漱石全集
第九巻

心
道草

大正四年七月撮影　（於早稲田南町書齋南縁）

目次

こゝろ

三、四、二〇——三、八、一一

上　先生と私

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此處でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚かる遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々々しい頭文字抔はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非來いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費やした。所が私が鎌倉に着いて三日と經たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつた。けれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に勸まない結婚を强ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしや

うと相談をした。私には何うして可いか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとう／＼歸る事になつた。折角來た私は一人取り殘された。

學校の授業が始まるにはまだ大分日數があるので、鎌倉に居つても可し、歸つても可いといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中國のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私とさう變りもしなかつた。從つて一人坊ちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒も有たなかつたのである。

宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い畷を一つ越さなければ手が屆かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別莊は其所此所にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めてゐた。

私は毎日海へ這入りに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り拔けて磯へ下りると、此邊にこれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢湯の樣に黑い頭でごちや／＼してゐる事もあつた。其中に知つた人を一人も有たない私も、斯ういふ賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寐そべつて見たり、膝頭を波に打たして其所いらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は實に先生を此雜沓の間に見付出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會から其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊に大きな別莊を構へてゐる人と違つて、各自に專有の着換場を拵えてゐない此所いらの避暑客には、是非共斯うした共同着換所といつた風なものが必要なのであつた。

彼等は此所で茶を飲み、此所で休息する外に、此所で海水着を洗濯させたり、此所で鹹はゆい身體を淸めたり、此所へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。

二

私が其掛茶屋で先生を見た時は、先生は丁度着物を脱いで是から海へ入らうとする所であつた。私は其時反對に濡れた身體を風に吹かして水から上つて來た。二人の間には目を遮ぎる幾多の黑い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程濱邊が混雜し、それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず、私がすぐ先生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着てゐた彼は、それを床几の上にすぽりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼は我我の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其二日前に由井が濱迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る樣子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍がホテルの裏口になつてゐたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が鹽を浴びに出て來たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は特更肉を隱し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有樣を目擊した許

の私の眼には、猿股一つで濟まして皆なの前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧りみて、其所にこゞんでゐる日本人に、一言二言何か云つた。其日本人は砂の上に落ちた手拭を拾ひ上げてゐる所であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。其人が卽ち先生であつた。

私は單に好奇心の爲に、並んで濱邊を下りて行く二人の後姿を見守つてゐた。すると彼等は眞直に波の中に足を踏み込んだ。さうして遠淺の磯近くにわい／＼騷いでゐる多人數の間を通り拔けて、比較的廣々した所へ來ると、二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小さく見える迄沖の方へ向いて行つた。夫から引き返して又一直線に濱邊迄戻つて來た。掛茶屋へ歸ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身體を拭いて着物を着て、さつさと何處へか行つて仕舞つた。

彼等の出て行つた後、私は矢張元の床几に腰を卸して烟草を吹かしてゐた。其時私はぽかんとしながら先生の事を考へた。どうも何處かで見た事のある顔の樣に思はれてならなかつた。然し何うしても何時何處で會つた人か想ひ出せずに仕舞つた。

其時の私は屈托がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。それで翌日も亦先生に會つた時刻を見計らつて、わざ／＼掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は來ないで先生一人麥藁帽を被つて遣つて來た。先生は眼鏡をとつて臺の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すた／＼濱を下りて行つた。先生が昨日の樣に騷がしい浴客の中を通り拔けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。私は淺い水を頭の上迄跳かして相當の深さの所迄來て其所から先生を目標に拔手を切つた。すると先生は昨日と違

つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。

私が陸へ上つて雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はちやんと着物を着て入違に外へ出て行つた。

三

私は次の日も同じ時刻に濱へ行つて先生の顔を見た。其次の日にも亦同じ事を繰り返した。けれども物を云ひ掛ける機會も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として來て、また超然と歸つて行つた。周圍がいくら賑やかでも、それには殆んど注意を拂ふ樣子が見えなかつた。最初一所に來た西洋人は其後丸で姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或時先生が例の通りさつさと海から上つて來て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着やうとすると、何うした譯か、其浴衣に砂が一杯着いてゐた。先生はそれを落すために、後向になつて、浴衣を二三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白絣の上へ兵兒帶を締めてから、眼鏡の失くなつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受取つた。

次の日私は先生の後につゞいて海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。廣い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私

等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしてゐた。私は自由と歡喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ぱたりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寐た。私も其眞似をした。靑空の色がぎら／＼と眼を射るやうに痛烈な色を私の顏に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな聲を出した。

しばらくして海の中で起き上がる樣に姿勢を改めた先生は「もう歸りませんか」と云つて私を促がした。比較的強い體質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ「えゝ歸りませう」と快よく答へた。さうして二人で又元の路を濱邊へ引き返した。

私は是から先生と懇意になつた。然し先生が何處にゐるかは未だ知らなかつた。

夫から中二日置いて丁度三日目の午後だつたと思ふ。先生と掛茶屋で出會つた時、先生は突然私に向つて、「君はまだ大分長く此所に居る積ですか」と聞いた。考へのない私は斯ういふ問に答へる丈の用意を頭の中に蓄えてゐなかつた。それで「何うだか分りません」と答へた。然しにやにや笑つてゐる先生の顏を見た時、私は急に極りが惡くなつた。「先生は？」と聞き返さずにはゐられなかつた。是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。

私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違つて、廣い寺の境内にある別莊のやうな建物であつた。其所に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生々々と呼び掛けるので、先生は苦笑ひをした。私はそれが年長者に對する私の口癖だと云つて辯解した。私は此間の西洋人の事を聞いて見た。先生は彼の風變りの所や、もう鎌倉にゐない事や、色々の話をした末、日本人にさへあまり交際を

有たないのに、さういふ外國人と近付になつたのは不思議だと云つたりした。私は最後に先生に向つて、何處かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても思ひ出せないと云つた。若い私は其時暗に相手も私と同じ樣な感じを有つてゐはしまいかと疑つた。さうして腹の中で先生の返事を豫期してかゝつた。所が先生はしばらく沈吟したあとで「何うも君の顏には見覺がありませんね。人違ぢやないですか」と云つたので私は變に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ歸つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずつと前であつた。私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜ござんすか」と聞いた。先生は單簡にたゞ「えゝ入らつしやい」と云つた丈であつた。其時分の私は先生と餘程懇意になつた積でゐたので、先生からもう少し濃かな言葉を豫期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。先生はそれに氣が付いてゐる樣でもあり、又全く氣が付かない樣でもあつた。私は又輕微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く氣にはなれなかつた。寧ろそれとは反對で、不安に搖かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前に滿足に現はれて來るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて來た。先生は始めか

ら私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素氣ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠けやうとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の價値のないものだから止せといふ警告を與へたのである。他の懐かしみに應じない先生は、他を輕蔑する前に、まづ自分を輕蔑してゐたものと見える。

私は無論先生を訪ねる積で東京へ歸つて來た。歸つてから授業の始まる迄にはまだ二週間の日數があるので、其うちに一度行つて置かうと思つた。然し歸つて二日三日と經つうちに、鎌倉に居た時の氣分が段段薄くなつて來た。さうして其上に彩られる大都會の空氣が、記憶の復活に伴ふ強い刺激と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往來で學生の顔を見るたびに新らしい學年に對する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一ヶ月ばかりすると私の心に、又一種の弛みが出來てきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しさうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私は又先生に會ひたくなつた。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覺えてゐる。晴れた空が身に沁み込むやうに感ぜられる好い日和であつた。其日も先生は留守であつた。鎌倉にゐた時、私は先生自身の口から、何時でも大抵宅にゐるといふ事を聞いた。寧ろ外出嫌ひだといふ事も聞いた。二度來て二度とも會へなかつた私は、其言葉を思ひ出して、理由もない不滿を何處かに感じた。私はすぐ玄關先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇して其所に立つてゐた。此前名刺を取次いだ記憶のある下女

は、私を待たして置いて又内へ這入つた。すると奧さんらしい人が代つて出て來た。美くしい奧さんであつた。

私は其人から鄭寧に先生の出先を敎へられた。先生は例月其日になると雜司ヶ谷の墓地にある或佛へ花を手向けに行く習慣なのださうである。「たつた今出た許りで、十分になるか、ならないかで御座います」と奧さんは氣の毒さうに云つて呉れた。私は會釋して外へ出た。賑かな町の方へ一丁程歩くと、私も散歩がてら雜司ヶ谷へ行つて見る氣になつた。先生に會へるか會へないかといふ好奇心も動いた。夫ですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側から這入つて、兩方に楓を植ゑ付けた廣い道を奧の方へ進んで行つた。すると其端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て來た。私は其人の眼鏡の縁が日に光る迄近く寄つて行つた。さうして出拔けに「先生」と大きな聲を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顏を見た。

「何うして……、何うして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。其言葉は森閑とした晝の中に異樣な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも應へられなかつた。

「私の後を跟けて來たのですか。何うして……」

先生の態度は寧ろ落付いてゐた。聲は寧ろ沈んでゐた。けれども其表情の中には判然云へない樣な一種

の墓があつた。

私は私が何うして此所へ來たかを先生に話した。

「誰の墓へ參りに行つたか、妻が其人の名を云ひましたか」

「いゝえ、其んな事は何も仰しやいません」

「さうですか。――さう、夫は云ふ筈がありませんね、始めて會つた貴方に。いふ必要がないんだから」

先生は漸く得心したらしい樣子であつた。然し私には其意味が丸で解らなかつた。

先生と私は通へ出やうとして墓の間を拔けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのといふ傍に、一切衆生悉有佛生と書いた塔婆などが建てゝあつた。全權公使何々といふのもあつた。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「是は何と讀むんでせう」と先生に聞いた。「アンドレとでも讀ませる積でせうね」と云つて先生は苦笑した。

先生は是等の墓標が現はす人種々の樣式に對して、私程に滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼是云ひたがるのを、始めのうちは默つて聞いてゐたが、仕舞に「貴方は死といふ事實をまだ眞面目に考へた事がありませんね」と云つた。私は默つた。先生もそれぎり何とも云はなくなつた。

墓地の區切り目に、大きな銀杏が一本空を隱すやうに立つてゐた。其下へ來た時、先生は高い梢を見上げて、「もう少しすると、綺麗ですよ。此木がすつかり黃葉して、こゝいらの地面は金色の落葉で埋まるやうになります」と云つた。先生は月に一度づゝは必ず此木の下を通るのであつた。

向ふの方で凸凹の地面をならして新墓地を作つてゐる男が、鍬の手を休めて私達を見てゐた。私達は其所から左へ切れてすぐ街道へ出た。

是から何處へ行くといふ目的のない私は、たゞ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生は何時もより口數を利かなかつた。それでも私は左程の窮窟を感じなかつたので、ぶら／＼一所に歩いて行つた。

「すぐ御宅へ御歸りですか」

「えゝ別に寄る所もありませんから」

二人は又默つて南の方へ坂を下りた。

「先生の御宅の墓地はあすこにあるんですか」と私が又口を利き出した。

「いゝえ」

「何方の御墓があるんですか。——御親類の御墓ですか」

「いゝえ」

先生は是以外に何も答へなかつた。私も其話はそれぎりにして切り上げた。すると一町程歩いた後で、先生が不意に其所へ戻つて來た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「御友達の御墓へ毎月御參りをなさるんですか」

「さうです」

先生は其日是以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するやうになつた。行くたびに先生は在宅であつた。先生に會ふ度數が重なるに伴れて、私は益〻繁く先生の玄關へ足を運んだ。

けれども先生の私に對する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になつた其後も、あまり變りはなかつた。先生は何時も靜であつた。ある時は靜過ぎて淋しい位であつた。私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何處かに強く働らいた。斯ういふ感じを先生に對して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない。然し其私丈には此直感が後になつて事實の上に證據立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿氣てゐると笑はれても、それを見越した自分の直覺を、とにかく賴もしく又嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懷に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出來ない人、――是が先生であつた。

今云つた通り先生は始終靜かであつた。落付いてゐた。けれども時として變な曇りが其顏を横切る事があつた。窓に黑い鳥影が射すやうに、射すかと思ふと、すぐ消えるには消えたが。私が始めて其曇りを先生の眉間に認めたのは、雜司ケ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私は其異樣の瞬間に、今迄快よく流れてゐた心臟の潮流を一寸鈍らせた。然しそれは單に一時の結滞に過ぎなかつた。私の心は五分と經たないうちに平素の彈力を囘復した。私はそれぎり暗さうなこの雲の影を忘れてしまつた。ゆく

りなくまた夫を思ひ出させられたのは、小春の盡きるに間のない或る晩の事であつた。
先生と話してゐた私は、不圖先生がわざ〳〵注意して呉れた銀杏の大樹を眼の前に想ひ浮べた。勘定して見ると、先生が毎月例として墓參に行く日が、それから丁度三日目に當つてゐた。其三日目は私の課業が午で終る樂な日であつた。私は先生に向つて斯う云つた。

「先生雜司ヶ谷の銀杏はもう散つて仕舞つたでせうか」

「まだ空坊主にはならないでせう」

先生はさう答へながら私の顏を見守つた。さうして其所からしばし眼を離さなかつた。私はすぐ云つた。

「今度御墓參りに入らつしやる時に御伴をしても宜ござんすか。私は先生と一所に彼所いらが散歩して見たい」

「私は墓參りに行くんで、散歩に行くんぢやないですよ」

「然し序でに散歩をなすつたら丁度好いぢやありませんか」

先生は何とも答へなかつた。しばらくしてから、「私のは本當の墓參り丈なんだから」と云つて、何處迄も墓參と散歩を切り離さうとする風に見えた。私と行きたくない口實だか何だか、私には其時の先生が、如何にも子供らしくて變に思はれた。私はなほと先へ出る氣になつた。

「ぢや御墓參りでも好いから一所に伴れて行つて下さい。私も御墓參りをしますから」

實際私には墓參と散歩との區別が殆んど無意味のやうに思はれたのである。すると先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異樣の光が出た。それは迷惑とも嫌惡とも畏怖とも片付けられない微かな不安ら

しいものであつた。私は忽ち雜司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思ひ起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生が云つた。「私はあなたに話す事の出來ないある理由があつて、他と一所にあすこへ墓參りには行きたくないのです。自分の妻さへまだ伴れて行つた事がないのです」

七

私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する氣で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい溫かい交際が出來たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繫ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて來たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絕えず恐れてゐたのである。

私は月に二度若くは三度づゝ必ず先生の宅へ行くやうになつた。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は突然私に向つて聞いた。

「あなたは何でさう度々私のやうなものの宅へ遣つて來るのですか」

「何でと云つて、そんな特別な意味はありません。――然し御邪魔なんですか」

「邪魔だとは云ひません」
成程迷惑といふ樣子は、先生の何處にも見えなかつた。私は先生の交際の範圍の極めて狹い事を知つてゐた。先生の元の同級生などで、其頃東京に居るものは殆んど二人か三人しかないといふ事も知つてゐた。先生と同鄕の學生などには時たま座敷で同座する場合もあつたが、彼等のいづれもは皆な私程先生に親しみを有つてゐないやうに見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生が云つた。「だから貴方の來て下さる事を喜こんでゐます。だから何故さう度々來るのかと云つて聞いたのです」

「そりや又何故です」

私が斯う聞き返した時、先生は何とも答へなかつた。たゞ私の顏を見て「あなたは幾歲ですか」と云つた。

此問答は私に取つて頗る不得要領のものであつたが、私は其時底迄押さずに歸つて仕舞つた。しかも夫から四日と經たないうちに又先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑ひ出した。

「又來ましたね」と云つた。

「えゝ來ました」と云つて自分も笑つた。

私は外の人から斯う云はれたら屹度癪に觸つたらうと思ふ。然し先生に斯う云はれた時は、丸で反對であつた。癪に觸らない許でなく却つて愉快だつた。

「私は淋しい人間です」と先生は其晩又此間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによ

ると貴方も淋しい人間ぢやないですか。私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かずにゐられるが、若いあなたは左右は行かないのでせう。動ける丈動きたいのでせう。動いて何かに打つかりたいのでせう。……」

「私はちつとも淋しくはありません」

「若いうち程淋しいものはありません。そんなら何故貴方はさう度々私の宅へ來るのですか」

此所でも此間の言葉が又先生の口から繰り返された。

「あなたは私に會つても恐らくまだ淋しい氣が何處かでしてゐるでせう。私にはあなたの爲に其淋しさを根元から引き抜いて上げる丈の力がないんだから。貴方は外の方を向いて今に手を廣げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生は斯う云つて淋しい笑ひ方をした。

八

幸にして先生の豫言は實現されずに濟んだ。經驗のない當時の私は、此豫言の中に含まれてゐる明白な意義さへ了解し得なかつた。私は依然として先生に會ひに行つた。其内いつの間にか先生の食卓で飯を食ふやうになつた。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないやうになつた。

普通の人間として私は女に對して冷淡ではなかつた。けれども年の若い私の今迄經過して來た境遇からいつて、私は殆んど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた。それが源因か何うかは疑問だが、私の興

味は往來で出合ふ知りもしない女に向つて多く働く丈であつた。先生の奧さんには其前玄關で會つた時、美くしいといふ印象を受けた。それから會ふたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。然しそれ以外に私は是と云つてとくに奧さんに就いて語るべき何物も有たないやうな氣がした。

是は奧さんに特色がないと云ふよりも、特色を示す機會が來なかつたのだと解釋する方が正當かも知れない。然し私はいつでも先生に付屬した一部分の樣な心持で奧さんに對してゐた。奧さんも自分の夫の所へ來る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばら〳〵になつてゐた。それで始めて知り合になつた時の奧さんに就いては、たゞ美くしいといふ外に何の感じも殘つてゐない。

ある時私は先生の宅で酒を飲まされた。其時奧さんが出て來て傍で酌をして吳れた。先生はいつもより愉快さうに見えた。奧さんに「御前も一つ御上り」と云つて、自分の吞み干した盃を差した。奧さんは「私は……」と辭退しかけた後、迷惑さうにそれを受取つた。奧さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奧さんと先生の間に下のやうな會話が始まつた。

「珍らしい事。私に吞めと仰しやつた事は滅多にないのにね」

「御前は嫌だからさ。然し稀には飲むといゝよ。好い心持になるよ」

「些ともならないわ。苦しいぎりで。でも貴夫は大變御愉快さうね、少し御酒を召上ると」

「時によると大變愉快になる。然し何時でもといふ譯には行かない」

「今夜は如何です」

「今夜は好い心持だね」
「是から毎晩少しづゝ召上ると宜ござんすよ」
「左右は行かない」
「召上がつて下さいよ。其方が淋しくなくつて好いから」
先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそゝとしてゐた。高い笑ひ聲などの聞こえた試は丸でなかつた。或時は宅の中にゐるものは先生と私だけのやうな氣がした。
「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云つた。私は「左右ですな」と答へた。然し私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をただ蒼蠅いものゝ様に考へてゐた。
「一人貰つて遣らうか」と先生が云つた。
「貰ッ子ぢや、ねえあなた」と奥さんは又私の方を向いた。
「子供は何時迄經つたつて出來つこないよ」と先生が云つた。
奥さんは默つてゐた。「何故です」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」と云つて高く笑つた。

九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一對であつた。家庭の一員として暮らした事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、座敷で私と對坐してゐる時、先生は何かの序に、

下女を呼ばないで、奥さんを呼ぶ事があつた。（奥さんの名は靜といつた）先生は「おい靜」と何時でも襖の方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞こえた。返事をして出て來る奥さんの樣子も甚だ素直であつた。ときたま御馳走になつて、奥さんが席へ現はれる場合抔には、此關係が一層明らかに二人の間に描き出される樣であつた。

先生は時々奥さんを伴れて、音樂會だの芝居だのに行つた。夫から夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二三度以上あつた。私は箱根から貰つた繪端書をまだ持つてゐる。日光へ行つた時は紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

當時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまづ斯んなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私が何時もの通り、先生の玄關から案内を頼まうとすると、座敷の方で誰かの話し聲がした。能く聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆ひらしかつた。先生の宅は玄關の次がすぐ座敷になつてゐるので、格子の前に立つてゐた私の耳に其言逆ひの調子丈は略分つた。さうして其うちの一人が先生だといふ事も、時々高まつて來る男の方の聲で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、何うも奥さんらしく感ぜられた。泣いてゐる樣でもあつた。私はどうしたものだらうと思つて玄關先で迷つたが、すぐ決心をして其儘下宿へ歸つた。

妙に不安な心持が私を襲つて來た。私は書物を讀んでも呑み込む能力を失つて仕舞つた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ來て私の名を呼んだ。私は驚ろいて窓を開けた。先生は散歩しやうと云つて、下から私を誘つた。先刻帶の間へ包んだ儘の時計を出して見ると、もう八時過であつた。私は歸つたなりま

だ袴を着けてゐた。私は夫なりすぐ表へ出た。

其晩私は先生と一所に麥酒を飲んだ。先生は元來酒量に乏しい人であつた。ある程度迄飲んで、それで醉へなければ、醉ふ迄飲んで見るといふ冒險の出來ない人であつた。

「今日は駄目です」と云つて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒さうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻の事が引つ懸つてゐた。肴の骨が咽喉に刺さつた時の樣に、私は苦しんだ。打ち明けて見やうかと考へたり、止した方が好からうかと思ひ直したりする動搖が、妙に私の樣子をそはそはさせた。

「君、今夜は何うかしてゐますね」と先生の方から云ひ出した。「實は私も少し變なのですよ。君に分りますか」

私は何の答もし得なかつた。

「實は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神經を昂奮させて仕舞つたんです」と先生が又云つた。

「何うして……」

私には喧嘩といふ言葉が口へ出て來なかつた。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「何んなに先生を誤解なさるんですか」
先生は私の此間に答へやうとはしなかつた。
「妻が考へてゐるやうな人間なら、私だつて斯んなに苦しんでゐやしない」
先生が何んなに苦しんでゐるか、是も私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が歸るとき歩きながらの沈默が一丁も二丁もつゞいた。其後で突然先生が口を利き出した。
「惡い事をした。怒つて出たから妻は嘸心配をしてゐるだらう。考へると女は可哀さうなものですね。私の妻などは私より外に丸で頼りにするものがないんだから」
先生の言葉は一寸其所で途切れたが、別に私の返事を期待する樣子もなく、すぐ其續きへ移つて行つた。
「さう云ふと、夫の方は如何にも心丈夫の樣で少し滑稽だが。君、私は君の眼に何う映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」
「中位に見えます」と私は答へた。此答は先生に取つて少し案外らしかつた。先生は又口を閉ぢて、無言で歩き出した。
先生の宅へ歸るには私の下宿のつい傍を通るのが順路であつた。私は其所迄來て、曲り角で分れるのが先生に濟まない樣な氣がした。「序に御宅の前まで御伴しませうか」と云つた。先生は忽ち手で私を遮ぎつた。

「もう遲いから早く歸り玉へ。私も早く歸つて遣るんだから、妻君の爲に」。

先生が最後に付け加へた「妻君の爲に」といふ言葉は妙に其時の私の心を暖かにした。私は其言葉のために、歸つてから安心して寐る事が出來た。私は其後も長い間此「妻君の爲に」といふ言葉を忘れなかつた。

先生と奧さんの間に起つた波瀾が、大したものでない事は是でも解つた。それが又滅多に起る現象でなかつた事も、其後絕えず出入をして來た私には略推察が出來た。それ所か先生はある時斯んな感想すら私に洩らした。

「私は世の中で女といふものをたつた一人しか知らない。妻以外の女は殆んど女として私に訴へないのです。妻の方でも、私を天下にたゞ一人しかない男と思つて吳れてゐます。さういふ意味から云つて、私々は最も幸福に生れた人間の一對であるべき筈です」

私は今前後の行き掛りを忘れて仕舞たから、先生が何の爲に斯んな自白を私に爲て聞かせたのか、判然云ふ事が出來ない。けれども先生の態度の眞面目であつたのと、調子の沈んでゐたのとは、今だに記憶に殘つてゐる。其時たゞ私の耳に異樣に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一對であるべき筈です」といふ最後の一句であつた。先生は何故幸福な人間と云ひ切らないで、あるべき筈であると斷わつたのか。私にはそれ丈が不審であつた。ことに其所へ一種の力を入れた先生の語氣が不審であつた。先生は事實果して幸福なのだらうか、又幸福であるべき筈でありながら、それ程幸福でないのだらうか。私は心の中で疑ぐらさるを得なかつた。けれども其疑ひは一時限り何處かへ葬むられて仕舞つた。

私は其うち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向ひで話をする機會に出合つた。先生は其日橫濱を出帆する汽船に乘つて外國へ行くべき友人を新橋へ送りに行つて留守であつた。橫濱から船に乘る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのは其頃の習慣であつた。私はある書物に就いて先生に話して貰ふ必要があつたので、豫じめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行は前日わざ〳〵告別に來た友人に對する禮義として其日突然起つた出來事であつた。先生はすぐ歸るから留守でも私に待つてゐるやうにと云ひ殘して行つた。それで私は座敷へ上つて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

十一

其時の私は旣に大學生であつた。始めて先生の宅へ來た頃から見るとずつと成人した氣でゐた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに對して何の窮屈も感じなかつた。差向ひで色々の話をした。然しそれは特色のない唯の談話だから、今では丸で忘れて仕舞つた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。然しそれを話す前に、一寸斷つて置きたい事がある。

先生は大學出身であつた。是は始めから私に知れてゐた。然し先生の何もしないで遊んでゐるといふ事は、東京へ歸つて少し經つてから始めて分つた。私は其時何うして遊んでゐられるのかと思つた。

先生は丸で世間に名前を知られてゐない人であつた。だから先生の學問や思想に就ては、先生と密接の關係を有つてゐる私より外に敬意を拂ふもののあるべき筈がなかつた。それを私は常に惜い事だと云つた。先生は又「私のやうなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」と答へるぎりで、取り合はなかつた。

私には其答が謙遜過ぎて却つて世間を冷評する様にも聞こえた。實際先生は時々昔しの同級生で今著名になつてゐる誰彼を捉へて、ひどく無遠慮な批評を加へる事があつた。それで私は露骨に其矛盾を擧げて云々して見た。私の精神は反抗の意味といふよりも、世間が先生を知らないで平氣でゐるのが殘念だつたからである。其時先生は沈んだ調子で、「何うしても私は世間に向つて働らき掛ける資格のない男だから仕方がありません」と云つた。先生の顔には深い一種の表情があり〳〵と刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の繼げない程に強いものだつたので、私はそれぎり何もいふ勇氣が出なかつた。

　私が奥さんと話してゐる間に、問題が自然先生の事から其所へ落ちて來た。

「先生は何故あゝやつて、宅で考へたり勉強したりなさる丈で、世の中へ出て仕事をなさらないんでせう」

「あの人は駄目ですよ。さういふ事が嫌なんですから」

「つまり下らない事だと悟つてゐらつしやるんでせうか」

「悟るの悟らないのつて、――そりや女だからわたくしには解りませんけれど、恐らくそんな意味ぢやないでせう。矢つ張り何か遣りたいのでせう。それでゐて出來ないんです。だから氣の毒ですわ」

「然し先生は健康からいつて、別に何處も惡い所はない様ぢやありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それで何故活動が出來ないんでせう」

「それが解らないのよ、あなた。それが解る位なら私だつて、こんなに心配しやしません。わからないから氣の毒でたまらないんです」

奥さんの語氣には非常に同情があつた。それでも口元丈には微笑が見えた。外側から云へば、私の方が寧ろ眞面目だつた。私は六づかしい顏をして默つてゐた。すると奥さんが急に思ひ出した樣に又口を開いた。

「若い時はあんな人ぢやなかつたんですよ。若い時は丸で違つてゐました。それが全く變つて仕舞つたんです」

「若い時つて何時頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知つてゐらつしやつたんですか」

奥さんは急に薄赤い顏をした。

十二

奥さんは東京の人であつた。それは曾て先生からも奥さん自身からも聞いて知つてゐた。奥さんは「本當いふと合の子なんですよ」と云つた。奥さんの父親はたしか鳥取か何處かの出であるのに、御母さんの方はまだ江戸といつた時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥さんは冗談半分さう云つたのである。所が先生は全く方角違の新潟縣人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知つてゐるとすれば、郷里の關

係からでない事は明らかであつた。然し薄赤い顏をした奧さんはそれより以上の話をしたくない樣だつたので、私の方でも深くは聞かずに置いた。

先生と知合になつてから先生の亡くなる迄に、私は隨分色々の問題で先生の思想や情操に觸れて見たが、結婚當時の狀況に就いては、殆んど何ものも聞き得なかつた。私は時によると、それを善意に解釋しても見た。年輩の先生の事だから、艶めかしい囘想などを若いものに聞かせるのはわざと愼んでゐるのだらうと思つた。時によると、又それを悪くも取つた。先生に限らず、奧さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、さういふ艶つぽい問題になると、正直に自分を開放する丈の勇氣がないのだらうと考へた。尤も何方も推測に過ぎなかつた。さうして何方の推測の裏にも、二人の結婚の奧に横たはる花やかなロマンスの存在を假定してゐた。

私の假定は果して誤らなかつた。けれども私はたゞ戀の半面丈を想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美くしい戀愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生に取つて見慘なものであるかは相手の奧さんに丸で知れてゐなかつた。奧さんは今でもそれを知らずにゐる。先生はそれを奧さんに隱して死んだ。先生は奧さんの幸福を破壞する前に、先づ自分の生命を破壞して仕舞つた。

私は今此悲劇に就いて何事も語らない。其悲劇のために寧ろ生れ出たともいへる二人の戀愛に就いては、先刻云つた通りであつた。二人とも私には殆んど何も話して呉れなかつた。奧さんは愼みのために、先生は又それ以上の深い理由のために。

たゞ一つ私の記憶に殘つてゐる事がある。或時花時分に私は先生と一所に上野へ行つた。さうして其所

で美くしい一對の男女を見た。彼等は睦まじさうに寄添つて花の下を歩いてゐた。場所が場所なので、花よりも其方を向いて眼を峙てゝゐる人が澤山あつた。

「新婚の夫婦のやうだね」と先生が云つた。

「仲が好さゝうですね」と私が答へた。

先生は苦笑さへしなかつた。二人の男女を視線の外に置くやうな方角へ足を向けた。それから私に斯う聞いた。

「君は戀をした事がありますか」

私はないと答へた。

「戀をしたくはありませんか」

私は答へなかつた。

「したくない事はないでせう」

「えゝ」

「君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が戀を求めながら相手を得られないといふ不快の聲が交つてゐませう」

「そんな風に聞こえましたか」

「聞こえました。戀の滿足を味はつてゐる人はもつと暖かい聲を出すものです。然し……然し君、戀は罪惡ですよ。解つてゐますか」

私は急に驚ろかされた。何とも返事をしなかつた。

十三

我々は群集の中にゐた。群集はいづれも嬉しさうな顔をしてゐた。其所を通り抜けて、花も人も見えない森の中へ來る迄は、同じ問題を口にする機會がなかつた。

「戀は罪惡ですか」と私が其時突然聞いた。

「罪惡です。たしかに」と答へた時の先生の語氣は前と同じやうに強かつた。

「何故ですか」

「何故だか今に解ります。今にぢやない、もう解つてゐる筈です。あなたの心はとつくの昔から既に戀で動いてゐるぢやありませんか」

私は一應自分の胸の中を調べて見た。けれども其所は案外に空虚であつた。思ひ中るやうなものは何にもなかつた。

「私の胸の中に是といふ目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはゐない積です」

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだらうと思つて動きたくなるのです」

「今それ程動いちやゐません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて來たぢやありませんか」

「それは左右かも知れません。然しそれは戀とは違ひます」

「戀に上る楷段なんです。異性と抱き合ふ順序として、まづ同性の私の所へ動いて來たのです」
「私には二つのものが全く性質を異にしてゐるやうに思はれます」
「いや同じです。私は男として何うしてもあなたに滿足を與へられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、猶更あなたに滿足を與へられないでゐるのです。私は實際御氣の毒に思つてゐます。あなたが私から餘所へ動いて行くのは仕方がない。私は寧ろそれを希望してゐるのです。然し……」
私は變に悲しくなつた。
「私が先生から離れて行くやうに御思ひになれば仕方がありませんが、私にそんな氣の起つた事はまだありません」
先生は私の言葉に耳を貸さなかつた。
「然し氣を付けないと不可ない。戀は罪惡なんだから。私の所では滿足が得られない代りに危險もないが、――君、黑い長い髮で縛られた時の心持を知つてゐますか」
私は想像で知つてゐた。然し事實としては知らなかつた。いづれにしても先生のいふ罪惡といふ意味は朦朧としてよく解らなかつた。其上私は少し不愉快になつた。
「先生、罪惡といふ意味をもつと判然云つて聞かして下さい。それでなければ此問題を此所で切り上げて下さい。私自身に罪惡といふ意味が判然解る迄」
「惡い事をした。私はあなたに眞實を話してゐる氣でゐた。所が實際は、あなたを焦慮してゐたのだ。私は惡い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪の方角に靜かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間から廣い庭の一部に茂る熊笹が幽邃に見えた。

「君は私が何故毎月雜司ヶ谷の墓地に埋つてゐる友人の墓へ參るのか知つてゐますか」

先生の此問は全く突然であつた。しかも先生は私が此問に對して答へられないといふ事も能く承知してゐた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて氣が付いたやうに斯う云つた。

「又惡い事を云つた。焦慮せるのが惡いと思つて、說明しやうとすると、其說明が又あなたを焦慮せるやうな結果になる。何うも仕方がない。此問題はこれで止めませう。とにかく戀は罪惡ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」

私には先生の話が益解らなくなつた。然し先生はそれぎり戀を口にしなかつた。

十四

年の若い私は稍ともすると一圖になり易かつた。少なくとも先生の眼にはさう映つてゐたらしい。私には學校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。敎授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とゞの詰りをいへば、敎壇に立つて私を指導して呉れる偉い人々よりも只獨りを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。

「あんまり逆上ちや不可ません」と先生がいつた。

「覺めた結果として左右思ふんです」と答へた時の私には充分の自信があつた。其自信を先生は肯がつ

て吳れなかつた。
「あなたは熱に浮かされてゐるのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたから夫程に思はれるのを、苦しく感じてゐます。然し是から先の貴方に起るべき變化を豫想して見ると、猶苦しくなります」
「私にはそれ程輕薄に思はれてゐるんですか。それ程不信用なんですか」
「私は御氣の毒に思ふのです」
「氣の毒だが信用されないと仰しやるんですか」
先生は迷惑さうに庭の方を向いた。其庭に、此間迄重さうな赤い強い色をぽた〳〵點じてゐた椿の花はもう一つも見えなかつた。先生は座敷から此椿の花をよく眺める癖があつた。
「信用しないつて、特にあなたを信用しないんぢやない。人間全體を信用しないんです」
其時生垣の向ふで金魚賣らしい聲がした。其外には何の聞こえるものもなかつた。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外靜かであつた。家の中は何時もの通りひつそりしてゐた。私は次の間に奥さんのゐる事を知つてゐた。默つて針仕事か何かしてゐる奥さんの耳に私の話し聲が聞こえるといふ事も知つてゐた。然し私は全くそれを忘れて仕舞つた。
「ぢや奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。
先生は少し不安な顏をした。さうして直接の答を避けた。
「私は私自身さへ信用してゐないのです。つまり自分で自分が信用出來ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないのです」

んです。さうして非常に怖くなつたんです」

「いや考へたんぢやない。遣つたんです。遣つた後で驚ろいたんです。」

「さう六づかしく考へれば、誰だつて確かなものはないでせう」

私はもう少し先迄同じ道を辿つて行きたかつた。すると襖の陰で「あなた、あなた」といふ奥さんの聲が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といつた。奥さんは「一寸」と先生を次の間へ呼んだ。二人の間に何んな用事が起つたのか、私には解らなかつた。それを想像する餘裕を與へない程早く先生は又座敷へ歸つて來た。

「兎に角あまり私を信用しては不可ませんよ。今に後悔するから。さうして自分が欺むかれた返報に、殘酷な復讐をするやうになるものだから」

「そりや何ういふ意味ですか」

「かつては其人の膝の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥ぞけたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未來の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と獨立と己れとに充ちた現代に生れた我我は、其犧牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」

私はかういふ覺悟を有つてゐる先生に對して、云ふべき言葉を知らなかつた。

十五

其後私は奥さんの顔を見るたびに氣になつた。先生は奥さんに對しても始終斯ういふ態度に出るのだらうか。若しさうだとすれば、奥さんはそれで滿足なのだらうか。

奥さんの様子は滿足とも不滿足とも極めやうがなかつた。私は夫程近く奥さんに接觸する機會がなかつたから。それから奥さんは私に會ふたびに尋常であつたから。最後に先生の居る席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだ其上にもあつた。先生の人間に對する此覺悟は何處から來るのだらうか。たゞ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだらうか。先生は坐つて考へる質の人であつた。先生の頭さへあれば、斯ういふ態度は坐つて世の中を考へてゐても自然と出て來るものだらうか。私には左右ばかりとは思へなかつた。先生の覺悟は生きた覺悟らしかつた。火に燒けて冷却し切つた石造家屋の輪廓とは違つてゐた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれども其思想家の纒め上げた主義の裏には、強い事實が織り込まれてゐるらしかつた。自分と切り離された他人の事實でなくつて、自分自身が痛切に味はつた事實、血が熱くなつたり脉が止まつたりする程の事實が、疊み込まれてゐるらしかつた。

是は私の胸で推測するがものはない。先生自身既にさうだと告白してゐた。たゞ其告白が雲の峯のやうであつた。私の頭の上に正體の知れない恐ろしいものを蔽ひ被せた。さうして何故それが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしてゐた。それでゐて明らかに私の神經を震はせた。

私は先生の此人生觀の基點に、或強烈な戀愛事件を假定して見た。（無論先生と奥さんとの間に起つた）。先生がかつて戀は罪惡だといつた事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。然し先生は

理に奥さんを愛してゐると私に告げた。すると二人の戀から斯んな厭世に近い覺悟が出やう筈がなかつた。「かつては其人の前に跪いたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとする」と云つた先生の言葉は、現代一般の誰彼に就いて用ひられるべきで、先生と奥さんの間には當てはまらないもの〻やうでもあつた。

雜司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、――是も私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い緣故のある墓だといふ事を知つてゐた。先生の生活に近づきつゝありながら、近づく事の出來ない私は、先生の頭の中にある生命の斷片として、其墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つて其墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。寧ろ二人の間に立つて、自由の往來を妨げる魔物のやうであつた。

斯うしてゐるうちに、私は又奥さんと差向ひで話しをしなければならない時機が來た。その頃は日の詰つて行くせわしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であつた。先生の附近で盜難に罹つたものが三四日續いて出た。盜難はいづれも宵の口であつた。大したものを持つて行かれた家は殆んどなかつたけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならない事情が出來てきた。先生と同鄕の友人で地方の病院に奉職してゐるものが上京したため、先生は外の二三名と共に、ある所で其友人に飯を食はせなければならなくなつた。先生は譯を話して、私に歸つてくる間迄の留守番を賴んだ。私はすぐ引受けた。

十六

私の行つたのはまだ灯の點くか點かない暮方であつたが、几帳面な先生はもう宅にゐなかつた。「時間に後れると惡いつて、つい今しがた出掛けました」と云つた奥さんは、私を先生の書齋へ案內した。

書齋には洋机と椅子の外に、澤山の書物が美くしい背皮を並べて、硝子越に電燈の光で照らされてゐた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲團の上へ私を坐らせて、「ちつと其所いらにある本でも讀んでゐて下さい」と斷つて出て行つた。私は丁度主人の歸りを待ち受ける客のやうな氣がして濟まなかつた。私は畏こまつた儘烟草を飲んでゐた。奥さんが茶の間で何か下女に話してゐる聲が聞こえた。書齋は茶の間の緣側を突き當つて折れ曲つた角にあるので、棟の位置からいふと、座敷よりも却つて掛け離れた靜かさを領してゐた。一しきりで奥さんの話聲が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受ける樣な心持で、凝としながら氣を何處かに配つた。

三十分程すると、奥さんが又書齋の入口へ顏を出した。「おや」と云つて、輕く驚ろいた時の眼を私に向けた。さうして客に來た人のやうに鹿爪らしく控えてゐる私を可笑しさうに見た。

「それぢや窮屈でせう」

「いえ、窮屈ぢやありません」

「でも退屈でせう」

「いゝえ。泥棒が來るかと思つて緊張してゐるから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶々碗を持つた儘、笑ひながら其所に立つてゐた。

「此所は隅つこだから番をするには好くありませんね」と私が云つた。

「おや失禮ですがもつと眞中へ出て來て頂戴。御退屈だらうと思つて、御茶を入れて持つて來たんですが、茶の間で宜しければ彼方で上げますから」

私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鐵瓶が鳴つてゐた。私は其處で茶と菓子の御馳走になつた。奥さんは寐られないと不可いといつて、茶碗に手を觸れなかつた。

「先生は矢張り時々斯んな會へ御出掛になるんですか」

「いゝえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌になるやうです」

斯ういつた奥さんの樣子に、別段困つたものだといふ風も見えなかつたので、私はつい大膽になつた。

「それぢや奥さん丈が例外なんですか」

「いゝえ私も嫌はれてゐる一人なんです」

「そりや嘘です」と私が云つた。「奥さん自身嘘と知りながら左右仰やるんでせう」

「何故」

「私に云はせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌ひになるんですもの」

「あなたは學問をする方丈あつて、中々御上手ね。空つぽな理窟を使ひこなす事が。世の中が嫌になつたから、私迄も嫌になつたんだとも云はれるぢやありませんか。それと同なじ理窟で」

「兩方とも云はれる事は云はれますが、此場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白さうに。空の盃でよくあゝ飽きずに献酬が出來ると思ひますわ」

奥さんの言葉は少し手痛かつた。然し其言葉の耳障からいふと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭腦のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてるるらしく見えた。

十七

私はまだ其後にいふべき事を有つてゐた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛ける男のやうに取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶々碗の底を覗いて默つてゐる私を外らさないやうに、「もう一杯上げませうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？一つ？二ツつ？」

妙なもので角砂糖を撮み上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の數を聞いた。奥さんの態度は私に媚びるといふ程ではなかつたけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消さうとする愛嬌に充ちてゐた。

私は默つて茶を飲んだ。飲んでしまつても默つてゐた。

「あなた大變默り込んぢまつたのね」と奥さんが云つた。

「何かいふと又議論を仕掛けるなんて、叱り付けられさうですから」と私は答へた。

「まさか」と奥さんが再び云つた。
二人はそれを緒口に又話を始めた。さうして又二人に共通な興味のある先生を問題にした。
「奥さん、先刻の續きをもう少し云はせて下さいませんか。奥さんには空な理窟と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上の空で云つてる事ぢやないんだから」
「ぢや仰やい」
「今奥さんが急に居なくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きてゐられるでせうか」
「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないぢやありませんか。私の所へ持つて來る問題ぢやないわ」
「奥さん、私は眞面目ですよ。だから逃げちや不可ません。正直に答へなくつちや」
「正直よ。正直に云つて私には分らないのよ」
「ぢや奥さんは先生を何の位愛してゐらつしやるんですか。これは先生に聞くより寧ろ奥さんに伺つてい丶質問ですから、あなたに伺ひます」
「何もそんな事を開き直つて聞かなくつても好いぢやありませんか」
「眞面目腐つて聞くがものはない。分り切つてると仰やるんですか」
「まあ左右よ」
「その位先生に忠實なあなたが急に居なくなつたら、先生は何うなるんでせう。世の中の何方を向いても面白さうでない先生は、あなたが急にゐなくなつたら後で何うなるでせう。先生から見てぢやない。あ

なたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでせうか、不幸になるでせうか」
「それや私から見れば分つてゐます。（先生はさう思つてゐないかも知れませんが。）先生は私を離れれば不幸になる丈です。或は生きてゐられないかも知れませんよ。さういふと、己惚になるやうですが、私は今先生を人間として出来る丈幸福にしてゐるんだと信じてゐますわ。どんな人があつても私程先生を幸福にできるものはないと迄思ひ込んでゐますわ。それだから斯うして落ち付いてゐられるんです」
「その信念が先生の心に好く映る筈だと私は思ひますが」
「それは別問題ですわ」
「矢張り先生から嫌はれてゐると仰やるんですか」
「私は嫌はれてるとは思ひません。嫌はれる訳がないんですもの。然し先生は世間が嫌なんでせう。世間といふより近頃では人間が嫌になつてゐるんでせう。だから其人間の一人として、私も好かれる筈がないぢやありませんか」
奥さんの嫌はれてゐるといふ意味がやつと私に呑み込めた。

十八

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が舊式の日本の女らしくない所も私の注意に一種の刺戟を與へた。それで奥さんは其頃流行り始めた所謂新らしい言葉などは殆んど使はなかつた。
私は女といふものに深い交際をした經驗のない迂闊な青年であつた。男としての私は、異性に對する本

能から、憧憬の目的物として常に女を夢みてゐた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるやうな心持で、たゞ漠然と夢みてゐたに過ぎなかつた。だから實際の女の前へ出ると、私の感情が突然變る事が時々あつた。私は自分の前に現はれた女のために引き付けられる代りに、其場に臨んで却つて變な反撥力を感じた。奧さんに對した私にはそんな氣が丸で出なかつた。普通男女の間に横はる思想の不平均といふ考も殆んど起らなかつた。私は奧さんの女であるといふ事を忘れた。私はたゞ誠實なる先生の批評家及び同情家として奧さんを眺めた。

「奧さん、私が此前何故先生が世間的にもつと活動なさらないのだらうと云つて、あなたに聞いた時に、あなたは仰やつた事がありますね。元はあゝぢやなかつたんだつて」

「えゝ云ひました。實際彼んなぢやなかつたんですもの」

「何んなだつたんですか」

「あなたの希望なさるやうな、又私の希望するやうな頼もしい人だつたんです」

「それが何うして急に變化なすつたんですか」

「急にぢやありません。段々あゝなつて來たのよ」

「奧さんは其間始終先生と一所にゐらしつたんでせう」

「無論ゐましたわ。夫婦ですもの」

「ぢや先生が左右變つて行かれる源因がちやんと解るべき筈ですがね」

「それだから困るのよ。あなたから左右云はれると實に辛いんですが、私には何う考へても、考へやう

がないんですもの。私は今迄何遍あの人に、何うぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」
「先生は何と仰しやるんですか」
「何にも云ふ事はない、何にも心配する事はない、おれは斯ういふ性質になつたんだからと云ふ丈で、取り合つて呉れないんです」
私は默つてゐた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にゐる下女はことりとも音をさせなかつた。私は丸で泥棒の事を忘れて仕舞つた。
「あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。
「いゝえ」と私が答へた。
「何うぞ隱さずに云つて下さい。さう思はれるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんが又云つた。「是でも私は先生のために出來る丈の事はしてゐる積なんです」
「そりや先生も左右認めてゐられるんだから、大丈夫です。御安心なさい、私が保證します」
奥さんは火鉢の灰を搔き馴らした。それから水注の水を鐵瓶に注した。鐵瓶は忽ち鳴りを沈めた。
「私はとう〳〵辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に惡い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる欠點なら改めるからつて、すると先生は、御前に欠點なんかありやしない、欠點はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕樣がないんです、涙が出て猶の事自分の惡い所が聞きたくなるんです」
奥さんは眼の中に涙を一杯溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに對してゐた。私が其氣で話してゐるうちに、奥さんの樣子が次第に變つて來た。奥さんは私の頭腦に訴へる代りに、私の心臓を動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、又ない筈であるのに、矢張り何かある。それだのに眼を開けて見極めやうとすると、矢張り何にもない。奥さんの苦にする要點は此所にあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、其結果として自分も嫌はれてゐるのだと斷言した。さう斷言して置きながら、ちつとも其所に落ち付いてゐられなかつた。底を割ると、却つて其逆を考へてゐた。先生は自分を嫌ふ結果、とう／＼世の中迄厭になつたのだらうと推測してゐた。けれども何う骨を折つても、其推測を突き留めて事實とする事が出來なかつた。先生の態度は何處迄も良人らしかつた。親切で優しかつた。疑ひの塊りを其日／＼の情合で包んで、そつと胸の奥に仕舞つて置いた奥さんは、其晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなた何う思つて？」と聞いた。「私からあゝなつたのか、それともあなたのいふ人世觀とか何とかいふものから、あゝなつたのか。隱さず云つて頂戴」

私は何も隱す氣はなかつた。けれども私の知らないあるものが其所に存在してゐるとすれば、私の答が何であらうと、それが奥さんを滿足させる筈がなかつた。さうして私は其所に私の知らないあるものがあると信じてゐた。

「私には解りません」
奥さんは豫期の外れた時に見る憐れな表情を其咄嗟に現はした。私はすぐ私の言葉を繼ぎ足した。
「然し先生が奥さんを嫌つてゐらつしやらない事丈は保證します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに傳へる丈です。先生は嘘を吐かない方でせう」
奥さんは何とも答へなかつた。しばらくしてから斯う云つた。
「實は私すこし思ひ中る事があるんですけれども……」
「先生があゝ云ふ風になつた源因に就いてですか」
「えゝ。もしそれが源因だとすれば、私の責任丈はなくなるんだから、夫丈でも私大變樂になれるんですが、……」
「何んな事ですか」
奥さんは云ひ澁つて膝の上に置いた自分の手を眺めてゐた。
「あなた判斷して下すつて。云ふから」
「私に出來る判斷なら遣ります」
「みんなは云へないのよ。みんな云ふと叱られるから。叱られない所丈よ」
私は緊張して唾液を呑み込んだ
「先生がまだ大學にゐる時分、大變仲の好い御友達が一人あつたのよ。其方が丁度卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語くやうな小さな聲で、「實は變死したんです」と云つた。それは「何うして」と聞き返さずにはゐられない樣な云ひ方であつた。

「それつ切りしか云へないのよ。けれども其事があつてから後なんです。先生の性質が段々變つて來たのは。何故其方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解つてゐないでせう。けれども夫から先生が變つて來たと思へば、さう思はれない事もないのよ」

「其人の墓ですか、雜司ヶ谷にあるのは」

「それも云はない事になつてるから云ひません。然し人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。だから其所を一つ貴方に判斷して頂きたいと思ふの」

私の判斷は寧ろ否定の方に傾いてゐた。

二十

私は私のつらまへた事實の許す限り、奥さんを慰めやうとした。奥さんも亦出來る丈私によつて慰さめられたさうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもと〳〵事の大根を攫んでゐなかつた。奥さんの不安も實は其所に漂よふ薄い雲に似た疑惑から出て來てゐた。事件の眞相になると、奥さん自身にも多くは知れてゐなかつた。知れてゐる所でも悉皆は私に話す事が出來なかつた。從つて慰さめる私も、慰さめられる奥さんも、共に波に浮いて、ゆら〳〵してゐた。ゆら〳〵しなが

ら、奥さんは何處迄も手を出して、覺束ない私の判斷に縋り付かうとした。

十時頃になつて先生の靴の音が玄關に聞こえた時、奥さんは急に今迄の凡てを忘れたやうに、前に坐つてゐる私を其方退けにして立ち上つた。さうして格子を開ける先生を殆んど出合頭に迎へた。私は取り殘されながら、後から奥さんに尾いて行つた。下女丈は假寐でもしてゐたと見えて、ついに出て來なかつた

先生は寧ろ機嫌がよかつた。然し奥さんの調子は更によかつた。今しがた奥さんの美くしい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶してゐた私は、其變化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかつたならば、(實際それは詐りとは思へなかつたが)、今迄の奥さんの訴へは感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかつた。尤も其時の私には奥さんをそれ程批評的に見る氣は起らなかつた。私は奥さんの態度の急に輝やいて來たのを見て、寧ろ安心した。是ならばさう心配する必要もなかつたんだと考へ直した。

先生は笑ひながら「どうも御苦勞さま、泥棒は來ませんでしたか」と私に聞いた。それから「來ないんで張合が抜けやしませんか」と云つた。

歸る時、奥さんは「どうも御氣の毒さま」と會釋した。其調子は忙がしい處を暇を潰させて氣の毒だといふよりも、折角來たのに泥棒が這入らなくつて氣の毒だといふ冗談のやうに聞こえた。奥さんはさう云ひながら、先刻出した西洋菓子の殘りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。

私は其晩の事を記憶のうちから抽き抜いて此所へ詳しく書いた。是は書く丈の必要があるから書いたの

だが、實をいふと、奥さんに菓子を貰つて歸るときの氣分では、それ程當夜の會話を重く見てゐなかつた。私は其翌日午飯を食ひに學校から歸つてきて、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包を見ると、すぐ其中からチヨコレートを塗つた鳶色のカステラを出して頬張つた。さうしてそれを食ふ時に、必竟此菓子を私に呉れた二人の男女は、幸福な一對として世の中に存在してゐるのだと自覺しつゝ味はつた。

秋が暮れて冬が來る迄格別の事もなかつた。私は先生の宅へ出這入りをする序に、衣服の洗ひ張や仕立方などを奥さんに頼んだ。それ迄繻絆といふものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかゝつたものを重ねるやうになつたのは此時からであつた。子供のない奥さんは、さういふ世話を燒くのが却つて退屈凌ぎになつて、結句身體の藥だ位の事を云つてゐた。

「こりや手織ね。こんな地の好い着物は今迄縫つた事がないわ。其代り縫ひ惡いのよそりあ。丸で針が立たないんですもの。御蔭で針を二本折りましたわ」

斯んな苦情をいふ時ですら、奥さんは別に面倒臭いといふ顔をしなかつた。

二十一

冬が來た時、私は偶然國へ歸らなければならない事になつた。私の母から受取つた手紙の中に、父の病氣の經過が面白くない樣子を書いて、今が今といふ心配もあるまいが、年が年だから、出來るなら都合して歸つて來てくれと頼むやうに付け足してあつた。

父はかねてから腎臟を病んでゐた。中年以後の人に屢見る通り、父の此病は慢性であつた。其代り要

心さへしてゐれば急變のないものと當人も家族のものも信じて疑はなかつた。現に父は養生の御蔭一つで、今日迄何うか斯うか凌いで來たやうに客が來ると吹聽してゐた。其父が、母の書信によると、庭へ出て何かしてゐる機に突然眩暈がして引ツ繰返つた。家内のものは輕症の腦溢血と思ひ違へて、すぐその手當をした。後で醫者から何うも左右ではないらしい、矢張り持病の結果だらうといふ判斷を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考へるやうになつたのである。

冬休みが來るにはまだ少し間があつた。私は學期の終り迄待つてゐても差支あるまいと思つて一日二日其儘にして置いた。すると其一日二日の間に、父の寐てゐる樣子だの、母の心配してゐる顏だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを甞めた私は、とう／＼歸る決心をした。國から旅費を送らせる手數と時間を省くため、私は暇乞かた／＼先生の所へ行つて、要る丈の金を一時立て替へてもらふ事にした。

先生は少し風邪の氣味で、座敷へ出るのが臆劫だといつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入て稀に見るやうな懷かしい和らかな日光が机掛の上に射してゐた。先生は此日あたりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盥から立ち上る湯氣で、呼吸の苦しくなるのを防いでゐた。

「大病は好いが、ちよつとした風邪などは却つて厭なものですね」と云つた先生は、苦笑しながら私の顏を見た。

先生は病氣といふ病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑ひたくなつた。

「私は風邪位なら我慢しますが、それ以上の病氣は眞平です。先生だつて同じ事でせう。試ろみに遣つ

て御覧になるとよく解ります」

「左右かね。私は病氣になる位なら、死病に罹りたいと思つてる」

私は先生のいふ事に格別注意を拂はなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでせう。其位なら今手元にある筈だから持つて行き玉へ」

先生は奥さんを呼んで、必要の金額を私の前に並べさせて呉れた。それを奥の茶簞笥か何かの抽出から出して來た奥さんは、白い半紙の上に鄭寧に重ねて、「そりや御心配ですね」と云つた。

「何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。――そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「えゝ」

先生の奥さんの母親といふ人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだと云ふ事が始めて私に解つた。

「何うせ六づかしいんでせう」と私が云つた。

「左右さね。私が代られゝば代つて上げても好いが。――嘔氣はあるんですか」

「何うですか、何とも書いてないから、大方ないんでせう」

「嘔氣さへ來なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが云つた。

私は其晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病氣は思つた程惡くはなかつた。それでも着いた時は、床の上に胡坐をかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢して斯う凝としてゐる。なにもう起きても好いのさ」と云つた。然し其翌日からは母が止めるのも聞かずに、とう／＼床を上げさせて仕舞つた。母は不承不性に太織の蒲團を疊みながら「御父さんは御前が歸つて來たので、急に氣が強くおなりなんだよ」と云つた。私には父の擧動がさして虛勢を張つてゐるやうにも思へなかつた。

私の兄はある職を帶びて遠い九州にゐた。是は萬一の事がある場合でなければ、容易に父母の顏を見る自由の利かない男であつた。妹は他國へ嫁いだ。是も急場の間に合ふ樣に、おいそれと呼び寄せられる女ではなかつた。兄妹三人のうちで、一番便利なのは矢張り書生をしてゐる私丈であつた。其私が母の云ひ付け通り學校の課業を放り出して、休み前に歸つて來たといふ事が、父には大きな滿足であつた。

「是しきの病氣に學校を休ませては氣の毒だ。御母さんがあまり仰山な手紙を書くものだから不可い」

父は口では斯う云つた。斯ういつた許でなく、今迄敷いてゐた床を上げさせて、何時ものやうな元氣を示した。

「あんまり輕はずみをして又逆回すと不可ませんよ」

私の此注意を父は愉快さうに然し極めて輕く受けた。

「なに大丈夫、是で何時もの樣に要心さへしてゐれば」

實際父は大丈夫らしかつた。家の中を自由に往來して、息も切れなければ、眩暈も感じなかつた。たゞ顏色丈は普通の人よりも大變惡かつたが、是は又今始まつた症狀でもないので、私達は格別それを氣に

留めなかつた。

私は先生に手紙を書いて恩借の禮を述べた。正月上京する時に持參するからそれ迄待つてくれるやうにと斷つた。さうして父の病狀の思つた程險惡でない事、此分なら當分安心な事、眩暈も嘔氣も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪に就いても一言の見舞を附け加へた。私は先生の風邪を實際輕く見てゐたので。

私は其手紙を出す時に決して先生の返事を豫期してゐなかつた。出した後で父や母と先生の噂などをしながら、遙かに先生の書齋を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸でも持つて行つて御上げ」

「えゝ、然し先生が干した椎茸なぞを食ふかしら」

「旨くはないが、別に嫌な人もないだらう」

私には椎茸と先生を結び付けて考へるのが變であつた。

先生の返事が來た時、私は一寸驚ろかされた。ことにその內容が特別の用件を含んでゐなかつた時、驚ろかされた。先生はたゞ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思つた。さう思ふと、その簡單な一本の手紙が私には大層な喜びになつた。尤も是は私が先生から受取つた第一の手紙には相違なかつたが。

第一といふと私と先生の間に書信の往復がたび〳〵あつたやうに思はれるが、事實は決してさうでない事を一寸斷つて置きたい。私は先生の生前にたつた二通の手紙しか貰つてゐない。其一通は今いふ此簡單な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大變長いものである。

父は病氣の性質として、運動を愼しまなければならないので、床を上げてからも、殆んど戸外へは出なかつた。一度天氣のごく穩やかな日の午後庭へ下りた事があるが、其時は萬一を氣遣つて、私が引き添ふやうに傍に付いてゐた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせやうとしても、父は笑つて應じなかつた。

二十三

私は退屈な父の相手としてよく將碁盤に向つた。二人とも無精な性質なので、炬燵にあたつた儘、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざ〳〵手を掛蒲團の下から出すやうな事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の來る迄双方とも知らずにゐたりした。それを母が灰の中から見付出して、火箸で挾み上げるといふ滑稽もあつた。

「碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いてゐるから、炬燵の上では打てないが、其所へ來ると將碁盤は好いね、斯うして樂に差せるから。無精者には持つて來いだ。もう一番遣らう」

父は勝つた時は必ずもう一番遣らうと云つた。其癖負けた時にも、もう一番遣らうと云つた。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、將碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍らしいので、此隱居じみた娯樂が私にも相當の興味を與へたが、少し時日が經つに伴れて、若い私の氣力は其位な刺戟で滿足出來なくなつた。私は金や香車を握つた拳を頭の上へ伸して、時々思ひ切つたあくびをした。

私は東京の事を考へた。さうして漲る心臟の血潮の奧に、活動々々と打ちつゞける鼓動を聞いた。不思議にも其鼓動の音が、ある微妙な意識狀態から、先生の力で強められてゐるやうに感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。兩方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分らない程大人しい男であつた。他に認められるといふ點からいへば何方も零であつた。それでゐて、此將碁を差したがる父は、單なる娯樂の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往來をした覺のない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を與へてゐた。たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。私は父が私の本當の父であり、先生は又いふ迄もなく、あかの他人であるといふ明白な事實を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな眞理でも發見したかの如くに驚ろいた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今迄珍らしかつた私が段々陳腐になつて來た。是は夏休みなどに國へ歸る誰でもが一樣に經驗する心持だらうと思ふが、當座の一週間位は下にも置かないやうに、ちやほや歡待されるのに、其峠を定規通り通り越すと、あとはそろ／＼家族の熱が冷めて來て、仕舞には有つても無くつても構はないもの〻やうに粗末に取扱かはれ勝になるものである。私も滯在中に其峠を通り越した。其上私は國へ歸るたびに、父にも母にも解らない變な所を東京から持つて歸つた。昔でいふと、儒者の家へ切支丹の臭を持ち込むやうに、私の持つて歸るものは父とも母とも調和しなかつた。無論私はそれを隱してゐた。けれども元々身に着いてゐるものだから、出すまいと思つても、何時かそれが父や母の眼に留つた。私はつい面白くなくなつた。早く東京へ歸りたくなつた。

父の病氣は幸ひ現狀維持の儘で、少しも惡い方へ進む模樣は見えなかつた。念のためにわざ／＼遠くか

ら相當の醫者を招いたりして、愼重に診察して貰つても矢張私の知つてゐる以外に異狀は認められなかつた。私は冬休みの盡きる少し前に國を立つ事にした。立つと云ひ出すと、人情は妙なもので、父も母も反對した。

「もう歸るのかい、まだ早いぢやないか」と母が云つた。

「まだ四五日居ても間に合ふんだらう」と父が云つた。

私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。

二十四

東京へ歸つて見ると、松飾はいつか取拂はれてゐた。町は寒い風の吹くに任せて、何處を見ても是といふ程の正月めいた景氣はなかつた。

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸も序に持つて行つた。たゞ出すのは少し變だから、母が是を差上げて呉れといひましたとわざ／＼斷つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新らしい菓子折に入れてあつた。鄭寧に禮を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、其折を持つて見て、輕いのに驚ろかされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、斯んな所に極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念の問を繰り返してくれた中に、先生は斯んな事をいつた。

「成程容體を聞くと、今が今何うといふ事もないやうですが、病氣が病氣だから餘程氣をつけないと不可ません」

先生は腎臓の病に就いて私の知らない事を多く知つてゐた。

「自分で病氣に罹つてゐながら、氣が付かないで平氣でゐるのがあの病の特色です。私の知つたある士官は、とう〳〵それで遣られたが、全く嘘のやうな死に方をしたんですよ。何しろ傍に寐てゐた細君が看病をする暇もなんにもない位なんですからね。夜中に一寸苦しいと云つて、細君を起したぎり、翌る朝はもう死んでゐたんです。しかも細君は夫が寐てゐるとばかり思つてたんだつて云ふんだから」

今迄樂天的に傾むいてゐた私は急に不安になつた。

「私の父もそんなになるでせうか。ならんとも云へないですね」

「醫者は何と云ふのです」

「醫者は到底治らないといふんです。けれども當分の所心配はあるまいともいふんです」

「夫なら好いでせう。醫者が左右いふなら。私の今話したのは氣が付かずにゐた人の事で、しかもそれが隨分亂暴な軍人なんだから」

私は稍安心した。私の變化を凝と見てゐた先生は、それから斯う付け足した。

「然し人間は健康にしろ病氣にしろ、どつちにしても脆いものですね。いつ何んな事で何んな死にやうをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考へて御出ですか」

「いくら丈夫の私でも、滿更考へない事もありません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるぢやありませんか。自然に。それからあつと思ふ間に死ぬ人もあるでせう。不自然な暴力で」
「不自然な暴力つて何ですか」
「何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使ふんでせう」
「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力の御蔭ですね」
「殺される方はちつとも考へてゐなかつた。成程左右いへば左右だ」
其日はそれで歸つた。歸つてからも父の病氣の事はそれ程苦にならなかつた。先生のいつた自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいふ言葉も、其場限りの淺い印象を與へた丈で、後は何等のこだわりを私の頭に殘さなかつた。私は今迄幾度か手を着けやうとしては手を引つ込めた卒業論文を、愈本式に書き始めなければならないと思ひ出した。

二十五

其年の六月に卒業する筈の私は、是非共此論文を成規通り四月一杯に書き上げて仕舞はなければならなかつた。二、三、四と指を折つて餘る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐつた。他のものは餘程前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、餘所目にも忙がしさうに見えるのに、私丈はまだ何にも手を着けずにゐた。私にはたゞ年が改たまつたら大いに遣らうといふ決心丈があつた。私は其決心で遣り出した。さうして忽ち動けなくなつた。今迄大きな問題を空に描いて、骨組丈は略出來上つてゐ

る位に考へてゐた私は、頭を抑えて惱み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。さうして練り上げた思想を系統的に纏める手數を省くために、たゞ書物の中にある材料を並べて、それに相當な結論を一寸付け加へる事にした。

私の選擇した問題は先生の專門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選擇に就いて先生の意見を尋ねた時、先生は好いでせうと云つた。狼狽した氣味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の讀まなければならない參考書を聞いた。先生は自分の知つてゐる限りの知識を、快よく私に與へて呉れた上に、必要の書物を二三冊貸さうと云つた。然し先生は此點について毫も私を指導する任に當らうとしなかつた。

「近頃はあんまり書物を讀まないから、新らしい事は知りませんよ。學校の先生に聞いた方が好いでせう」

先生は一時非常の讀書家であつたが、其後何ういふ譯か、前程此方面に興味が働らかなくなつたやうだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私は其時不圖思ひ出した。私は論文を餘所にして、そゞろに口を開いた。

「先生は何故元のやうに書物に興味を持ち得ないんですか」

「何故といふ譯もありませんが。……つまり幾何本を讀んでもそれ程えらくならないと思ふ所爲でせう。それから……」

「それから、未だあるんですか」

「まだあるといふ程の理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥

のやうに極が悪かつたものだが、近頃は知らないといふ事が、それ程の耻でないやうに見え出したものだから、つい無理にも本を讀んで見やうといふ元氣が出なくなつたのでせう。まあ早く云へば老い込んだのです」

先生の言葉は寧ろ平靜であつた。世間に脊中を向けた人の苦味を帶びてゐなかつた丈に、私にはそれ程の手應もなかつた。私は先生を老い込んだとも思はない代りに、偉いとも感心せずに歸つた。

それからの私は殆んど論文に祟られた精神病者の樣に眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達に就いて、色々樣子を聞いて見たりした。そのうちの一人は締切の日に車で事務所へ馳けつけて漸く間に合はせたと云つた。他の一人は五時を十五分程後らして持つて行つたため、危うく跳ね付けられやうとした所を、主任教授の好意でやつと受理して貰つたと云つた。私は不安を感ずると共に度胸を据ゑた。毎日机の前で精根のつゞく限り働らいた。でなければ、薄暗い書庫に這入つて、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のやうに脊表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更へて行つた。それが一仕切經つと、櫻の噂がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のやうに正面許り見て、論文に鞭たれた。私はついに四月の下旬が來て、やつと豫定通りのものを書き上げる迄、先生の敷居を跨がなかつた。

二十六

私の自由になつたのは、八重櫻の散つた枝にいつしか青い葉が霞むやうに伸び始める初夏の季節であつ

た。私は籠を拔け出した小鳥の心をもつて、廣い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行つた。枳殼の垣が黑ずんだ枝の上に、萌るやうな芽を吹いてゐたり、柘榴の枯れた幹から、つや〳〵しい茶褐色の葉が、柔らかさうに日光を映してゐたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて始めてそんなものを見るやうな珍らしさを覺えた。

先生は嬉しさうな私の顏を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といつた。私は「御蔭で漸やく濟みました。もう何にもする事はありません」と云つた。

實際其時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、是から先は威張つて遊んで居ても構はないやうな晴やかな心持でゐた。私は書き上げた自分の論文に對して充分の自信と滿足を有つてゐた。私は先生の前で、しきりに其内容を喋々した。先生は何時もの調子で、「成程」とか、「左右ですか」とか云つてくれたが、それ以上の批評は少しも加へなかつた。私は物足りないといふよりも、聊か拍子拔けの氣味であつた。それでも其日私の氣力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みる程に生々してゐた。私は靑く蘇生らうとする大きな自然の中に、先生を誘ひ出さうとした。

「先生何處かへ散歩しませう。外へ出ると大變好い心持です」

「何處へ」

私は何處でも構はなかつた。たゞ先生を伴れて郊外へ出たかつた。

一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも區別の付かない靜かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を捥ぎ取つて芝笛を鳴らした。ある鹿兒島人を友達にもつて、その

人の眞似をしつゝ自然に習ひ覺えた私は、此芝笛といふものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつゞけると、先生は知らん顔をして餘所を向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたやうに蓊欝した小高い一構の下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだら〳〵上りになつてゐる入口を眺めて、「這入つて見ようか」と云つた。私はすぐ「植木屋ですね」と答へた。

植込の中を一うねりして奥へ上ると左側に家があつた。明け放つた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。たゞ軒先に据ゑた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いてゐた。

「靜かだね。斷わらずに這入つても構はないだらうか」

「構はないでせう」

二人は又奥の方へ進んだ。然しそこにも人影は見えなかつた。躑躅が燃えるやうに咲き亂れてゐた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「是は霧島でせう」と云つた。

芍藥も十坪あまり一面に植付けられてゐたが、まだ季節が來ないので花を着けてゐるのは一本もなかつた。此芍藥畠の傍にある古びた緣臺のやうなものゝ上に先生は大の字なりに寐た。私は其餘つた端の方に腰を卸して烟草を吹かした。先生は蒼い透き徹るやうな空を見てゐた。私は私を包む若葉の色に心を奪はれてゐた。其若葉の色をよく〳〵眺めると、一々違つてゐた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けてゐるものは一つもなかつた。細い杉苗の頂に投げ被せてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

二十七

私はすぐ其帽子を取り上げた。所々に着いてゐる赤土を爪で彈きながら先生を呼んだ。
「先生帽子が落ちました」
「ありがたう」
身體を半分起してそれを受取つた先生は、起きるとも寐るとも片付かない其姿勢の儘で、變な事を私に聞いた。
「突然だが、君の家には財産が餘程あるんですか」
「あるといふ程ありやしません」
「まあ何の位あるのかね。失禮の樣だが」
「何の位つて、山と田地が少しある限で、金なんか丸で無いんでせう」
先生が私の家の經濟に就いて、問らしい問を掛けたのはこれが始めてゞあつた。私の方はまだ先生の暮し向に關して、何も聞いた事がなかつた。先生と知合になつた始め、私は先生が何うして遊んでゐられるかを疑ぐつた。其後も此疑ひは絶えず私の胸を去らなかつた。然し私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけと許思つて何時でも控えてゐた。若葉の色で疲れた眼を休ませてゐた私の心は、偶然また其疑ひに觸れた。
「先生は何うなんです。何の位の財産を有つてゐらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」
先生は平生から寧ろ質素な服裝をしてゐた。それに家内は小人數であつた。從つて住宅も決して廣くはなかつた。けれども其生活の物質的に豐な事は、内輪に這入り込まない私の眼にさへ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅澤といへない迄も、あたぢけなく切り詰めた無彈力性のものではなかつた。

「左右でせう」と私が云つた。

「そりや其位の金はあるさ。けれども決して財産家ぢやありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」

此時先生は起き上つて、縁臺の上に胡坐をかいてゐたが、斯う云ひ終ると、竹の杖の先で地面の上へ圓のやうなものを描き始めた。それが濟むと、今度はステッキを突き刺すやうに眞直に立てた。

「是でも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分獨言のやうであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい默つてゐた。

「是でも元は財産家なんですよ、君」と云ひ直した先生は、次に私の顏を見て微笑した。私はそれでも何とも答へなかつた。寧ろ不調法で答へられなかつたのである。すると先生が又問題を他へ移した。

「あなたの御父さんの病氣は其後何うなりました」

私は父の病氣について正月以後何にも知らなかつた。月々國から送つてくれる爲替と共に來る簡單な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病氣の訴へはそのうちに殆んど見當らなかつた。其上書體も確であつた。此種の病人に見る顫が少しも筆の運を亂してゐなかつた。

「何とも云つて來ませんよ」

「矢張り駄目ですかね。でも當分は持ち合つてるんでせう。何とも云つて來ませんが、もう好いんでせう」

「好ければ結構だが、――病症が病症なんだからね」

「さうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを、普通の談話――胸に浮かんだ儘を其通り口にする、普通の談話と思つて聞いてゐた。所が先生の言葉の底には兩方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の經驗を持たない私は無論其處に氣が付く筈がなかつた。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけて貰つて置かないと不可いと思ふがね、餘計な御世話だけれども。君の御父さんが達者なうちに、貰うものはちやんと貰つて置くやうにしたら何うですか。萬一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「えゝ」

私は先生の言葉に大した注意を拂はなかつた。私の家庭でそんな心配をしてゐるものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じてゐた。其上先生のいふ事の、先生として、あまりに實際的なのに私は少し驚ろかされた。然し其所は年長者に對する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたの御父さんが亡くなられるのを、今から豫想して掛るやうな言葉遣をするのが氣に觸つたら許

して呉れ玉へ。然し人間は死ぬものだからね。何んなに達者なものでも、何時死ぬか分らないものだからね」

先生の口氣は珍らしく苦々しかつた。

「そんな事をちつとも氣に掛けちやゐません」と私は辯解した。

「君の兄妹は何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生は其上に私の家族の人數を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の樣子を問ひなどした。さうして最後に斯ういつた。

「みんな善い人ですか」

「別に惡い人間といふ程のものもゐないやうです。大抵田舍者ですから」

「田舍者は何故惡くないんですか」

私は此追窮に苦しんだ。然し先生は私に返事を考へさせる餘裕さへ與へなかつた。

「田舍者は都會のものより却つて惡い位なものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、是といつて、惡い人間はゐないやうだと云ひましたね。然し惡い人間といふ一種の人間が世の中にあると君は思つてゐるんですか。そんな鑄型に入れたやうな惡人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間際に、急に惡人に變るんだから恐ろしいのです。だから油斷が出來ないんです」

先生のいふ事は、此所で切れる樣子もなかつた。私は又此所で何か云はうとした。すると後の方で犬が

た。そこへ十位の小供が馳けて來て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黑い帽子を被つたまゝ先生の前へ廻つて禮をした。

「叔父さん、這入つて來る時、家に誰もゐなかつたかい」と聞いた。

「誰もゐなかつたよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」

「さうか、居たのかい」

「あゝ。叔父さん、今日はつて、斷つて這入つて來ると好かつたのに」

先生は苦笑した。懷中から蟇口を出して、五錢の白銅を小供の手に握らせた。

「おつかさんに左右云つとくれ。少し此所で休まして下さいつて」

小供は怜悧さうな眼に笑を漲らして、首肯いて見せた。

「今斥候長になつてる所なんだよ」

小供は斯う斷つて、躑躅の間を下の方へ馳け下りて行つた。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追ひ掛けた。しばらくすると同じ位の年格好の小供が二三人、是も斥候長の下りて行つた方へ馳けていつた。

二十九

先生の談話は、此犬と小供のために、結末迄進行する事が出來なくなつたので、私はついに其要領を得ないでしまつた。先生の氣にする財産云々の掛念は其時の私には全くなかつた。私の性質として、又私の境遇からいつて、其時の私には、そんな利害の念に頭を惱ます餘地がなかつたのである。考へると是は私がまだ世間に出ない爲でもあり、又實際其場に臨まない爲でもあつたらうが、兎に角若い私には何故か金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでたゞ一つ底迄聞きたかつたのは、人間がいざといふ間際に、誰でも惡人になるといふ言葉の意味であつた。單なる言葉としては、是丈でも私に解らない事はなかつた。然し私は此句に就いてもつと知りたかつた。

犬と小供が去つたあと、廣い若葉の園は再び故の靜かさに歸つた。さうして我々は沈默に鎖ざされた人の樣にしばらく動かずにゐた。うるはしい空の色が其時次第に光を失なつて來た。眼の前にある樹は大概楓であつたが、其枝に滴るやうに吹いた輕い緑の若葉が、段々暗くなつて行く樣に思はれた。遠い往來を荷車を引いて行く響がごろ〳〵と聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて緣日へでも出掛けるものと想像した。先生は其音を聞くと、急に瞑想から呼息を吹き返した人のやうに立ち上つた。

「もう、徐々歸りませう。大分日が永くなつたやうだが、矢張斯う安閑としてゐるうちには、何時の間にか暮れて行くんだね」

先生の脊中には、さつき縁臺の上に仰向に寐た痕が一杯着いてゐた。私は兩手でそれを拂ひ落した。

「ありがたう。脂がこびり着いてやしませんか」

「綺麗に落ちました」

「此羽織はつい此間拵らえた許なんだよ。だから無暗に汚して歸ると、妻に叱られるからね。有難う」

二人は又だら〳〵坂の中途にある家の前へ來た。這入る時には誰もゐる氣色の見えなかつた縁に、御上さんが、十五六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけてゐた。二人は大きな金魚鉢の横から、「どうも御邪魔をしました」と挨拶した。御上さんは「いゝえ御構ひ申しも致しませんで」と禮を返した後、先刻小供に遣つた白銅の禮を述べた。

門口を出て二三町來た時、私はついに先生に向つて口を切つた。

「さき程先生の云はれた、人間は誰でもいざといふ間際に惡人になるんだといふ意味ですね。あれは何ういふ意味ですか」

「意味といつて、深い意味もありません。——つまり事實なんですよ。理窟ぢやないんだ」

「事實で差支ありませんが、私の伺ひたいのは、いざといふ間際といふ意味なんです。一體何んな場合を指すのですか」

先生は笑ひ出した。恰も時機の過ぎた今、もう熱心に說明する張合がないと云つた風に。

「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ惡人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつた。先生が調子に乗らない如く、私も拍子抜けの氣味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきほひ先生は少し後れ勝になつた。先生はあとから、

「おい〳〵」と聲を掛けた。

「そら見給へ」
「何をですか」
「君の氣分だつて、私の返事一つですぐ變るぢやないか」
待ち合はせるために振り向いて立ち留まつた私の顏を見て、先生は斯う云つた。

三十

其時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにゐた。しかし先生の方では、それに氣が付いてゐたのか、ゐないのか、丸で私の態度に拘泥る樣子を見せなかつた。いつもの通り沈默がちに落付き拂つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹になつた。何とかいつて一つ先生を遣つ付けて見たくなつて來た。
「先生」
「何ですか」
「先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでゐる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしい所を拜見した樣な氣がします」
先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手應のあつたやうにも思つた。また的が外れたやうにも感じた。仕方がないから後は云はない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。さうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやり其所に立つてゐた。

「やあ失敬」

先生は斯ういつて又歩き出した。私はとう〳〵先生を遣り込める事を斷念した。私達の通る道は段々賑やかになつた。今迄ちらほらと見えた廣い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないやうに左右の家並が揃つてきた。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹にからませたり、金網で鷄を圍ひ飼ひにしたりするのが閑靜に眺められた。市中から歸る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終氣を奪られがちな私は、さつき迄胸の中にあつた問題を何處かへ振り落して仕舞つた。先生が突然其所へ後戻りをした時、私は實際それを忘れてゐた。

「私は先刻そんなに昂奮したやうに見えたんですか」

「そんなにと云ふ程でもありませんが、少し……」

「いや見えても構はない。實際昂奮するんだから。私は財産の事をいふと屹度昂奮するんです。君には何う見えるか知らないが、私は是で大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりも猶昂奮してゐた。然し私の驚ろいたのは、決して其調子ではなかつた。寧ろ先生の言葉が私の耳に訴へる意味そのものであつた。先生の口から斯んな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかつた。私は先生の性質の特色として、斯んな執着力を未だ嘗て想像した事さへなかつた。私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。さうして其弱くて高い處に、私の懐かしみの根を置いてゐた。一時の氣分で先生にちよつと盾を突いて見やうとした私は、此言葉の前に小さくなつた。先生は斯う云つ

た。

「私は他に欺むかれたのです。しかも血のつゞいた親戚のものから欺むかれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄脊負はされてゐる。恐らく死ぬ迄脊負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出來ないんだから。然し私はまだ復讐をしずにゐる。考へると私は個人に對する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覺えたのだ。私はそれで澤山だと思ふ」

私は慰藉の言葉さへ口へ出せなかつた。

三十一

其日の談話も遂にこれぎりで發展せずにしまつた。私は寧ろ先生の態度に畏縮して、先へ進む氣が起らなかつたのである。

二人は市の外れから電車に乘つたが、車内では殆んど口を聞かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、又變つてゐた。常よりは晴やかな調子で、「是から六月迄は一番氣樂な時ですね。ことによると生涯で一番氣樂かも知れない。精出して遊び玉へ」と云つた。私は笑つて帽子を脱つた。其時私は先生の顏を見て、先生は果して心の何處で、一般の人間を憎んでゐるのだらうかと疑つた。その眼、その口、何處にも厭世的の影は射してゐなかつた。

私は思想上の問題に就いて、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。然し同じ問題に就いて、利益を受けやうとしても、受けられない事が間々あつたと云はなければならない。先生の談話は時として不得要領に終つた。其日二人の間に起つた郊外の談話も、此不得要領の一例として私の胸の裏に殘つた。

無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑つてゐた。私は斯う云つた。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構ひませんが、ちやんと解つてる癖に、はつきり云つて呉れないのは困ります」

「私は何にも隱してやしません」

「隱してゐらつしやいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とを、ごちや〳〵に考へてゐるんぢやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考を無暗に人に隱しやしません。隱す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それは又別問題になります」

「別問題とは思はれません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど價値のないものになります。私は魂の吹き込まれてゐない人形を與へられた丈で、滿足は出來ないのです」

先生はあきれたと云つた風に、私の顏を見た。卷烟草を持つてゐた其手が少し顫へた。

「あなたは大膽だ」

「たゞ眞面目なんです。眞面目に人生から教訓を受けたいのです」
「私の過去を訐いてもですか」
訐くといふ言葉が、突然恐ろしい響を以て、私の耳を打つた。私は今私の前に坐つてゐるのが、一人の罪人であつて、不斷から尊敬してゐる先生でないやうな氣がした。先生の顏は蒼かつた。
「あなたは本當に眞面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから實はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには餘りに單純すぎる樣だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて吳れますか。あなたは腹の底から眞面目ですか」
「もし私の命が眞面目なものなら、私の今いつた事も眞面目です」
私の聲は顫へた。
「よろしい」と先生が云つた。「話しませう。私の過去を殘らず、あなたに話して上げませう。其代り……。いやそれは構はない。然し私の過去はあなたに取つて夫程有益でないかも知れませんよ。聞かない方が增かも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、其積でゐて下さい。適當の時機が來なくつちや話さないんだから」
私は下宿へ歸つてからも一種の壓迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評價してゐた程に、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は豫定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭くなつた古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、何れもこれもみな暑さうな顔ばかりであつた。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身體を持て餘した。しばらく立つてゐるうちに手に持つたハンケチがぐしよ〳〵になつた。

私は式が濟むとすぐ歸つて裸體になつた。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のやうにぐる〳〵巻いた卒業證書の穴から、見える丈の世の中を見渡した。それから其卒業證書を机の上に放り出した。さうして大の字なりになつて、室の眞中に寐そべつた。私は寐ながら自分の過去を顧みた。又自分の未來を想像した。すると其間に立つて一區切を付けてゐる此卒業證書なるものが、意味のあるやうな、又意味のないやうな變な紙に思はれた。

私は其晩先生の家へ御馳走に招かれて行つた。是はもし卒業したら其日の晩餐は餘所で食はずに、先生の食卓で濟ますといふ前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の緣近くに据ゑられてあつた。模樣の織り出された厚い糊の硬い卓布が美くしく且淸らかに電燈の光を射返してゐた。先生のうちで飯を食ふと、屹度此西洋料理店に見るやうな白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。さうしてそれが必ず洗濯したての眞白なものに限られてゐた。

「カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを用ひる位なら、一層始から色の着いたものを使ふが好い。白ければ純白でなくつちや」

斯う云はれて見ると、成程先生は潔癖であつた。書齋なども實に整然と片付いてゐた。無頓着な私には、

先生のさういふ特色が折々著るしく眼に留まつた。

「先生は癇性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それ程氣にしないやうですよ」と答へた事があつた。それを傍に聞いてゐた先生は、「本當をいふと、私は精神的に癇性なんです。それで始終苦しいんです。考へると實に馬鹿々々しい性分だ」と云つて笑つた。精神的に癇性といふ意味は、俗に神經質といふ意味か、又は倫理的に潔癖だといふ意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。

其晩私は先生と向ひ合せに、例の白い卓布の前に坐つた。奥さんは二人を左右に置いて、獨り庭の方を正面にして席を占めた。

「御目出たう」と云つて、先生が私のために杯を上げて呉れた。私は此盃に對して夫程嬉しい氣を起さなかつた。無論私自身の心が此言葉に反響するやうに、飛び立つ嬉しさを有つてゐなかつたのが、一つの源因であつた。けれども先生の云ひ方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帶びてゐなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私は其笑のうちに、些とも意地の惡いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たいといふ眞情も汲み取る事が出來なかつた。先生の笑は、「世間はこんな場合によく御目出たうと云ひたがるものですね」と私に物語つてゐた。

奥さんは私に「結構ね。嘸御父さんや御母さんは御喜びでせう」と云つて呉れた。私は突然病氣の父の事を考へた。早くあの卒業證書を持つて行つて見せて遣らうと思つた。

「先生の卒業證書は何うしました」と私が聞いた。

「何うしたかね。――まだ何處かに仕舞つてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。
「えゝ、たしか仕舞つてある筈ですが」
卒業證書の在處は二人とも能く知らなかつた。

三十三

飯になつた時、奥さんは傍に坐つてゐる下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない客に對する先生の家の仕來りらしかつた。始めの一二回は私も窮屈を感じたが、度數の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。
「御茶？御飯？隨分よく食べるのね」
奥さんの方でも思ひ切つて遠慮のない事を云ふことがあつた。然し其日は、時候が時候なので、そんなに調戯はれる程食慾が進まなかつた。
「もう御仕舞。あなた近頃大變小食になつたのね」
「小食になつたんぢやありません。暑いんで食はれないんです」
奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子を運ばせた。
「是は宅で拵えたのよ」
用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞ふだけの餘裕があると見えた。私はそれを二杯更へて貰つた。

「君も愈卒業したが、是から何をする氣ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で脊中を障子に靠たせてゐた。

私にはたゞ卒業したといふ自覺がある丈で、是から何をしやうといふ目的もなかつた。返事にためらつてゐる私を見た時、奥さんは「教師?」と聞いた。それにも答へずにゐると、今度は、「ぢや御役人?」と又聞かれた。私も先生も笑ひ出した。

「本當いふと、まだ何をする考へもないんです。實は職業といふものに就いて、全く考へた事がない位なんですから。だいち何れが善いか、何れが惡いか、自分が遣つて見た上でないと解らないんだから、選擇に困る譯だと思ひます」

「それも左右ね。けれどもあなたは必竟財産があるからそんな呑氣な事を云つてゐられるのよ。是が困る人で御覽なさい。中々あなたの樣に落付いちや居られないから」

私の友達には卒業しない前から、中學教師の口を探してゐる人があつた。私は腹の中で奥さんのいふ事實を認めた。然し斯う云つた。

「少し先生にかぶれたんでせう」

「碌なかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構はないから、其代り此間云つた通り、御父さんの生きてゐるうちに、相當の財産を分けて貰つて御置きなさい。それでないと決して油斷はならない」

私は先生と一所に、郊外の植木屋の廣い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いてゐる五月の初めを思ひ出した。あの時歸り途に、先生が昂奮した語氣で、私に物語つた強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、寧ろ凄い言葉であつた。けれども事實を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、御宅の財産は餘ッ程あるんですか」

「何だつてそんな事を御聞になるの」

「先生に聞いても敎へて下さらないから」

奥さんは笑ひながら先生の顏を見た。

「敎へて上げる程ないからでせう」

「でも何の位あつたら先生のやうにしてゐられるか、宅へ歸つて一つ父に談判する時の參考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしてゐた。相手は自然奥さんでなければならなかつた。

「何の位つて程ありやしませんわ。まあ斯うして何うか斯うか暮して行かれる丈よ、あなた。――そりや何うでも宜いとして、あなたは是から何か爲さらなくつちや本當に不可せんよ。先生のやうにごろ〲許してゐちや……」

「ごろ〲許してゐやしないさ」

先生はちよつと顏丈向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

私は其夜十時過に先生の家を辭した。二三日うちに歸國する筈になつてゐたので、座を立つ前に私は一寸暇乞の言葉を述べた。

「又當分御目にかゝれませんから」

「九月には出て入らつしやるんでせうね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て來る必要もなかつた。然し暑い盛りの八月を東京迄來て送らうとも考へてゐなかつた。私には位置を求めるための貴重な時間といふものがなかつた。

「まあ九月頃になるでせう」

「ぢや隨分御機嫌よう。私達も此夏はことによると何處かへ行くかも知れないのよ。隨分暑さうだから。行つたら又繪葉書でも送つて上げませう」

「何ちらの見當です。若し入らつしやるとすれば」

先生は此問答をにやく笑つて聞いてゐた。

「何まだ行くとも行かないとも極めてゐやしないんです」

席を立たうとした時に、先生は急に私をつらまへて、「時に御父さんの病氣は何うなんです」と聞いた。私は父の健康に就いて殆んど知る所がなかつた。何とも云つて來ない以上、惡くはないのだらう位に考へてゐた。

「そんなに容易く考へられる病氣ぢやありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」私はそんな尿毒症といふ言葉も意味も私には解らなかつた。此前の冬休みに國で醫者と會見した時に、私はそんな術語を丸で聞かなかつた。

「本當に大事にして御上げなさいよ」と奥さんもいつた。「毒が脳へ廻るやうになると、もう夫つきりよ、あなた。笑ひ事ぢやないわ」

無經驗な私は氣味を惡がりながらも、にやにやしてゐた。

「何うせ助からない病氣ださうですから、いくら心配したつて仕方がありません」

「さう思ひ切りよく考へれば、夫迄ですけれども」

奥さんは昔同じ病氣で死んだといふ自分の御母さんの事でも憶ひ出したのか、沈んだ調子で斯ういつたなり下を向いた。私も父の運命が本當に氣の毒になつた。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「靜、御前はおれより先へ死ぬだらうかね」

「何故」

「何故でもない、たゞ聞いて見るのさ。それとも己の方が御前より前に片付くかな。大抵世間ぢや旦那が先で、細君が後へ殘るのが當り前のやうになつてるね」

「さう極つた譯でもないわ。けれども男の方は何うしても、そら年が上でせう」

「だから先へ死ぬといふ理窟なのかね。すると己も御前より先にあの世へ行かなくつちやならない事に

なるね」
「あなたは特別よ」
「さうかね」
「だつて丈夫なんですもの。殆んど煩つた例がないぢやありませんか。そりや何うしたつて私の方が先だわ」
「先かな」
「え、屹度先よ」
先生は私の顔を見た。私は笑つた。
「然しもしおれの方が先へ行くとするね。さうしたら御前何うする」
「何うするつて……」
奥さんは其所で口籠つた。先生の死に對する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう氣分を更へてゐた。
「何うするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていふ位だから」
奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく斯う云つた。

三十五

私は立て掛けた腰を又卸して、話の區切の付く迄二人の相手になつてゐた。

「君は何う思ひます」と先生が聞いた。
先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判斷のつくべき問題ではなかつた。私はたゞ笑つてゐた。
「壽命は分りませんね。私にも」
「是ばかりは本當に壽命ですからね。生れた時にちやんと極つた年數をもらつて來るんだから仕方がないわ。先生の御父さんや御母さんなんか、殆んど同なじよ、あなた、亡くなつたのが」
「亡くなられた日がですか」
「まさか日迄同なじぢやないけれども。でもまあ同なじよ。だつて續いて亡くなつちまつたんですもの」
此知識は私にとつて新らしいものであつた。私は不思議に思つた。
「何うしてさう一度に死なれたんですか」
奥さんは私の問に答へやうとした。先生はそれを遮つた。
「そんな話は御止しよ。つまらないから」
先生は手に持つた團扇をわざとばた／＼云はせた。さうして又奥さんを顧みた。
「靜、おれが死んだら此家を御前に遣らう」
奥さんは笑ひ出した。
「序に地面も下さいよ」
「地面は他のものだから仕方がない。其代りおれの持つてるものは皆な御前に遣るよ」

「何うも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕樣がないわね」
「古本屋に賣るさ」
「賣ればいくら位になつて」
先生はいくらとも云はなかつた。けれども先生の話は、容易に自分の死といふ遠い問題を離れなかつた。さうして其死は必ず奧さんの前に起るものと假定されてゐた。奧さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答へをしてゐるらしく見えた。それが何時の間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。
「おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍仰しやるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだらは止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思ひ通りにして上げるから、それで好いぢやありませんか」
先生は庭の方を向いて笑つた。然しそれぎり奧さんの厭がる事を云はなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奧さんは玄關迄送つて出た。
「御病人を御大事に」と奧さんがいつた。
「また九月に」と先生がいつた。
私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄關と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐやうに、夜陰のうちに枝を張つてゐた。私は二三歩動き出しながら、黑ずんだ葉に被はれてゐる其梢を見て、來るべき秋の花と香を想ひ浮べた。私は先生の宅と此木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出來ないものゝやうに、一所に記憶してゐた。私が偶然其樹の前に立つて、再びこの宅の玄關を跨ぐべ

き次の秋に思を馳せた時、今迄格子の間から射してゐた玄關の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入たらしかつた。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。國へ歸る前に調のへる買物もあつたし、御馳走を詰めた胃袋にくつろぎを與へる必要もあつたので、たゞ賑やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなささうな男女がぞろ〳〵動く中に、私は今日私と一所に卒業したなにがしに會つた。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私は其所で麥酒の泡のやうな彼の氣焔を聞かされた。私の下宿へ歸つたのは十二時過であつた。

三十六

私は其翌日も暑さを冒して、頼まれものを買ひ集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないやうに考へてゐたのが、いざとなると大變臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手數に氣の毒といふ觀念を丸で有つてゐない田舎者を憎らしく思つた。

私は此一夏を無爲に過ごす氣はなかつた。國へ歸つてからの日程といふやうなものを豫め作つて置いたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかつた。私は半日を丸善の二階で潰す覺悟でゐた。私は自分に關係の深い部門の書籍棚の前に立つて、隅から隅迄一冊づゝ點檢して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であつた。小僧にいふと、いくらでも出しては呉れるが、偖何れを選んでいゝのか、買ふ段になつては、只迷ふ丈であつた。其上價が極めて不定であつた。安から

うと思つて聞くと、非常に高かつたり、高からうと考へて、聞かずにゐると、却つて大變安かつたりした。或はいくら比べて見ても、何處から價格の差違が出るのか見當の付かないのもあつた。私は全く弱らせられた。さうして心のうちで、何故先生の奥さんを煩はさなかつたかを悔いた。

私は鞄を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴか〳〵してゐるので、田舍ものを威嚇かすには充分であつた。此鞄を買ふといふ事は、私の母の注文であつた。卒業したら新らしい鞄を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて歸るやうにと、わざ〳〵手紙の中に書いてあつた。私は其文句を讀んだ時に笑ひ出した。私には母の料簡が解らないといふよりも、其言葉が一種の滑稽として訴へたのである。

私は暇乞をする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて國へ歸つた。此冬以來父の病氣に就いて先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならない地位にありながら、何ういふものか、それが大して苦にならなかつた。私は寧ろ父が居なくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。其位だから私は心の何處かで、父は既に亡くなるべきものと覺悟してゐたに違なかつた。九州にゐる兄へ遣つた手紙のなかにも、私は父の到底故の様な健康體になる見込のない事を述べた。一度などは職務の都合もあらうが、出來るなら繰り合せて此夏位一度顔丈でも見に歸つたら何うだと迄書いた。其上年寄が二人ぎりで田舍にゐるのは定めて心細いだらう、我々も子として遺憾の至であるといふやうな感傷的な文句さへ使つた。私は實際心に浮ぶ儘を書いた。けれども書いたあとの氣分は書いた時とは違つてゐた。

私はさうした矛盾を汽車の中で考へた。考へてゐるうちに自分が自分に氣の變りやすい輕薄もの〻やうに思はれて來た。私は不愉快になつた。私は又先生夫婦の事を想ひ浮べた。ことに二三日前晩食に呼ばれた時の會話を憶ひ出した。

「何つちが先へ死ぬだらう」

私は其晩先生と奥さんの間に起つた疑問をひとり口の內で繰り返して見た。さうして此疑問には誰も自信をもつて答へる事が出來ないのだと思つた。然し何方が先へ死ぬと判然分つてゐたならば、先生は何うするだらう。奥さんは何うするだらう。先生も奥さんも、今のやうな態度でゐるより外に仕方がないだらうと思つた。(死に近づきつ〻ある父を國元に控えながら、此私が何うする事も出來ないやうに)。私は人間を果敢ないものに觀じた。人間の何うする事も出來ない持つて生れた輕薄を、果敢ないものに觀じた。

中　兩親と私

一

宅へ歸つて案外に思つたのは、父の元氣が此前見た時と大して變つてゐない事であつた。

「あゝ歸つたかい。さうか、それでも卒業が出來てまあ結構だつた。一寸御待ち、今顏を洗つて來るから」

父は庭へ出て何か爲てゐた所であつた。古い麥藁帽の後へ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひら〳〵させながら、井戸のある裏手の方へ廻つて行つた。

學校を卒業するのを普通の人間として當然のやうに考へてゐた私は、それを豫期以上に喜こんで呉れる父の前に恐縮した。

「卒業が出來てまあ結構だ」

父は此言葉を何遍も繰り返した。私は心のうちで此父の喜びと、卒業式のあつた晩先生の家の食卓で、「御目出たう」と云はれた時の先生の顏付とを比較した。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる先生の方が、それ程にもないものを珍らしさうに嬉しがる父よりも、却つて高尚に見えた。私は仕

舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。

「大學位卒業したつて、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」

私は遂に斯んな口の利きやうをした。すると父が變な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかり云ふんぢやない。そりや卒業は結構に違ないが、おれの云ふのはもう少し意味があるんだ。それが御前に解つてゐて呉れさへすれば、……」

私は父から其後を聞かうとした。父は話したくなささうであつたが、とう／＼斯う云つた。

「つまり、おれが結構といふ事になるのさ。おれは御前の知つてる通りの病氣だらう。去年の冬御前に會つた時、ことによるともう三月か四月位なものだらうと思つてゐたのさ。それが何ういふ仕合せか、今日迄斯うしてゐる。起居に不自由なく斯うしてゐる。そこへ御前が卒業して呉れた。だから嬉しいのさ。折角丹精した息子が、自分の居なくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに學校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだらうぢやないか。大きな考を有つてゐる御前から見たら、高が大學を卒業した位で、結構だ／＼と云はれるのは餘り面白くもないだらう。然しおれの方から見て御覽、立場が少し違つてゐるよ。つまり卒業は御前に取つてより、此おれに取つて結構なんだ。解つたかい」

私は一言もなかつた。詫まる以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平氣なうちに自分の死を覺悟してゐたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだらうと思ひ定めてゐたと見える。其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにゐた私は全く愚ものであつた。私は鞄の中から卒業證書を取り出して、それを大事さうに父と母に見せた。證書は何かに壓し潰されて、元の形を失つてゐた。父はそれを鄭寧に伸した。

「こんなものは卷いたなり手に持つて來るものだ」
「中に心でも入れると好かつたのに」と母も傍から注意した。
父はしばらくそれを眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ這入るやうな正面へ證書を置いた。何時もの私ならすぐ何とかいふ筈であつたが、其時の私は丸で平生と違つてゐた。父や母に對して少しも逆らふ氣が起らなかつた。私はだまつて父の爲すが儘に任せて置いた。一旦癖のついた鳥の子紙の證書は、中々父の自由にならなかつた。適當な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢を得て倒れやうとした。

二

私は母を蔭へ呼んで父の病狀を尋ねた。
「御父さんはあんなに元氣さうに庭へ出たり何かしてゐるが、あれで可いんですか」
「もう何ともないやうだよ。大方好く御なりなんだらう」
母は案外平氣であつた。都會から懸け隔たつた森や田の中に住んでゐる女の常として、母は斯ういふ事に掛けては丸で無知識であつた。それにしても此前父が卒倒した時には、あれ程驚ろいて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで獨り異な感じを抱いた。
「でも醫者はあの時到底六づかしいつて宣告したぢやありませんか」
「だから人間の身體ほど不思議なものはないと思ふんだよ。あれ程御醫者が手重く云つたものが、今迄

しやん〳〵してゐるんだからね。御母さんも始めのうちは心配して、成るべく動かさないやうにと思つてたんだがね。それ、あの氣性だらう。養生はしなさるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、中々私のいふ事なんか、聞きさうにもなさらないんだからね」

私は此前歸つた時、無理に床を上げさして、髭を剃つた父の樣子と態度とを思ひ出した。「もう大丈夫、御母さんがあんまり仰山過ぎるから不可ないんだ」といつた其時の言葉を考へて見ると、滿更母ばかり責める氣にもなれなかつた。「然し傍でも少しは注意しなくつちや」と云はうとした私は、とう〳〵遠慮して何にも口へ出さなかつた。たゞ父の病の性質に就いて、私の知る限りを敎へるやうに話して聞かせた。然し其大部分は先生と先生の奧さんから得た材料に過ぎなかつた。母は別に感動した樣子も見せなかつた。たゞ「へえ、矢つ張り同なじ病氣でね。御氣の毒だね。いくつで御亡くなりかえ、其方は」などゝ聞いた。

私は仕方がないから、母を其儘にして置いて直接父に向つた。父は私の注意を母よりは眞面目に聞いてくれた。「尤もだ。御前のいふ通りだ。けれども、己の身體は必竟己の身體で、其己の身體に就いての養生法は、多年の經驗上、己が一番能く心得てゐる筈だからね」と云つた。それを聞いた母は苦笑した。「それ御覽な」と云つた。

「でも、あれで御父さんは自分でちやんと覺悟丈はしてゐるんですよ。今度私が卒業して歸つたのを大變喜こんでゐるのも、全く其爲なんです。生きてるうちに卒業は出來まいと思つたのが、達者なうちに免狀を持つて來たから、それで嬉しいんだつて、御父さんは自分でさう云つてゐましたぜ」

「そりや、御前、口でこそさう御云ひだけれどもね。御腹のなかではまだ大丈夫だと思つて御出のだよ」

「左右でせうか」
「まだ〳〵十年も二十年も生きる氣で御出のだよ。尤も時々はわたしにも心細いやうな事を御云ひだがね。おれも此分ぢやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、御前は何うする、一人で此家に居る氣かなんて」
私は急に父が居なくなつて母一人が取り殘された時の、古い廣い田舍家を想像して見た。此家から父一人を引き去つた後は、其儘で立ち行くだらうか。兄は何うするだらうか。母は何といふだらうか。さう考へる私は又此所の土を離れて、東京で氣樂に暮らして行けるだらうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意――父の丈夫でゐるうちに、分けて貰ふものは、分けて貰つて置けといふ注意を、偶然思ひ出した。
「なにね、自分で死ぬ〳〵つて云ふ人に死んだ試はないんだから安心だよ。御父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて云ひながら、是から先まだ何年生きなさるか分るまいよ。夫よりか默つてる丈夫の人の方が劍呑さ」
私は理窟から出たとも統計から來たとも知れない、此陳腐なやうな母の言葉を默然と聞いてゐた。

三

私のために赤い飯を炊いて客をするといふ相談が父と母の間に起つた。私は歸つた當日から、或は斯んな事になるだらうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れてゐた。私はすぐ斷わつた。
「あんまり仰山な事は止して下さい」
私は田舍の客が嫌だつた。飲んだり食つたりするのを、最後の目的として遣つて來る彼等は、何か事が

あれば好いといつた風の人ばかり揃つてゐた。私は子供の時から彼等の席に侍するのを心苦しく感じてゐた。まして自分のために彼等が來るとなると、私の苦痛は一層甚しいやうに想像された。然し私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騷ぐのは止せとも云ひかねた。それで私はたゞあまり仰山だからとばかり主張した。

「仰山々々と御云ひだが、些とも仰山ぢやないよ。生涯に二度とある事ぢやないんだからね、御客位するのは當り前だよ。さう遠慮を御爲でない」

母は私が大學を卒業したのを、嫁でも貰つたと同じ程度に、重く見てゐるらしかつた。

「呼ばなくつても好いが、呼ばないと又何とか云ふから」

是は父の言葉であつた。父は彼等の陰口を氣にしてゐた。實際彼等はこんな場合に、自分達の豫期通りにならないと、すぐ何とか云ひたがる人々であつた。

「東京と違つて田舍は蒼蠅いからね」

父は斯うも云つた。

「御父さんの顏もあるんだから」と母が又付け加へた。

私は我を張る譯にも行かなかつた。何うでも二人の都合の好いやうにしたらと思ひ出した。

「つまり私のためなら、止して下さいと云ふ丈なんです。陰で何か云はれるのが厭だからといふ御主意なら、そりや又別です。あなたがたに不利益な事を私が强ひて主張したつて仕方がありません」

「さう理窟を云はれると困る」

父は苦い顔をした。

「何も御前の爲にするんぢやないと御父さんが仰しやるんぢやないけれども、御前だつて世間への義理位は知つてるだらう」

母は斯うなると女だけにしどろもどろな事を云つた。其代り口數からいふと、父と私を二人寄せても中中敵ふどころではなかつた。

「學問をさせると人間が兎角理窟つぽくなつて不可ない」

父はたゞ是丈しか云はなかつた。然し私は此簡單な一句のうちに、父が平生から私に對して有つてる不平の全體を見た。私は其時自分の言葉使ひの角張つた所に氣が付かずに、父の不平の方ばかりを無理の樣に思つた。

父は其夜また氣を更へて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしに只ぶら〳〵古い家の中に寐起してる私に、斯んな問を掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であつた。私は此穩やかな父の前に拘泥らない頭を下げた。私は父と相談の上招待の日取を極めた。

其日取のまだ來ないうちに、ある大きな事が起つた。それは明治天皇の御病氣の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つた此事件は、一軒の田舍家のうちに多少の曲折を經て漸く纏まらうとした私の卒業祝を、塵の如くに吹き拂つた。

「まあ御遠慮申した方が可からう」

眼鏡を掛けて新聞を見てゐた父は斯う云つた。父は默つて自分の病氣の事も考へてゐるらしかつた。私

はつい此間の卒業式に例年の通り大學へ行幸になつた陛下を憶ひ出したりした。

四

小勢な人數には廣過ぎる古い家がひつそりしてゐる中に、私は行李を解いて書物を繙き始めた。何故か私は氣が落ち付かなかつた。あの目眩るしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁を一枚々々にまくつて行く方が、氣に張があつて心持よく勉強が出來た。

私は稍ともすると机にもたれて假寐をした。時にはわざ〳〵枕さへ出して本式に晝寐を貪ぼる事もあつた。眼が覺めると、蟬の聲を聞いた。うつゝから續いてゐるやうな其聲は、急に八釜しく耳の底を掻き亂した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思を胸に抱いた。

私は筆を執つて友達のだれかれに短かい端書又は長い手紙を書いた。其友達のあるものは東京に殘つてゐた。あるものは遠い故郷に歸つてゐた。返事の來るのも、音信の屆かないのもあつた。私は固より先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字で三枚ばかり國へ歸つてから以後の自分といふやうなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にゐるだらうかと疑ぐつた。先生が奥さんと一所に宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人が何處からか來て、留守番をするのが例になつてゐた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私は其人を先生の親類と思ひ違へてゐた。先生は「私には親類はありませんよ」と答へた。先生の郷里にゐる續きあひの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしてゐなかつた。私の疑問にした其留守番の女の

人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。私は先生に郵便を出す時、不圖幅の細い帶を樂に後で結んでゐる其人の姿を思ひ出した。もし先生夫婦が何處かへ避暑にでも行つたあとへ此郵便が屆いたら、あの切下の御婆さんは、それをすぐ轉地先へ送つて呉れる丈の氣轉と親切があるだらうかなどと考へた。其癖その手紙のうちには是といふ程の必要の事も書いてないのを、私は能く承知してゐた。たゞ私は淋しかつた。さうして先生から返事の來るのを豫期してかゝつた。然し其返事は遂に來なかつた。

父は此前の冬に歸つて來た時程將棋を差したがらなくなつた。將棋盤はほこりの溜つた儘、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下の御病氣以後父は凝と考へ込んでゐるやうに見えた。毎日新聞の來るのを待ち受けて、自分が一番先へ讀んだ。それから其讀がらをわざ〳〵私の居る所へ持つて來て呉れた。

「おい御覽、今日も天子樣の事が詳しく出てゐる」

父は陛下のことを、つねに天子さまと云つてゐた。

「勿體ない話だが、天子さまの御病氣も、お父さんのとまあ似たものだらうな」

斯ういふ父の顏には深い掛念の曇がかゝつてゐた。斯う云はれる私の胸には又父が何時斃れるか分らないといふ心配がひらめいた。

「然し大丈夫だらう。おれの樣な下らないものでも、まだ斯うしてゐられる位だから」

父は自分の達者な保證を自分で與へながら、今にも己れに落ちかゝつて來さうな危險を豫感してゐるらしかつた。

「御父さんは本當に病氣を怖がつてるんですよ。御母さんの仰しやるやうに、十年も二十年も生きる氣

ぢやなささうですぜ」
母は私の言葉を聞いて當惑さうな顔をした。
「ちつと又將棋でも差すやうに勸めて御覧な」
私は床の間から將棋盤を取り卸して、ほこりを拭いた。

五

父の元氣は次第に衰ろへて行つた。私を驚ろかせたハンケチ付の古い麥藁帽子が自然と閑却されるやうになつた。私は黒い煤けた棚の上に載つてゐる其帽子を眺めるたびに、父に對して氣の毒な思をした。父が以前のやうに、輕々と動く間は、もう少し愼んで呉れたらと心配した。父が凝と坐り込むやうになると、矢張り元の方が達者だつたのだといふ氣が起つた。私は父の健康に就いてよく母と話し合つた。
「全たく氣の所爲だよ」と母が云つた。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考へてゐた。私にはさう許とも思へなかつた。
「氣ぢやない、本當に身體が惡かないんでせうか。何うも氣分より健康の方が惡くなつて行くらしい」
私は斯う云つて、心のうちで又遠くから相當の醫者でも呼んで、一つ見せやうかしらと思案した。
「今年の夏は御前も詰らなかららう。折角卒業したのに、御祝もして上げる事が出來ず、御父さんの身體もあの通りだし。それに天子樣の御病氣で。——いつその事、歸るすぐに御客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」

私が歸つたのは七月の五六日で、父や母が私の卒業を祝ふために客を呼ばうと云ひだしたのは、それから一週間後であつた。さうして愈と極めた日はそれから又一週間の餘も先になつてゐた。時間に束縛を許さない悠長な田舍に歸つた私は、御蔭で好もしくない社交上の苦痛から救はれたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しも其所に氣が付いてゐないらしかつた。

崩御の報知が傳へられた時、父は其新聞を手にして、「あゝ、あゝ」と云つた。

「あゝ、あゝ、天子樣もとう／＼御かくれになる。己も……」

父は其後を云はなかつた。

私は黒いうすものを買ふために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往來へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空氣のなかにだらりと下つた。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあつた。雨や風に打たれたり又吹かれたりした其藁の色はとくに變色して、薄く灰色を帶びた上に、所々の凸凹さへ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構へは何んな體裁ですか。私の郷里の方とは大分違つてゐますかね」と聞かれた事を思ひ出した。私は自分の生れた此古い家を、先生に見せたくもあつた。又先生に見せるのが恥づかしくもあつた。

私は又一人家のなかへ這入つた。自分の机の置いてある所へ來て、新聞を讀みながら、遠い東京の有樣を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、何んなに暗いなかで何んなに動いてゐるだらうかの畫面に

るるなかに、自然と捲き込まれてゐる運命を、眼の前に控えてゐる事に氣が付かなかつた。しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えてゐるのだとは固より氣が付かなかつた。

集められた。私はその黑いなりに動かなければ仕末のつかなくなつた都會の、不安でざわ〳〵してゐるなかに、一點の燈火の如くに先生の家を見た。私は其時此燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれてゐる運命を、眼の前に控えてゐる事に氣が付かなかつた。しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えてゐるのだとは固より氣が付かなかつた。

私は今度の事件に就いて先生に手紙を書かうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。（先生に宛てゝさう云ふ事を書いても仕方がないとも思つたし、前例に徴して見ると、とても返事を呉れさうになかつたから。）私は淋しかつた。それで手紙を書くのであつた。さうして返事が來れば好いと思ふのであつた。

六

八月の半ごろになつて、私はある朋友から手紙を受け取つた。その中に地方の中學教員の口があるが行かないかと書いてあつた。此朋友は經濟の必要上、自分でそんな位地を探し廻る男であつた。此口も始めは自分の所へかゝつて來たのだが、もつと好い地方へ相談が出來たので、餘つた方を私に讓る氣で、わざ〳〵知らせて來て呉れたのであつた。私はすぐ返事を出して斷つた。知り合ひの中には、隨分骨を折つて、教師の職にありつきたがつてゐるものがあるから、其方へ廻して遣つたら好からうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母に其話をした。二人とも私の斷つた事に異存はないやうであつた。

「そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだらう」

斯ういつて呉れる裏に、私は二人が私に對して有つてゐる過分な希望を讀んだ。迂濶な父や母は、不相當な地位と收入とを卒業したての私から期待してゐるらしかつたのである。

「相當の口つて、近頃ぢやそんな旨い口は中々あるものぢやありません。ことに兄さんと私とは專門も違ふし、時代も違ふんだから、二人を同じやうに考へられちや少し困ります」

「然し卒業した以上は、少くとも獨立して遣つて行つて呉れなくつちや此方も困る。人からあなたの所の御二男は、大學を卒業なすつて何をして御出ですかと聞かれた時に返事が出來ない樣ぢや、おれも肩身が狹いから」

父は澁面をつくつた。父の考へは古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかつた。其郷里の誰彼から、大學を卒業すればいくら位月給が取れるものだらうと聞かれたり、まあ百圓位なものだらうかと云はれたりした父は、斯ういふ人々に對して、外聞の惡くないやうに、卒業したての私を片付けたかつたのである。廣い都を根據地として考へてゐる私は、父や母から見ると、丸で足を空に向けて歩く奇體な人間に異ならなかつた。私の方でも、實際さういふ人間のやうな氣持を折々起した。私はあからさまに自分の考へを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に默然としてゐた。

「御前のよく先生々々といふ方にでも御願したら好いぢやないか。斯んな時こそ」

母は斯うより外に先生を解釋する事が出來なかつた。其先生は私に國へ歸つたら父の生きてゐるうちに早く財産を分けて貰へと勸める人であつた。卒業したから、地位の周旋をして遣らうといふ人ではなかつた。

「其先生は何をしてゐるのかい」と父が聞いた。
「何にもして居ないんです」と私が答へた。
私はとくの昔から先生の何もしてゐないといふ事を父にも母にも告げた積でゐた。さうして父はたしかに夫を記憶してゐる筈であつた。
「何もしてゐないと云ふのは、また何ういふ訳かね。御前がそれ程尊敬する位な人なら何か遣つてゐさうなものだがね」
父は斯ういつて、私を諷した。父の考へでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働らいてゐる。必竟やくざだから遊んでゐるのだと結論してゐるらしかつた。
「おれの様な人間だつて、月給こそ貰つちやゐないが、是でも遊んでばかりゐるんぢやない」
父はかうも云つた。私は夫でもまだ黙つてゐた。
「御前のいふ様な偉い方なら、屹度何か口を探して下さるよ。頼んで御覧なのかい」と母が聞いた。
「いゝえ」と私は答へた。
「ぢや仕方がないぢやないか。何故頼まないんだい。手紙でも好いから御出しな」
「えゝ」
私は生返事をして席を立つた。

七

父は明らかに自分の病氣を恐れてゐた。然し醫者の來るたびに蒼蠅い質問を掛けて相手を困らす質でもなかつた。醫者の方でも亦遠慮して何とも云はなかつた。

父は死後の事を考へてゐるらしかつた。少なくとも自分が居なくなつた後のわが家を想像して見るらしかつた。

「小供に學問をさせるのも、好し惡しだね。折角修業をさせると、其小供は決して宅へ歸つて來ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために學問させるやうなものだ」

學問をした結果兄は今遠國にゐた。教育を受けた因果で、私は又東京に住む覺悟を固くした。斯ういふ子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舍家の中に、たつた一人取り殘されさうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた。

わが家は動かす事の出來ないものと父は信じ切つてゐた。其中に住む母も亦命のある間は、動かす事の出來ないものと信じてゐた。自分が死んだ後、この孤獨な母を、たつた一人伽藍堂のわが家に取り殘すのも亦甚しい不安であつた。それだのに、東京で好い地位を求めろと云つて、私を強ひたがる父の頭には矛盾があつた。私は其矛盾を可笑しく思つたと同時に、其御蔭で又東京へ出られるのを喜こんだ。

私は父や母の手前、此地位を出來る丈の努力で求めつゝある如くに裝ほはなくてはならなかつた。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出來る事があつたら何でもするから周旋して呉れと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合ふまいと思ひながら此手紙を書いた。又取り合ふ積でも、世間の狹い先生としては何うする事も出來まいと思ひながら此手紙を書いた。然し私は先生から此手紙に

對する返事が屹度來るだらうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向つて云つた。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しやつた通り。一寸讀んで御覽なさい」

母は私の想像したごとくそれを讀まなかつた。

「さうかい、夫ぢや早く御出し。そんな事は他が氣を付けないでも、自分で早く遣るものだよ」

母は私をまだ子供のやうに思つてゐた。私も實際子供のやうな感じがした。

「然し手紙ぢや用は足りませんよ。何うせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくつちや」

「そりや左右かも知れないけれども、又ひよつとして、何んな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んで置くに越した事はないよ」

「えゝ。兎に角返事は來るに極つてますから、さうしたら又御話ししませう」

私は斯んな事に掛けて几帳面な先生を信じてゐた。私は先生の返事の來るのを心待に待つた。けれども私の豫期はついに外れた。先生からは一週間經つても何の音信もなかつた。

「大方どこかへ避暑にでも行つてゐるんでせう」

私は母に向つて云譯らしい言葉を使はなければならなかつた。さうして其言葉は母に對する言譯ばかりでなく、自分の心に對する言譯でもあつた。私は强ひても何かの事情を假定して先生の態度を辯護しなければ不安になつた。

私は時々父の病氣を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまはうかと思つたりした。其父自身もおのれの病

忠告通り財産分配の事を父に云ひ出す機會を得ずに過ぎた。

氣を忘れる事があつた。未來を心配しながら、未來に對する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の

八

九月始めになつて、私は愈又東京へ出やうとした。私は父に向つて當分今迄通り學資を送つて呉れるやうにと頼んだ。

「此所に斯うしてゐたつて、あなたの仰しやる通りの地位が得られるものぢやないですから」

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くやうな事を云つた。

「無論口の見付かる迄で好いですから」とも云つた。

私は心のうちで、其口は到底私の頭の上に落ちて來ないと思つてゐた。けれども事情にうとい父はまた飽く迄も其反對を信じてゐた。

「そりや僅の間の事だらうから、何うにか都合してやらう。其代り永くは不可いよ。相當の地位を得次第獨立しなくつちや。元來學校を出た以上、出たあくる日から他の世話になんぞなるものぢやないんだから。今の若いものは、金を使ふ道だけ心得てゐて、金を取る方は全く考へてゐないやうだね」

父は此外にもまだ色々の小言を云つた。その中には、「昔の親は子に食はせて貰つたのに、今の親は子に食はれる丈だ」など丶いふ言葉があつた。それ等を私はたゞ默つて聞いてゐた。

小言が一通り濟んだと思つた時、私は靜かに席を立たうとした。父は何時行くかと私に尋ねた。私には早

い丈が好かつた。

「御母さんに日を見て貰ひなさい」

「さう爲ませう」

其時の私は父の前に存外大人しかつた。私はなるべく父の機嫌に逆はずに、田舎を出やうとした。父は又私を引き留めた。

「御前が東京へ行くと宅は又淋しくなる。何しろ己と御母さん丈なんだからね。そのおれも身體さへ達者なら好いが、この樣子ぢや何時急に何んな事がないとも云へないよ」

私は出來るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ歸つた。私は取り散らした書物の間に坐つて、心細さうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私は其時又蟬の聲を聞いた。其聲は此間中聞いたのと違つて、つく／＼法師の聲であつた。私は夏郷里に歸つて、煮え付くやうな蟬の聲の中に凝と坐つてゐると、變に悲しい心持になる事がしば／＼あつた。私の哀愁はいつも此虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むやうに感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めてゐた。

私の哀愁は此夏歸省した以後次第に情調を變へて來た。油蟬の聲がつく／＼法師の聲に變る如くに、私を取り卷く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろ／＼動いてゐるやうに思はれた。私は淋しさうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶ひ浮べた。先生と父とは、丸で反對の印象を私に與へる點に於て、比較の上にも、連想の上にも、一所に私の頭に上り易かつた。

私は殆んど父の凡てを知り尽してゐた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがある丈であつた。先生の多くはまだ私に解つてゐなかつた。話すと約束された其人の過去もまだ聞く機会を得ずにゐた。要するに先生は私にとつて薄暗かつた。私は是非とも其所を通り越して、明るい所迄行かなければ気が済まなかつた。先生と関係の絶えるのは私にとつて大いな苦痛であつた。私は母に日を見て貰つて、東京へ立つ日取を極めた。

九

私が愈立たうといふ間際になつて、（たしか二日前の夕方の事であつたと思ふが、）父は又突然引つ繰返つた。私は其時書物や衣類を詰めた行李をからげてゐた。父は風呂へ入つた所であつた。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体の父を後から抱かかへてゐる母を見た。それでも座敷へ伴れて戻つた時、父はもう大丈夫だと云つた。念の為に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷してゐた私は、九時頃になつて漸く形ばかりの夜食を済ました。

翌日になると父は思つたより元気が好かつた。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行つたりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向つて云つたと同じ言葉を又繰り返した。其時は果して口で云つた通りまあ大丈夫であつた。私は今度も或は左右なるかも知れないと思つた。然し医者はたゞ用心が肝要だと注意する丈で、念を押しても判然した事を話して呉れなかつた。私は不安のために、出立の日が来てもついに

東京へ立つ氣が起らなかつた。

「もう少し様子を見てからにしませうか」と私は母に相談した。

「さうして御呉れ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり脊戸へ下りたりする元氣を見てゐる間丈は平氣でゐる癖に、斯んな事が起るとまた必要以上に心配したり氣を揉んだりした。

「御前は今日東京へ行く筈ぢやなかつたか」と父が聞いた。

「えゝ、少し延ばしました」と私が答へた。

「おれの爲にかい」と父が聞き返した。

私は一寸躊躇した。さうだと云へば、父の病氣の重いのを裏書するやうなものであつた。私は父の神經を過敏にしたくなかつた。然し父は私の心をよく見拔いてゐるらしかつた。

「氣の毒だね」と云つて、庭の方を向いた。

私は自分の部屋に這入つて、其所に放り出された行李を眺めた。行李は何時持ち出しても差支ないやうに、堅く括られた儘であつた。私はぼんやり其前に立つて、又繩を解かうかと考へた。

私は坐つた儘腰を浮かした時の落付かない氣分で、又三四日を過ごした。すると父が又卒倒した。醫者は絶對に安臥を命じた。

「何うしたものだらうね」と母が父に聞こえないやうな小さな聲で私に云つた。母の顏は如何にも心細さうであつた。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寐てゐる父には、殆んど何の苦悶もなかつ

た。話をする所などを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であつた。其上食慾は不斷よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に云ふ事を聞かなかつた。

「何うせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくつちや」

私には旨いものといふ父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入れられる都には住んでゐなかつたのである。夜に入つてかき餅などを燒いて貰つてぼり／＼噛んだ。

「何うして斯う渇くのかね。矢張心に丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していゝ所に却つて頼みを置いた。其癖病氣の時にしか使はない渇くといふ昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用ひてゐた。

伯父が見舞に來たとき、父は何時迄も引き留めて歸さなかつた。淋しいからもつと居て呉れといふのが重な理由であつたが、母や私が、食べたい丈物を食べさせないといふ不平を訴たへるのも、其目的の一つであつたらしい。

十

父の病氣は同じやうな狀態で一週間以上つゞいた。私はその間に長い手紙を九州にゐる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らく是が父の健康に關して二人へ遣る最後の音信だらうと思つた。それで兩方へ愈といふ場合には電報を打つから出て來いといふ意味を書き込めた。

兄は忙がしい職にゐた。妹は姙娠中であつた。だから父の危險が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自

由は利かなかつた。と云つて、折角都合して來たには來たが、間に合はなかつたと云はれるのも辛かつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。

「さう判然りした事になると私にも分りません。然し危險は何時來るか分らないといふ事丈は承知してゐて下さい」

停車場のある町から迎へた醫者は私に斯う云つた。私は母と相談して、其醫者の周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ來て挨拶する白い服を着た女を見て變な顔をした。

父は死病に罹つてゐる事をとうから自覺してゐた。それでゐて、眼前にせまりつゝある死そのものには氣が付かなかつた。

「今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つて見やう。人間は何時死ぬか分らないからな。何でも遣りたい事は、生きてるうちに遣つて置くに限る」

母は仕方なしに「其時は私も一所に伴れて行つて頂きませう」など〻調子を合せてゐた。

時とすると又非常に淋しがつた。

「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣つてくれ」

私は此「おれが死んだら」といふ言葉に一種の記憶を有つてゐた。東京を立つ時、先生が奥さんに向つて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑を帶びた先生の顔と、縁喜でもないと耳を塞いだ奥さんの様子とを憶ひ出した。あの時の「おれが死んだら」は單純な假定であつた。今私が聞くのは何時起るか分らない事實であつた。私は先生に對する奥さんの態度を學ぶ事が出來なか

つた。然し口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事を仰しやつちや不可せんよ。今に癒つたら東京へ遊びに入らつしやる筈ぢやありませんか。御母さんと一所に。今度入らつしやると吃度吃驚しますよ、變つてゐるんで。電車の新らしい線路丈でも大變增えてゐますからね。電車が通るやうになれば自然町並も變るし、その上に市區改正もあるし、東京が凝としてゐる時は、まあ二六時中一分もないと云つて可い位です」

私は仕方がないから云はないで可い事迄喋舌つた。父はまた、滿足らしくそれを聞いてゐた。

病人があるので自然家の出入も多くなつた。近所にゐる親類などは、二日に一人位の割で代る〲見舞に來た。中には比較的遠くに居て平生疎遠なものもあつた。「何うかと思つたら、この樣子ぢや大丈夫だ。話も自由だし、だいち顏がちつとも瘠せてゐないぢやないか」など〻云つて歸るものがあつた。私の歸つた當時はひつそり過ぎる程靜であつた家庭が、こんな事で段々ざわ〱し始めた。

その中に動かずにゐる父の病氣は、たゞ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。私は母や伯父と相談して、とう〱兄と妹に電報を打つた。兄からはすぐ行くといふ返事が來た。妹の夫からも立つといふ報知があつた。妹は此前懷妊した時に流產したので、今度こそは癖にならないやうに大事を取らせる積だと、かねて云ひ越した其夫は、妹の代りに自分で出て來るかも知れなかつた。

十一

斯うした落付のない間にも、私はまだ靜かに坐る餘裕を有つてゐた。偶には書物を開けて十頁もつゞけ

ざまに讀む時間さへ出て來た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれて仕舞つた。私は要るに任せて、其中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、此夏中の日課を顧みた。私の遣つた事は此日課の三ヶ一にも足らなかつた。私は今迄も斯ういふ不愉快を何度となく重ねて來た。然し此夏程思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。是が人の世の常だらうと思ひながらも私は厭な氣持に抑え付けられた。

私は此不快の裏に坐りながら、一方に父の病氣を考へた。父の死んだ後の事を想像した。さうして夫と同時に、先生の事を一方に思ひ浮べた。私は此不快な心持の兩端に地位、敎育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元を離れて、獨り取り亂した書物の中に腕組をしてゐる所へ母が顏を出した。

「少し午眠でもおしよ。御前も嘸草臥れるだらう」

母は私の氣分を了解してゐなかつた。私も母からそれを豫期する程の子供でもなかつた。私は單簡に禮を述べた。母はまだ室の入口に立つてゐた。

「御父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寐て御出だよ」と母が答へた。

母は突然這入つて來て私の傍に坐つた。

「先生からまだ何とも云つて來ないかい」と聞いた。

母は其時の私の言葉を信じてゐた。其時の私は先生から屹度返事があると母に保證した。然し父や母の

希望するやうな返事が來るとは、其時の私も丸で期待しなかつた。私は心得があつて母を欺むいたと同じ結果に陷つた。

「もう一遍手紙を出して御覽な」と母が云つた。

役に立たない手紙を何通書かうと、それが母の慰安になるなら、手數を厭ふやうな私ではなかつた。けれども斯ういふ用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙かに恐れてゐた。あの依賴に對して今迄返事の貰へないのも、或はさうした譯からぢやないかしらといふ邪推もあつた。

「手紙を書くのは譯はないですが、斯ういふ事は郵便ぢやとても埒は明きませんよ。何うしても自分で東京へ出て、ぢかに賴んで廻らなくつちや」

「だつて御父さんがあの樣子ぢや、御前、何時東京へ出られるか分らないぢやないか」

「だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付ないうちは、ちやんと斯うしてゐる積です」

「そりや解り切つた話だね。今にも六づかしいといふ大病人を放ちらかして置いて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。然し母が何故斯んな問題を此ざわ〳〵した際に持ち出したのか理解出來なかつた。私が父の病氣を餘所に、靜かに坐つたり書見したりする餘裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考へる丈、胸に空地があるのか知らと疑つた。其時「實はね」と母が云ひ出した。

「實は御父さんの生きて御出のうちに、御前の口が極つたら嘸安心なさるだらうと思ふんだがね。此樣子ぢや、とても間に合はないかも知れないけれども、夫にしても、まだあゝ遣つて口も慥なら氣も慥なんだから、あゝして御出のうちに喜こばして上げるやうに親孝行をおしな」

憐れな私は親孝行の出來ない境遇にゐた。私は遂に一行の手紙も先生に出さなかつた。

十二

兄が歸つて來た時、父は寐ながら新聞を讀んでゐた。父は平生から何を措いても新聞丈には眼を通す習慣であつたが、床についてからは、退屈のため猶更それを讀みたがつた。母も私も強ひては反對せずに、成るべく病人の思ひ通りにさせて置いた。

「さういふ元氣なら結構なものだ。餘程惡いかと思つて來たら、大變好いやうぢやありませんか」

兄は斯んな事を云ひながら父と話をした。其賑やか過ぎる調子が私には却つて不調和に聞こえた。それでも父の前を外して私と差し向ひになつた時は、寧ろ沈んでゐた。

「新聞なんか讀ましちや不可なかないか」

「私もさう思ふんだけれども、讀まないと承知しないんだから、仕樣がない」

兄は私の辯解を默つて聞いてゐた。やがて、「能く解るのかな」と云つた。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは餘程鈍つてゐるやうに觀察したらしい。

「そりや慥です。私はさつき二十分許枕元に坐つて色々話して見たが、調子の狂つた所は少しもないで

す。あの樣子ぢやことによると未だ中々持つかも知れませんよ」
兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向つて妹の事をあれこれと尋ねてゐた。「身體が身體だから無暗に汽車になんぞ乘つて搖れない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、却つて此方が心配だから」と云つてゐた。「なに今に治つたら赤ん坊の顏でも見に、久し振に此方から出掛るから差支ない」とも云つてゐた。
乃木大將の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。
「大變だ大變だ」と云つた。
何事も知らない私達は此突然な言葉に驚ろかされた。
「あの時は愈頭が變になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私に云つた。「私も實は驚ろきました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。
其頃の新聞は實際田舍ものには日每に待ち受けられるやうな記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを讀んだ。讀む時間のない時は、そつと自分の室へ持つて來て、殘らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大將と、それから官女見たやうな服裝をした其夫人の姿を忘れる事が出來なかつた。
悲痛な風が田舍の隅迄吹いて來て、眠たさうな樹や草を震はせてゐる最中に、突然私は一通の電報を先生から受取つた。洋服を着た人を見ると犬が吠えるやうな所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受取つた母は、果して驚ろいたやうな樣子をして、わざ〳〵私を人のゐない所へ呼び出した。

私は首を傾けた。

「何だい」と云つて、私の封を開くのを傍に立つて待つてゐた。

電報には一寸會ひたいが來られるかといふ意味が簡單に書いてあつた。

「屹度御頼もうして置いた口の事だよ」と母が推斷して呉れた。

私も或は左右かも知れないと思つた。然しそれにしては少し變だとも考へた。兎に角兄や妹の夫迄呼び寄せた私が、父の病氣を打遣つて、東京へ行く譯には行かなかつた。私は母と相談して、行かれないといふ返電を打つ事にした。出來る丈簡畧な言葉で父の病氣の危篤に陷いりつゝある旨も付け加へたが、夫でも氣が濟まなかつたから、委細手紙として、細かい事情を其日のうちに認ためて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切つた母は、「本當に間の惡い時は仕方のないものだね」と云つて殘念さうな顔をした。

十三

私の書いた手紙は可なり長いものであつた。母も私も今度こそ先生から何とか云つて來るだらうと考へてゐた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で屆いた。それには來ないでもよろしいといふ文句だけしかなかつた。私はそれを母に見せた。

「大方手紙で何とか云つてきて下さる積だらうよ」

母は何處迄も先生が私のために衣食の口を周旋して呉れるものと許り解釋してゐるらしかつた。私も或は左右かとも考へたが、先生の平生から推して見ると、何うも變に思はれた。「先生が口を探してくれる」。これは有り得べからざる事のやうに私には見えた。

「兎に角私の手紙はまだ向へ着いてゐない筈だから、此電報は其前に出したものに違ないですね」
私は母に向つて斯んな分り切つた事を云つた。母は又尤もらしく思案しながら「左右だね」と答へた。
私の手紙を讀まない前に、先生が此電報を打つたといふ事が、先生を解する上に於て、何の役にも立たないのは知れてゐるのに。
其日には丁度主治醫が町から院長を連れて來る筈になつてゐたので、母と私はそれぎり此事件に就いて話をする機會がなかつた。二人の醫者は立ち合の上、病人に浣腸などをして歸つて行つた。
父は醫者から安臥を命ぜられて以來、兩便とも寐たまゝ他の手で始末して貰つてゐた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌つたが、身體が利かないので、已を得ずいや〳〵床の上で用を足した。それが病氣の加減で頭がだん〳〵鈍くなるのか何だか、日を經るに從つて、無精な排泄を意としないやうになつた。たまには蒲團や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、當人は却つて平氣でゐたりした。尤も尿の量は病氣の性質として、極めて少なくなつた。醫者はそれを苦にした。食慾も次第に衰へた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがる丈で、咽喉から下へは極僅しか通らなかつた。好な新聞も手に取る氣力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、何時迄も黑い鞘に納められた儘であつた。子供の時分から仲の好かつた作さんといふ今では一里ばかり隔つた所に住んでゐる人が見舞に來た時、父は「あゝ作さんか」と云つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。
「作さんよく來て呉れた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」
「そんな事はないよ。御前なんか子供は二人とも大學を卒業するし、少し位病氣になつたつて、申し分

はないんだ。おれを御覽よ。かうあには死なれるしさ、子供はなしさ。たゞ斯うして生きてる丈の事だよ。達者だつて何の樂しみもないぢやないか」

浣腸をしたのは作さんが來てから二三日あとの事であつた。父は醫者の御蔭で大變樂になつたといつて喜こんだ。少し自分の壽命に對する度胸が出來たといふ風に機嫌が直つた。傍にゐる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報のきた事を、恰も私の位置が父の希望する通り東京にあつたやうに話した。傍にゐる私はむづがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る譯にも行かないので、默つて聞いてゐた。病人は嬉しさうな顏をした。

「そりや結構です」と妹の夫も云つた。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも譯の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つた。

十四

父の病氣は最後の一撃を待つ間際迄進んで來て、其所でしばらく躊躇するやうに見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つた。

父は傍のものを辛くする程の苦痛を何處にも感じてゐなかつた。其點になると看病は寧ろ樂であつた。要心のために、誰か一人位づゝ代る〳〵起きてはゐたが、あとのものは相當の時間に各自の寢床へ引き取

つて差支なかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るやうな聲を微かに聞いたと思ひ誤まつた私は、一遍半夜に床を拔け出して、念のため父の枕元迄行つて見た事があつた。其夜は母が起きてゐる番に當つてゐた。然し其母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寐入つてゐた。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のやうに靜にしてゐた。私は忍び足で又自分の寐床へ歸つた。

私は兄と一所の蚊帳の中に寐た。妹の夫だけは、客扱ひを受けてゐる所爲か、獨り離れた座敷に入つて休んだ。

「關さんも氣の毒だね。あゝ幾日も引つ張られて歸れなくつちあ」

關といふのは其人の苗字であつた。

「然しそんな忙がしい身體でもないんだから、あゝして泊つてゐて呉れるんでせう。關さんよりも兄さんの方が困るでせう、斯う長くなつちや」

「困つても仕方がない。外の事と違ふからな」

兄と床を竝べて寐る私は、斯んな寐物語りをした。兄の頭にも私の胸にも、父は何うせ助からないといふ考があつた。何うせ助からないものならばといふ考もあつた。我々は子として親の死ぬのを待つてゐるやうなものであつた。然し子としての我々はそれを言葉の上に表はすのを憚かつた。さうして御互に御互が何んな事を思つてゐるかをよく理解し合つてゐた。

「御父さんは、まだ治る氣でゐるやうだな」と兄が私に云つた。

實際兄の云ふ通りに見える所もないではなかつた。近所のものが見舞にくると、父は必ず會ふと云つて

承知しなかつた。會へば屹度、私の卒業祝ひに呼ぶ事が出來なかつたのを殘念がつた。其代り自分の病氣が治つたらといふやうな事も時々付け加へた。

「御前の卒業祝ひは已めになつて結構だ。おれの時には弱つたからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽られた其時の亂雜な有樣を想ひ出して苦笑した。飮むものや食ふものを强ひて勸る父の態度も、にが／＼しく私の眼に映つた。

私達はそれ程仲の好い兄弟ではなかつた。小さいうちは好く喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。學校へ這入つてからの專門の相違も、全く性格の相違から出てゐた。大學にゐる時分の私は、ことに先生に接觸した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思つてゐた。私は長く兄に會はなかつたので、又懸け隔つた遠くに居たので、時から云つても距離からいつても、兄はいつでも私には近くなかつたのである。それでも久し振に斯う落ち合つてみると、兄弟の優しい心持が何處からか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな源因になつてゐた。二人に共通な父、其父の死なうとしてゐる枕元で、兄と私は握手したのであつた。

「御前是から何うする」と兄は聞いた。私は又全く見當の違つた質問を兄に掛けた。

「一體家の財産は何うなつてるんだらう」

「おれは知らない。御父さんはまだ何とも云はないから。然し財産つて云つた所で金としては高の知れたものだらう」

母は又母で先生の返事の來るのを苦にしてゐた。

「まだ手紙は來ないかい」と私を責めた。

十五

「先生先生といふのは一體誰の事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したぢやないか」と私は答へた。私は自分で質問して置きながら、すぐ他の説明を忘れてしまふ兄に對して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必竟聞いても解らないと云ふのであつた。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解して貰ふ必要はなかつた。けれども腹は立つた。又例の兄らしい所が出て來たと思つた。

先生々々と私が尊敬する以上、其人は必ず著名の士でなくてはならないやうに兄は考へてゐた。少なくとも大學の教授位だらうと推察してゐた。名もない人、何もしてゐない人、それが何處に價値を有つてゐるだらう。兄の腹は此點に於て、父と全く同じものであつた。けれども父が何も出來ないから遊んでゐるのだと速斷するのに引きかへて、兄は何か遣れる能力があるのに、ぶら／＼してゐるのは詰らん人間に限ると云つた風の口吻を洩らした。

「イゴイストは不可いね。何もしないで生きてゐやうといふのは横着な了簡だからね。人は自分の有つてゐる才能を出來る丈働らかせなくつちや嘘だ」

私は兄に向つて、自分の使つてゐるイゴイストといふ言葉の意味が能く解るかと聞き返して遣りたかつ

た。

「それでも其人の御蔭で地位が出來ればまあ結構だ。御父さんも喜こんでるやうぢやないか」

兄は後から斯んな事を云つた。先生から明瞭な手紙の來ない以上、私はさう信ずる事も出來ず、またさう口に出す勇氣もなかつた。それを母の早呑込でみんなにさう吹聴してしまつた今となつて見ると、私は急にそれを打ち消す譯に行かなくなつた。私は母に催促される迄もなく、先生の手紙を待ち受けた。さうして其手紙に、何うかみんなの考へてゐるやうな衣食の口の事が書いてあれば可いがと念じた。私は死に瀕してゐる父の手前、其父に幾分でも安心させて遣りたいと祈りつゝある母の手前、働らかなければ人間でないやうにいふ兄の手前、其他妹の夫だの伯父だの叔母だの、手前、私のちつとも頓着してゐない事に神經を腦まさなければならなかつた。

父が變な黄色いものを嘔いた時、私はかつて先生と奧さんから聞かされた危險を思ひ出した。「あゝして長く寐てゐるんだから胃も惡くなる筈だね」と云つた母の顔を見て、何も知らない其人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合つた時、兄は「聞いたか」と云つた。それは醫者が歸り際に兄に向つて云つた事を聞いたかといふ意味であつた。私には説明を待たないでも其意味が能く解つてゐた。

「御前此所へ歸つて來て、宅の事を監理する氣はないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答へなかつた。

「御母さん一人ぢや、何うする事も出來ないだらう」と兄が又云つた。兄は私を土の臭を嗅いで朽ちて行つても惜しくないやうに見てゐた。

「本を讀む丈なら、田舍でも充分出來るし、それに働らく必要もなくなるし、丁度好いだらう」

「兄さんが歸つて來るのが順ですね」と私が云つた。
「おれにそんな事が出來るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中で是から仕事をしやうといふ氣が充ち滿ちてゐた。
「御前が厭なら、まあ伯父さんにでも世話を賴むんだが、夫にしても御母さんは何方かで引き取らなくつちやなるまい」
「御母さんが此所を動くか動かないかゞ既に大きな疑問ですよ」
兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後に就いて、斯んな風に語り合つた。

十六

父は時々囈語を云ふ樣になつた。
「乃木大將に濟まない。實に面目次第がない。いへ私もすぐ御後から」
斯んな言葉をひよい〳〵出した。母は氣味を惡がつた。成るべくみんなを枕元へ集めて置きたがつた。氣のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「お光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語つてゐた。私はよく起つて母を呼びに行つた。「何か御用ですか」と、母が仕掛た用を其儘にして置いて病室へ來ると、父はたゞ母の顏を見詰める丈で何も云はない事があつた。さうかと思ふと、丸で懸け離れた話をした。突然「お光御前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあつた。母はさう云ふ言葉の前に屹度淚ぐんだ。さ

うして後では又屹度丈夫であつた昔の父を其對照として想ひ出すらしかつた。
「あんな憐れつぽい事を御言ひだがね、あれでもとは隨分酷かつたんだよ」
母は父のために第で脊中をどやされた時の事などを話した。今迄何遍もこれを聞かされた私と兄は、何時もとは丸で違つた氣分で、母の言葉を父の記念のやうに耳へ受け入れた。
父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。
「今のうち何か聞いて置く必要はないかな」と兄が私の顏を見た。
「左右だなあ」と私は答へた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し惡しだと考へてゐた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。
「云ひたい事があるのに、云はないで死ぬのも殘念だらうし、と云つて、此方から催促するのも惡いかも知れず」
話はとう〳〵愚圖々々になつて仕舞つた。そのうちに昏睡が來た。例の通り何も知らない母は、それをたゞの眠と思ひ違へて反つて喜こんだ。「まああゝして樂に寐られゝば、傍にゐるものも助かります」と云つた。
父は時々眼を開けて、誰は何うしたなどと突然聞いた。其誰はつい先刻迄そこに坐つてゐた人の名に限られてゐた。父の意識には暗い所と明るい所と出來て、その明るい所丈が、闇を縫ふ白い糸のやうに、ある距離を置いて連續するやうに見えた。母が昏睡狀態を普通の眠と取り違へたのも無理はなかつた。
そのうち舌が段々縺れて來た。何か云ひ出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないで仕舞ふ事が

多くあつた。其癖話し始める時は、危篤の病人とは思はれない程、强い聲を出した。我々は固より不斷以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるやうにしなければならなかつた。

「頭を冷やすと好い心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更へて、それから新らしい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切つた氷の破片が、嚢の中で落ちつく間、私は父の禿げ上つた額の外でそれを柔らかに抑えてゐた。其時兄が廊下傳に這入て來て、一通の郵便を無言の儘私の手に渡した。空いた方の左手を出して、其郵便を受け取つた私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べると餘程目方の重いものであつた。並の狀袋にも入れてなかつた。また並の狀袋に入れられべき分量でもなかつた。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあつた。私はそれを兄の手から受け取つた時、すぐその書留である事に氣が付いた。裏を返して見ると其所に先生の名がつゝしんだ字で書いてあつた。手の放せない私は、すぐ封を切る譯に行かないので、一寸それを懷に差し込んだ。

十七

其日は病人の出來がことに惡いやうに見えた。私が厠へ行かうとして席を立つた時、廊下で行き合つた兄は「何所へ行く」と番兵のやうな口調で誰何した。

「何うも様子が少し變だから成るべく傍にゐるやうにしなくつちや不可ないよ」と注意した。

私もさう思つてゐた。懷中した手紙は其儘にして又病室へ歸つた。父は眼を開けて、そこに並んでゐる人の名前を母に尋ねた。母があれは誰、これは誰と一々説明して遣ると、父は其度に首肯いた。首肯かない時は、母が聲を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「何うも色々御世話になります」

父は斯ういつた。さうして又昏睡状態に陷つた。枕邊を取り卷いてゐる人は無言の儘しばらく病人の樣子を見詰めてゐた。やがて其中の一人が立つて次の間へ出た。すると又一人立つた。私も三人目にとうとう席を外して、自分の室へ來た。私には先刻懷へ入れた郵便物の中を開けて見やうといふ目的があつた。それは病人の枕元でも容易に出來る所作には違なかつた。然し書かれたものゝ分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで讀み通す譯には行かなかつた。私は特別の時間を偸んでそれに充てた。

私は纎維の強い包み紙を引き搔くやうに裂き破つた。中から出たものは、縱横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿樣のものであつた。さうして封じる便宜のために、四つ折に疊まれてあつた。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して讀み易いやうに平たくした。

私の心は此多量の紙と印氣が、私に何事を語るのだらうかと思つて驚ろいた。私は同時に病室の事が氣にかゝつた。私が此かきものを讀み始めて、讀み終らない前に、父は屹度何うかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極つてゐるといふ豫覺があつた。私は落ち付いて先生の書いたものを讀む氣になれなかつた。私はそわ／＼しながらたゞ最初の一頁を讀んだ。其頁は

下のやうに綴られてゐた。

「あなたから過去を問ひたゞされた時、答へる事の出來なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。然し其自由はあなたの上京を待つてゐるうちには又失はれて仕舞ふ世間的の自由に過ぎないのであります。從つて、それを利用出來る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の經驗として教へて上げる機會を永久に逸するやうになります。さうすると、あの時あれ程堅く約束した言葉が丸で嘘になります。私は已を得ず、口で云ふべき所を、筆で申し上げる事にしました」

私は其所迄讀んで、始めて此長いものが何のために書かれたのか、其理由を明らかに知る事が出來た。私の衣食の口、そんなものに就いて先生が手紙を寄こす氣遣はないと、私は初手から信じてゐた。然し筆を執ることの嫌な先生が、何うしてあの事件を斯う長く書いて、私に見せる氣になつたのだらう。先生は何故私の上京する迄待つてゐられないだらう。

「自由が來たから話す。然し其自由はまた永久に失はれなければならない」

私は心のうちで斯う繰り返しながら、其意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲はれた。私はつゞいて後を讀まうとした。其時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の聲が聞こえた。私は又驚ろいて立ち上つた。廊下を馳け拔けるやうにしてみんなの居る方へ行つた。私は愈父の上に最後の瞬間が來たのだと覺悟した。

十八

病室には何時の間にか醫者が來てゐた。なるべく病人を樂にするといふ主意から又浣腸を試みる所であつた。看護婦は昨夜の疲れを休める爲に別室で寐てゐた。慣れない兄は起つてまごまごしてゐた。私の顏を見ると、「一寸手を御貸し」と云つた儘、自分は席に着いた。私は兄に代つて、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。

父の樣子は少しくつろいで來た。三十分程枕元に坐つてゐた醫者は、浣腸の結果を認めた上、また來ると云つて、歸つて行つた。歸り際に、若しもの事があつたら何時でも呼んで呉れるやうにわざわざ斷つてゐた。

私は今にも變がありさうな病室を退いて又先生の手紙を讀まうとした。然し私はすこしも寬くりした氣分になれなかつた。机の前に坐るや否や、又兄から大きな聲で呼ばれさうでならなかつた。左右して今度呼ばれゝば、それが最後だといふ畏怖が私の手を顫はした。私は先生の手紙をたゞ無意味に頁丈剝繰つて行つた。私の眼は几帳面に枠の中に篏められた字畫を見た。けれどもそれを讀む餘裕はなかつた。拾ひ讀みにする餘裕すら覺束なかつた。私は一番仕舞の頁迄順々に開けて見て、又それを元の通りに疊んで机の上に置かうとした。其時不圖結末に近い一句が私の眼に這入つた。

「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう」

私ははつと思つた。今迄ざわざわと動いてゐた私の胸が一度に凝結したやうに感じた。私は又逆に頁を

はぐり返した。さうして一枚に一句位づゝの割で倒に讀んで行つた。私は咄嗟の間に、私の知らなければならない事を知らうとして、ちら〱する文字を、眼で刺し通さうと試みた。其時私の知らうとするのは、たゞ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話さうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に與へて呉れない此長い手紙を自烈たさうに疊んだ。

私は又父の樣子を見に病室の戸口迄行つた。病人の枕邊は存外靜かであつた。賴りなささうに疲れた顏をして其所に坐つてゐる母を手招ぎして、「何うですか樣子は」と聞いた。母は「今少し持ち合つてるやうだよ」と答へた。私は父の眼の前へ顏を出して、「何うです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯いた。父ははつきり「有難う」と云つた。父の精神は存外朦朧としてゐなかつた。

私は又病室を退ぞいて自分の部屋に歸つた。其所で時計を見ながら、汽車の發着表を調べた。私は突然立つて帶を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で醫者の家へ馳け込んだ。私は醫者から父がもう二三日保つだらうか、其所のところを判然聞かうとした。注射でも何でもして、保たして呉れと賴まうとした。醫者は生憎留守であつた。私には凝として彼の歸るのを待ち受ける時間がなかつた。心の落付もなかつた。私はすぐ俥を停車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片を宛てがつて、其上から鉛筆で母と兄あてゞ手紙を書いた。手紙はごく簡單なものであつたが、斷らないで走るよりまだ增しだらうと思つて、それを急いで宅へ屆けるやうに車夫に賴んだ。さうして思ひ切つた勢で東京行の汽車に飛び乘つてしまつた。私はごう〱鳴る三等列車の中で、又

袂から先生の手紙を出して、漸く始から仕舞迄眼を通した。

下　先生と遺書

一

「……私は此夏あなたから二三度手紙を受け取りました。東京で相當の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶してゐます。私はそれを讀んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考へたのです。然し自白すると、私はあなたの依賴に對して、丸で努力をしなかつたのです。御承知の通り、交際區域の狹いといふよりも、世の中にたつた一人で暮してゐるといつた方が適切な位の私には、さういふ努力を敢てする餘地が全くないのです。然しそれは問題ではありません。實をいふと、私はこの自分を何うすれば好いのかと思ひ煩らつてゐた所なのです。此儘人間の中に取り殘されたミイラの樣に存在して行かうか、それとも……其時分の私は「それとも」といふ言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳足で絕壁の端迄來て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のやうに。私は卑怯でした。さうして多くの卑怯な人と同じ程度に於て煩悶したのです。遺憾ながら、其時の私には、あなたといふものが殆んど存在してゐなかつたと云つても誇張ではありません。一歩進めていふと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつて丸で無意

味なのでした。何うでも構はなかつたのです。私はそれ所の騷ぎでなかつたのです。私は狀差へ貴方の手紙を差したなり、依然として腕組をして考へ込んでゐました。宅に相應の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位々々といつて藻掻き廻るのか。私は寧ろ苦々しい氣分で、遠くにゐる貴方に斯んな一瞥を與へた丈でした。私は返事を上げなければ濟まない貴方に對して、言譯のために斯んな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無躾な言葉を弄するのではありません。私の本意は後を御覽になれば能く解る事と信じます。兎に角私は何とか挨拶すべき所を默つてゐたのですから、私は此怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思ひます。

其後私はあなたに電報を打ちました。有體に云へば、あの時私は一寸貴方に會ひたかつたのです。それから貴方の希望通り私の過去を貴方のために物語りたかつたのです。あなたは返電を掛けて、今東京へは出られないと斷つて來ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めてゐました。あなたも電報丈では氣が濟まなかつたと見えて、又後から長い手紙を寄こして吳れたので、あなたの出京出來ない事情が能く解りました。私はあなたを失禮な男だとも何とも思ふ譯がありません。貴方の大事な御父さんの病氣を其方退けにして、何であなたが宅を空けられるものですか。その御父さんの生死を忘れてゐるやうな私の態度こそ不都合です。――私は實際あの電報を打つ時に、あなたの御父さんの事を忘れてゐたのです。其癖あなたが東京にゐる頃には、難症だからよく注意しなくつては不可いと、あれ程忠告したのは私ですのに。私は斯ういふ矛盾な人間なのです。或は私の腦髓よりも、私の過去が私を壓迫する結果斯んな矛盾な人間に私を變化させるのかも知れません。私は此點に於ても充分私の我を認めてゐます。あなたに

許して貰はなくてはなりません。
あなたの手紙、――あなたから來た最後の手紙――を讀んだ時、私は惡い事をしたと思ひました。それで其意味の返事を出さうかと考へて、筆を執りかけましたが、一行も書かずに已めました。何うせ書くなら、此手紙を書いて上げたかつたから、さうして此手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がたゞ來るに及ばないといふ簡單な電報を再び打つたのは、それが爲です。

二

「私はそれから此手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、自分の思ふやうに、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、貴方に對する私の此義務を放擲する所でした。然しいくら止さうと思つて筆を擱いても、何にもなりませんでした。私は一時間經たないうちに又書きたくなりました。貴方から見たら、是が義務の遂行を重んずる私の性格のやうに思はれるかも知れません。私もそれは否みません。私は貴方の知つてる通り、殆んど世間と交渉のない孤獨な人間ですから、義務といふ程の義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張つて居りません。故意か自然か、私はそれを出來る丈切り詰めた生活をしてゐたのです。けれども私は義務に冷淡だから斯うなつたのではありません。寧ろ鋭敏過ぎて刺戟に堪へる丈の精力がないから、御覽のやうに消極的な月日を送る事になつたのです。だから一旦約束した以上、それを果さないのは、大變厭な心持です。私はあなたに對して此厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆を又取り上げなければならないのです。

其上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私丈の經驗だから、私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に與へないで死ぬのは、惜いとも云はれるでせう。私にも多少そんな心持があります。たゞし受け入れる事の出來ない人に與へる位なら、私はむしろ私の經驗を私の生命と共に葬つた方が好いと思ひます。實際こゝに貴方といふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで濟んだでせう。私は何千萬とゐる日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは眞面目だから。あなたは眞面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の參考になるものを御攫みなさい。私の暗いといふのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。然し何う間違つても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だから是から發達しやうといふ貴方には幾分か參考になるだらうと思ふのです。

貴方は現代の思想問題に就いて、よく私に議論を向けた事を記憶してゐるでせう。私のそれに對する態度もよく解つてゐるでせう。私はあなたの意見を輕蔑迄しなかつたけれども、決して尊敬を拂ひ得る程度にはなれなかつた。あなたの考へには何等の背景もなかつたし、あなたは自分の過去を有つには餘りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足なさうな顏をちよい〳〵私に見せた。其極あなたは私の過去を繪卷物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬

した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、溫かく流れる血潮を啜らうとしたからです。其時私はまだ生きてゐた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥ぞけてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出來るなら滿足です。

三

「私が兩親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。何時か妻があなたに話してゐたやうにも記憶してゐますが、二人は同じ病氣で死んだのです。しかも妻が貴方に不審を起させた通り、殆んど同時といつて可い位に、前後して死んだのです。實をいふと、父の病氣は恐るべき腸窒扶斯でした。それが傍にゐて看護をした母に傳染したのです。

私は二人の間に出來たたつた一人の男の子でした。宅には相當の財産があつたので、寧ろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時兩親が死なずにゐて呉れたなら、少なくとも父か母か何方か、片方で好いから生きてゐて呉れたなら、私はあの鷹揚な氣分を今迄持ち續ける事が出來たらうにと思ひます。

私は二人の後に茫然として取り殘されました。私には知識もなく、經驗もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍に居る事が出來ませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さへまだ知

らせてなかつたのです。母はそれを覺つてゐたか、又は傍のもの〻云ふ如く、實際父は回復期に向ひつゝあるものと信じてゐたか、それは分りません。母はたゞ伯父に萬事を賴んでゐました。其所に居合せた私を指さすやうにして『此子をどうぞ何分』と云ひました。私は其前から兩親の許可を得て、東京へ出る筈になつてゐましたので、母はそれも序に云ふ積らしかつたのです。それで『東京へ』とだけ付け加へましたら、伯父がすぐ後を引き取つて『よろしい決して心配しないがいゝ』と答へました。母は強い熱に堪へ得る體質の女なんでしたらうか、伯父は『確かりしたものだ』と云つて、私に向つて母の事を褒めてゐました。然しこれが果して母の遺言であつたのか何うだか、今考へると分らないのです。母は無論父の罹つた病氣の恐るべき名前を知つてゐたのです。さうして、自分がそれに傳染してゐた事も承知してゐたのです。けれども自分は屹度此病氣で命を取られると迄信じてゐたかどうか、其所になると疑ふ餘地はまだ幾何でもあるだらうと思はれるのです。其上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明かなものにせよ、一向記憶となつて母の頭に影さへ殘してゐない事がしば〳〵あつたのです。だから……然しそんな事は問題ではありません。たゞ斯ういふ風に物を解きほどいて見たり、又ぐる〳〵廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです。それは貴方にも始めから御斷りして置かなければならないと思ひますが、其實例としては當面の問題に大した關係のない斯んな記述が、却つて役に立ちはしないかと考へます。貴方の方でもまあその積で讀んで下さい。此性分が倫理的に個人の行爲やら動作の上に及んで、私は後來益他の德義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。それが私の煩悶や苦惱に向つて、積極的に大きな力を添へてゐるのは慥ですから覺えてゐて下さい。

話が本筋をはづれると、分り惡くなりますからまたあとへ引き返しませう。是でも私は此長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、或は多少落ち付いてゐやしないかと思つてゐるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響ももう途絶えました。雨戸の外にはいつの間にか憐れな虫の聲が、露の秋をまた忍びやかに思ひ出させるやうな調子で微かに鳴いてゐます。何も知らない妻は次の室で無邪氣にすや〳〵寐入つてゐます。私が筆を執ると、一字一劃が出來上りつゝペンの先で鳴つてゐます。私は寧ろ落付いた氣分で紙に向つてゐるのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が惱亂して筆がしどろに走るのではないやうに思ひます。

四

「兎に角たつた一人取り殘された私は、母の云ひ付け通り、此伯父を頼るより外に途はなかつたのです。伯父は又一切を引き受けて凡ての世話をして呉れました。さうして私を私の希望する東京へ出られるやうに取り計つて呉れました。

　私は東京へ來て高等學校へ這入りました。其時の高等學校の生徒は今よりも餘程殺伐で粗野でした。私の知つたものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負はせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしてゐる間に、學校の制帽をとう〳〵向ふのものに取られてしまつたのです。所が其帽子の裏には當人の名前がちやんと、菱形の白いきれの上に書いてあつたのです。それで事が面倒になつて、其男はもう少しで警察から學校へ照會される所でした。然し友達が色々と骨を折つ

て、ついに表沙汰にせずに濟むやうにして遣りました。斯んな亂暴な行爲を、上品な今の空氣のなかに育つたあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿々々しい感じを起すでせう。私も實際馬鹿々々しく思ひます。然し彼等は今の學生にない一種質朴な點をその代りに有つてゐたのです。其頃私の月々伯父から貰つてゐた金は、あなたが今、御父さんから送つてもらふ學資に比べると遙かに少ないものでした。（無論物價も違ひませうが）。それでゐて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず數ある同級生のうちで、經濟の點にかけては、決して人を羨ましがる憐れな境遇にゐた譯ではないのです。今から回顧すると、寧ろ人に羨やましがられる方だつたのでせう。と云ふのは、私は月々極つた送金の外に、書籍費、（私は其時分から書物を買ふ事が好でした）、及び臨時の費用を、よく伯父から請求して、ずん／＼それを自分の思ふ樣に消費する事が出來たのですから。

何も知らない私は、伯父を信じてゐた許でなく、常に感謝の心をもつて、伯父をありがたいもの〻やうに尊敬してゐました。伯父は事業家でした。縣會議員にもなりました。其關係からでもありませう、政黨にも緣故があつたやうに記憶してゐます。父の實の弟ですけれども、さういふ點で、性格からいふと父とは丸で違つた方へ向いて發達した樣にも見えます。父は先祖から讓られた遺產を大事に守つて行く篤實一方の男でした。樂みには、茶だの花だのを遣りました。それから詩集などを讀む事も好きでした。書畫骨董といつた風のものにも、多くの趣味を有つてゐる樣子でした。家は田舍にありましたけれども、二里ばかり隔つた市、——其市には伯父が住んでゐたのです、——其市から時々道具屋が懸物だの、香爐だのを持つて、わざ／＼父に見せに來ました。父は一口にいふと、まあマンオフミーンズとでも評したら好いの

でせう、比較的上品な嗜好を有つた田舎紳士だつたのです。だから氣性からいふと、闊達な伯父とは餘程の懸隔がありました。それでゐて二人は又妙に仲が好かつたのです。父はよく伯父を評して、自分よりも遙かに働きのある頼もしい人のやうに云つてゐました。自分のやうに、親から財産を譲られたものは、何うしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘ふ必要がないから不可いのだとも云つてゐました。此言葉は母も聞きました。私も聞きました。父は寧ろ私の心得になる積で、それを云つたらしく思はれます。「御前もよく覺えてゐるが好い」と父は其時わざ／＼私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにゐます。此位私の父から信用されたり、褒められたりしてゐた伯父を、私が何うして疑がふ事が出來るでせう。私にはたゞでさへ誇になるべき伯父でした。父や母が亡くなつて、萬事其人の世話にならなければならない私には、もう單なる誇ではなかつたのです。私の存在に必要な人間になつてゐたのです。

五

「私が夏休みを利用して始めて國へ歸つた時、兩親の死に斷えた私の住居には、新らしい主人として、伯父夫婦が入れ代つて住んでゐました。是は私が東京へ出る前からの約束でした。たつた一人取り殘された私が家にゐない以上、左右でもするより外に仕方がなかつたのです。

伯父は其頃市にある色々な會社に關係してゐたやうです。業務の都合から云へば、今迄の居宅に寐起するが、二里も隔つた私の家に移るより遙かに便利だと云つて笑ひました。是は私の父母が亡くなつた後、何う邸を始末して、私が東京へ出るかと云ふ相談の時、伯父の口を洩れた言葉であります。私の家は舊い

歴史を有つてゐるので、少しは其界隈で人に知られてゐました。あなたの郷里でも同じ事だらうと思ひますが、田舍では由緒のある家を、相續人があるのに壞したり賣つたりするのは大事件です。今の私ならその位の事は何とも思ひませんが、其頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家は其儘にして置かなければならず、甚だ所置に苦しんだのです。

伯父は仕方なしに私の空家へ這入る事を承諾して呉れました。然し市の方にある住居も其儘にして置いて、兩方の間を往つたり來たりする便宜を與へて貰はなければ困るといひました。私に固より異議のありやう筈がありません。私は何んな條件でも東京へ出られゝば好い位に考へてゐたのです。

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懷かしげに故郷の家を望んでゐました。固より其所にはまだ自分の歸るべき家があるといふ旅人の心で望んでゐたのです。休みが來れば歸らなくてはならないといふ氣分は、いくら東京を戀しがつて出て來た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには歸れると思ふその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、伯父は何んな風に兩方の間を往來してゐたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まつてゐました。學校へ出る子供などは平生恐らく市の方にゐたのでせうが、是も休暇のために田舍へ遊び半分といつた格で引き取られてゐました。

みんな私の顏を見て喜こびました。私は又父や母の居た時より、却つて賑やかで陽氣になつた家の樣子を見て嬉しがりました。伯父はもと私の部屋になつてゐた一間を占領してゐる一番目の男の子を追ひ出して、私を其所へ入れました。座敷の數も少なくないのだから、私はほかの部屋で構はないと辭退したので

すけれども、伯父は御前の宅だからと云つて、聞きませんでした。
私は折々亡くなつた父や母の事を思ひ出す外に、何の不愉快もなく、其一夏を伯父の家族と共に過ごして、又東京へ歸つたのです。たゞ一つ其夏の出來事として、私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは、伯父夫婦が口を揃へて、まだ高等學校へ入つたばかりの私に結婚を勸める事でした。それは前後で丁度三四回も繰り返されたでせう。私も始めはたゞ其突然なのに驚ろいた丈でした。二度目には判然斷りました。三度目には此方からとう〳〵其理由を反問しなければならなくなりました。彼等の主意は單簡でした。早く嫁を貰つて此所の家へ歸つて來て、亡くなつた父の後を相續しろと云ふ丈なのです。家は休暇になつて歸りさへすれば、それで可いものと私は考へてゐました。父の後を相續する、それには嫁が必要だから貰ふ、兩方とも理窟としては一通り聞こえます。ことに田舎の事情を知つてゐる私には、能く解ります。私も絶對にそれを嫌つてはゐなかつたのでせう。然し東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るやうに、遙か先の距離に望まれる丈でした。私は伯父の希望に承諾を與へないで、ついに又私の家を去りました。

六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまひました。私の周圍を取り捲いてゐる青年の顏を見ると、世帯染みたものは一人もゐません。みんな自由です、さうして悉く單獨らしく思はれたのです。斯ういふ氣樂な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に餘儀なくされて、既に妻を迎へてゐたものがあつ

たから知れませんが、子供らしい私は其所に氣が付きませんでした。それから左右いふ特別の境遇に置かれた人の方でも、四邊に氣兼をして、なるべくは書生に緣の遠いそんな內輪の話は爲ないやうに愼しんでゐたのでせう。後から考へると、私自身が既に其組だつたのですが、私はそれさへ分らずに、たゞ子供らしく愉快に修學の道を步いて行きました。

學年の終りに、私は又行李を絡げて、親の墓のある田舍へ歸つて來ました。さうして去年と同じやうに、父母のゐたわが家の中で、又伯父夫婦と其子供の變らない顏を見ました。私は再び其所で故鄕の匂を嗅ぎました。其匂は私に取つて依然として懷かしいものでありました。一學年の單調を破る變化としても有難いものに違なかつたのです。

然し此自分を育て上たと同じ樣な匂の中で、私は又突然結婚問題を伯父から鼻の先へ突き付けられました。伯父の云ふ所は、去年の勸誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。たゞ此前勸められた時には、何等の目的物がなかつたのに、今度はちやんと肝心の當人を捕まへてゐたので、私は猶困らせられたのです。其當人といふのは伯父の娘卽ち私の從妹に當る女でした。その女を貰つて吳れゝば、御互のために便宜である、父も存生中そんな事を話してゐた、と伯父が云ふのです。私もさうすれば便宜だとは思ひました。父が伯父にさういふ風な話をしたといふのも有り得べき事と考へました。然しそれは私が伯父に云はれて、始めて氣が付いたので、云はれない前から、覺つてゐた事柄ではないのです。だから私は驚ろきました。驚ろいたけれども、伯父の希望に無理のない所も、それがために能く解りました。

私は迂濶なのでせうか。或はさうなのかも知れませんが、恐らく其從妹に無頓着であつたのが、重な源

國になつてゐるのでせう。私は小供のうちから市にゐる伯父の家へ始終遊びに行きました。たゞ行く許でなく、能く其所に泊りました。さうして此從妹とは其時分から親しかつたのです。あなたも御承知でせう、兄妹の間に戀の成立した例のないのを。私は此公認された事實を勝手に布衍してゐるかも知れないが、始終接觸して親しくなり過ぎた男女の間には、戀に必要な刺戟の起る清新な感じが失なはれてしまふやうに考へてゐます。香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味はうのは、酒を飮み始めた刹那にある如く、戀の衝動にも斯ういふ際どい一點が、時間の上に存在してゐるとしか思はれないのです。一度平氣で其所を通り拔けたら、馴れゝば馴れる程、親しみが増す丈で、戀の神經はだん／＼麻痺して來る丈です。私は何う考へ直しても、此從妹を妻にする氣にはなれませんでした。

伯父はもし私が主張するなら、私の卒業迄結婚を延ばしても可いと云ひました。けれども善は急げといふ諺もあるから、出來るなら今のうちに祝言の盃丈は濟ませて置きたいとも云ひました。當人に望のない私には何方にしたつて同じ事です。私は又斷りました。伯父は厭な顔をしました。從妹は泣きました。私に添はれないから悲しいのではありません。結婚の申し込を拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が從妹を愛してゐない如く、從妹も私を愛してゐない事は、私によく知れてゐました。私はまた東京へ出ました。

七

「私が三度目に歸國したのは、それから又一年經つた夏の取付でした。私は何時でも學年試驗の濟むの

を待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれ程懐かしかつたからです。貴方にも覺があるでせう、生れた所は空氣の色が違ひます、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂つてゐます。一年のうちで、七八の二月を其中に包まれて、穴に入つた蛇の様に凝としてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好い心持だつたのです。

單純な私は從妹との結婚問題に就いて、左程頭を痛める必要がないと思つてゐました。厭なものは斷る、斷つてさへしまへば後には何も殘らない、私は斯う信じてゐたのです。だから伯父の希望通りに意志を曲げなかつたにも關らず、私は寧ろ平氣でした。過去一年の間いまだかつて其んな事に屈托した覺もなく、相變らずの元氣で國へ歸つたのです。

所が歸つて見ると伯父の態度が違つてゐます。元のやうに好い顔をして私を自分の懷に抱かうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、歸つて四五日の間は氣が付かずにゐました。たゞ何かの機會に不圖變に思ひ出したのです。すると妙なのは、伯父ばかりではないのです。伯母も妙なのです。從妹も妙なのです。中學校を出て、是から東京の高等商業へ這入る積だといつて、手紙で其様子を聞き合せたりした伯父の男の子迄妙なのです。

私の性分として考へずにはゐられなくなりました。何うして私の心持が斯う變つたのだらう。いや何うして向ふが斯う變つたのだらう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗つて、急に世の中が判然見えるやうにして呉れたのではないかと疑ひました。私は父や母が此世に居なくなつた後でも、居た時と同じやうに私を愛して呉れるものと、何處か心の奥で信じてゐたのです。尤も其頃でも私は決して理に暗

い質ではありませんでした。然し先祖から讓られた迷信の魂も、強い力で私の血の中に潛んでゐたのです。今でも潛んでゐるでせう。

私はたつた一人山へ行つて、父母の墓の前に跪づきました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。さうして私の未來の幸福が、此冷たい石の下に橫はる彼等の手にまだ握られてでもゐるやうな氣分で、私の運命を守るべく彼等に祈りました。貴方は笑ふかも知れない。私も笑はれても仕方がないと思ひます。然し私はさうした人間だつたのです。

私の世界は掌を翻へすやうに變りました。尤も是は私に取つて始めての經驗ではなかつたのです。私が十六七の時でしたらう、始めて世の中に美くしいものがあるといふ事實を發見した時には、一度にはつと驚ろきました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。さうして心の中であゝ美しいと叫びました。十六七と云へば、男でも女でも、俗にいふ色氣の付く頃です。色氣の付いた私は世の中にある美しいものゝ代表者として、始めて女を見る事が出來たのです。今迄其存在に少しも氣の付かなかつた異性に對して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以來私の天地は全く新らしいものとなりました。

私が伯父の態度に心づいたのも、全く是と同じなんでせう。俄然として心づいたのです。何の豫感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今迄とは丸で別物のやうに私の眼に映つたのです。私は驚ろきました。さうして此儘にして置いては、自分の行先が何うなるか分らないといふ氣になりました。

八

「私は今迄伯父任せにして置いた家の財産に就いて、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に對して濟まないと云ふ氣を起したのです。伯父は忙がしい身體だと自稱する如く、毎晩同じ所に寐泊はしてゐませんでした。二日家へ歸ると三日は市の方で暮らすといつた風に、兩方の間を往來して、其日其日を落付のない顏で過ごしてゐました。さうして忙がしいといふ言葉を口癖のやうに使ひました。何の疑も起らない時は、私も實際に忙がしいのだらうと思つてゐたのです。それから、忙がしがらなくては當世流でないのだらうと、皮肉にも解釋してゐたのです。けれども財産の事に就いて、時間の掛る話をしやうといふ目的が出來た眼で、この忙がしがる樣子を見ると、それが單に私を避ける口實としか受取れなくなつて來たのです。私は容易に伯父を捕まへる機會を得ませんでした。

私は伯父が市の方に妾を有つてゐるといふ噂を聞きました。私は其噂を昔し中學の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置く位の事は、此伯父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きてゐるうちに、そんな評判を耳に入れた覺のない私は驚ろきました。友達は其外にも色々伯父に就いての噂を語つて聞かせました。一時事業で失敗しかゝつてゐたやうに他から思はれてゐたのに、此二三年來又急に盛り返して來たといふのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものゝ一つでした。

私はとう／＼伯父と談判を開きました。談判といふのは少し不穩當かも知れませんが、話の成行からいふと、そんな言葉で形容するより外に途のない所へ、自然の調子が落ちて來たのです。伯父は何處迄も私

を子供扱ひにしやうとします。私はまた始めから猜疑の眼で伯父に對してゐます。穩やかに解決のつく筈はなかつたのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しく此所に書く事の出來ない程先を急いでゐます。實をいふと、私は是より以上に、もつと大事なものを控えてゐるのです。私のペンは早くから其所へ辿りつきたがつてゐるのを、漸との事で抑え付けてゐる位です。あなたに會つて靜かに話す機會を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜むといふ意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覺えてゐるでせう、私がいつか貴方に、造り付けの惡人が世の中にゐるものではないと云つた事を。多くの善人がいざといふ場合に突然惡人になるのだから油斷しては不可ないと云つた事を。あの時あなたは私に昂奮してゐると注意して呉れました。さうして何んな場合に、善人が惡人に變化するのかと尋ねました。私がたゞ一口金と答へた時、あなたは不滿な顔をしました。私はあなたの不滿な顔をよく記憶してゐます。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時此伯父の事を考へてゐたのです。普通のものが金を見て急に惡人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎惡と共に私は此伯父を考へてゐたのです。私の答は、思想界の奧へ突き進んで行かうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れません、陳腐だつたかも知れません。けれども私にはあれが生きた答でした。現に私は昂奮してゐたではありませんか。私は冷かな頭で新らしい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きてゐると信じてゐます。血の力で體が動くからです。言葉が空氣に波動を傳へる許で

なく。もつと強い物にもつと強く働き掛ける事が出來るからです。

九

「一口でいふと、伯父は私の財產を胡魔化したのです。事は私が東京へ出てゐる三年の間に容易く行なはれたのです。凡てを伯父任せにして平氣でゐた私は、世間的に云へば本當の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とでも云へませうか。私は其時の己れを顧みて、何故もつと人が惡く生れて來なかつたかと思ふと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。然しまた何うかして、もう一度あゝいふ生れたまゝの姿に立ち歸つて生きて見たいといふ心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知つてゐる私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年數の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でせう。

若し私が伯父の希望通り伯父の娘と結婚したならば、其結果は物質的に私に取つて有利なものでしたらうか。是は考へる迄もない事と思ひます。伯父は策略で娘を私に押し付けやうとしたのです。好意的に兩家の便宜を計るといふよりも、ずつと下卑た利害心に驅られて、結婚問題を私に向けたのです。私は從妹を愛してゐないだけで、嫌つてはゐなかつたのですが、後から考へて見ると、それを斷つたのが私には多少の愉快になると思ひます。胡魔化されるのは何方にしても同じでせうけれども、載せられ方からいへば、從妹を貰はない方が、向ふの思ひ通りにならないといふ點から見て、少しは私の我が通つた事になるのですから。然しそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに關係のない貴方に云はせたら、

さぞ馬鹿氣た意地に見えるでせう。
私と伯父の間に他の親戚のものが這入りました。その親戚のものも私は丸で信用してゐませんでした。信用しないばかりでなく、寧ろ敵視してゐました。私は伯父が私を欺いたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ないと思ひ詰めました。父があれ丈賞め拔いてゐた伯父ですら斯うだから、他のものはといふのが私の論理でした。

それでも彼等は私のために、私の所有にかゝる一切のものを纏めて呉れました。それは金額に見積ると、私の豫期より遙かに少ないものでした。私としては默つてそれを受け取るか、でなければ伯父を相手取つて公け沙汰にするか、二つの方法しかなかつたのです。私は憤りました。又迷ひました。訴訟にすると落着迄に長い時間のかゝる事も恐れました。私は修業中のからだですから、學生として大切な時間を奪はれるのは非常の苦痛だとも考へました。私は思案の結果、市に居る中學の舊友に頼んで、私の受け取つたものを、凡て金の形に變へやうとしました。舊友は止した方が得だといつて忠告して呉れましたが、私は聞きませんでした。私は永く故鄕を離れる決心を其時に起したのです。伯父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は國を立つ前に、又父と母の墓へ參りました。私はそれぎり其墓を見た事がありません。もう永久に見る機會も來ないでせう。

私の舊友は私の言葉通りに取計らつて呉れました。尤もそれは私が東京へ着いてから餘程經つた後の事です。田舍で畠地などを賣らうとしたつて容易には賣れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される

恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時價に比べると餘程少ないものでした。自白すると、私の財產は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後から此友人に送つて貰つた金丈なのです。親の遺產としては固より非常に減つてゐたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、猶心持が悪かつたのです。けれども學生として生活するにはそれで充分以上でした。實をいふと私はそれから出る利子の半分も使へませんでした。此餘裕ある私の學生生活が私を思ひも寄らない境遇に陷し入れたのです。

十

「金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新らしく一戸を構へて見やうかといふ氣になつたのです。然しそれには世帶道具を買ふ面倒もありますし、世話をして呉れる婆さんの必要も起りますし、其婆さんが又正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と云つた譯で、ちよくら一寸實行する事は覺束なく見えたのです。ある日私はまあ宅丈でも探して見やうかといふそゞろ心から、散歩がてらに本郷臺を西へ下りて小石川の坂を眞直に傳通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの樣子が丸で違つてしまひましたが、其頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えてゐたものです。私は其草の中に立つて、何心なく向の崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、其頃は又ずつとあの西側の趣が違つてゐました。見渡す限り緑が一面に深く茂つてゐる丈でも、神經が休まります。私は不圖こゝいらに適當な宅はないだらうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切

れないで、がたぴししてゐる彼の邊の家並は、其時分の事ですから隨分汚ならしいものでした。私は露次を拔けたり、横丁を曲つたり、ぐる／＼歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、こゝいらに小じんまりした貸家はないかと尋ねて見ました。上さんは『左右ですね』と云つて、少時首をかしげてゐましたが、『かし家はちよいと……』と全く思ひ當らない風でした。私は望のないものと諦らめて歸り掛けました。すると上さんが又、『素人下宿ぢや不可ませんか』と聞くのです。私は一寸氣が變りました。靜かな素人屋に一人で下宿してゐるのは、却つて家を持つ面倒がなくつて結構だらうと考へ出したのです。それから其駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教へてもらひました。

　それはある軍人の家族、といふよりも寧ろ遺族、の住んでゐる家でした。主人は何でも日清戰爭の時か何かに死んだのだと上さんが云ひました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官學校の傍とかに住んでゐたのだが、厩などがあつて、邸が廣過ぎるので、其所を賣り拂つて、此所へ引つ越して來たけれども、無人で淋しくつて困るから相當の人があつたら世話をして呉れと賴まれてゐたのださうです。私は上さんから其家には未亡人と一人娘と下女より外にゐないのだといふ事を確かめました。私は閑靜で至極好からうと心の中に思ひました。けれどもそんな家族のうちに、私のやうなものが、突然行つた處で、素性の知れない書生さんといふ名稱のもとに、すぐ拒絶されはしまいかといふ掛念もありました。私は止さうかとも考へました。然し私は書生としてそんなに見苦しい服裝はしてゐませんでした。それから大學の制帽を被つてゐました。あなたは笑ふでせう、大學の制帽が何うしたんだと云つて。けれども其頃の大學生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私は其場合此四角な帽子に一種の自信を見出した位です。さう

して駄菓子屋の上さんに教はつた通り、紹介も何もなしに其軍人の遺族の家を訪ねました。
私は未亡人に會つて來意を告げました。未亡人は私の身元やら學校やら專問やらに就いて色々質問しました。さうして是なら大丈夫だといふ所を何所かに握つたのでせう、何時でも引つ越して來て差支ないといふ挨拶を卽坐に與へて呉れました。未亡人は正しい人でした、又判然した人でした。私は軍人の妻君といふものはみんな斯んなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚ろきもしました。此氣性で何處が淋しいのだらうと疑ひもしました。

十一

「私は早速其家へ引き移りました。私は最初來た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。其所は宅中で一番好い室でした。本鄕邊に高等下宿といつた風の家がぽつ〳〵建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の樣子を心得てゐました。私の新らしく主人となつた室は、それ等よりもずつと立派でした。移つた當座は、學生としての私には過ぎる位に思はれたのです。
室の廣さは八疊でした。床の横に違ひ棚があつて、緣と反對の側には一間の押入が付いてゐました。窓は一つもなかつたのですが、其代り南向の緣に明るい日が能く差しました。
私は移つた日に、其室の床に活けられた花と、其横に立て懸けられた琴を見ました。何方も私の氣に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちから有つてゐました。その爲でもありませうか、斯ういふ艶めかしい裝飾を何時の間にか輕蔑する癖が付いてゐたの

です。
私の父が存生中にあつめた道具類は、例の伯父のために滅茶々々にされてしまつたのですが、夫でも多少は殘つてゐました。私は國を立つ時それを中學の舊友に預かつて貰ひました。それから其中で面白さうなものを四五幅裸にして行李の底へ入れて來ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて樂しむ積でゐたのです。所が今いつた琴と活花を見たので、急に勇氣がなくなつて仕舞ひました。後から聞いて始めて此花が私に對する御馳走に活けられたのだといふ事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前から其所にあつたのですから、是は置き所がないため、已を得ず其儘に立て懸けてあつたのでせう。

斯んな話をすると、自然其裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでせう。移つた私にも、移らない初からさういふ好奇心が既に動いてゐたのです。斯うした邪氣が豫備的に私の自然を損なつたためか、又は私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めて其所の御孃さんに會つた時、へどもどした挨拶をしました。其代り御孃さんの方でも赤い顏をしました。

私はそれ迄未亡人の風采や態度から推して、此御孃さんの凡てを想像してゐたのです。然し其想像は御孃さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあゝなのだらう、其妻君の娘だから斯うだらうと云つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。所が其推測が、御孃さんの顏を見た瞬間に、悉く打ち消されました。さうして私の頭の中へ今迄想像も及ばなかつた異性の匂が新らしく入つて來ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴

も邪魔にならなくなりました。

其花は又規則正しく凋れる頃になると活け更へられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、其琴の音を聞いてゐました。私には其琴が上手なのか下手なのか能く解らないのです。けれども餘り込み入つた手を彈かない所を見ると、上手なのぢやなからうと考へました。まあ活花の程度位なものだらうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、御孃さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾つて吳れました。尤も活方は何時見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ變つた例がありませんでした。然し片方の音樂になると花よりももつと變でした。ぽつん〳〵糸を鳴らす丈で、一向肉聲を聞かせないのです。唄はないのではありませんが、丸で內所話でもするやうに小さな聲しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んで此下手な活花を眺めては、まづさうな琴の音に耳を傾むけました。

十二

「私の氣分は國を立つ時既に厭世的になつてゐました。他は頼りにならないものだといふ觀念が、其時骨の中迄染み込んでしまつたやうに思はれたのです。私は私の敵視する伯父だの伯母だの、その他の親戚だのを、恰も人類の代表者の如く考へ出しました。汽車へ乘つてさへ隣のものゝ樣子を、それとなく注意し始めました。たまに向から話し掛けられでもすると、猶の事警戒を加へたくなりました。私の心は沈

鬱でした。鉛を呑んだやうに重苦しくなる事が時々ありました。それでゐて私の神經は、今云つた如くに鋭どく尖つて仕舞つたのです。

私が東京へ來て下宿を出やうとしたのも、是が大きな源因になつてゐるやうに思はれます。金に不自由がなければこそ、一戸を構へて見る氣にもなつたのだと云へばそれ迄ですが、元の通りの私ならば、たとひ懷中に餘裕が出來ても、好んでそんな面倒な眞似はしなかつたでせう。

私は小石川へ引き移つてからも、當分此緊張した氣分に寛ぎを與へる事が出來ませんでした。私は自分で自分が恥づかしい程、きよと／＼周圍を見廻してゐました。不思議にもよく働らくのは頭と眼だけで、口の方はそれと反對に、段々動かなくなつて來ました。私は家のものゝ樣子を猫のやうによく觀察しながら、默つて机の前に坐つてゐました。時々は彼等に對して氣の毒だと思ふ程、私は油斷のない注意を彼等の上に注いでゐたのです。おれは物を偸まない巾着切見たやうなものだ、私は斯う考へて、自分が厭になる事さへあつたのです。

貴方は定めて變に思ふでせう。其私が其所の御孃さんを何うして好く餘裕を有つてゐるか。其御孃さんの下手な活花を、何うして嬉しがつて眺める餘裕があるか。同じく下手な其人の琴を何うして喜こんで聞く餘裕があるか。さう質問された時、私はたゞ兩方とも事實であつたのだから、事實として貴方に敎へて上げると云ふより外に仕方がないのです。解釋は頭のある貴方に任せるとして、私はたゞ一言付け足して置きませう。私は金に對して人類を疑ぐつたけれども、愛に對しては、まだ人類を疑はなかつたのです。だから他から見ると變なものでも、また自分で考へて見て、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平氣で

兩立してゐたのです。

　私は未亡人の事を常に奥さんと云つてゐましたから、是から未亡人と呼ばずに奥さんと云ひます。奥さんは私を靜かな人、大人しい男と評しました。それから勉强家だとも褒めて呉れました。けれども私の不安な眼つきや、きよと〳〵した樣子については、何事も口へ出しませんでした。氣が付かなかつたのか、遠慮してゐたのか、どつちだかよく解りませんが、何しろ其所には丸で注意を拂つてゐないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと云つて、さも尊敬したらしい口の利き方をした事があります。其時正直な私は少し顏を赤らめて、向ふの言葉を否定しました。すると奥さんは『あなたは自分で氣が付かないから、左右御仰るんです』と眞面目に說明して呉れました。奥さんは始め私のやうな書生を宅へ置く積ではなかつたらしいのです。何處かの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋を頼んでゐたらしいのです。俸給が豐でなくつて、已を得ず素人屋に下宿する位の人だからといふ考へが、それで前かたから奥さんの頭の何處かに這入つてゐたのでせう。奥さんは自分の胸に描いた其想像の御客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だと云つて褒めるのです。成程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金錢にかけて、鷹揚だつたかも知れません。然しそれは氣性の問題ではありませんから、私の内生活に取つて殆んど關係のないのと一般でした。奥さんはまた女丈にそれを私の全體に推し廣げて、同じ言葉を應用しやうと力めるのです。

十三

「奥さんの此態度が自然私の氣分に影響して來ました。しばらくするうちに、私の眼はもと程きよろ付がなくなりました。自分の心が自分の坐つてゐる所に、ちやんと落付いてゐるやうな氣にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑ひ深い私の樣子に、てんから取り合はなかつたのが、私に大きな幸福を與へたのでせう。私の神經は相手から照り返して來る反射のないために段々靜まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱つて吳れたものとも思はれますし、又自分で公言する如く、實際私を鷹揚だと觀察してゐたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたやうにも考へられますから、或は奥さんの方で胡魔化されてゐたのかも解りません。

私の心が靜まると共に、私は段々家族のものと接近して來ました。奥さんとも御孃さんとも笑談を云ふやうになりました。茶を入れたからと云つて向ふの室へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買つて來て、二人を此方へ招いたりする晩もありました。私は急に交際の區域が殖えたやうに感じました。それがために大切な勉强の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。御孃さんは學校へ行く上に、花だの琴だのを習つてゐるんだから、定めて忙がしからうと思ふと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に餘裕を有つてゐるやうに見えました。それで三人は顏さへ見ると一所に集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに來るのは、大抵御孃さんでした。御孃さんは緣側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を拔けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。御孃さんは、其所へ來て一寸留まります。それから屹度私の名を呼んで『御勉强？』と聞きます。私は大抵六づかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めてゐましたから、傍で見たらさぞ勉强家のやうに見えたのでせう。然し實際を云ふと、夫程熱心に書物を硏究してはゐなかつたのです。頁の上に眼は着けてゐながら、御孃さんの呼びに來るのを待つてゐる位なものでした。待つてゐて來ないと、仕方がないから私の方で立ち上るのです。さうして向ふの室の前へ行つて、此方から『御勉强ですか』と聞くのです。

御孃さんの部屋は茶の間と續いた六疊でした。奥さんはその茶の間にゐる事もあるし、又御孃さんの部屋にゐる事もありました。つまり此二つの部屋は仕切があつても、ないと同じ事で、親子二人が往つたり來たりして、どつち付かずに占領してゐたのです。私が外から聲を掛けると、『御這入なさい』と答へるのは屹度奥さんでした。御孃さんは其所にゐても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たま御孃さん一人で、用があつて私の室へ這入つた序に、其所に坐つて話し込むやうな場合も其内に出て來ました。さういふ時には、私の心が妙に不安に冒されて來るのです。さうして若い女とたゞ差向ひで坐つてゐるのが不安なのだとばかりは思へませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るやうな不自然な態度が私を苦しめるのです。然し相手の方は却つて平氣でした。これが琴を浚ふのに聲さへ碌に出せなかつたあの女かしらと疑がはれる位、耻づかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、『はい』と返事をする丈で、容易に腰を上げない事さへありました。そ

れでゐて御孃さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼には能くそれが解つてゐました。能く解るやうに振舞つて見せる痕迹さへ明らかでした。

十四

「私は御孃さんの立つたあとで、ほつと一息するのです。夫と同時に、物足りないやうな又濟まないやうな氣持になるのです。私は女らしかつたのかも知れません。今の青年の貴方がたから見たら猶左右見えるでせう。然し其頃の私達は大抵そんなものだつたのです。

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、御孃さんと私を二人ぎり殘して行くやうな事はなかつたのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいふのは變ですが、奥さんの樣子を能く觀察してゐると、何だか自分の娘と私とを接近させたがつてゐるらしくも見えるのです。それでゐて、或場合には、私に對して暗に警戒する所もあるやうなのですから、始めて斯んな場合に出會つた私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度を何方かに片付けて貰ひたかつたのです。頭の働きから云へば、それが明らかな矛盾に違ひなかつたからです。然し伯父に欺むかれた記憶のまだ新らしい私は、もう一歩踏み込んだ疑ひを挾さまずには居られませんでした。私は奥さんの此態度の何方かが本當で、何方かゞ僞だらうと推定しました。さうして判斷に迷ひました。たゞ判斷に迷ふばかりでなく、何でそんな妙な事をするか其意味が私には呑み込めなかつたのです。理由を考へ出さうとしても、考へ出せない私は、罪を女といふ一字に塗り付けて

我慢した事もありました。必竟女だからあゝなのだ、女といふものは何うせ愚なものだ。私の考は行き詰れば何時でも此所へ落ちて來ました。

それ程女を見縊つてゐた私が、また何うしても御孃さんを見縊る事が出來なかつたのです。私の理窟は其人の前に全く用を爲さない程動きませんでした。私は其人に對して、殆んど信仰に近い愛を有つてゐたのです。私が宗教だけに用ひる此言葉を、若い女に應用するのを見て、貴方は變に思ふかも知れませんが、私は今でも固く信じてゐるのです。本當の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。私は御孃さんの顏を見るたびに、自分が美くしくなるやうな心持がしました。御孃さんの事を考へると、氣高い氣分がすぐ自分に乘り移つて來るやうに思ひました。もし愛といふ不可思議なものに兩端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性慾が動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極點を捕まへたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出來ない身體でした。けれども御孃さんを見る私の眼や、御孃さんを考へる私の心は、全く肉の臭を帶びてゐませんでした。

私は母に對して反感を抱くと共に、子に對して戀愛の度を增して行つたのですから、三人の關係は、下宿した始めよりは段々複雜になつて來ました。尤も其變化は殆んど內面的で外へは現れて來なかつたのです。そのうち私はあるひよつとした機會から、今迄奧さんを誤解してゐたのではなからうかといふ氣になりました。奧さんの私に對する矛盾した態度が、どつちも僞りではないのだらうと考へ直して來たのです。其上、それが互違に奧さんの心を支配するのでなくつて、何時でも兩方が同時に奧さんの胸に存在してゐるのだと思ふやうになつたのです。つまり奧さんが出來るだけ御孃さんを私に接近させやうとしてゐなが

ら、同時に私に警戒を加へてゐるのは矛盾の樣だけれども、其警戒を加へる時に、片方の態度を忘れるのでも翻へすのでも何でもなく、矢張依然として二人を接近させたがつてゐたのだと觀察したのです。たゞ自分が正當と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釋したのです。御孃さんに對して、肉の方面から近づく念の萌さなかつた私は、其時入らぬ心配だと思ひました。しかし奧さんを惡く思ふ氣はそれから無くなりました。

十五

「私は奧さんの態度を色々綜合して見て、私が此所の家で充分信用されてゐる事を確めました。しかも其信用は初對面の時からあつたのだといふ證據さへ發見しました。他を疑ぐり始めた私の胸には、此發見が少し奇異な位に響いたのです。私は男に比べると女の方がそれ丈直覺に富んでゐるのだらうと思ひました。同時に、女が男のために、欺まされるのも此所にあるのではなからうかと思ひました。奧さんを左右觀察する私が、御孃さんに對して同じやうな直覺を強く働らかせてゐたのだから、今考へると可笑しいのです。私は他を信じないと心に誓ひながら、絕對に御孃さんを信じてゐたのですから。それでゐて、私を信じてゐる奧さんを奇異に思つたのですから。

私は鄕里の事に就いて餘り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件に就いては何にも云はなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさへ既に一種の不愉快を感じました。私は成るべく奧さんの方の話だけを聞かうと力めました。所がそれでは向ふが承知しません。何かに付けて、私の國元の事情を知りたが

るのです。私はとう〳〵何もかも話してしまひました。私は二度と國へは歸らない、歸つても何にもない、あるのはたゞ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大變感動したらしい樣子を見せました。御孃さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私は嬉しかつたのです。

私の凡てを聞いた奥さんは、果して自分の直覺が的中したと云はないばかりの顏をし出しました。それからは私を自分の親戚に當る若いものか何かを取扱ふやうに待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。寧ろ愉快に感じた位です。所がそのうちに私の猜疑心が又起つて來ました。

私が奥さんを疑ぐり始めたのは、極些細な事からでした。然し其些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて來ます。私は何ういふ拍子か不圖奥さんが、伯父と同じやうな意味で、御孃さんを私に接近させやうと力めるのではないかと考へ出したのです。すると今迄親切に見えた人が、急に狡猾な策畧家として私の眼に映じて來たのです。私は苦々しい唇を嚙みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言してゐました。私も夫を嘘とは思ひませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、其所に間違はなかつたやうに思はれます。然し一般の經濟狀態は大して豐だと云ふ程ではありませんでした。利害問題から考へて見て、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私は又警戒を加へました。けれども娘に對して前云つた位の強い愛をもつてゐる私が、其母に對していくら警戒を加へたつて何になるでせう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だなといつて、自分を罵つた事もあります。然しそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに濟んだのです。私の

煩悶は、奥さんと同じやうに御孃さんも策畧家ではなからうかといふ疑問に會つて始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、萬事を遣つてゐるのだらうと思ふと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なのではありません、絶體絶命のやうな行き詰つた心持になるのです。それでゐて私は、一方に御孃さんを固く信じて疑はなかつたのです。だから私は信念と迷ひの途中に立つて、少しも動く事が出來なくなつて仕舞ひました。私には何方も想像であり、又何方も眞實であつたのです。

十六

「私は相變らず學校へ出席してゐました。然し教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるやうな心持がしました。勉强も其通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底迄浸み渡らないうちに烟の如く消えて行くのです。私は其上無口になりました。それを二三の友達が誤解して、冥想に耽つてでもゐるかのやうに、他の友達に傳へました。私は此誤解を解かうとはしませんでした。都合の好い假面を人が貸して呉れたのを、却つて仕合せとして喜びました。それでも時々は氣が濟まなかつたのでせう、發作的に焦燥ぎ廻つて彼等を驚ろかした事もあります。

私の宿は人出入の少ない家でした。親類も多くはないやうでした。御孃さんの學校友達がときたま遊びに來る事はありましたが、極めて小さな聲で、居るのだか居ないのだか分らないやうな話をして歸つてしまふのが常でした。それが私に對する遠慮からだとは、如何な私にも氣が付きませんでした。私の所へ訪ねて來るものは、大した亂暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に氣兼をする程な男は一人もなか

つたのですから。そんな所になると、下宿人の私は主人のやうなもので、肝心の御孃さんが却つて食客の位地にゐたと同じ事です。

然しこれはたゞ思ひ出した序に書いた丈で、實は何うでも構はない點です。たゞ其所に何うでも可くない事が一つあつたのです。茶の間か、さもなければ御孃さんの室で、突然男の聲が聞こえるのです。其聲が又私の客と違つて、頗ぶる低いのです。だから何を話してゐるのか丸で分らないのです。さうして分らなければ分らない程、私の神經に一種の昂奮を與へるのです。私は坐つてゐて變にいら〳〵し出します。私はあれは親類なのだらうか、それとも唯の知り合ひなのだらうかとまづ考へて見るのです。夫から若い男だらうか年輩の人だらうかと思案して見るのです。坐つてゐてそんな事の知れやう筈がありません。さうかと云つて、起つて行つて障子を開けて見る譯には猶行きません。私の神經は震へるといふよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の歸つた後で、屹度忘れずに其人の名を聞きました。御孃さんや奥さんの返事は、又極めて簡單でした。私は物足りない顏を二人に見せながら、物足りる迄追窮する勇氣を有つてゐなかつたのです。權利は無論有つてゐなかつたのでせう。私は自分の品格を重んじなければならないといふ教育から來た自尊心と、現に其自尊心を裏切してゐる物欲しさうな顏付とを同時に彼等の前に示すのです。彼等は笑ひました。それが嘲笑の意味でなくつて、好意から來たものか、又好意らしく見せる積なのか、私は卽坐に解釋の餘地を見出し得ない程落付を失つてしまふのです。さうして事が濟んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんぢやなからうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身體でした。たとひ學校を中途で已めやうが、又何處へ行つて何う暮らさうが、或は何處の何者と結婚しやうが、唯とも相談する必要のない位地に立つてゐました。私は思ひ切つて奥さんに御孃さんを貰ひ受ける話をして見やうかといふ決心をした事がそれ迄に何度となくありました。けれども其度毎に私は躊躇して、口へはとう〳〵出さずに仕舞つたのです。斷られるのが恐ろしいからではありません。もし斷られたら、私の運命が何う變化するか分りませんけれども、其代り今迄とは方角の違つた場所に立つて、新らしい世の中を見渡す便宜も生じて來るのですから、其位の勇氣は出せば出せたのです。然し私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乘るのは何よりも業腹でした。叔父に欺まされた私は、是から先何んな事があつても、人には欺まされまいと決心したのです。

十七

「私が書物ばかり買ふのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと云ひました。私は實際田舍で織つた木綿ものしか有つてゐなかつたのです。其頃の學生は絹の入つた着物を肌に着けませんでした。私の友達に横濱の商人か何かで、宅は中々派出に暮してゐるものがありましたが、其所へある時羽二重の胴着が配達で屆いた事があります。すると皆ながそれを見て笑ひました。其男は恥かしがつて色々辯解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それを又大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運惡く其胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸ひとでも思つたのでせう、評判の胴着をぐる〳〵と丸めて、散歩に出た序に、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまひました。其時一所に歩いてゐた私は、

橋の上に立つて笑ひながら友達の所作を眺めてゐましたが、私の胸の何處にも勿體ないといふ氣は少しも起りませんでした。

其頃から見ると私も大分大人になつてゐました。けれども未だ自分で餘所行の着物を拵えるといふ程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髯を生やす時代が來なければ、服裝の心配などはするに及ばないものだといふ變な考を有つてゐたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと云ひました。奥さんは私の買ふ書物の分量を知つてゐました。買つた本をみんな讀むのかと聞くのです。私の買ふものゝ中には字引もありますが、當然眼を通すべき筈でありながら、頁さへ切つてないのもあつたのですから、私は返事に窮しました。私は何うせ要らないものを買ふなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に氣が付きました。其上私は色々世話になるといふ口實の下に、御孃さんの氣に入るやうな帶か反物を買つて遣りたかつたのです。それで萬事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとは云ひません。私にも一所に來いと命令するのです。御孃さんも行かなくてはいけないと云ふのです。今と違つた空氣の中に育てられた私共は、學生の身分として、あまり若い女などと一所に歩き廻る習慣を有つてゐなかつたものです。其頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思ひ切つて出掛けました。

御孃さんは大層着飾つてゐました。地體が色の白い癖に、白粉を豐富に塗つたものだから猶目立ちます。往來の人がじろ／＼見て行くのです。さうして御孃さんを見たものは屹度其視線をひるがへして、私の顏を見るのだから、變なものでした。

三人は日本橋へ行つて買ひたいものを買ひました。買ふ間にも色々氣が變るので、思つたより暇がかゝりました。奥さんはわざ／＼私の名を呼んで何うだらうと相談をするのです。時々反物を御孃さんの肩から胸へ竪に宛てゝ置いて、私に二三歩遠退いて見て呉れろといふのです。私は其度ごとに、それは駄目だとか、それは能く似合ふとか、兎に角一人前の口を聞きました。

斯んな事で時間が掛つて歸りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に對する御禮に何か御馳走すると云つて、木原店といふ寄席のある狹い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狹いが、飯を食はせる家も狹いものでした。此邊の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚ろいた位です。

我々は夜に入つて家へ歸りました。其翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉ぢ籠つてゐました。月曜になつて、學校へ出ると、私は朝つぱらさう／＼級友の一人から調戯はれました。何時妻を迎へたのかと云つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だといつて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けた所を、其男に何處かで見られたものと見えます。

十八

「私は宅へ歸つて奥さんと御孃さんに其話をしました。奥さんは笑ひました。然し定めて迷惑だらうと云つて私の顏を見ました。私は其時腹のなかで、男は斯んな風にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にさう思はせる丈の意味を有つてゐたのです。私は其時自分の考へてゐる通りを直截に打ち明けて仕舞へば好かつたかも知れません。然し私にはもう狐疑といふ薩張りしない

塊がこびり付いてゐました。私は打ち開けやうとして、ひよいと留まりました。さうして話の角度を故意に少し外らしました。

　私は肝心の自分といふものを問題の中から引き拔いて仕舞ひました。さうして御孃さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二三さういふ話のないでもないやうな事を、明らかに告げました。然しまだ學校へ出てゐる位で年が若いから、此方では左程急がないのだと說明しました。奥さんは口へは出さないけれども、御孃さんの容色に大分重きを置いてゐるらしく見えました。極めやうと思へば何時でも極められるんだからといふやうな事さへ口外しました。それから御孃さんより外に子供がないのも、容易に手離したがらない源因になつてゐました。嫁に遣るか、聟を取るか、それにさへ迷つてゐるのではなからうかと思はれる所もありました。

　話してゐるうちに、私は色々の知識を奥さんから得たやうな氣がしました。然しそれがために、私は機會を逸したと同樣の結果に陷いつてしまひました。私は自分に就いて、ついに一言も口を開く事が出來ませんでした。私は好い加減な所で話を切り上げて、自分の室へ歸らうとしました。

　さつき迄傍にゐて、あんまりだわとか何とか云つて笑つた御孃さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、脊中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、其後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が讀める筈はありません。御孃さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見當が付きませんでした。御孃さんは戸棚を前にして坐つてゐました。其戸棚の一尺ばかり開いてゐる隙間から、御孃さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかつたのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買つた反

物を見付け出しました。私の着物も御孃さんのも同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。
　私が何とも云はずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改たまつた調子になつて、私に何う思ふかと聞くのです。その聞き方は何をどう思ふのかと反問しなければ解らない程不意でした。それが御孃さんを早く片付けた方が得策だらうかといふ意味だと判然した時、私は成るべく緩くらな方が可いだらうと答へました。奥さんは自分もさう思ふと云ひました。
　奥さんと御孃さんと私の關係が斯うなつてゐる所へ、もう一人男が入り込まなければならない事になりました。其男が此家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な變化を來してゐます。もし其男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、恐らくかういふ長いものを貴方に書き殘す必要も起らなかつたでせう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、其瞬間の影に一生を薄暗くされて氣が付かずにゐたのと同じ事です。自白すると、私は自分で其男を宅へ引張つて來たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隱さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。所が奥さんは止せと云ひました。私には連れて來なければ濟まない事情が充分あるのに、止せといふ奥さんの方には、筋の立つた理窟は丸でなかつたのです。だから私は私の善いと思ふ所を強ひて斷行してしまひました。

十九

「私は其友達の名を此所にKと呼んで置きます。私はこのKと小供の時からの仲好でした。小供の時からと云へば斷らないでも解つてるでせう、二人には同郷の縁故があつたのです。Kは眞宗の坊さんの子

でした。尤も長男ではありません、次男でした。それである醫者の所へ養子に遣られたのです。私の生れた地方は大變本願寺派の勢力の強い所でしたから、眞宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が好かつたやうです。一例を擧げると、もし坊さんに女の子があつて、其女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、何處か適當な所へ嫁に遣つて呉れます。無論費用は坊さんの懷から出るのではありません。そんな譯で眞宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相應に暮らしてゐたのです。然し次男を東京へ修業に出す程の餘力があつたか何うか知りません。又修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものか何うか、其所も私には分りません。兎に角Kは醫者の家へ養子に行つたのです。それは私達がまだ中學にゐる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つてゐたので驚ろいたのを今でも記憶してゐます。

Kの養子先も可なりな財産家でした。Kは其所から學資を貰つて東京へ出て來たのです。出て來たのは私と一所でなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。其時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寐起したものです。Kと私も二人で同じ間にゐました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を睨めるやうなものでしたらう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでゐて六疊の間の中では、天下を睥睨するやうな事を云つてゐたのです。

然し我々は眞面目でした。我々は實際偉くなる積でゐたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進といふ言葉を使ひました。さうして彼の行爲動作は悉くこの精進の一語で形容されるやうに、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬してゐました。

Kは中學にゐた頃から、宗教とか哲學とかいふ六づかしい問題で、私を困らせました。是は彼の父の感化なのか、又は自分の生れた家、卽ち寺といふ一種特別な建物に屬する空氣の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに坊さんらしい性格を有つてゐたやうに見受けられます。元來Kの養家では彼を醫者にする積で東京へ出したのです。然るに頑固な彼は醫者にはならない決心をもつて、東京へ出て來たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺むくと同じ事ではないかと詰りました。大膽な彼は左右だと答へるのです。道のためなら、其位の事をしても構はないと云ふのです。其時彼の用ひた道といふ言葉は、恐らく彼にも能く解つてゐなかつたでせう。私は無論解つたとは云へません。然し年の若い私達には、この漠然とした言葉が尊とく響いたのです。よし解らないにしても氣高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行かうとする意氣組に卑しい所の見える筈はありません。私はKの說に贊成しました。私の同意がKに取つて何の位有力であつたか、それは私も知りません。一圖な彼は、たとひ私がいくら反對しやうとも、矢張自分の思ひ通りを貫ぬいたに違なからうとは察せられます。然し萬一の場合、贊成の聲援を與へた私に、多少の責任が出來てくる位の事は、子供ながら私はよく承知してゐた積です。よし其時にそれ丈の覺悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に割り當てられただけの責任は、私の方で帶びるのが至當になる位な語氣で私は贊成したのです。

二十

「Kと私は同じ科へ入學しました。Kは澄ました顏をして、養家から送つてくれる金で、自分の好な道

を歩き出したのです。知れはしないといふ安心と、知れたつて構ふものかといふ度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平氣でした。

最初の夏休みにKは國へ歸りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと云つてゐました。私が歸つて來たのは九月上旬でしたが、彼は果して大觀音の傍の汚ない寺の中に閉ぢ籠つてゐました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狹い室でしたが、彼は其所で自分の思ふ通りに勉強が出來たのを喜こんでゐるらしく見えました。私は其時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたやうに思ひます。彼は手頸に珠數を懸けてゐました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する眞似をして見せました。彼は斯うして日に何遍も珠數の輪を勘定するらしかつたのです。たゞし其意味は私には解りません。圓い輪になつてゐるものを一粒づゝ數へて行けば、何處迄數へて行つても終局はありません。Kはどんな所で何んな心持がして、爪繰る手を留めたでせう。詰らない事ですが、私はよくそれを思ふのです。

私は又彼の室に聖書を見ました。私はそれ迄に御經の名を度々彼の口から聞いた覺がありますが、基督教に就いては、問はれた事も答へられた例もなかつたのですから、一寸驚ろきました。私は其理由を訊ねずにはゐられませんでした。Kは理由はないと云ひました。是程人の有難がる書物なら讀んで見るのが當り前だらうとも云ひました。其上彼は機會があつたら、コーランも讀んで見る積だと云ひました。彼はモハメッドと劍といふ言葉に大いなる興味を有つてゐるやうでした。

二年目の夏に彼は國から催促を受けて漸く歸りました。歸つても專門の事は何にも云はなかつたものと

見えます。家でも亦其所に氣が付かなかつたのです。あなたは學校教育を受けた人だから、斯ういふ消息を能く解してゐるでせうが、世間は學生の生活だの、學校の規則だのに關して、驚ろくべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じてゐません。我々は又比較的内部の空氣ばかり吸つてゐるので、校内の事は細大共に世の中に知れ渡つてゐる筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kは其點にかけて、私より世間を知つてゐたのでせう、澄ました顔で又戻つて來ました。國を立つ時は私も一所でしたから、汽車へ乘るや否やすぐ何うだつたとKに問ひました。Kは何うでもなかつたと答へたのです。

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去らうと決心した年です。私は其時Kに歸國を勸めましたが、Kは應じませんでした。さう毎年家へ歸つて何をするのだと云ふのです。彼はまた踏み留まつて勉強する積らしかつたのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らした其二ケ月間が、私の運命にとつて、如何に波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽欝と孤獨の淋しさとを一つ胸に抱いて、九月に入つて又Kに逢ひました。すると彼の運命も亦私と同樣に變調を示してゐました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白狀してしまつたのです。彼は最初から其覺悟でゐたのださうです。今更仕方がないから、御前の好きなものを遣るより外に途はあるまいと、向ふに云はせる積もあつたのでせうか。兎に角大學へ入つて迄も養父母を欺むき通す氣はなかつたらしいのです。又欺むかうとしても、さう長く續くものではないと見拔いたのかも知れません。

二十一

「Kの手紙を見た養父は大變怒りました。親を騙すやうな不埒なものに學資を送る事は出來ないといふ嚴しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kは又それと前後して實家から受取つた書翰も見せました。これにも前に劣らない程嚴しい詰責の言葉がありました。養家先へ對して濟まないといふ義理が加はつてゐるからでもありませうが、此方でも一切構はないと書いてありました。Kが此事件のために復籍してしまふか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこは是から起る問題として、差し當り何うかしなければならないのは、月々に必要な學資でした。

私は其點に就いてKに何か考があるのかと尋ねました。Kは夜學校の教師でもする積だと答へました。其時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでゐましたから、内職の口は貴方が考へる程拂底でもなかつたのです。私はKがそれで充分遣つて行けるだらうと考へました。然し私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行かうとした時、贊成したものは私です。私は左右かと云つて手を拱いでゐる譯に行きません。私は其場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から云つて、自活の方が友達の保護の下に立つより遙かに快よく思はれたのでせう。彼は大學へ這入つた以上、自分一人位何うか出來なければ男でないやうな事を云ひました。私は私の責任を完ふするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思ふ通りにさせて、私は手を引きました。

Ｋは自分の望むやうな口を程なく探し出しました。然し時間を惜む彼にとつて、此仕事が何の位辛かつたかは想像する迄もない事です。彼は今迄通り勉強の手をちつとも緩めずに、新らしい荷を脊負つて猛進したのです。私は彼の健康を氣遣ひました。然し剛氣な彼は笑ふ丈で、少しも私の注意に取合ひませんでした。

　同時に彼と養家との關係は、段々こん絡がつて來ました。時間に餘裕のなくなつた彼は、前のやうに私と話す機會を奪はれたので、私はついに其顛末を詳しく聞かずに仕舞ひましたが、解決の益困難になつて行く事丈は承知してゐました。人が仲に入つて調停を試みた事も知つてゐました。其人は手紙でＫに歸國を促がしたのですが、Ｋは到底駄目だと云つて、應じませんでした。此剛情な所が、――Ｋは學年中で歸れないのだから仕方がないと云ひましたけれども、向ふから見れば剛情でせう。そこが事態を益險惡にした樣にも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、實家の怒も買ふやうになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の效果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さへ受けずに葬られてしまつたのです。私も腹が立ちました。今迄も行掛り上、Ｋに同情してゐた私は、それ以後は理否を度外に置いてもＫの味方をする氣になりました。

　最後にＫはとう〳〵復籍に決しました。養家から出して貰つた學資は、實家で辨償する事になつたのです。其代り實家の方でも構はないから、是からは勝手にしろといふのです。昔の言葉で云へば、まあ勘當なのでせう。或はそれ程強いものでなかつたかも知れませんが、當人はさう解釋してゐました。Ｋは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに繼母に育てられた結果とも見る事が出來るやうです。もし彼

私は思ふのです。彼の父は云ふ迄もなく僧侶でした。けれども義理堅い點に於て、寧ろ武士に似た所がありはしないかと疑はれます。

の實の母が生きてゐたら、或は彼と實家との關係に、斯うまで隔りが出來ずに濟んだかも知れないと私は

二十二

「Kの事件が一段落ついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受取りました。Kの養子に行つた先は、此人の親類に當るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、此人の意見が重きをなしてゐたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙には其後Kが何うしてゐるか知らせて呉れと書いてありました。姉が心配してゐるから、成るべく早く返事を貰ひたいといふ依賴も付け加へてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ緣づいた此姉を好いてゐました。彼等はみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、此姉とKの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、繼母よりも此姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでせう。

私はKに手紙を見せました。Kは何とも云ひませんでしたけれども、自分の所へ此姉から同じやうな意味の書狀が二三度來たといふ事を打ち明けました。Kは其度に心配するに及ばないと答へて遣つたのださうです。運惡く此姉は生活に餘裕のない家に片付いたゝめに、いくらKに同情があつても、物質的に弟を何うして遣る譯にも行かなかつたのです。

私はKと同じやうな返事を彼の義兄宛で出しました。其中に、萬一の場合には私が何うでもするから、安心するやうにといふ意味を強い言葉で書き現はしました。是は固より私の一存でした。Kの行先を心配する此姉に安心を與へやうといふ好意は無論含まれてゐましたが、私を輕蔑したとより外に取りやうのない彼の實家や養家に對する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になる迄、約一年半の間、彼は獨力で己れを支へて行つたのです。所が此過度の勞力が次第に彼の健康と精神の上に影響した來たやうに見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅い問題も手傳つてゐたでせう。彼は段々感傷的になつて來たのです。時によると、自分丈が世の中の不幸を一人で脊負つて立つてゐるやうな事を云ひます。さうして夫を打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未來に横はる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くやうにも思つて、いら／＼するのです。學問を遣り始めた時には、誰しも偉大な抱負を有つて、新らしい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに氣が付いて、過半は其所で失望するのが當り前になつてゐますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方は又普通に比べると遙かに甚しかつたのです。私はついに彼の氣分を落ち付けるのが專一だと考へました。

私は彼に向つて、餘計な仕事をするのは止せと云ひました。さうして當分身體を樂にして、遊ぶ方が大きな將來のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私のいふ事などは聞くまいと、かねて豫期してゐたのですが、實際云ひ出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りま

したっＫはたゞ學問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考だと云ふのです。それには成るべく窮屈な境遇にゐなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、丸で醉興です。其上窮屈な境遇にゐる彼の意志は、ちつとも強くなつてゐないのです。彼は寧ろ神經衰弱に罹つてゐる位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるやうな樣子を見せました。自分もさういふ點に向つて、人生を進む積だつたと遂には明言しました。（尤も是は私に取つてまんざら空虛な言葉でもなかつたのです。Ｋの說を聞いてゐると、段々さういふ所に釣り込まれて來る位、彼には力があつたのですから）。最後に私はＫと一所に住んで、一所に向上の路を辿つて行きたいと發議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まづく事を敢てしたのです。さうして漸との事で彼を私の家に連れて來ました。

二十三

「私の座敷には控えの間といふやうな四疊が付屬してゐました。玄關を上つて私のゐる所へ通らうとするには、是非此四疊を橫切らなければならないのだから、實用の點から見ると、至極不便な室でした。私は此所へＫを入れたのです。尤も最初は同じ八疊に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考へだつたのですが、Ｋは狹苦しくつても一人で居る方が好いと云つて、自分で其方のはうを擇んだのです。

前にも話した通り、奧さんは私の此所置に對して始めは不贊成だつたのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商賣でないのだから、成るべくなら止した方が好い

といふのです。私が決して世話の燒ける人でないから構ふまいといふと、世話は燒けないでも、氣心の知れない人は厭だと答へるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の氣心は初めから能く分つてゐると辯解して已まないのです。私は苦笑しました。すると奥さんは又理窟の方向を更へます。そんな人を連れて來るのは、私の爲に惡いから止せと云ひ直します。何故私のために惡いかと聞くと、今度は向ふで苦笑するのです。

實をいふと私だつて強ひてKと一所にゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼は乾度それを受取る時に躊躇するだらうと思つたのです。彼はそれ程獨立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡さうとしたのです。然し私はKの經濟問題について、一言も奥さんに打ち明ける氣はありませんでした。

私はたゞKの健康に就いて云々しました。一人で置くと益人間が偏窟になるばかりだからと云ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の惡かつた事や、實家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかゝつた人を抱いて、自分の熱を向ふに移してやる覺悟で、Kを引き取るのだと告げました。其積であたゝかい面倒を見て遣つて吳れと、奥さんにも御孃さんにも頼みました。私はこゝ迄來て漸々奥さんを說き伏せたのです。然し私から何にも聞かないKは、此顛末を丸で知らずにゐました。私も却つてそれを滿足に思つて、のつそり引き移つて來たKを、知らん顏で迎へました。

奥さんと御孃さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをして吳れました。凡てそれを私に對する好意から來たのだと解釋した私は、心のうちで喜びました。――Kが相變らずむつちりした樣子をしてゐる

るにも拘はらず。

私がKに向つて新らしい住居の心持は何うだと聞いた時に、彼はたゞ一言悪くないと云つた丈でした。私から云はせれば悪くない所ではないのです。彼の今迄居た所は北向の濕つぽい臭のする汚ない室でした。食物も室相應に粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷から喬木に移つた趣があつた位です。それを左程に思ふ氣色を見せないのは、一つは彼の強情から來てゐるのですが、一つは彼の主張からも出てゐるのです。佛教の教義で養はれた彼は、衣食住について兎角の贅澤をいふのを恰も不道德のやうに考へてゐました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの傳を讀んだ彼には、動ともすると精神と肉體とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば靈の光輝が增すやうに感ずる場合さへあつたのかも知れません。

私は成るべく彼に逆はない方針を取りました。氷を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて溫かい水になれば、自分で自分に氣が付く時機が來るに違ないと思つたのです。

二十四

「私は奧さんからさう云ふ風に取扱かはれた結果、段々快活になつて來たのです。それを自覺してゐたから、同じものを今度はKの上に應用しやうと試みたのです。Kと私とが性格の上に於て、大分相違のある事は、長く交際つて來た私に能く解つてゐましたけれども、私の神經が此家庭に入つてから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けば何時か沈まる事があるだらうと考へたのです。

Kは私より強い決心を有してゐる男でした。勉強も私の倍位はしたでせう。其上持つて生れた頭の質が私よりもずつと可かつたのです。後では專門が違ましたから何とも云へませんが、同じ級にゐる間は、中學でも高等學校でも、Kの方が常に上席を占めてゐました。私には平生から何をしてもKに及ばないといふ自覺があつた位です。けれども私が強ひてKを私の宅へ引張つて來た時には、私の方が能く事理を辨へてゐると信じてゐました。私に云はせると、彼は我慢と忍耐の區別を了解してゐないやうに思はれたのです。是はとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉體なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、發達もするし、破壞されもするでせうが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは勿論ですから、能く考へないと、非常に險惡な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも氣が付かずにゐる恐れが生じてきます。醫者の說明を聞くと、人間の胃袋程横着なものはないさうです。粥ばかり食つてゐると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間にかなくなつて仕舞ふのださうです。だから何でも食ふ稽古をして置けと醫者はいふのです。けれども是はたゞ慣れるといふ意味ではなからうと思ひます。次第に刺戟を增すに從つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるといふ意味でなくてはなりますまい。もし反對に胃の力がぢり〳〵弱つて行つたなら結果は何うなるだらうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全く此所に氣が付いてゐなかつたのです。たゞ困難に慣れてしまへば、仕舞に其困難は何でもなくなるものだと極めてゐたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すといふだけの功德で、其艱苦が氣にかゝらなくなる時機に邂逅へるものと信じ切つてゐたらしいのです。

私はKを說くときに、是非其所を明らかにして遣りたかつたのです。然し云へば屹度反抗されるに極つてゐました。また昔の人の例などを、引合に持つて來るに違ないと思ひました。さうなれば私だつて、其人達とKと違つてゐる點を明白に述べなければならなくなります。それを首肯つて呉れるやうなKなら可いのですけれども、彼の性質として、議論が其所迄行くと容易に後へは返りません。猶先へ出ます。さうして、口で先へ出た通りを、行爲で實現しに掛ります。彼は斯うなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壞しつゝ進みます。結果から見れば、彼はたゞ自己の成功を打ち碎く意味に於て、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の氣性をよく知つた私はついに何とも云ふ事が出來なかつたのです。其上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神經衰弱に罹つてゐたやうに思はれたのです。よし私が彼を說き伏せた所で、彼は必ず激するに違ないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはゐませんでしたけれども、私が孤獨の感に堪へなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤獨の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤獨な境遇に突き落すのは猶厭でした。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、當分の間は批評がましい批評を彼の上に加へずにゐました。たゞ穩かに周圍の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五

私は蔭へ廻つて、奧さんと御孃さんに、成るべくKと話しをする樣に頼みました。私は彼の是迄通つて來た無言生活が彼に祟つてゐるのだらうと信じたからです。使はない鐵が腐るやうに、彼の心には錆が

出てゐたとしか、私には思はれなかつたのです。
奧さんは取り付き把のない人だと云つて笑つてゐました。御孃さんは又わざ〳〵其例を擧げて私に說明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kは無いと答へるさうです。では持つて來ようと云ふと、要らないと斷わるさうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだと云つたぎり應對をしないのださうです。私はたゞ苦笑してゐる譯にも行きません。氣の毒だから、何とか云つて其場を取り繕ろつて置かなければ濟まなくなります。尤もそれは春の事ですから、强ひて火にあたる必要もなかつたのですが、是では取り付き把がないと云はれるのも無理はないと思ひました。

それで私は成るべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる樣に力めました。Kと私が話してゐる所へ家の人を呼ぶとか、又は家の人と私が一つ室に落ち合つた所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でも其場合に應じた方法をとつて、彼等を接近させやうとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。又ある時はいくら呼んでも中々出て來ませんでした。Kはあんな無駄話をして何處が面白いと云ふのです。私はたゞ笑つてゐました。然し心の中では、Kがそのために私を輕蔑してゐる事が能く解りました。

私はある意味から見て實際彼の輕蔑に價してゐたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも云はれるでせう。私もそれを否みはしません。然し眼だけ高くつて、外が釣り合はないのは手もなく不具です。私は何を措いても、此際彼を人間らしくするのが專一だと考へたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつてゐても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たない

といふ事を發見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まづ異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。さうして其處から出る空氣に彼を曝した上、錆び付きかゝつた彼の血液を新らしくしやうと試みたのです。

此試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいやうに見えたものが、段々一つに纏まつて來出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しづゝ悟つて行くやうでした。彼はある日私に向つて、女はさう輕蔑すべきものでないと云ふやうな事を云ひました。Kははじめ女からも、私同樣の知識と學問を要求してゐたらしいのです。左右してそれが見付からないと、すぐ輕蔑の念を生じたものと思はれます。今迄の彼は、性によつて立場を變へる事を知らずに、同じ視線で凡ての男女を一樣に觀察してゐたのです。私は彼に、もし我等二人丈が男同志で永久に話を交換してゐるならば、二人はたゞ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだらうと云ひました。彼は尤もだと答へました。私は其時御孃さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使ふやうになつたのでせう。然し裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今迄書物で城壁をきづいて其中に立て籠つてゐたやうなKの心が、段々打ち解けて來るのを見てゐるのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からさうした目的で事を遣り出したのですから、自分の成功に伴ふ喜悦を感ぜずにはゐられなかつたのです。私は本人に云はない代りに、奧さんと御孃さんに自分の思つた通りを話しました。二人も滿足の樣子でした。

二十六

「Kと私は同じ科に居りながら、專攻の學問が違つてゐましたから、自然出る時や歸る時に遲速がありました。私の方が早ければ、たゞ彼の空室を通り拔ける丈ですが、遲いと簡單な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしてゐました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私を一寸見ます。さうして屹度今歸つたのかと云ひます。私は何も答へないで點頭く事もありますし、或はたゞ『うん』と答へて行き過ぎる場合もありました。

ある日私は神田に用があつて、歸りが何時もよりずつと後れました。私は急ぎ足に門前迄來て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私は御孃さんの聲を聞いたのです。聲は慥にKの室から出たと思ひました。玄關から眞直に行けば、茶の間、御孃さんの部屋と二つ續いてゐて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、といふ間取なのですから、何處で誰の聲がした位は、久しく厄介になつてゐる私には能く分るのです。私はすぐ格子を締めました。すると御孃さんの聲もすぐ已みました。私が靴を脫いでゐるうち、――私は其時分からハイカラで手數のかゝる編上を穿いてゐたのですが、――私がこゞんで其靴紐を解いてゐるうち、Kの部屋では誰の聲もしませんでした。私は變に思ひました。ことによると、私の疳違かも知れないと考へたのです。然し私がいつもの通りKの室を拔けやうとして、襖を開けると、其所に二人はちやんと坐つてゐました。Kは例の通り今歸つたかと云ひました。御孃さんも『御歸り』と坐つた儘で挨拶しました。私には氣の所爲か其簡單な挨拶が少し硬いやうに聞こえました。何處かで自然を踏み外

してゐるやうな調子として、私の鼓膜に響いたのです。私は御孃さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひつそりしてゐたから聞いて見た丈の事です。

奥さんは果して留守でした。下女も奥さんと一所に出たのでした。だから家に殘つてゐるのは、Kと御孃さん丈だつたのです。私は一寸首を傾けました。今迄長い間世話になつてゐたけれども、奥さんが御孃さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかつたのですから。私は何か急用でも出來たのかと御孃さんに聞き返しました。御孃さんはたゞ笑つてゐるのです。私は斯んな時に笑ふ女が嫌でした。若い女に共通な點だと云へばそれ迄かも知れませんが、御孃さんも下らない事に能く笑ひたがる女でした。然し御孃さんは私の顔色を見て、すぐ不斷の表情に歸りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと眞面目に答へました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める權利はありません。私は沈默しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も歸つて來ました。やがて晩飯の食卓でみんなが顔を合せる時刻が來ました。下宿した當座は萬事客扱ひだつたので、食事のたびに下女が膳を運んで來て呉れたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向ふへ呼ばれて行く習慣になつてゐたのです。Kが新らしく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じやうに取扱はせる事に極めました。其代り私は薄い板で造つた足の疊み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今では何處の宅でも使つてゐるやうですが、其頃そんな卓の周圍に並んで飯を食ふ家族は殆んどなかつたのです。私はわざ〳〵御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上させたのです。

私は其卓上で奥さんから其日何時もの時刻に肴屋が來なかつたので、私達に食はせるものを買ひに町へ行かなければならなかつたのだといふ說明を聞かされました。成程客を置いてゐる以上、それも尤もな事だと私が考へた時、御孃さんは私の顏を見て又笑ひ出しました。然し今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。

二十七

「一週間ばかりして私は又Kと御孃さんが一所に話してゐる室を通り拔けました。其時御孃さんは私の顏を見るや否や笑ひ出しました。私はすぐ何が可笑しいのかと聞けば可かつたのでせう。それをつい默つて自分の居間迄來て仕舞つたのです。だからKも何時ものやうに、今歸つたかと聲を掛ける事が出來なくなりました。御孃さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたやうでした。

夕飯の時、御孃さんは私を變な人だと云ひました。私は其時も何故變なのか聞かずにしまひました。ただ奥さんが睨めるやうな眼を御孃さんに向けるのに氣が付いた丈でした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は傳通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つて又富坂の下へ出ました。散歩としては短かい方ではありませんでしたが、其間に話した事は極めて少なかつたのです。性質からいふと、Kは私よりも無口な男でした。私も多辯な方ではなかつたのです。然し私は歩きながら、出來る丈話を彼に仕掛て見ました。私の問題は重に二人の下宿してゐる家族に就いてでした。私は奥さんや御孃さんを彼が何う見てゐるか知りたかつたのです。所が彼は海のものとも山のものとも見分の

付かないやうな返事ばかりするのです。しかも其返事は要領を得ない癖に、極めて簡單でした。彼は二人の女に關してよりも、專攻の學科の方に多くの注意を拂つてゐる樣に見えました。尤もそれは二學年目の試驗が目の前に逼つてゐる頃でしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が學生らしい學生だつたのでせう。其上彼はシユエデンボルグが何うだとか斯うだとか云つて、無學な私を驚ろかせました。

我々が首尾よく試驗を濟ましました時、二人とももう後一年だと云つて奥さんは喜こんで呉れました。さう云ふ奥さんの唯一の誇とも見られる御孃さんの卒業も、間もなく來る順になつてゐたのです。Kは私に向つて、女といふものは何にも知らないで學校を出るのだと云ひました。Kは御孃さんが學問以外に稽古してゐる縫針だの琴だの活花だのを、丸で眼中に置いてゐないやうでした。私は彼の迂濶を笑つてやりました。さうして女の價値はそんな所にあるものでないといふ昔の議論を又彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。其代り成程といふ樣子も見せませんでした。私には其所が愉快でした。彼のふんと云つた樣な調子が、依然として女を輕蔑してゐるやうに見えたからです。女の代表者として私の知つてゐる御孃さんを、物の數とも思つてゐないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに對する嫉妬は、其時にもう充分萠してゐたのです。

私は夏休みに何處かへ行かうかとKに相談しました。Kは行きたくないやうな口振を見せました。無論彼は自分の自由意志で何處へも行ける身體ではありませんが、私が誘ひさへすれば、また何處へ行つても差支へない身體だつたのです。私は何故行きたくないのかと彼に尋ねて見ました。彼は理由も何にもないと云ふのです。宅で書物を讀んだ方が自分の勝手だと云ふのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強し

た方が、身體の爲だと主張すると、それなら私一人行つたら可からうと云ふのです。然し私はK一人を此所に殘して行く氣にはなれないのです。私はたゞでさへKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見てゐるのが、餘り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を惡くするのかと云はれゝば夫迄です。私は馬鹿に違ないのです。果しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとう〳〵一所に房州へ行く事になりました。

二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始てでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか云ひました。今では何んなに變つてゐるか知りませんが、其頃は非道い漁村でした。第一何處も彼處も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剝くのです。拳のやうな大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろ〳〵してゐるのです。

　私はすぐ厭になりました。然しKは好いとも惡いとも云ひません。少なくとも顏付丈は平氣なものでした。其癖彼は海へ入るたんびに何處かに怪我をしない事はなかつたのです。私はとう〳〵彼を說き伏せて、其所から富浦に行きました。富浦から又那古に移りました。總て此沿岸は其時分から重に學生の集まる所でしたから、何處でも我々には丁度手頃の海水浴場だつたのです。Kと私は能く海岸の岩の上に坐つて、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、又特別に綺麗なものでした。赤い色だ

の藍の色だの、普通市場に上らないやうな色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでゐるのが鮮やかに指さゝれました。

　私は其所に坐つて、よく書物をひろげました。Ｋは何もせずに默つてゐる方が多かつたのです。私にはそれが考へに耽つてゐるのか、景色に見惚れてゐるのか、若しくは好きな想像を描いてゐるのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Ｋに何をしてゐるのだと聞きました。Ｋは何もしてゐないと一口答へる丈でした。私は自分の傍に斯うぢつとして坐つてゐるものが、Ｋでなくつて、御孃さんだつたら嘸愉快だらうと思ふ事が能くありました。それ丈ならまだ可いのですが、時にはＫの方でも私と同じやうな希望を抱いて岩の上に坐つてゐるのではないかしらと忽然疑ひ出すのです。すると落ち付いて其所に書物をひろげてゐるのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。さうして遠慮のない大きな聲を出して怒鳴ります。纏まつた詩だの歌だのを面白さうに吟ずるやうな手緩い事は出來ないのです。只野蠻人の如くにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。斯うして海の中へ突き落したら何うすると云つてＫに聞きました。Ｋは動きませんでした。後向の儘、丁度好い、遣つて呉れと答へました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。

　Ｋの神經衰弱は此時もう大分可くなつてゐたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になつて來てゐたのです。私は自分より落付いてゐるＫを見て、羨ましがりました。又憎らしがりました。彼は何うしても私に取り合ふ氣色を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信の如く映りました。然しその自信を彼に認めた所で、私は決して滿足出來なかつたのです。私の疑ひはもう一歩前へ出て、その性

質を明らめたがりました。彼は學問なり事業なりに就いて、是から自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になつたのだらうか。單にそれ丈ならば、Kと私との利害に何の衝突の起る譯はないのです。私は却つて世話のし甲斐があつたのを嬉しく思ふ位なものです。けれども彼の安心がもし御孃さんに對してであるとすれば、私は決して彼を許す事が出來なくなるのです。不思議にも彼は私の御孃さんを愛してゐる素振に全く氣が付いてゐないやうに見えました。無論私もそれがKの眼に付くやうにわざとらしくは振舞ひませんでしたけれども。Kは元來さういふ點にかけると鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫といふ安心があつたので、彼をわざ〳〵宅へ連れて來たのです。

二十九

「私は思ひ切つて自分の心をKに打ち明けやうとしました。尤も是は其時に始まつた譯でもなかつたのです。旅に出ない前から、私にはさうした腹が出來てゐたのですけれども、打ち明ける機會をつらまへる事も、其機會を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思ふと、其頃私の周圍にゐた人間はみんな妙でした。女に關して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種を有たないのも大分ゐたでせうが、たとひ有つてゐても默つてゐるのが普通の樣でした。比較的自由な空氣を呼吸してゐる今の貴方がたから見たら、定めし變に思はれるでせう。それが道學の餘習なのか、又は一種のはにかみなのか、判斷は貴方の理解に任せて置きます。

　Kと私は何でも話し合へる中でした。偶には愛とか戀とかいふ問題も、口に上らないではありませんで

したが、何時でも抽象的な理論に落ちてしまふ丈でした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と學問の話と、未來の事業と、抱負と、修養の話位で持ち切つてゐたのです。いくら親しくつても斯う堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はたゞ堅いなりに親しくなる丈です。私は御孃さんの事をKに打ち明けやうと思ひ立つてから、何遍歯痒い不快に惱まされたか知れません。私はKの頭の何處か一ヶ所を突き破つて、其所から柔らかい空氣を吹き込んでやりたい氣がしました。

貴方がたから見て笑止千萬な事も其時の私には實際大困難だつたのです。私は旅先でも宅にゐた時と同じやうに卑怯でした。私は始終機會を捕える氣でKを觀察してゐながら、變に高踏的な彼の態度を何うする事も出來なかつたのです。私に云はせると、彼の心臟の周圍は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けやうとする血潮は、一滴も其心臟の中へは入らないで、悉く彈き返されてしまふのです。

或時はあまりにKの樣子が強くて高いので、私は却つて安心した事もあります。さうして自分の疑を腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のやうに見えて、急に厭な心持になるのです。然し少時すると、以前の疑が又逆戻りをして、強く打ち返して來ます。凡てが疑ひから割り出されるのですから、凡てが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるやうに見えました。性質も私のやうにこせ〳〵してゐない所が、異性には氣に入るだらうと思はれました。何處か間が拔けてゐて、それで何處かに確かりした男らしい所のある點も、私よりは優勢に見えました。學

力になれば専問こそ違ひますが、私は無論Kの敵でないと自覺してゐました。――凡て向ふの好い所丈が斯う一度に眼先へ散らつき出すと、一寸安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の樣子を見て、厭なら一先東京へ歸つても可いと云つたのですが、さう云はれると、私は急に歸りたくなくなりました。實はKを東京へ歸したくなかつたのかも知れません。二人は房州の鼻を廻つて向ふ側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思ひをして、上總の其所一里に騙されながら、うん〳〵歩きました。私にはさうして歩いてゐる意味が丸で解らなかつた位です。私は冗談半分Kにさう云ひました。するとKは足があるから歩くのだと答へました。さうして暑くなると、海に入つて行かうと云つて、何處でも構はず潮へ漬りました。その後を又強い日で照り付けられるのですから、身體が倦怠くてぐた〳〵になりました。

三十

斯んな風にして歩いてゐると、暑さと疲勞とで自然身體の調子が狂つて來るものです。尤も病氣とは違ひます。急に他の身體の中へ、自分の靈魂が宿替をしたやうな氣分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、何處かで平生の心持と離れるやうになりました。彼に對する親しみも憎しみも、旅中限りといふ特別な性質を帶びる風になつたのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、又歩行のため、在來と異なつた新らしい關係に入る事が出來たのでせう。其時の我々は恰も道づれになつた行商のやうなものでした。いくら話をしても何時もと違つて、頭を使ふ込み入つた問題には觸れませんでした。

我々は此調子でとう〳〵銚子迄行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出來ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊といふ所で、鯛の浦を見物しました。もう年數も餘程經つてゐますし、それに私には夫程興味のない事ですから、判然とは覺えてゐませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとか云ふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられてゐたとかいふ言傳へになつてゐるのです。それ以來村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が澤山ゐるのです。我々は小舟を傭つて、其鯛をわざ〳〵見に出掛けたのです。

其時私はたゞ一圖に波を見てゐました。さうして其波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。然しＫは私程それに興味を有ち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像してゐたらしいのです。丁度其所に誕生寺といふ寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでせう、立派な伽藍でした。Ｋは其寺に行つて住持に會つて見るといひ出しました。實をいふと、我々は隨分變な服裝をしてゐたのです。ことにＫは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つてゐました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつてゐました。私は坊さんなどに會ふのは止さうと云ひました。Ｋは強情だから聞きません。厭なら私丈外に待つてゐろといふのです。私は仕方がないから一所に玄關にかゝりましたが、心のうちでは屹度斷られるに違ないと思つてゐました。所が坊さんといふものは案外丁寧なもので、廣い立派な座敷へ私達を通して、すぐ會つて呉れました。其時分の私はＫと大分考が違つてゐましたから、坊さんとＫの談話にそれ程耳を傾ける氣も起りませんでしたが、Ｋはしきりに日蓮の事を聞いてゐたやうです。日

蓮は草日蓮と云はれる位で、草書が大變上手であつたと坊さんが云つた時、字の拙いKは、何だ下らないといふ顔をしたのを私はまだ覺えてゐます。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでせう。坊さんが其點でKを滿足させたか何うかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それ所ではありませんでしたから、唯口の先で好い加減な挨拶をしてゐました。夫も面倒になつてしまひには全く默つてしまつたのです。

たしかその翌る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寢やうといふ少し前になつてから、急に六づかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事に就いて、私が取り合はなかつたのを、快よく思つてゐなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと云つて、何だか私をさも輕薄もののやうに遣り込めるのです。ところが私の胸には御孃さんの事が蟠まつてゐますから、彼の侮蔑に近い言葉をたゞ笑つて受け取る譯に行きません。私は私で辯解を始めたのです。

三十一

「其時私はしきりに人間らしいといふ言葉を使ひました。Kは此人間らしいといふ言葉のうちに、私が自分の弱點の凡てを隱してゐると云ふのです。成程後から考へれば、Kのいふ通りでした。然し人間らしくない意味をKに納得させるために其言葉を使ひ出した私には、出立點が既に反抗的でしたから、それを反省するやうな餘裕はありません。私は猶の事自説を主張しました。するとKが彼の何處をつらまえて人間らしくないと云ふのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。――君は人間らしいのだ。或は人間

らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先丈では人間らしくないやうな事を云ふのだ。又人間らしくないやうに振舞はうとするのだ。

私が斯う云つた時、彼はたゞ自分の修養が足りないから、他にはさう見えるかも知れないと答へた丈で、一向私を反駁しやうとしませんでした。私は張合が抜けたといふよりも、却つて氣の毒になりました。私はすぐ議論を其所で切り上げました。彼の調子もだん／＼沈んで來ました。もし私が彼の知つてゐる通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだらうと云つて悵然としてゐました。Ｋの口にした昔の人とば、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。靈のために肉を虐げたり、道のために體を鞭つたりした所謂難行苦行の人を指すのです。Ｋは私に、彼がどの位そのために苦しんでゐるか解らないのが、如何にも殘念だと明言しました。

Ｋと私とはそれぎり寐てしまひました。さうして其翌る日から又普通の行商の態度に返つて、うん／＼汗を流しながら歩き出したのです。然し私は路々其晩の事をひよい／＼と思ひ出しました。私には此上もない好い機會が與へられたのに、知らない振をして何故それを遣り過ごしたのだらうといふ悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいといふ抽象的な言葉を用ひる代りに、もつと直截で簡單な話をＫに打ち明けてしまへば好かつたと思ひ出したのです。實を云ふと、私がそんな言葉を創造したのも、御孃さんに對する私の感情が土臺になつてゐたのですから、事實を蒸溜して拵らえた理論などをＫの耳に吹き込むよりも、原の形そのまゝを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だつたでせう。私にそれが出來なかつたのは、學問の交際が基調を構成してゐる二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思ひ切つて

それを突き破る丈の勇氣が私に缺けてゐたのだといふ事をこゝに自白します。氣取り過ぎたと云つても、虛榮心が祟つたと云つても同じでせうが、私のいふ氣取るとか虛榮とかいふ意味は、普通のとは少し違ひます。それがあなたに通じさへすれば、私は滿足なのです。

我々は眞黑になつて東京へ歸りました。歸つた時は私の氣分が又變つてゐました。人間らしいとか、人間らしくないとかいふ小理窟は殆んど頭の中に殘つてゐませんでした。Kにも宗教家らしい樣子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのといふ問題は、其時宿つてゐなかつたでせう。二人は異人種のやうな顏をして、忙がしさうに見える東京をぐる〳〵眺めました。それから兩國へ來て、暑いのに軍鷄を食ひました。Kは其勢で小石川迄歩いて歸らうと云ふのです。體力から云へばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ應じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚ろきました。二人はたゞ色が黑くなつたばかりでなく、無暗に歩いてゐたうちに大變痩せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫さうになつたと云つて賞めて呉れるのです。御孃さんは奥さんの矛盾が可笑しいと云つて又笑ひ出しました。旅行前時々腹の立つた私も、其時丈は愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久し振に聞いた所爲でせう。

三十二

「それのみならず私は御孃さんの態度の少し前と變つてゐるのに氣が付きました。久し振で旅から歸つた私達が平生の通り落付く迄には、萬事に就いて女の手が必要だつたのですが、其世話をして呉れる奥

さんは兎に角、御孃さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするやうに見えたのです。それを露骨に遣られては、私も迷惑したかも知れません。場合によつては却つて不快の念さへ起しかねなかつたらうと思ふのですが、御孃さんの所作は其點で甚だ要領を得てゐたから、私は嬉しかつたのです。つまり御孃さんは私だけに解るやうに、持前の親切を餘分に私の方へ割り宛てゝ呉れたのです。だからKは別に厭な顔もせずに平氣でゐました。私は心の中でひそかに彼に對する愷歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた學校の課業に出席しなければならない事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で、出入の刻限にまた遲速が出來てきました。私がKより後れて歸る時は一週に三度ほどありましたが、何時歸つても御孃さんの影をKの室に認める事はないやうになりました。Kは例の眼を私の方に向けて「今歸つたのか」を規則の如く繰り返しました。私の會釋も殆んど器械の如く簡單で且つ無意味でした。

たしか十月の中頃と思ひます、私は寐坊をした結果、日本服の儘急いで學校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでゐる時間が惜しいので、草履を突つかけたなり飛び出したのです。其日は時間割からいふと、Kよりも私の方が先へ歸る筈になつてゐました。私は戻つて來ると、其積で玄關の格子をがらりと開けたのです。すると居ないと思つてゐたKの聲がひよいと聞こえました。同時に御孃さんの笑ひ聲が私の耳に響きました。私は何時ものやうに手數のかゝる靴を穿いてゐないから、すぐ玄關に上がつて仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐つてゐるKを見ました。然し御孃さんはもう其所にはゐなかつたのです。私は恰もKの室から逃れ出るやうに去る其後姿をちらりと認めた丈でした。私はKに何

うして早く歸つたのかと問ひました。Kは心持が惡いから休んだのだと答へました。私が自分の室に這入つて其儘坐つてゐると、間もなく御孃さんが茶を持つて來て吳れました。其時御孃さんは始めて御歸りといつて私に挨拶をしました。私は笑ひながらさつきは何故逃げたんですと聞けるやうな捌けた男ではありません。それでゐて腹の中では何だか其事が氣にかゝるやうな人間だつたのです。御孃さんはすぐ座を立つて緣側傳ひに向ふへ行つてしまひました。然しKの室の前に立ち留まつて、二言三言內と外とで話しをしてゐました。それは先刻の續きらしかつたのですが、前を聞かない私には丸で解りませんでした。

そのうち御孃さんの態度がだん〳〵平氣になつて來ました。Kと私が一所に宅にゐる時でも、よくKの室の緣側へ來て彼の名を呼びました。さうして其所へ入つて、ゆつくりしてゐました。無論郵便を持つて來る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、其位の交通は同じ宅にゐる二人の關係上、當然と見なければならないのでせうが、是非御孃さんを專有したいといふ强烈な一念に動かされてゐる私には、何うしてもそれが當然以上に見えたのです。ある時は御孃さんがわざ〳〵私の室へ來るのを囘避して、Kの方ばかりへ行くやうに思はれる事さへあつた位です。それなら何故Kに宅を出て貰はないのかと貴方は聞くでせう。然しさうすれば私がKを無理に引張て來た主意が立たなくなる丈です。私にはそれが出來ないのです。

三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閻魔を拔けて細い坂路を上

つて宅へ歸りました。Kの室は空虛でしたけれども、火鉢には繼ぎたての火が暖かさうに燃えてゐました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳さうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く殘つてゐる丈で、火種さへ盡きてゐるのです。私は急に不愉快になりました。

其時私の足音を聞いて出て來たのは、奥さんでした。奥さんは默つて室の眞中に立つてゐる私を見て、氣の毒さうに外套を脱がせて呉れたり、日本服を着せて呉れたりしました。それから私が寒いといふのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持つて來て呉れました。私がKはもう歸つたのかと聞きましたら、奥さんは歸つて又出たと答へました。其日もKは私より後れて歸る時間割だつたのですから、私は何うした譯かと思ひました。奥さんは大方用事でも出來たのだらうと云つてゐました。

私はしばらく其所に坐つたまゝ書見をしました。宅の中がしんと靜まつて、誰の話し聲も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身體に食ひ込むやうな感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私は不圖賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたやうですが、空はまだ冷たい鉛のやうに重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に擔いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。其時分はまだ道路の改正が出來ない頃なので、坂の勾配が今よりもずつと急でした。道幅も狹くて、あゝ眞直ではなかつたのです。其上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がつてゐるのと、放水がよくないのとで、往來はどろ／＼でした。ことに細い石橋を渡つて柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無暗に歩く譯には行きません。誰でも路の眞中に自然と細長く泥が搔き分けられた所を、後生大事に辿つて行かなければならないのです。其幅は僅か一二尺しかないのですから、手

もなく往來に敷いてある帶の上を踏んで向へ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になつてそろ〳〵通り抜けます。私は此細帶の上で、はたりとKに出合ひました。足の方にばかり氣を取られてゐた私は、彼と向き合ふ迄、彼の存在に丸で氣が付かずにゐたのです。私は不意に自分の前が塞がつたので偶然眼を上げた時、始めて其所に立つてゐるKを認めたのです。私はKに何處へ行つたのかと聞きました。Kは一寸其所迄と云つたぎりでした。彼の答へは何時もの通りふんといふ調子でした。Kと私は細い帶の上で身體を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えました。近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顏を見ると、それが宅の御孃さんだつたので、私は少からず驚ろきました。御孃さんは心持薄赤い顏をして、私に挨拶をしました。其時分の束髮は今と違つて廂が出てゐないのです、さうして頭の眞中に蛇のやうにぐる〳〵卷きつけてあつたものです。私はぼんやり御孃さんの頭を見てゐましたが、次の瞬間に、何方か路を讓らなければならないのだといふ事に氣が付きました。私は思ひ切つてどろ〳〵の中へ片足踏ん込みました。さうして比較的通り易い所を空けて、御孃さんを渡して遣りました。

それから柳町の通りへ出た私は何處へ行つて好いか自分にも分らなくなりました。何處へ行つても面白くないやうな心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構はずに、糠る海の中を自暴にどし〳〵歩きました。それから直ぐ宅へ歸つて來ました。

三十四

「私はKに向つて御孃さんと一所に出たのかと聞きました。Kは左右ではないと答へました。眞砂町で偶然出會つたから連れ立つて歸つて來たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入つた質問を控えなければなりませんでした。然し食事の時、又御孃さんに向つて、同じ問を掛けたくなりました。すると御孃さんは私の嫌な例の笑ひ方をするのです。さうして何處へ行つたか中てゝ見ろと仕舞に云ふのです。其頃の私はまだ癇癪持でしたから、さう不眞面目に若い女から取り扱はれると腹が立ちました。所が其所に氣の付くのは、同じ食卓に着いてゐるものゝうちで奥さん一人だつたのです。Kは寧ろ平氣でした。御孃さんの態度になると、知つてわざと遣るのか、知らないで無邪氣に遣るのか、其所の區別が一寸判然しない點がありました。若い女として御孃さんは思慮に富んだ方でしたけれども、其若い女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです。さうして其嫌な所は、Kが宅へ來てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに對する私の嫉妬に歸して可いものか、又は私に對する御孃さんの技巧と見做して然るべきものか、一寸分別に迷ひました。私は今でも決して其時の私の嫉妬心を打ち消す氣はありません。私はたび〳〵繰り返した通り、愛の裏面に此感情の働きを明らかに意識してゐたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、此感情が屹度首を持ち上げたがるのでしたから。是は餘事ですが、かういふ嫉妬は愛の半面ぢやないでせうか。私は結婚してから、此感情がだん〳〵薄らいで行くのを自覺しました。其代り愛情の方も決して元のやうに猛烈ではないのです。

　私はそれ迄躊躇してゐた自分の心を、一思ひに相手の胸へ擲き付けやうかと考へ出しました。私の相手といふのは御孃さんではありません。奥さんの事です。奥さんに御孃さんを呉れろと明白な談判を開かう

かと考へたのです。然しさう決心しながら、一日〳〵と私は斷行の日を延ばして行つたのです。さういふと私はいかにも優柔な男のやうに見えます、又見えても構ひませんが、實際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつた爲ではありません。Ｋの來ないうちは、他の手に乘るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一歩も動けないやうにしてゐました。Ｋの來た後は、もしかすると御孃さんがＫの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになつたのです。果して御孃さんが私よりもＫに心を傾むけてゐるならば、此戀は口へ云ひ出す價値のないものと私は決心してゐたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどゝ云ふのとは少し譯が違ます。此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。世の中では否應なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがつてゐる人もありますが、それは私達より餘つ程世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、當時の私は考へてゐたのです。一度貰つて仕舞へば何うか斯うか落ち付くものだ位の哲理では、承知する事が出來ない位私は熱してゐました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だつたのです。同時に尤も迂遠な愛の實際家だつたのです。

肝心の御孃さんに、直接此私といふものを打ち明ける機會も、長く一所にゐるうちには時々出て來たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、さういふ事は許されてゐないのだといふ自覺が、其頃の私には強くありました。然し決してそれ許が私を束縛したとは云へません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に氣兼なく自分の思つた通りを遠慮せずに口にする丈の勇氣に乏しいものと私は見込んでゐたのです。

三十五

「斯んな譯で私はどちらの方面へ向つても進む事が出來ずに立ち竦んでゐました。身體の惡い時に午睡などをすると、眼だけ覺めて周圍のものが判然見えるのに、何うしても手足の動かせない場合がありませう。私は時としてあゝいふ苦しみを人知れず感じたのです。

其内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多を遣るから誰か友達を連れて來ないかと云つた事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答へたので、奥さんは驚ろいてしまひました。成程Kに友達といふ程の友達は一人もなかつたのです。往來で會つた時挨拶をする位のものは多少ありましたが、それ等だつて決して歌留多などを取る柄ではなかつたのです。奥さんはそれぢや私の知つたものでも呼んで來たら何うかと云ひ直しましたが、私も生憎そんな陽氣な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ち遣つて置きました。所が晩になつてKと私はとう〳〵御孃さんに引つ張り出されてしまひました。客も誰も來ないのに、内々の小人數丈で取らうといふ歌留多ですから頗る靜なものでした。其上斯ういふ遊技を遣り付けないKは、丸で懷手をしてゐる人と同樣でした。私はKに一體百人一首の歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kは能く知らないと答へました。私の言葉を聞いた御孃さんは、大方Kを輕蔑するとでも取つたのでせう。それから眼に立つやうにKの加勢をし出しました。仕舞には二人が殆んど組になつて私に當るといふ有樣になつて來ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れなかつたのです。幸ひにKの態度は少しも最初と變りませんでした。彼の何處にも得意らしい樣子を

認めなかつた私は、無事に其場を切り上げる事が出來ました。

それから二三日經つた後の事でしたらう、奥さんと御孃さんは朝から市ケ谷にゐる親類の所へ行くと云つて宅を出ました。Kも私もまだ學校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに殘つてゐました。私は書物を讀むのも散歩に出るのも厭だつたので、たゞ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顋を支へたなり考へてゐました。隣の室にゐるKも一向音を立てませんでした。双方とも居るのだか居ないのだか分らない位靜でした。尤も斯ういふ事は、二人の間柄として別に珍らしくも何ともなかつたのですから、私は別段それを氣にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切の襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立つた儘、私に何を考へてゐると聞きました。私はもとより何も考へてゐなかつたのです。もし考へてゐたとすれば、何時もの通り御孃さんが問題だつたかも知れません。其御孃さんには無論奥さんも食つ付いてゐますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のやうに、私の頭の中をぐるぐる回つて、此問題を複雜にしてゐるのです。Kと顔を見合せた私は、今迄朧氣に彼を一種の邪魔もの丶如く意識してゐながら、明らかに左右と答へる譯に行かなかつたのです。私は依然として彼の顔を見て默つてゐました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて來て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ兩肱を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押し遣るやうにしました。

Kは何時もに似合はない話を始めました。奥さんと御孃さんは市ケ谷の何處へ行つたのだらうと云ふのです。私は大方叔母さんの所だらうと答へました。Kは其叔母さんは何だと又聞きます。私は矢張り軍人

の細君だと教へて遣りました。すると女の年始は大抵十五日過だのに、何故そんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私は何故だか知らないと挨拶するより外に仕方がありませんでした。

三十六

「Kは中々奥さんと御嬢さんの話を已めませんでした。仕舞には私も答へられないやうな立ち入つた事迄聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思ひ出すと、私は何うしても彼の調子の變つてゐる所に氣が付かずにはゐられないのです。私はとう／＼何故今日に限つてそんな事ばかり云ふのかと彼に訊ねました。其時彼は突然默りました。然し私は彼の結んだ口元の肉が顫へるやうに動いてゐるのを注視しました。彼は元來無口な男でした。平生から何か云はうとすると、云ふ前に能く口のあたりをもぐ／＼させる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するやうに容易く開かない所に、彼の言葉の重みも籠つてゐたのでせう。一旦聲が口を破つて出るとなると、其聲には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた何か出て來るなとすぐ疳付いたのですが、それが果して何の準備なのか、私の豫覺は丸でなかつたのです。だから驚ろいたのです。彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに對する切ない戀を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたやうなものです。口をもぐ／＼させる働さへ、私にはなくなつて仕舞つたのです。

其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しさの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでし

た。石か鐵のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼吸をする彈力性さへ失はれた位に堅くなつたのです。幸ひな事に其狀態は長く續きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい氣分を取り戻しました。さうして、すぐ失策つたと思ひました。先を越されたなと思ひました。

然し其先を何うしやうといふ分別は丸で起りません。恐らく起る丈の餘裕がなかつたのでせう。私は腋の下から出る氣味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにゐました。Kは其間何時もの通り重い口を切つては、ぽつり／＼と自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくつて堪りませんでした。恐らく其苦しさは、大きな廣告のやうに、私の顏の上に判然りした字で貼り付けられてあつたらうと私は思ふのです。いくらKでも其所に氣の付かない筈はないのですが、彼は又彼で、自分の事に一切を集中してゐるから、私の表情などに注意する暇がなかつたのでせう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫ぬいてゐました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないといふ感じを私に與へたのです。私の心は半分其自白を聞いてゐながら、半分何うしやう／＼といふ念に絶えず搔き亂されてゐましたから、細かい點になると殆んど耳へ入らないと同樣でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いつた苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感ずるやうになつたのです。つまり相手は自分より強いのだといふ恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り濟んだ時、私は何とも云ふ事が出來ませんでした。此方も彼の前に同じ意味の自白をしたものだらうか、夫とも打ち明けずにゐる方が得策だらうか、私はそんな利害を考へて默つてゐたのではありません。たゞ何事も云へなかつたのです。又云ふ氣にもならなかつたのです。

午食の時、Kと私は向ひ合せに席を占めました。下女に給仕をして貰つて、私はいつにない不味い飯を濟ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんと御孃さんは何時歸るのだか分りませんでした。

三十七

「二人は各自の室に引き取つたぎり顏を合はせませんでした。Kの靜かな事は朝と同じでした。私も凝と考へ込んでゐました。

私は當然自分の心をKに打ち明けるべき筈だと思ひました。然しそれにはもう時機が後れてしまつたといふ氣も起りました。何故先刻Kの言葉を遮ぎつて、此方から逆襲しなかつたのか、其所が非常な手落りのやうに見えて來ました。責めてKの後に續いて、自分は自分の思ふ通りを其場で話して仕舞つたら、まだ好かつたらうにとも考へました。Kの自白に一段落が付いた今となつて、此方から又同じ事を切り出すのは、何う思案しても變でした。私は此不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に搖られてぐら〳〵しました。

私はKが再び仕切の襖を開けて向ふから突進してきて吳れゝば好いと思ひました。私に云はせれば、先刻は丸で不意擊に會つたも同じでした。私にはKに應ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失なつたものを、今度は取り戻さうといふ下心を持つてゐました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。然し其襖は何時迄經つても開きません。さうしてKは永久に靜なのです。

其内私の頭は段々此靜かさに掻き亂されるやうになつて來ました。Kは今襖の向で何を考へてゐるだらうと思ふと、それが氣になつて堪らないのです。不斷も斯んな風に御互が仕切一枚を間に置いて默り合つてゐる場合は始終あつたのですが、私はKが靜であればある程、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、其時の私は餘程調子が狂つてゐたものと見なければなりません。それでゐて私は此方から進んで襖を開ける事が出來なかつたのです。一旦云ひそびれた私は、また向ふから働らき掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。

　仕舞に私は凝として居られなくなりました。無理に凝としてゐれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立つて縁側へ出ました。其所から茶の間へ來て、何といふ目的もなく、鐵瓶の湯を湯呑に注いで一杯呑みました。それから玄關へ出ました。私はわざとKの室を回避するやうにして、斯んな風に自分を往來の眞中に見出したのです。私には無論何處へ行くといふ的もありません。たゞ凝としてゐられない丈でした。それで方角も何も構はずに、正月の町を、無暗に歩き廻つたのです。私の頭はいくら歩いてもKの事で一杯になつてゐました。私もKを振ひ落す氣で歩き廻る譯ではなかつたのです。寧ろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついて居たのです。

　私には第一に彼が解しがたい男のやうに見えました。何うしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、又何うして打ち明けなければゐられない程に、彼の戀が募つて來たのか、さうして平生の彼は何處に吹き飛ばされてしまつたのか、凡て私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知つてゐました。又彼の眞面目な事を知つてゐました。私は是から私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければなら

ない多くを有つてゐると信じました。同時に是からさき彼を相手にするのが變に氣味が惡かつたのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐つてゐる彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底出來ないのだといふ聲が何處かで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のやうに思へたからでせう。私は永久彼に祟られたのではなからうかといふ氣さへしました。

私が疲れて宅へ歸つた時、彼の室は依然として人氣のないやうに靜でした。

三十八

「私が家へ這入ると間もなく俥の音が聞こえました。今のやうに護謨輪のない時分でしたから、がらがらいふ厭な響が可なりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり經つた後の事でしたが、まだ奧さんと御孃さんの晴着が脱ぎ棄てられた儘、次の室を亂雜に彩どつてゐました。二人は遲くなると私達に濟まないといふので、飯の支度に間に合ふように、急いで歸つて來たのださうです。然し奧さんの親切はKと私とに取つて殆んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のやうに、素氣ない挨拶ばかりしてゐました。Kは私よりも猶寡言でした。たまに親子連で外出した女二人の氣分が、また平生よりは勝れて晴やかだつたので、我々の態度は猶の事眼に付きます。奧さんは私に何うかしたのかと聞きました。私は少し心持が惡いと答へました。實際私は心持が惡かつたのです。すると今度は御孃さんがKに

同じ問を掛けました。Kは私のやうに心持が惡いとは答へません。たゞ口が利きたくないからだと云ひました。御孃さんは何故口が利きたくないのかと追窮しました。私は其時ふと重たい瞼を上げてKの顏を見ました。私にはKが何と答へるだらうかといふ好奇心があつたのです。Kの唇は例のやうに少し顫へてゐました。それが知らない人から見ると、丸で返事に迷つてゐるとしか思はれないのです。御孃さんは笑ひながら又何か六づかしい事を考へてゐるのだらうと云ひました。Kの顏は心持薄赤くなりました。

其晩私は何時もより早く床へ入りました。私が食事の時氣分が惡いと云つたのを氣にして、奥さんは十時頃蕎麥湯を持つて來て呉れました。然し私の室はもう眞暗でした。奥さんはおや／＼と云つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜にぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きてゐたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだらうから身體を煖ためるが可いと云つて、湯呑を顏の傍へ突き付けるのです。私は已を得ず、どろ／＼した蕎麥湯を奥さんの見てゐる前で飮みました。

私は遲くなる迄暗いなかで考へてゐました。無論一つ問題をぐる／＼廻轉させる丈で、外に何の効力もなかつたのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしてゐるだらうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと聲を掛けました。すると向ふでもおいと返事をしました。Kもまだ起きてゐたのです。私はまだ寐ないのかと襖ごしに聞きました。もう寐るといふ簡單な挨拶がありました。何をしてゐるのだと私は重ねて問ひました。今度はKの答がありません。其代り五六分經つたと思ふ頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るやうに聞こえました。私はもう何時かと又尋ねました。Kは一時二十分だと答へまし

た。やがて洋燈をふつと吹き消す音がして、家中が眞暗なうちに、しんと靜まりました。
然し私の眼は其暗いなかで愈冴えて來るばかりです。私はまた半ば無意識な狀態で、おいとKに聲を掛けました。Kも以前と同じやうな調子で、おいと答へました。私は今朝彼から聞いた事に就いて、もつと詳しい話をしたいが、彼の都合は何うだと、とう〳〵此方から切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する氣はなかつたのですが、Kの返答だけは卽坐に得られる事と考へたのです。所がKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答へたやうな素直な調子で、今度は應じません。左右だなあと低い聲で澁つてゐます。私は又はつと思はせられました。

三十九

「Kの生返事は翌日になつても、其翌日になつても、彼の態度によく現はれてゐました。彼は自分から進んで例の問題に觸れようとする氣色を決して見せませんでした。尤も機會もなかつたのです。奥さんと御孃さんが揃つて一日宅を空けでもしなければ、二人はゆつくり落付いて、左右いふ事を話し合ふ譯にも行かないのですから。私はそれを能く心得てゐました。心得てゐながら、變にいら〳〵し出すのです。其結果始めは向ふから來るのを待つ積で、暗に用意をしてゐた私が、折があつたら此方で口を切らうと決心するやうになつたのです。
同時に私は默つて家のものゝ樣子を觀察して見ました。然し奥さんの態度にも御孃さんの素振にも、別に平生と變つた點はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼等の擧動に是といふ差違が生じ

ないならば、彼の自白は單に私丈に限られた自白で、肝心の本人にも、又其監督者たる奧さんにも、まだ通じてゐないのは慥でした。さう考へた時私は少し安心しました。それで無理に機會を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の與へて呉れるものを取り逃さないやうにする方が好からうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとして置く事にしました。

斯う云つて仕舞へば大變簡單に聞こえますが、さうした心の經過には、潮の滿干と同じやうに、色々の高低があつたのです。私はＫの動かない樣子を見て、それにさま〴〵の意味を付け加へました。奧さんと御孃さんの言語動作を觀察して、二人の心が果して其所に現はれてゐる通なのだらうかと疑つても見ました。さうして人間の胸の中に裝置された複雜な器械が、時計の針のやうに、明瞭に僞りなく、盤上の數字を指し得るものだらうかと考へました。要するに私は同じ事を斯うも取り、彼あも取りした揚句、漸く此處に落ち付いたものと思つて下さい。更に六づかしく云へば、落ち付くなどゝいふ言葉は、此際決して使はれた義理でなかつたのかも知れません。

其内學校がまた始まりました。私達は時間の同じ日には連れ立つて宅を出ます。都合が可ければ歸る時にも矢張り一所に歸りました。外部から見たＫと私は、何にも前と違つた所がないやうに親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考へてゐたに違ありません。ある日私は突然往來でＫに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、此間の自白が私丈に限られてゐるか、又は奧さんや御孃さんにも通じてゐるかの點にあつたのです。私の是から取るべき態度は、此間に對する彼の答次第で極めなければならないと、私は思つたのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けてゐないと明言し

ました。私は事情が自分の推察通りだつたので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのを能く知つてゐました。彼の度胸にも敵はないといふ自覺があつたのです。けれども一方では又妙に彼を信じてゐました。學資の事で養家を三年も欺むいてゐた彼ですけれども、彼の信用は私に對して少しも損はれてゐなかつたのです。私はそれがために却つて彼を信じ出した位です。だからいくら疑ひ深い私でも、明白な彼の答を腹の中で否定する氣は起りやうがなかつたのです。

私は又彼に向つて、彼の戀を何う取り扱かふ積かと尋ねました。それが單なる自白に過ぎないのか、又は其自白について、實際的の効果をも收める氣なのかと問ふたのです。然るに彼は其所になると、何にも答へません。默つて下を向いて歩き出します。私は彼に隱し立をして呉れるな、凡て思つた通りを話して呉れと頼みました。彼は何も私に隱す必要はないと判然斷言しました。然し私の知らうとする點には、一言の返事も與へないのです。私も往來だからわざ〳〵立ち留まつて底迄突き留める譯に行きません。ついそれなりに爲てしまひました。

四十

「ある日私は久し振に學校の圖書館に入りました。私は廣い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外國雜誌を、あちら此方と引繰り返して見てゐました。私は擔任教師から專攻の學科に關して、次の週までにある事項を調べて來いと命ぜられたのです。然し私に必要な事柄が中々見付からないので、私は二度も三度も雜誌を借り替へなければなりませんでした。最後に私はやつと自分に必要な論文

を探し出して、一心にそれを讀み出しました。すると突然幅の廣い机の向ふ側から小さな聲で私の名を呼ぶものがあります。私は不圖眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲るやうにして、彼の顏を私に近付けました。御承知の通り圖書館では他の人の邪魔になるやうな大きな聲で話をする譯に行かないのですから、Kの此所作は誰でも遣る普通の事なのですが、私は其時に限つて、一種變な心持がしました。

Kは低い聲で勉强かと聞きました。私は一寸調べものがあるのだと答へました。それでもKはまだ其顏を私から放しません。同じ低い調子で一所に散歩をしないかといふのです。私は少し待つてゐれば爲ても可いと答へました。彼は待つてゐると云つた儘、すぐ私の前の空席に腰を卸しました。すると私は氣が散つて急に雜誌が讀めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたやうに思はれて仕方がないのです。私は已を得ず讀みかけた雜誌を伏せて、立ち上がらうとしました。Kは落付き拂つてもう濟んだのかと聞きます。私は何うでも可いのだと答へて、雜誌を返すと共に、Kと圖書館を出ました。

二人は別に行く所もなかつたので、龍岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。其時彼は例の事件について、突然向ふから口を切りました。前後の樣子を綜合して考へると、Kはそのために私をわざ〳〵散歩に引つ張出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでゐませんでした。彼は私に向つて、たゞ漠然と、何う思ふと云ふのです。何う思ふといふのは、さうした戀愛の淵に陷いつた彼を、何んな眼で私が眺めるかといふ質問なのです。一言でいふと、彼は現在の自

分について、私の批判を求めたい様なのです。其所に私は彼の平生と異なる點を確かに認める事が出來たと思ひました。度々繰り返すやうですが、彼の天性は他の思はくを憚かる程弱く出來上つてはゐなかつたのです。斯うと信じたら一人でどん／＼進んで行く丈の度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件で其特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、是は樣子が違ふと明らかに意識したのは當然の結果なのです。

　私がKに向つて、此際何んで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼は何時もにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥づかしいと云ひました。さうして迷つてゐるから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと云ひました。私は隙かさず迷ふといふ意味を聞き糺しました。彼は進んで可いか退ぞいて可いか、それに迷ふのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。さうして退ぞかうと思へば退ぞけるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉が其所で不意に行き詰りました。彼はたゞ苦しいと云つた丈でした。實際彼の表情には苦しさうな所がありありと見えてゐました。もし相手が御孃さんでなかつたならば、私は何んなに彼に都合の好い返事を、その渇き切つた顏の上に慈雨の如く注いで遣つたか分りません。私はその位の美くしい同情を有つて生れて來た人間と自分ながら信じてゐます。然し其時の私は違つてゐました。

四十一

「私は丁度他流試合でもする人のやうにKを注意して見てゐたのです。私は、私の眼、私の心、私の身體、すべて私といふ名の付くものを五分の隙間もないやうに用意して、Kに向つたのです。罪のないK

は穴だらけといふより寧ろ明け放しと評するのが適當な位に無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管してゐる要塞の地圖を受取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺める事が出來たも同じでした。

Kが理想と現實の間に彷徨してふら〳〵してゐるのを發見した私は、たゞ一打で彼を倒す事が出來るだらうといふ點にばかり眼を着けました。さうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向つて急に嚴肅な改たまつた態度を示し出しました。無論策略からですが、其態度に相應する位な緊張した氣分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感ずる餘裕はありませんでした。私は先づ『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云ひ放ちました。是は二人で房州を旅行してゐる際、Kが私に向つて使つた言葉です。私は彼の使つた通りを、彼と同じやうな口調で、再び彼に投げ返したのです。然し決して復讐ではありません。私は復讐以上に殘酷な意味を有つてゐたといふ事を自白します。私は其一言でKの前に横たはる戀の行手を塞がうとしたのです。

Kは眞宗寺に生れた男でした。然し彼の傾向は中學時代から決して生家の宗旨に近いものではなかつたのです。教義上の區別をよく知らない私が、斯んな事をいふ資格に乏しいのは承知してゐますが、私はただ男女に關係した點についてのみ、さう認めてゐたのです。Kは昔しから精進といふ言葉が好でした。私は其言葉の中に、禁慾といふ意味も籠つてゐるのだらうと解釋してゐました。然し後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれてゐるので、私は驚ろきました。道のためには凡てを犠牲にすべきものだと云ふのが彼の第一信條なのですから、攝慾や禁慾は無論、たとひ慾を離れた戀そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしてゐる時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。

其頃から御孃さんを思つてゐた私は、勢ひ何うしても彼に反對しなければならなかつたのです。私が反對すると、彼は何時でも氣の毒さうな顏をしました。其所には同情よりも侮蔑の方が餘計に現はれてゐました。

斯ういふ過去を二人の間に通り拔けて來てゐるのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だといふ言葉は、Kに取つて痛いに違いなかつたのです。然し前にも云つた通り、私は此一言で、彼が折角積み上げた過去を蹴散らした積ではありません。却つてそれを今迄通り積み重ねて行かせやうとしたのです。それが道に達しやうが、天に屆かうが、私は構ひません。私はたゞKが急に生活の方向を轉換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は單なる利己心の發現でした。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

私は二度同じ言葉を繰り返しました。さうして、其言葉がKの上に何う影響するかを見詰めてゐました。

『馬鹿だ』とやがてKが答へました。『僕は馬鹿だ』

Kはぴたりと其所へ立ち留つた儘動きません。彼は地面の上を見詰めてゐます。私は思はずぎよつとしました。私にはKが其刹那に居直り强盜の如く感ぜられたのです。然しそれにしては彼の聲が如何にも力に乏しいといふ事に氣が付きました。私は彼の眼遣を參考にしたかつたのですが、彼は最後迄私の顏を見ないのです。さうして、徐々と又步き出しました。

四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと云つた方がまだ適當かも知れません。其時の私はたとひKを騙し打ちにしても構はない位に思つてゐたのです。然し私にも教育相當の良心はありますから、もし誰か私の傍へ來て、御前は卑怯だと一言私語いて呉れるものがあつたなら、私は其瞬間に、はつと我に立ち歸つたかも知れません。もしKが其人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでせう。たゞKは私を窘めるには餘りに正直でした。餘りに單純でした。餘りに人格が善良だつたのです。目のくらんだ私は、其所に敬意を拂ふ事を忘れて、却つて其所に付け込んだのです。其所を利用して彼を打ち倒さうとしたのです。

　Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私は其時やつとKの眼を眞向に見る事が出來たのです。Kは私より脊の高い男でしたから、私は勢ひ彼の顔を見上げるやうにしなければなりません。私はさうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

『もう其話は止めやう』と彼が云ひました。彼の眼にも彼の言葉にも變に悲痛な所がありました。私は一寸挨拶が出來なかつたのです。するとKは、『止めて呉れ』と今度は賴むやうに云ひ直しました。私は其時彼に向つて殘酷な答を與へたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食ひ付くやうに。

『止めて呉れつて、僕が云ひ出した事ぢやない、もと〳〵君の方から持ち出した話ぢやないか。然し君が止めたければ、止めても可いが、たゞ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止める丈の覺悟がなければ、一體君は君の平生の主張を何うする積なのか』

私が斯う云つた時、脊の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるやうな感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方では又人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平氣でゐられない質だつたのです。私は彼の樣子を見て漸やく安心しました。すると彼は卒然『覺悟？』と聞きました。さうして私がまだ何とも答へない先に『覺悟、――覺悟ならない事もない』と付け加へました。彼の調子は獨言のやうでした。又夢の中の言葉のやうでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖たかな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて蒼味を失つた杉の木立の茶褐色が、薄黑い空の中に、梢を並べて聳えてゐるのを振り返つて見た時は、寒さが脊中へ噛り付いたやうな心持がしました。我々は夕暮の本郷臺を急ぎ足でどし／＼通り拔けて、又向ふの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私は其頃になつて、漸やく外套の下に體の溫味を感じ出した位です。

急いだためでもありませうが、我々は歸り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ歸つて食卓に向つた時、奧さんは何うして遲くなつたのかと尋ねました。私はKに誘はれて上野へ行つたと答へました。奧さんは此寒いのにと云つて驚ろいた樣子を見せました。御孃さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何もないが、たゞ散歩したのだといふ返事丈して置きました。平生から無口なKは、いつもより猶默つてゐました。奧さんが話しかけても、御孃さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むやうに搔き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

四十三

「其頃は覺醒とか新らしい生活とかいふ文字のまだない時分でした。然しKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新らしい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考へが彼に缺けてゐたからではないのです。彼には投げ出す事の出來ない程尊とい過去があつたからです。彼はそのために今日迄生きて來たと云つても可い位なのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないと云つて、決して其愛の生温い事を證據立てる譯には行きません。いくら熾烈な感情が燃えてゐても、彼は無暗に動けないのです。前後を忘れる程の衝動が起る機會を彼に與へない以上、Kは何うしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。さうすると過去が指し示す路を今迄通り歩かなければならなくなるのです。其上彼には現代人の有たない強情と我慢がありました。私は此双方の點に於て能く彼の心を見拔いてゐた積なのです。

上野から歸つた晩は、私に取つて比較的安靜な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。さうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑さうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いてゐたでせう、私の聲にはたしかに得意の響があつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に歸りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、其時丈は恐るゝに足りないといふ自覺を彼に對して有つてゐたのです。

私は程なく穩やかな眠に落ちました。然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覺ましました。見ると、間の襖

が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立つてゐます。さうして彼の室には宵の通りまだ燈火が點いてゐるのです。急に世界の變つた私は、少しの間口を利く事も出來ずに、ぼうつとして、其光景を眺めてゐました。

其時Kはもう寐たのかと聞きました。Kは何時でも遲く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寐たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を脊中に受けてゐるので、彼の顏色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の聲は不斷よりも却つて落ち付いてゐた位でした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に歸りました。私は其暗闇より靜かな夢を見るべく又眼を閉ぢました。私はそれぎり何も知りません。然し翌朝になつて、昨夕の事を考へて見ると、何だか不思議でした。私はことによると、凡てが夢ではないかと思ひました。それで飯を食ふ時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと云ひます。何故そんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の拔けた頃になつて、近頃は熟睡が出來るのかと却つて向ふから私に問ふのです。私は何だか變に感じました。

其日は丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつてゐたので、二人はやがて一所に宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つてゐる私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を滿足させるやうな答をしません。私はあの事件に就いて何か話す積ではなかつたのかと念を押して見ました。Kは左

右ではないと強い調子で云ひ切りました。昨日上野で『其話はもう止めよう』と云つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはさういふ點に掛けて鋭どい自尊心を有つた男なのです。不圖其處に氣のついた私は突然彼の用ひた『覺悟』といふ言葉を連想し出しました。すると今迄丸で氣にならなかつた其二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

四十四

「Kの果斷に富んだ性格は私によく知れてゐました。彼の此事件に就いてのみ優柔な譯も私にはちやんと呑み込めてゐたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫まへた積で得意だつたのです。所が『覺悟』といふ彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼してゐるうちに、私の得意はだん／＼色を失なつて、仕舞にはぐら／＼搖き始めるやうになりました。私は此場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。凡ての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに疊み込んでゐるのではなからうかと疑ぐり始めたのです。さうした新らしい光で覺悟の二字を眺め返して見た私は、はつと驚ろきました。其時の私が若し此驚きを以て、もう一返彼の口にした覺悟の内容を公平に見廻したらば、まだ可かつたかも知れません。悲しい事に私は片眼でした。私はたゞKが御孃さんに對して進んで行くといふ意味に其言葉を解釋しました。果斷に富んだ彼の性格が、戀の方面に發揮されるのが卽ち彼の覺悟だらうと一圖に思ひ込んでしまつたのです。

私は私にも最後の決斷が必要だといふ聲を心の耳で聞きました。私はすぐ其聲に應じて勇氣を振り起

しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覺悟を極めました。私は默つて機會を覘つてゐました。しかし二日經つても三日經つても、私はそれを捕まへる事が出來ません。私はKのゐない時、又御孃さんの留守な折を待つて、奥さんに談判を開かうと考へたのです。然し片方がゐなければ、片方が邪魔をするといつた風の日ばかり續いて、何うしても「今だ」と思ふ好都合が出て來て呉れないのです。私はいら／＼しました。

一週間の後私はとう／＼堪え切れなくなつて假病を遣ひました。奥さんからも、御孃さんからも、K自身からも、起きろといふ催促を受けた私は、生返事をした丈で、十時頃迄蒲團を被つて寢てゐました。私はKも御孃さんもゐなくなつて、家の内がひつそり靜まつた頃を見計つて寢床を出ました。私の顏を見た奥さんは、すぐ何處が惡いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寢てゐたら可からうと忠告しても呉れました。身體に異狀のない私は、とても寢る氣にはなれません。顏を洗つて何時もの通り茶の間で飯を食ひました。其時奥さんは長火鉢の向側から給仕をして呉れたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶椀を手に持つた儘、何んな風に問題を切り出したものだらうかと、そればかりに屈托してゐたから、外觀からは實際氣分の好くない病人らしく見えただらうと思ひます。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる譯に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鐵瓶に水を注したり、火鉢の緣を拭いたりして、私に調子を合はせてゐます。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問ひました。奥さんはいゝえと答へましたが、今度は向ふで何故ですと聞き返して來ました。私は實は少し話したい事があるのだと云ひました。奥さんは何ですか

と云つて、私の顏を見ました。奥さんの調子は丸で私の氣分に這入り込めないやうな輕いものでしたから、私の次に出すべき文句も少し澁りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か云ひはしなかつたかと奥さんに聞いて見ました。奥さんは思ひも寄らないといふ風をして、『何を？』とまた反問して來ました。さうして私の答へる前に、『貴方には何か仰やつたんですか』と却つて向で聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに傳へる氣のなかつた私は、『いゝえ』といつてしまつた後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覺はないのだから、Kに關する用件ではないのだと云ひ直しました。奥さんは『左右ですか』と云つて、後を待つてゐます。私は何うしても切り出さなければならなくなりました。私は突然『奥さん、御孃さんを私に下さい』と云ひました。奥さんは私の豫期してかゝつた程驚ろいた樣子も見せませんでしたが、それでも少時返事が出來なかつたものと見えて、默つて私の顏を眺めてゐました。一度云ひ出した私は、いくら顏を見られても、それに頓着などはしてゐられません。『下さい、是非下さい』と云ひました。『私の妻として是非下さい』と云ひました。奥さんは年を取つてゐる丈に、私よりもずつと落付いてゐました。『上げてもいゝが、あんまり急ぢやありませんか』と聞くのです。私が『急に貰ひたいのだ』とすぐ答へたら笑ひ出しました。さうして『よく考へたのですか』と念を押すのです。私は云ひ出したのは突然でも、考へたのは突然でないとい

ふ譯を強い言葉で說明しました。

それから未だ二つ三つの問答がありましたが、私はそれを忘れて仕舞ひました。男のやうに判然した所のある奧さんは、普通の女と違つて斯んな場合には大變心持よく話の出來る人でした。『宜ござんす、差し上げませう』と云ひました。『差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。御存じの通り父親のない憐れな子です』と後では向ふから賴みました。

話は簡單でかつ明瞭に片付いてしまひました。最初から仕舞迄に恐らく十五分とは掛らなかつたでせう。奧さんは何の條件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から斷ればそれで澤山だと云ひました。本人の意嚮さへたしかめるに及ばないと明言しました。そんな點になると、學問をした私の方が、却つて形式に拘泥する位に思はれたのです。親類は兎に角、當人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奧さんは『大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから』と云ひました。

自分の室へ歸つた私は、事のあまりに譯もなく進行したのを考へて、却つて變な氣持になりました。果して大丈夫なのだらうかといふ疑念さへ、どこからか頭の底に這ひ込んで來た位です。けれども大體の上に於て、私の未來の運命は、是で定められたのだといふ觀念が私の凡てを新たにしました。

私は午頃又茶の間へ出掛けて行つて、奧さんに、今朝の話を御孃さんに何時通じてくれる積かと尋ねました。奧さんは、自分さへ承知してゐれば、いつ話しても構はなからうといふやうな事を云ふのです。斯うなると何だか私よりも相手の方が男見たやうなので、私はそれぎり引き込まうとしました。すると奧さ

んが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でも可い、稽古から歸つて來たら、すぐ話さうと云ふのです。私はさうして貰ふ方が都合が好いと答へて又自分の室に歸りました。然し默つて自分の机の前に坐つて、二人のこそ／＼話を遠くから聞いてゐる私を想像して見ると、何だか落ち付いてゐられないやうな氣もするのです。私はとう／＼帽子を被つて表へ出ました。さうして又坂の下で御孃さんに行き合ひました。何にも知らない御孃さんは私を見て驚ろいたらしかつたのです。私が帽子を脱つて『今御歸り』と尋ねると、向ふではもう病氣は癒つたのかと不思議さうに聞くのです。私は『えゝ癒りました、癒りました』と答へて、ずん／＼水道橋の方へ曲つてしまひました。

四十六

「私は猿樂町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私が此界隈を歩くのは、何時も古本屋をひやかすのが目的でしたが、其日は手擦のした書物などを眺める氣が、何うしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考へてゐました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。夫から御孃さんが宅へ歸つてからの想像がありました。私はつまり此二つのもので歩かせられてゐた樣なものです。其上私は時々往來の眞中で我知らず不圖立ち留まりました。さうして今頃は奥さんが御孃さんにもうあの話をしてゐる時分だらうなどと考へました。また或時は、もうあの話が濟んだ頃だとも思ひました。

　私はとう／＼萬世橋を渡つて、明神の坂を上つて、本郷臺へ來て、夫から又菊坂を下りて、仕舞に小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離は此三區に跨がつて、いびつな圓を描いたとも云はれるでせうが、

私は此長い散歩の間殆んどKの事を考へなかつたのです。今其時の私を回顧して、何故だと自分に聞いて見ても一向分りません。たゞ不思議に思ふ丈です。私の心がKを忘れ得る位、一方に緊張してゐたと見ればそれ迄ですが、私の良心が又それを許すべき筈はなかつたのですから。

Kに對する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄關から坐敷へ通る時、即ち例のごとく彼の室を拔けやうとした瞬間でした。彼は何時もの通り机に向つて書見をしてゐました。彼は何時もの通り書物から眼を放して、私を見ました。然し彼は何時もの通り今歸つたのかとは云ひませんでした。彼は『病氣はもう癒いのか、醫者へでも行つたのか』と聞きました。私は其刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の眞中にでも立つてゐたならば、私は屹度良心の命令に從つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。然し奥には人がゐます。私の自然はすぐ其所で食ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはたゞ沈んでゐた丈で、少しも疑ひ深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんは何時もより嬉しさうでした。私だけが凡てを知つてゐたのです。私は鉛のやうな飯を食ひました。其時御孃さんは何時ものやうにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答へる丈でした。それをKは不思議さうに聞いてゐました。仕舞に何うしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだらうと云つて一寸私の顔を見ました。Kは猶不思議さうに、なんで極が悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながら又私の

顔を見るのです。
　私は食卓に着いた初から、奥さんの顔付で、事の成行を略推察してゐました。然しKに説明を與へるために、私のゐる前で、それを悉く話されては堪らないと考へました。奥さんはまた其位の事を平氣でする女なのですから、私はひや／＼したのです。幸にKは又元の沈默に歸りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とう／＼私の恐れを抱いてゐる點までは話を進めずに仕舞ひました。私はほつと一息して室へ歸りました。然し私が是から先Kに對して取るべき態度は、何うしたものだらうか、私はそれを考へずにはゐられませんでした。私は色々の辯護を自分の胸で拵らえて見ました。けれども何の辯護もKに對して面と向ふには足りませんでした。卑怯な私は終に自分で自分をKに説明するのが厭になつたのです。

四十七

「私は其儘二三日過ごしました。其二三日の間Kに對する絶えざる不安が私の胸を重くしてゐたのは云ふ迄もありません。私はたゞでさへ何とかしなければ、彼に濟まないと思つたのです。其上奥さんの調子や、御孃さんの態度が、始終私を突ッつくやうに刺戟するのですから、私は猶辛かつたのです。何處か男らしい氣性を具へた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ぱ拔かないとも限りません。それ以來ことに目立つやうに思へた私に對する御孃さんの擧止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは斷言出來ません。私は何とかして、私と此家族との間に成り立つた新らしい關係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。然し倫理的に弱點をもつてゐると、自分で自分を認めてゐる私には、それがまた至

難の事のやうに感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改ためてさう云つて貰はうかと考へました。無論私のゐない時にです。然しありの儘を告げられては、直接と間接の區別がある丈で、面目のないのに變りはありません。と云つて、拵え事を話して貰はうとすれば、奥さんから其理由を詰問されるに極つてゐます。もし奥さんに總ての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱點を自分の愛人と其母親の前に曝け出さなければなりません。眞面目な私には、それが私の未來の信用に關するとしか思はれなかつたのです。結婚する前から戀人の信用を失ふのは、たとひ一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のやうに見えました。

要するに私は正直な路を歩く積で、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。さうして其所に氣のついてゐるものは、今の所たゞ天と私の心だけだつたのです。然し立ち直つて、もう一歩前へ踏み出さうとするには、今滑つた事を是非共周圍の人に知られなければならない窮境に陷いつたのです。私は飽くまで滑つた事を隱したがりました。同時に、何うしても前へ出ずには居られなかつたのです。

私は此間に挾まつてまた立ち竦みました。

五六日經つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答へました。すると何故話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私は此間の前に固くなりました。其時奥さんが私を驚ろかした言葉を、私は今でも忘れずに覺えてゐます。

『道理で妾が話したら變な顏をしてゐましたよ。貴方もよくないぢやありませんか、平生あんなに親し

くしてゐる間柄だのに、默つて知らん顔をしてゐるのは』
私はKが其時何か云ひはしなかつたかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも云はないと答へました。然し私は進んでもつと細かい事を尋ねずにはゐられませんでした。奥さんは固より何も隱す譯がありません。大した話もないがと云ひながら、一々Kの樣子を語つて聞かせて呉れました。
奥さんの云ふ所を綜合して考へて見ると、Kは此最後の打撃を、最も落付いた驚をもつて迎へたらしいのです。Kは御孃さんと私との間に結ばれた新らしい關係に就いて、最初は左右ですかとたゞ一口云つた丈だつたさうです。然し奥さんが、『あなたも喜こんで下さい』と述べた時、彼ははじめて奥さんの顏を見て微笑を洩らしながら、『御目出たう御座います』と云つた儘席を立つたさうです。さうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚は何時ですか』と聞いたさうです。それから『何か御祝ひを上げたいが、私は金がないから上げる事が出來ません』と云つたさうです。奥さんの前に坐つてゐた私は、其話を聞いて胸が塞るやうな苦しさを覺えました。

四十八

『勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日餘りになります。其間Kは私に對して少しも以前と異なつた樣子を見せなかつたので、私は全くそれに氣が付かずにゐたのです。彼の超然とした態度はたとひ外觀だけにもせよ、敬服に値すべきだと私は考へました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。『おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ』といふ感じが私の胸に渦卷

いて起りました。私は其時さぞKが輕蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめました。然し今更Kの前に出て、耻を搔かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。
私が進まうか止さうかと考へて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜の晩でした。所が其晩に、Kは自殺して死んで仕舞つたのです。私は今でも其光景を思ひ出すと慄然とします。何時も東枕で寐る私が、其晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因緣かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風で不圖眼を覺したのです。見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、此間の晩と同じ位開いてゐます。けれども此間のやうに、Kの黑い姿は其所には立つてゐません。私は暗示を受けた人のやうに、床の上に肱を突いて起き上りながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く點つてゐるのです。それで床も敷いてあるのです。然し掛蒲團は跳返されたやうに裾の方に重なり合つてゐるのです。さうしてK自身は向ふむきに突ッ伏してゐるのです。
私はおいと云つて聲を掛けました。然し何の答もありません。おい何うかしたのかと私は又Kを呼びました。それでもKの身體は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際迄行きました。其所から彼の室の樣子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。
其時私の受けた第一の感じは、Kから突然戀の自白を聞かされた時のそれと畧同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又あゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黑い光が、私の未來を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。さ

うして私はがた〳〵顫へ出したのです。
　それでも私はついに私を忘れる事が出來ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは豫期通り私の名宛になつてゐました。私は夢中で封を切りました。然し中には私の豫期したやうな事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つて何んなに辛い文句が其中に書き列ねてあるだらうと豫期したのです。さうして、もし夫が奥さんや御孃さんの眼に觸れたら、何んなに輕蔑されるかも知れないといふ恐怖があつたのです。私は一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思ひました。（固より世間體の上丈で助かつたのですが、其世間體が此場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。）
　手紙の内容は簡單でした。さうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するといふ丈なのです。それから今迄私に世話になつた禮が、極あつさりした文句で其後に付け加へてありました。世話序に死後の片付方も頼みたいといふ言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて濟まんから宜しく詫をして呉れといふ句もありました。國元へは私から知らせて貰ひたいといふ依頼もありました。必要な事はみんな一口づゝ書いてある中に御孃さんの名前丈は何處にも見えません。私は仕舞迄讀んで、すぐKがわざと回避したのだといふ事に氣が付きました。然し私の尤も痛切に感じたのは、最後に墨の餘りで書き添へたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらうといふ意味の文句でした。
　私は顫へる手で、手紙を卷き收めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆なの眼に着くやうに、元の通り机の上に置きました。さうして振り返つて、襖に迸しつてゐる血潮を始めて見たのです。

四十九

「私は突然Kの頭を抱えるやうに兩手で少し持ち上げました。私はKの死顏が一目見たかつたのです。然し俯伏になつてゐる彼の顏を、斯うして下から覗き込んだ時、私はすぐ其手を放してしまひました。慄とした許ではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今觸つた冷たい耳と、平生に變らない五分刈の濃い髮の毛を少時眺めてゐました。私は少しも泣く氣にはなれませんでした。私はたゞ恐ろしかつたのです。さうして其恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺戟して起る單調な恐ろしさ許ではありません。私は忽然と冷たくなつた此友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室へ歸りました。さうして八疊の中をぐる／＼廻り始めました。私の頭は無意味でも當分さうして動いてゐろと私に命令するのです。私は何うかしなければならないと思ひました。同時にもう何うする事も出來ないのだと思ひました。座敷の中をぐる／＼廻らなければゐられなくなつたのです。檻の中へ入れられた熊の樣な態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起さうといふ氣になります。けれども女に此恐ろしい有樣を見せては惡いといふ心持がすぐ私を遮ります。奥さんは兎に角、御孃さんを驚ろかす事は、とても出來ないといふ強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐる／＼廻り始めるのです。

私は其間に自分の室の洋燈を點けました。それから時計を折々見ました。其時の時計程埒の明かない遲いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかつ

た事丈は明らかです。ぐる〳〵廻りながら、其夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が續くのではなからうかといふ思ひに惱まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。學校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合はないのです。下女は其關係で六時頃に起きる譯になつてゐました。然し其日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと云つて注意して呉れました。奥さんは私の足音で眼を覺したのです。私は奥さんに眼が覺めてゐるなら、一寸私の室迄來て呉れと頼みました。奥さんは寐卷の上へ不斷着の羽織を引掛て、私の後に跟いて來ました。私は室へ這入るや否や、今迄開いてゐた仕切の襖をすぐ立て切りました。さうして奥さんに飛んだ事が出來たと小聲で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顋で隣の室を指すやうにして、『驚ろいちや不可ません』と云ひました。奥さんは蒼い顔をしました。『奥さん、Kは自殺しました』と私がまた云ひました。奥さんは其所に居竦まつたやうに、私の顔を見て默つてゐました。其時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。『濟みません。私が惡かつたのです。あなたにも御孃さんにも濟まない事になりました』と詫まりました。私は奥さんと向ひ合ふ迄、そんな言葉を口にする氣は丸でなかつたのです。然し奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず左右云つて仕舞つたのです。Kに詫まる事の出來ない私は、斯うして奥さんと御孃さんに詫びなければゐられなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふら〳〵と懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釋しなかつたのは私にとつて幸でした。蒼い顔をしながら、『不慮の出來事なら仕方がないぢやありませんか』と慰さめるやうに云つて呉れました。然し其顔

には驚ろきと怖れとが、彫り付けられたやうに、硬く筋肉を攫んでゐました。

五十

「私は奥さんに氣の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。其時Kの洋燈に油が盡きたと見えて、室の中は殆んど眞暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手に持つた儘、入口に立つて奥さんを顧みました。奥さんは私の後から隱れるやうにして、四疊の中を覗き込みました。然し這入らうとはしません。其所は其儘にして置いて、雨戸を開けて呉れと私に云ひました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得てゐました。私は醫者の所へも行きました。又警察へも行きました。然しみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはさうした手續の濟む迄、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んで仕舞つたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のやうな薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸ばしつたものと知れました。私は日中の光で明らかに其迹を再び眺めました。さうして人間の血の勢といふものの劇しいのに驚ろきました。

奥さんと私は出來る丈の手際と工夫を用ひて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸ひ彼の蒲團に吸收されてしまつたので、疊はそれ程汚れないで濟みましたから、後始末はまだ樂でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不斷の通り寐てゐる體に横にしました。私はそれから彼の實家へ電報を打ち

に出たのです。
私が歸つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられてゐました。室へ這入るとすぐ佛臭い烟で鼻を撲たれた私は、其烟の中に坐つてゐる女二人を認めました。私が御孃さんの顏を見たのは、昨夜來此時が始めてでした。御孃さんは泣いてゐました。奧さんも眼を赤くしてゐました。事件が起つてからそれ迄泣く事を忘れてゐた私は、其時漸やく悲しい氣分に誘はれる事が出來たのです。私の胸はその悲しさのために、何の位寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を與へてくれたものは、其時の悲しさでした。
私は默つて二人の傍に坐つてゐました。奧さんは私にも線香を上げてやれと云ひます。私は線香を上げて又默つて坐つてゐました。御孃さんは私には何とも云ひません。たまに奧さんと一口二口言葉を換はす事がありましたが、それは當座の用事に卽いてのみでした。御孃さんにはKの生前に就いて語る程の餘裕がまだ出て來なかつたのです。私はそれでも昨夜の物凄い有樣を見せずに濟んでまだ可かつたと心のうちで思ひました。若い美くしい人に恐ろしいものを見せると、折角の美くしさが、其爲に破壞されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髮の毛の末端迄來た時ですら、私はその考を度外に置いて行動する事は出來ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じやうな不快がそのうちに籠つてゐたのです。
國元からKの父と兄が出て來た時、私はKの遺骨を何處へ埋めるかに就いて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雜司ヶ谷近邊をよく一所に散歩した事があります。Kには其所が大變氣に入つてゐたの

です。それで私は笑談半分に、そんなに好なら死んだら此所へ埋めて遣らうと約束した覺があるのです。私も今其約束通りＫを雜司ヶ谷へ葬つたところで、何の位の功德になるものかとは思ひました。けれども私は私の生きてゐる限り、Ｋの墓の前に跪まづいて月々私の懺悔を新たにしたかつたのです。今迄構ひ付けなかつたＫを、私が萬事世話をして來たといふ義理もあつたのでせう、Ｋの父も兄も私の云ふ事を聞いて呉れました。

五十一

「Ｋの葬式の歸り路に、私はその友人の一人から、Ｋが何うして自殺したのだらうといふ質問を受けました。事件があつて以來私はもう何度となく此質問で苦しめられてゐたのです。奧さんも御孃さんも、國から出て來たＫの父兄も、通知を出した知り合ひも、彼とは何の緣故もない新聞記者迄も、必ず同樣の質問を私に掛けない事はなかつたのです。私の良心は其度にちく／＼刺されるやうに痛みました。さうして私は此質問の裏に、早く御前が殺したと白狀してしまへといふ聲を聞いたのです。

私の答は誰に對しても同じでした。私は唯彼の私宛で書き殘した手紙を繰り返す丈で、外に一口も附加へる事はしませんでした。葬式の歸りに同じ問を掛けて、同じ答を得たＫの友人は、懷から一枚の新聞を出して私に見せました。私は步きながら其友人によつて指し示された箇所を讀みました。それにはＫが父兄から勘當された結果厭世的な考を起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも云はずに、其新聞を疊んで友人の手に歸しました。友人は此外にもＫが氣が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて數

へて呉れました。忙がしいので、殆んど新聞を讀む暇がなかつた私は、丸でさうした方面の知識を缺いてゐましたが、腹の中では始終氣にかゝつてゐた所でした。私は何よりも宅のものゝ迷惑になるやうな記事の出るのを恐れたのです。ことに名前丈にせよ御孃さんが引合に出たら堪らないと思つてゐたのです。私は其友人に外に何とか書いたのはないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、たゞ其二種ぎりだと答へました。

私が今居る家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんも御孃さんも前の所にゐるのを厭がりますし、私も其夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だつたので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二ヶ月程してから私は無事に大學を卒業しました。卒業して半年も經たないうちに、私はとうとう御孃さんと結婚しました。外側から見れば、萬事が豫期通りに運んだのですから、目出度と云はなければなりません。奥さんも御孃さんも如何にも幸福らしく見えました。私も幸福だつたのです。けれども私の幸福には黑い影が隨いてゐました。私は此幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時御孃さんが、――もう御孃さんではありませんから、妻と云ひます。――妻が、何を思ひ出したのか、二人でKの墓參をしやうと云ひ出しました。私は意味もなく唯ぎよつとしました。何うしてそんな事を急に思ひ立つたのかと聞きました。妻は二人揃つて御參りをしたら、Kが嘸喜こぶだらうと云ふのです。私は何事も知らない妻の顏をしけじけ眺めてゐましたが、妻から何故そんな顏をするのかと問はれて始めて氣が付きました。

私は妻の望通り二人連れ立つて雜司ヶ谷へ行きました。私は新らしいKの墓へ水をかけて洗つて遣りました。妻は其前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私と一所になつた顛末を述べてKに喜こんで貰ふ積でしたらう。私は腹の中で、たゞ自分が惡かつたと繰り返す丈でした。

其時妻はKの墓を撫でゝ見て立派だと評してゐました。其墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立たりした因縁があるので、妻はとくに左右云ひたかつたのでせう。私は其新らしい墓と、新らしい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新らしい白骨とを思ひ比べて、運命の冷罵を感ぜずにはゐられなかつたのです。私はそれ以後決して妻と一所にKの墓參りをしない事にしました。

五十二

私の亡友に對する斯うした感じは何時迄も續きました。實は私も初からそれを恐れてゐたのです。年來の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を擧げたと云へば云へない事もないでせう。然し自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或は是が私の心持を一轉して新らしい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。所が愈夫として朝夕妻と顏を合せて見ると、私の果敢ない希望は手嚴しい現實のために脆くも破壞されてしまひました。私は妻と顏を合せてゐるうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私を何處迄も結び付けて離さないやうにするのです。妻の何處にも不足を感じない私は、たゞ此一點に於て彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐ夫が

映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻から何故そんなに考へてゐるのだとか、何か氣に入らない事があるのだらうとかいふ詰問を受けました。笑つて濟ませる時はそれで差支ないのですが、時によると、妻の癇も高じて來ます。しまひには『あなたは私を嫌つてゐらつしやるんでせう』とか、『何でも私に隱してゐらつしやる事があるに違ない』とかいふ怨言も聞かなくてはなりません。私は其度に苦しみました。

私は一層思ひ切つて、有の儘を妻に打ち明けやうとした事が何度もあります。然しいざといふ間際になると自分以外のある力が不意に來て私を抑え付けるのです。私を理解してくれる貴方の事だから、說明する必要もあるまいと思ひますが、話すべき筋だから話して置きます。其時分の私は妻に對して己を飾る氣は丸でなかつたのです。もし私が亡友に對すると同じやうな善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違ないのです。それを敢てしない私に利害の打算がある筈はありません。私はたゞ妻の記憶に暗黑な一點を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印氣でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大變な苦痛だつたのだと解釋して下さい。

一年經つてもKを忘れる事の出來なかつた私の心は常に不安でした。私は此不安を驅逐するために書物に溺れやうと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉强し始めたのです。さうして其結果を世の中に公けにする日の來るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理に其目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私は何うしても書物のなかに心を埋めてゐられなくなりました。私は又腕組をして

世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと觀察してゐたやうでした。妻の家にも親子二人位は坐つてゐて何うか斯うか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支のない境遇にゐたのですから、さう思はれるのも尤もです。私も幾分かスポイルされた氣味がありませう。然し私の動かなくなつた原因の主なものは、全く其所にはなかつたのです。叔父に欺むかれた當時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を惡く取る丈あつて、自分はまだ確な氣がしてゐました。世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念が何處かにあつたのです。それがKのために美事に破壞されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふら〳〵しました。他に愛想を盡かした私は、自分にも愛想を盡かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生埋にする事の出來なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れやうと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは云ひません。けれども飲めば飲める質でしたから、たゞ量を頼みに心を盛り潰さうと力めたのです。此淺薄な方便はしばらくするうちに私を猶厭世的にしました。私は爛醉の眞最中に不圖自分の位置に氣が付くのです。自分はわざと斯んな眞似をして己れを僞つてゐる愚物だといふ事に氣が付くのです。すると身振ひと共に眼も心も醒めてしまひます。時にはいくら飲んでも斯うした假裝狀態にさへ入り込めないで無暗に沈んで行く場合も出て來ます。其上技巧で愉快を買つた後には、屹度

沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛してゐる妻と其母親に、何時でも其所を見せなければならなかつたのです。しかも彼等は彼等に自然な立場から私を解釋して掛ります。

妻の母は時々氣拙い事を妻に云ふやうでした。それを妻は私に隱してゐました。然し自分は自分で、單獨に私を責めなければ氣が濟まなかつたらしいのです。責めると云つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か云はれた爲に、私が激した例は殆んどなかつた位ですから。妻は度々何處が氣に入らないのか遠慮なく云つて呉れと頼みました。それから私の未來のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて『貴方は此頃人間が違つた』と云ひました。それ丈なら未可いのですけれども、『Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう』と云ふのです。私は左右かも知れないと答へた事がありましたが、私の答へた意味と、妻の了解した意味とは全く違つてゐたのですから、私は心のうちで悲しかつたのです。それでも私は妻に何事も説明する氣にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に醉つて遲く歸つた翌日の朝でした。妻は笑ひました。或は默つてゐました。たまにぽろ／＼と涙を落す事もありました。私は何方にしても自分が不愉快で堪らなかつたのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのと詰り同じ事になるのです。私はしまひに酒を止めました。妻の忠告で止めたといふより、自分で厭になつたから止めたと云つた方が適當でせう。

酒は止めたけれども、何もする氣にはなりません。仕方がないから書物を讀みます。然し讀めば讀んだなりで、打ち遣つて置きます。私は妻から何の爲に勉強するのかといふ質問を度々受けました。私はたゞ苦笑してゐました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理

解してゐないのかと思ふと、悲しかつたのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せないのだと思ふと益悲しかつたのです。私は寂寞でした。何處からも切り離されて世の中にたつた一人住んでゐるやうな氣のした事も能くありました。

同時に私はKの死因を繰り返し〳〵考へたのです。其當座は頭がたゞ戀の一字で支配されてゐた所爲でもありませうが、私の觀察は寧ろ簡單でしかも直線的でした。Kは正しく失戀のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段々落ち付いた氣分で、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて來ました。現實と理想の衝突、――それでもまだ不充分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ豫覺が、折々風のやうに私の胸を横過り始めたからです。

五十四

「其内妻の母が病氣になりました。醫者に見せると到底癒らないといふ診斷でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。是は病人自身の爲でもありますし、又愛する妻の爲でもありましたが、もつと大きな意味からいふと、ついに人間の爲でした。私はそれ迄にも何かしたくつて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出來ないので已を得ず懷手をしてゐたに違ありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたといふ自覺を得たのは此時でした。私は罪滅しとでも

名づけなければならない、一種の氣分に支配されてゐたのです。
母は死にました。私と妻はたつた二人ぎりになりました。妻は私に向つて、是から世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと云ひました。自分自身さへ頼りにする事の出來ない私は、妻の顔を見て思はず涙ぐみました。さうして妻を不幸な女だと思ひました。又不幸な女だと口へ出しても云ひました。妻は何故だと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出來ないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考で彼女を觀察してゐるために、そんな事も云ふやうになるのだと恨みました。
母の亡くなつた後、私は出來る丈妻を親切に取り扱かつて遣りました。たゞ當人を愛してゐたから許ではありません。私の親切には箇人を離れてもつと廣い背景があつたやうです。丁度妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は滿足らしく見えました。けれども其滿足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な點が何處かに含まれてゐるやうでした。然し妻が私を理解し得たにした所で、此物足りなさは增すとも減る氣遣はなかつたのです。女には大きな人道の立場から來る愛情よりも、多少義理をはづれても自分丈に集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いやうに思はれますから。
妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもぴたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸には其時分から時々恐ろしい影が閃めきました。初めはそれが偶然外から襲つて來るのです。私は驚ろきました。私はぞつとしました。然ししばらくしてゐる中に、私の心が其物凄い閃めきに應ずるやうになりました。しまひには外から來ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでゐるものゝ如くに思はれ出して來たのです。私はさうした心持になるたびに、自分の頭が何うかしたのではなからうかと疑つて見ました。けれども私は醫者にも誰にも診て貰ふ氣にはなりませんでした。

私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです。其感じが私をKの墓へ毎月行かせます。其感じが私に妻の母の看護をさせます。さうして其感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。私は其感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいと迄思つた事もあります。斯うした階段を段々經過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可きだといふ氣になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考が起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行かうと決心しました。

私がさう決心してから今日迄何年になるでせう。私と妻とは元の通り仲好く暮して來ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。然し私の有つてゐる一點、私に取つては容易ならん此一點が、妻には常に暗黑に見えたらしいのです。それを思ふと、私は妻に對して非常に氣の毒な氣がします。

五十五

「死んだ積で生きて行かうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。然し私が何の方面かへ切つて出やうと思ひ立つや否や、恐ろしい力が何處からか出て來て、私の心をぐいと握り締めて少

しも動けないやうにするのです。さうして其力が私に御前は何をする資格もない男だと抑え付けるやうに云つて聞かせます。すると私は其一言で直ぐたりと萎れて仕舞ひます。しばらくして又立ち上がらうとすると、又締め付けられます。私は齒を食ひしばつて、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷かな聲で笑ひます。自分で能く知つてゐる癖にと云ひます。私は又ぐたりとなります。

波瀾も曲折もない單調な生活を續けて來た私の內面には、常に斯うした苦しい戰爭があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思ひを重ねて來たか知れない位です。私がこの牢屋の中に凝としてゐる事が何うしても出來なくなつた時、又その牢屋を何うしても突き破る事が出來なくなつた時、必竟私にとつて一番樂な努力で遂行出來るものは自殺より外にないと私は感ずるやうになつたのです。貴方は何故と云つて眼を睜るかも知れませんが、何時も私の心を握り締めに來るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食ひ留めながら、死の道丈を自由に私のために開けて置くのです。動かずにゐれば兎も角も、少しでも動く以上は、其道を步いて進まなければ私には進みやうがなくなつたのです。

私は今日に至る迄既に二三度運命の導いて行く最も樂な方向へ進まうとした事があります。然し私は何時でも妻に心を惹かされました。さうして其妻を一所に連れて行く勇氣は無論ないのです。妻に凡てを打ち明ける事の出來ない位な私ですから、自分の運命の犧牲として、妻の天壽を奪ふなどゝいふ手荒な所作は、考へてさへ恐ろしかつたのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります。二人を一束にして火に燻べるのは、無理といふ點から見ても、痛ましい極端としか私には思へませんでした。

同時に私だけが居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした。母の死んだ時、是から世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと云つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むやうに記憶させられてゐたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止して可かつたと思ふ事もありました。さうして又凝と竦んで仕舞ひます。さうして妻から時々物足りなさうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて来たのです。始めて貴方に鎌倉で會つた時も、貴方と一所に郊外を散歩した時も、私の氣分に大した變りはなかつたのです。私の後には何時でも黒い影が括ッ付いてゐました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなものです。貴方が卒業して國へ歸る時も同じ事でした。九月になつたらまた貴方に會はうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く會ふ氣でゐたのです。秋が去つて、冬が來て、其冬が盡きても、屹度會ふ積でゐたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな氣がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き殘つてゐるのは必竟時勢遲れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戲ひました。

五十六

「私は殉死といふ言葉を殆んど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分

が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。

それから約一ケ月程經ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相圖の號砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考へると、それが乃木大將の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は號外を手にして、思はず妻に殉死だ／＼と云ひました。

私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き殘して行つたものを讀みました。西南戰爭の時敵に旗を奪られて以來、申し譯のために死なう／＼と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覺悟をしながら生きながらへて來た年月を勘定して見ました。西南戰爭は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう／＼と思つて、死ぬ機會を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

それから二三日して、私はとう／＼自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から來る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。私は私の出來る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを盡した積です。

私は妻を殘して行きます。私がゐなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に殘酷

な驚怖を與へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私が死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。氣が狂つたと思はれても滿足なのです。

私が死なうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分は貴方に此長い自叙傳の一節を書き殘すために使用されたものと思つて下さい。始めは貴方に會つて話をする氣でゐたのですが、書いて見ると、却つて其方が自分を判然描き出す事が出來たやうな心持がして嬉しいのです。私は醉興に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の經驗の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを僞りなく書き殘して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。渡邊華山は邯鄲といふ畫を描くために、死期を一週間繰り延べたといふ話をつい先達て聞きました。他から見たら餘計な事のやうにも解釋できませうが、當人にはまた當人相應の要求が心の中にあるのだから已むを得ないとも云はれるでせう。私の努力も單に貴方に對する約束を果すためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

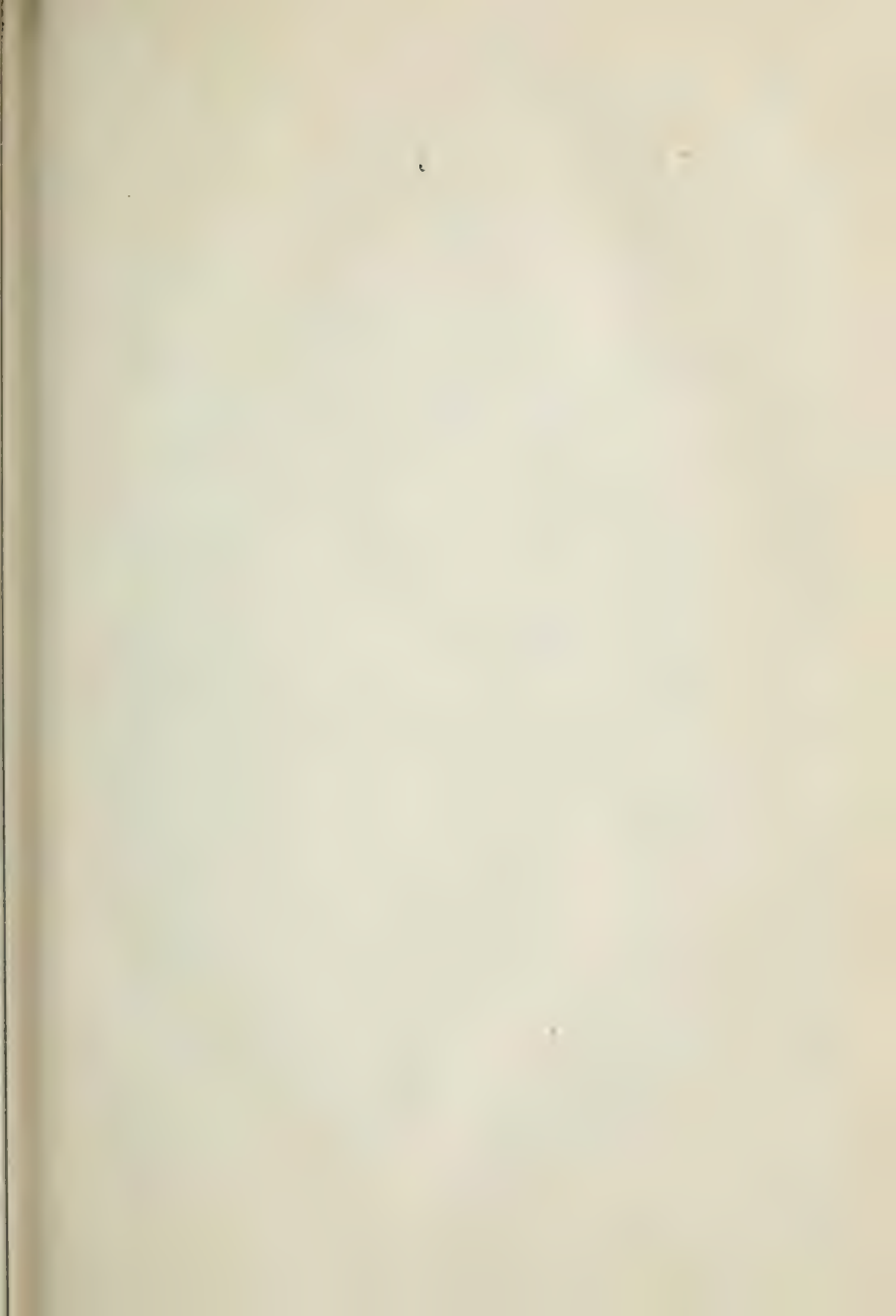
然し私は今其要求を果しました。もう何にもする事はありません。此手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世にはゐないでせう。とくに死んでゐるでせう。妻は十日ばかり前から市ケ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病氣で手が足りないといふから私が勸めて遣つたのです。私は妻の留守の間に、この長いものゝ大部分を書きました。時々妻が歸つて來ると、私はすぐそれを隱しました。

私は私の過去を善惡ともに他の參考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下

さい」私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい」。

道草

四、六、三――四、九、一四

一

健三が遠い所から歸つて來て駒込の奥に世帶を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故鄕の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身體には新しく後に見捨てた遠い國の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振ひ落さなければならないと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと滿足には却つて氣が付かなかつた。

彼は斯うした氣分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二遍づゝ規則のやうに往來した。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本鄕の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出會つた。其人は根津權現の裏門の坂を上つて、彼と反對に北へ向いて歩いて來たものと見えて、健三が行手を何氣なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顏をして其人の傍を通り拔けようとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾

くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は靜であつた。二人の間にはたゞ細い雨の絲が絕間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顏を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又眞正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ氣色なく、ぢつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顏が彼の歩調につれて、少しづゝ動いて廻るのに氣が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と緣を切つたのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔の事であつた。それから今日迄に十五六年の月日が經つてゐるが其間彼等はつひぞ一度も顏を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。黑い髭を生やして山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに變らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髮の毛が、何故今でも元の通り黑いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な氣分を與へる媒介となつた。

彼は固より其人に出會ふ事を好まなかつた。萬一出會つても其人が自分より立派な服裝でもしてゐて呉れゝば好いと思つてゐた。然し今目前に見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。帽子を被らないのは當人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判斷したところ、何うしても中流以下の活計を營んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐた洋傘が、重さう

な毛繻子であつた事に迄氣が付いてゐた。

其日彼は家へ歸つても途中で會つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に惱まされた。然し細君には何も打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も默つてゐる夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通つた。其次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもう何處からも出て來なかつた。彼は機械のやうに又義務のやうに何時もの道を往つたり來たりした。

斯うした無事の日が五日續いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然又根津權現の坂の蔭から現はれて健三を脅した。それが此前と略同じ場所で、時間も殆ど此前と違はなかつた。

其時健三は相手の自分に近付くのを意識しつゝ、何時もの通り機械のやうに又義務のやうに歩かうとした。けれども先方の態度は正反對であつた。何人をも不安にしなければ已まない程な注意を雙眼に集めて彼を凝視した。隙さへあれば彼に近付かうとする其人の心が曇よりした眸のうちにあり〳〵と讀まれた。出來る丈容赦なく其傍を通り拔けた健三の胸には變な豫覺が起つた。

「とても是丈では濟むまい」

然し其日家へ歸つた時も、彼はつひに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしまつた。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との關係がとくの昔に切れてゐたし、其上結婚地が故鄕の東京でなかつたので、細君の方ではぢかにその人を知る筈がなかつた。然し噂として丈なら或は健三自身の口から既に話してゐたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知つてゐないとも限らなかつた。それは何れにしても健三にとつて問題にはならなかつた。

たゞ此事件に關して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事實が一つあつた。五六年前彼がまだ地方にゐる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は變な顏をして其手紙を讀んだ。然しいくら讀んでも〳〵讀み切れなかつた。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

其時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に說明する必要があつた。それから其女に關聯して、是非とも此帽子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はさうした必要にせまられた過去の自分を記憶してゐる。然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に說明してやつたか、その點になると、彼はもう忘れてゐた。細君は女の事だからまだ判然覺えてゐるだらうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問ひ訊して見る氣も起らなかつた。彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所に竝べて考へるのが大嫌ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた。

幸ひ彼の目下の狀態はそんな事に屈託してゐる餘裕を彼に與へなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換へると、すぐ自分の書齋へ這入つた。彼は始終その六疊敷の狹い疊の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持でゐるのである。けれども實際から云ふと、仕事をするよりも、しなければならないとい

ふ刺戟の方が・遙に強く彼を支配してゐた。自然彼はいらくしなければならなかつた。彼が遠い所から持つて來た書物の箱を此六疊の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。さうして何でも手に觸れるものを片端から取り上げては二三頁づゝ讀んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時迄經つても片付かなかつた。しまひに此體たらくを見るに見かねた或友人が來て、順序にも冊數にも頓着なく、ある丈の書物をさつさと書棚の上に並べてしまつた。彼を知つてゐる多數の人は彼を神經衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

三

健三は實際其日々々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど餘裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。

娛樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙しがつてゐる彼が、ある時友達から謠の稽古を勸められて、體よくそれを斷つたが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるのだらうと驚いた。さうして自分の時間に對する態度が、恰も守錢奴のそれに似通つてゐる事には、丸で氣がつかなかつた。

自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雜になればなる程、人としての彼は孤獨に陷らなければならなかつた。彼は朧氣にその淋しさを感ずる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異樣の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。

だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却つて本來だとばかり心得てゐた。溫い人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。

彼は親類から變人扱にされてゐた。然しそれは彼に取つて大した苦痛にもならなかつた。

「教育が違ふんだから仕方がない」

彼の腹の中には常に斯ういふ答辯があつた。

「矢つ張り手前味噌よ」

是は何時でも細君の解釋であつた。

氣の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出來なかつた。さう云はれる度に氣不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思つた。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張をする人の言葉のやうに響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかつた。

彼には一人の腹違の姉と一人の兄があるぎりであつた。親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともとあまり親しく往來をしてゐなかつた。自分の姉や兄と疎遠になるといふ變な事實は、彼に取つても餘り氣持の好いものではなかつた。然し親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三四回彼等と顔を合せたといふ記憶も、彼には多少の言譯になつた。もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往來する丈で、當分外の方角へは足を向けずにしまつたらう。もし其間に身體の樂に出來

る日曜が來たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を疊の上に横たへて半日の安息を貪るに過ぎなかつたらう。然し次の日曜が來た時、彼は不圖途中で二度會つた男の事を思ひ出した。さうして急に思ひ立つたやうに姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫といふのは健三の從兄にあたる男だから、つまり姉にも從兄であつた。然し年齡は同年か一つ違で、健三から見ると雙方とも、一廻りも上であつた。此夫がもと四谷の區役所へ勤めた緣故で、彼が其處を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なのも搆はず、矢つ張り元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

四

此姉は喘息持であつた。年が年中ぜい〳〵云つてゐた。それでも生れ付が非常な癇性なので、餘程苦しくないと決して凝としてゐなかつた。何か用を拵へて狹い家の中を始終ぐる〳〵廻つて歩かないと承知しなかつた。其落付のないがさつな態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。

姉は又非常に喋舌る事の好な女であつた。さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがなかつた。彼女と對坐する健三は屹度苦い顏をして默らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懷が起つた。

其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍しく能く來て呉れたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲團を勸めて緣側へ手を洗ひに行つた。

健三は其留守に座敷のなかを見廻した。欄間には彼が子供の時から見覺えのある古ぼけた額が懸つてゐた。其落款に書いてある筒井憲といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大變字が上手なんだと、十五六の昔此處の主人から敎へられた事を思ひ出した。彼はその主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果を捥いで食つて、其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買つて遣ると云つて彼を騙したなり何時迄經つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪つて來ても堪忍してやらないと覺悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が詫らないので、仕方なしに此方からのこ／＼出掛けて行つた癖に、手持無沙汰なので、向うで御這入りといふ迄、默つて門口に立つてゐた滑稽もあつた。

……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明かな記憶の探照燈を向けた。さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出來にくゝなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身體の具合はどうです。あんまり非道く起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐つた姉の顏を見ながら斯う訊ねた。

「えゝ有難う。御蔭さまで陽氣が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事丈は遣つてるんだけれども。

「——でも矢張り年が年だからね。とても昔の樣にがせいに働く事は出來ないのさ。昔健ちやんの遊びに來てくれた時分にや、隨分尻つ端折りで、夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ぢやとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭樣で斯う遣つて毎日牛乳も飮んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。

「少し瘦せた樣ですね」

「なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから、矢つ張り癇が强いもんだからね。癇で肥る事が出來ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黑い半圓形の暈が、怠さうな皮で物憂げに染めてゐた。健三は默つて其ぱさ〳〵した手の平を見詰めた。

「でも健ちやんは立派になつて本當に結構だ。御前さんが外國へ行く時なんか、もう二度と生きて會ふ事は六づかしからうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で歸つて來られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出でだつたら嘸御喜びだらう」

姉の眼にはいつか淚が溜つてゐた。姉は健三の子供の時分、「今に姉さんに御金が出來たら、健ちやんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云つてゐた。さうかと思ふと、「こんな偏窟ぢや此子はとても物にやならない」とも云つた。健三は姉の昔の言葉やら語氣やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚び起すにつけても、久しく會はなかつた姉の老けた樣子が一層健三の眼についた。
「時に姉さんは幾何でしたかね」
「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」
姉は黄色い疎らな齒を出して笑つて見せた。實際五十一とは健三にも意外であつた。
「すると私とは一廻以上違ふんだね。健ちやんとは十六違ふんだよ、姉さんは。良人が未の三碧で姉さんが四綠なんだから。健ちやんは慥か七赤だつたね」
「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」
「繰つて見て御覽、屹度七赤だから」
健三はどうして自分の星を繰るのかそれさへ知らなかつた。年齢の話はそれぎり已めてしまつた。
「今日は御留守なんですか」と比田の事を訊いて見た。
「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に三度か四度で濟むんだけれども、他に頼まれるもんだからね。それに一晩でも餘計泊りさへすればやつぱり若干かになるだらう、それでつい他の分迄引受ける氣にもなるのさ。此頃ぢや彼方へ寢るのと此方へ歸るのと、まあ半々位なものだらう。ことによると、向うへ泊る方が却つて多いかも知れないよ」

健三は默つて障子の傍に据ゑてある比田の机を眺めた。硯箱や狀袋や卷紙がきちりと行儀よく竝んでゐる傍に、簿記用の帳面が赤い脊皮を此方へ向けて、二三冊立て懸けてあつた。それから綺麗に光つた小さい算盤も其下に置いてあつた。

噂によると比田は此頃變な女に關係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに圍つてゐるといふ評判であつた。宿直だ宿直だと云つて宅へ歸らないのは、或はその所爲ぢやなからうかと健三には思へた。

「比田さんは近頃どうです。大分年を取つたから元とは違つて眞面目になつたでせう」

「なに矢つ張り相變らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて來た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だつて、御金さへありや年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇體なもんで、年の所爲だか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなつたやうだよ。もとは健ちやんも知つてる通りの始末で、隨分烈しかつたもんだがね。蹴つたり、敲いたり、髮の毛を持つて座敷中引摺廻したり……」

「其代り姉さんも負けてる方ぢやなかつたんだからな」

「なに私や手出しなんかした事あ、ついの一度だつてありやしない」

健三は勝氣な姉の昔を考へ出してつい可笑くしなつた。二人の立ち廻りは今姉の自白するやうに受身いものばかりでは決してなかつた。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だつた。それにしても此利かぬ氣の姉が、夫に騙されて、彼が宅へ歸らない以上、屹度會社へ泊つてゐるに違ひないと信じ切つてゐるのが妙に不憫に思はれて來た。

「久し振に何か奢りませうか」と姉の顔を眺めながら云つた。

「ありがと、今御鮨をさういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてつて御呉れ」

姉は客の顔さへ見れば、時間に關係なく、何か食はせなければ承知しない女であつた。健三には仕方がないから尻を落付けてゆつくり腹の中に持つて來た話を姉に切り出す氣になつた。

六

近頃の健三は頭を餘計遣ひ過ぎる所爲か、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の悪強には敵はなかつた。

「海苔卷なら身體に障りやしないよ。折角姉さんが健ちやんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔卷を頬張つて、好い加減煙草で荒らされた口のうちをもぐ〳〵させた。

姉が餘り饒舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な會話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて來た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田だつて要りやしないやね、汚い達磨なんか」
健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。すると姉は何か秘密話でもするやうに急に調子を低くした。
「實は健ちやん、御前さんが歸つて來たら、話さう／＼と思つて、つい今日迄默つてたんだがね。健ちやんも歸りたてゞ嘸忙しからうし、夫に姉さんが出掛けて行くにしたところで、お住さんが居ちや、少し話し惡い事だしね。さうかつて、手紙を書かうにも御存じの無筆だらう……」
姉の前置は長たらしくもあり、又滑稽でもあつた。小さい時分いくら手習をさせても記憶が惡くつて、どんなに平易しい字も、とう／＼頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて來た女だと思ふと、健三にはわが姉ながら氣の毒でもあり又うら恥づかしくもあつた。
「それで姉さんの話つてえな、一體どんな話だんです。實は私も今日は少し姉さんに話があつて來たんだが」
「さうかい夫ぢやお前さんの方のから先へ聽くのが順だつたね。何故早く話さなかつたの」
「だつて話せないんだもの」
「そんなに遠慮しないでもいゝやね、姉弟の間ぢやないか、お前さん」
姉は自分の多辯が相手の口を塞いでゐるのだといふ明白な事實には毫も氣が付いてゐなかつた。
「まあ姉さんの方から先へ片付けませう。何ですか、あなたの話つていふのは」

「實は健ちやんにはまことに氣の毒で、云ひ惡いんだけれども、あたしも段々年を取つて身體は弱くなるし、夫に良人があの通りの男で、自分一人さへ好けりや女房なんか何うなつたつて、己の知つた事ぢやないつて顔をしてゐるんだから。――尤も月々の取高が少い上に、交際もあるんだから、仕方がないと云へば夫迄だけれどもね……」

姉の云ふ事は女丈に隨分曲りくねつてゐた。中々容易な事で目的地へ達しさうになかつたけれども、其主意は健三によく解つた。つまり月々遣る小遣をもう少し增して吳れといふのだらうと思つた。今でさへそれをよく夫から借りられてしまふといふ話を耳にしてゐる彼には、此請求が憐れでもあり、又腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつて此身體ぢやどうせ長い事もあるまいから」

是が姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭だとは云ひかねた。

七

彼は是から宅へ歸つて今夜中に片付けなければならない明日の仕事を有つてゐた。時間の價値といふものを少しも認めない此姉と對坐して、何時迄も、べん〳〵と喋舌つてゐるのは、彼にとつて多少の苦痛に違なかつた。彼は好加減に歸らうとした。さうして歸る間際になつてやつと帽子を被らない男の事を云ひ出した。

「實は此間島田に會つたんですがね」

「へえ何處で」
姉は吃驚したやうな聲を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。
「太田の原の傍です」
「ぢや御前さんのぢき近所ぢやないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」
「掛けるつて、別に言葉の掛けやうもないんだから」
「さうさね。健ちやんの方から何とか云はなきや、向うで口なんぞ利けた義理でもないんだから」
姉の言葉は出來る丈健三の意を迎へるやうな調子であつた。彼女は健三に「どんな服裝をしてゐたい」と訊き足した後で、「ぢや矢つ張り樂でもないんだね」と云つた。其處には多少の同情も籠つてゐるやうに見えた。然し男の昔を話し出した時にはさも〳〵惡らしさうな語氣を用ひ始めた。
「なんぼ因業だつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言譯を云つても、坐り込んで動かないんだもの。仕舞に此方も腹が立つたから、お氣の毒さま、お金はありませんが、品物で好ければ、お鍋でもお釜でも持つてつて下さいつて云つたらね、おや釜を持つてくつて云ふんだよ。あきれるぢやないか」
「釜を持つて行くつたつて、重くつて到底持てやしないでせう」
「ところがあの業突張の事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。そら其日の御飯をあたしに炊かせまいと思つて、さういふ意地の惡い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好い事あ

ない筈だあね」
健三の耳には此話がたゞの滑稽としては聞こえなかつた。其人と姉との間に起つた斯んな交渉のなかに引絡まつてゐる古い自分の影法師は、彼に取つて可笑しいといふよりも寧ろ悲しいものであつた。
「私や島田に二度會つたんですよ、姉さん。是から先又何時會ふか分らないんだ」
「いゝから知らん顔をして御出でよ。何度會つたつて構はないぢやないか」
「然し、わざ〳〵彼處いらを通つて、私の宅でも探してゐるんだか、また用があつて通りがゝりに偶然出つくはしたんだか、それが分らないんでね」
此疑問は姉にも解けなかつた。彼女はたゞ健三に都合の好ささうな言葉を無意味に使つた。それが健三には空御世辭のごとく響いた。
「此方へは其後丸で來ないんですか」
「あゝ此二三年は丸つきり來ないよ」
「其前は？」
「其前にはね、ちよく〳〵つて程でもないが、それでも時々は來たのさ。それが又可笑しいんだよ。來ると何時でも十一時頃でね。鰻飯かなにか食べさせないと決して歸らないんだからね。三度の御まんまを一かたけでも好いから他の家で食べようつて云ふのがつまりあの人の腹なんだよ。其癖服裝なんか可なりなものを着てゐるんだがね。……」
姉のいふ事は脫線しがちであつたけれども、それを聽いてゐる健三には、矢張り金錢上の問題で、自分

が東京を去つたあとも、なほ多少の交際が二人の間に持續されてゐたのだといふ見當はついた。然しそれ以上何も知る事は出來なかつた。目下の島田に就いては全く分らなかつた。

八

「島田は今でも元の處に住んでゐるんだらうか」

斯んな簡單な質問さへ姉には判然答へられなかつた。健三は少し的が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所を突き留めようと迄は思つてゐなかつたので、大した失望も感じなかつた。彼は此場合まだそれ程の手數を盡す必要がないと信じてゐた。たとひ盡すにした所で、一種の好奇心を滿足するに過ぎないとも考へてゐた。其上今の彼は斯ういふ好奇心を輕蔑しなければならなかつた。彼の時間はそんな事に使用するには餘りに高價すぎた。

彼はたゞ想像の眼で、子供の時分見た其人の家と、其家の周圍とを、心のうちに思ひ浮べた。

其處には往來の片側に幅の廣い大きな堀が一丁も續いてゐた。水の變らない其堀の中は腐つた泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さへ彼の鼻を襲つた。彼はその汚ならしい一廓を――樣のお屋敷といふ名で覺えてゐた。

堀の向う側には長屋がずつと並んでゐた。其長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあつた。石垣とすれ／＼に建てられた此長屋が何處迄も續いてゐるので、お屋敷のなかは丸で見えなかつた。

此お屋敷と反對の側には小さな平家が疎らに並んでゐた。古いのも新しいのもごちや／＼に交つてゐた

其町並は無論不揃であつた。老人の齒のやうに所々が空いてゐた。その空いてゐる所を少し許り買つて島田は彼の住居を拵へたのである。

健三はそれが何時出來上つたか知らなかつた。然し彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間しかない狹い家だつたけれども、木口抔は可成吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六疊の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狹い庭に、大き過ぎる程立派な御影の石燈籠が据ゑてあつた。

綺麗好きな島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雜巾を緣側や柱へ掛けた。それから跣足になつて、南の居間の前栽へ出て、草毟りをした。あるときは鍬を使つて、門口の泥溝も浚つた。其泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つてゐた。

島田はまた此住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。さうして雙方の家の間を通り拔けて裏へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない濕地であつた。草を踏むとじく／＼水が出た。一番凹んだ所などは始終淺い池のやうになつてゐた。島田は追々其處へも小さな貸家を建てる積でゐるらしかつた。然し其企ては何時迄も實現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやらう抔と云つてゐた。……

健三は斯ういふ昔の記憶を夫から夫へと繰り返した。今其處へ行つて見たら定めし驚く程變つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。

「ことによると、良人では年始狀位まだ出してゐるかも知れないよ」

健三の歸る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勸めたが、彼にはそれ程の必要もなかつた。

彼は其日無沙汰見舞かた〴〵市ケ谷の藥王寺前にゐる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見ようかと考へてゐたが、時間の遲くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないといふ氣が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ歸つた。其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。さうして島田の事は丸で忘れてしまつた。

九

彼はまた平生の我に歸つた。活力の大部分を擧げて自分の職業に使ふ事が出來た。彼の時間は靜かに流れた。然し其靜かなうちには始終いら〳〵するものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めてゐなければならなかつた細君は、別に手の出しやうもないので澄ましてゐた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思へなかつた。細君はまた心の中で彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなる程、夫婦間の交渉は、用事以外に少くならなければならない筈だと云ふのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢ひ健三を一人書齋に遺して置いて、子供丈を相手にした。其子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、屹度何か惡戯をして健三に叱られた。彼は子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等に對して、やはり一種の物足りない心持を抱いてゐた。

一週間後の日曜が來た時、彼は丸で外出しなかつた。氣分を變へるため四時頃風呂へ行つて歸つたら、急にうつとりした好い氣持に襲はれたので、彼は手足を疊の上へ伸ばしたまゝ、つい假寐をした。さうして晩食の時刻になつて、細君から起される迄は、首を切られた人のやうに何事も知らなかつた。然し起きて膳に向つた時、彼には微かな寒氣が脊筋を上から下へ傳はつて行くやうな感じがあつた。その後で烈しい嚔が二つ程出た。傍にゐる細君は默つてゐた。健三も何も云はなかつたが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に對する厭な心持を意識しつゝ箸を取つた。細君の方ではまた夫が何故自分に何もかも隔意なく話して、能働的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却つて不愉快に思つた。

其晩彼は明かに多少風邪氣味であるといふ事に氣が付いた。用心して早く寢ようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過迄起きてゐた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆寢てゐた。熱い葛湯でも飲んで、發汗したい希望をもつてゐた健三は、已むを得ず其儘冷たい夜具の裏に潛り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寢付が大變惡かつた。然し頭腦の疲勞は程なく彼を深い眠りの境に誘つた。

翌日眼を覺した時は存外安靜であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒つたものと考へた。然し愈起きて顏を洗ふ段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位身體が倦怠くなつてきた。勇氣を鼓して食卓に着いて見たが、朝食は少しも旨くなかつた。いつもは規定として三膳食べる所を、其日は一膳で濟ました後、梅干を熱い茶の中に入れてふう〳〵吹いて呑んだ。然し其意味は彼自身にも解らなかつた。此時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしてゐたが、別に何も云はなかつた。彼には其態度がわざと冷淡に構へてゐる技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳を二度も三度もして見せた。夫でも細君は依然として

取り合はなかつた。
　健三はさつさと頭から白襯衣を被つて洋服に着換へたなり例刻に宅を出た。細君は何時もの通り帽子を持つて夫を玄關迄送つて來たが、此時の彼にはそれがたゞ形式丈を重んずる女としか受取れなかつたので、彼は猶厭な心持がした。
　外ではしきりに惡感がした。舌が重々しくぱさついて、熱のある人のやうに身體全體が倦怠かつた。彼は自分の脈を取つて見て、其早いのに驚いた。指頭に觸れるピン／＼いふ音が、秒を刻む袂時計の音と錯綜して、彼の耳に異樣な節奏を傳へた。それでも彼は我慢して、爲る丈の仕事を外でした。

十

　彼は例刻に宅へ歸つた。洋服を着換へる時、細君は何時もの通り、彼の不斷着を持つた儘、彼の傍に立つてゐた。彼は不快な顏をして其方を向いた。
「床を取つて呉れ。寢るんだ」
「はい」
　細君は彼のいふが儘に床を延べた。彼はすぐ其中に入つて寢た。彼は自分の風邪氣の事を一口も細君に云はなかつた。細君の方でも一向其處に注意してゐない樣子を見せた。それで雙方とも腹の中には不平があつた。
　健三が眼を塞いでうつら／＼してゐると、細君が枕元へ來て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりますか」

「飯なんか食ひたくない」

細君はしばらく黙つてゐた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。

「あなた、何うかなすつたんですか」

健三は何も答へずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めてゐた。細君は無言のまゝ、そつと其手を彼の額の上に加へた。

晩になつて醫者が來た。たゞの風邪だらうと云ふ診察を下して、水藥と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲まして貰つた。

翌日は熱が猶高くなつた。醫者の注意によつて護謨の氷嚢を彼の頭の上に載せた細君は、蒲團の下に差し込むニッケル製の器械を下女が買つてくる迄、自分の手で落ちないやうにそれを抑へてゐた。

魔に襲はれたやうな氣分が二三日つゞいた。健三の頭には其間の記憶といふものが殆どない位であつた。正氣に歸つた時、彼は平氣な顔をして天井を見た。それから枕元に坐つてゐる細君を見た。さうして急に其細君の世話になつたのだといふ事を思ひ出した。然し彼は何も云はずに又顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなた何うなすつたんです」

「風邪を引いたんだつて、醫者が云ふぢやないか」

「そりや解つてます」

會話はそれで途切れてしまつた。細君は厭な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らして又細君を呼び戻した。

「己が何うしたといふんだい」

「何うしたつて、――あなたが御病氣だから、私だつて斯うして氷嚢を更へたり、藥を注いだりして上げるんぢやありませんか。それを彼方へ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後を云はずに下を向いた。

「そんな事を云つた覺えはない」

「そりや熱の高い時仰しやつた事ですから、多分覺えちや居らつしやらないでせう。けれども平生からさう考へてさへ居らつしやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる譯がないと思ひますわ」

斯んな場合に健三は細君の言葉の奧に果してどの位な眞實が潛んで居るだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑へつけたがる男であつた。事實の問題を離れて、單に論理の上から行くと、細君の方が此場合に負であつた。熱に浮かされた時、魔睡藥に醉つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つて居る事ばかり物語るとは限らないのだから。然しさうした論理は決して細君の心を服するに足らなかつた。

「よござんす。何うせあなたは私を下女同樣に取り扱ふ積で居らつしやるんだから。自分一人さへ好ければ構はないと思つて、……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。彼は論理の權威で自己を佯つてゐる事には丸

で氣が付かなかつた。學問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく從ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

其の晩細君は土鍋へ入れた粥をもつて、また健三の枕元に坐つた。それを茶碗に盛りながら、「御起になりませんか」と訊いた。

彼の舌にはまだ苔が一杯生えてゐた。重苦しいやうな厚ぼつたいやうな口の中へ物を入れる氣には殆どなれなかつた。それでも彼は何故だか床の上に起き返つて、細君の手から茶碗を受取らうとした。然し舌障りの惡い飯粒が、ざら〳〵と咽喉の方へ滑り込んで行く丈なので、彼はたつた一膳で口を拭つたなり、すぐ故の通り横になつた。

「まだ食氣が出ませんね」

「少しも旨くない」

細君は帶の間から一枚の名刺を出した。

「斯ういふ人が貴方の寢て居らつしやるうちに來たんですが、御病氣だから斷つて歸しました」

健三は寢ながら手を出して、鳥の子紙に刷つた其名刺を受取つて、姓名を讀んで見たが、まだ會つた事も聞いた事もない人であつた。

「何時來たのかい」

「たしか一昨日でしたらう。一寸御話しようと思つたんですが、まだ熱が下らないから、わざと默つてゐました」

「丸で知らない人だがな」

「でも島田の事で一寸御主人に御目にかゝりたいつて、來たんださうですよ」

細君はとくに島田といふ二字に力を入れて斯う云ひながら、健三の顏を見た。すると彼の頭に此間途中で會つた帽子を被らない男の影がすぐひらめいた。熱から覺めた彼には、それ迄此男の事を思ひ出す機會が丸でなかつたのである。

「御前島田の事を知つてるのかい」

「あの長い手紙がお常さんつて女から屆いた時、貴方が御話しなすつたぢやありませんか」

健三は何とも答へずに一旦下へ置いた名刺を又取り上げて眺めた。島田の事を其時どれ程詳しく彼女に話したかそれが彼には不確であつた。

「ありや何日だつたかね。餘つ程古い事だらう」

健三は其長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思ひ出して苦笑した。

「さうね。もう七年位になるでせう。私達がまだ千本通りにゐた時分ですから」

千本通りといふのは、彼等が其頃住んでゐた或都會の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに伺はないでも、御兄さんからも聞いて知つてますわ」と云つた。

「兄が何んな事を云つたかい」

「何んな事つて、――なんでも餘り善くない人だつていふ話ぢやありませんか」

細君はまだ其男の事に就いて、健三の心を知りたい樣子であつた。然し彼にはまた反對にそれを避けたい意向があつた。彼は默つて眼を閉ぢた。盆に載せた土鍋と茶椀を持つて席を立つ前、細君はもう一度斯う云つた。

「其名刺の名前の人はまた來るさうですよ。いづれ御病氣が御癒りになつたら又伺ひますからつて、歸つて行つたさうですから」

健三は仕方なしに又眼を開いた。

「來るだらう。どうせ島田の代理だと名乘る以上は又來るに極つてるさ」

「然しあなたお會ひになつて？若し來たら」

實をいふと彼は會ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此變な男に會はせたくなかつた。

「お會ひにならない方が好いでせう」

「會つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。

十二

健三の病氣は日ならず全快した。活字に眼を曝したり、萬年筆を走らせたり、又は腕組をしてたゞ考へたりする時が再び續くやうになつた頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄關先に現れた。

健三は鳥の子紙に刷つた吉田虎吉といふ見覺のある名刺を受取つて、しばらくそれを眺めてゐた。細君は小さな聲で「御會ひになりますか」と訊ねた。

「會ふから座敷へ通してくれ」

細君は斷りたさゝうな顏をして少し躊躇してゐた。然し夫の樣子を見てとつた彼女は、何も云はずにまた書齋を出て行つた。

吉田といふのは、でつぷり肥つた、かつぷくの好い、四十恰好の男であつた。縞の羽織を着て、其頃迄流行つた白縮緬の兵兒帶にぴか／＼する時計の鎖を卷付けてゐた。言葉使ひから見ても、彼は全くの町人であつた。さうかと云つて、決して堅氣の商人とは受取れなかつた。「成程」といふべき所を、わざと「なある」と引張つたり、「御尤も」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答へたりした。

健三には會見の順序として、まづ吉田の身元から訊いてかゝる必要があつた。然し彼よりは能辯な吉田は、自分の方で、聞かれない先に、素性の概略を說明した。

彼はもと高崎に居た。さうして其處にある兵營に出入して、糧秣を納めるのが彼の商賣であつた。

「そんな關係から、段々將校方の御世話になるやうになりまして、其内でも柴野の旦那には特別御贔屓になつたものですから」

健三は柴野といふ名を聞いて急に思ひ出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつ

た。

「其縁故で島田を御承知なんですね」

二人はしばらくその柴野といふ士官に就いて話し合つた。彼が今高崎に居ない事や、もつと遠くの西の方へ轉任してから幾年目になるといふ事や、相變らずの大酒で家計があまり裕でないといふ事や、すべて是等は、健三に取つて耳新しい報知に違なかつたが、同時に大した興味を惹く話題にもならなかつた。此夫婦に對して何等の惡感も抱いてゐない健三は、たゞ左右かと思つて平氣に聞いてゐる丈であつた。然し話が本筋に入つて、愈々島田の事を持ち出された時、彼は自然厭な心持がした。

吉田はしきりに此老人の窮迫の狀を訴へ始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙されてみんな損つちまふんです。とても取れる見込のないのに無暗に金を出してやつたり何かするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでせうか。あんまり慾張るからぢやありませんか」

たとひ吉田のいふ通り老人が困窮して居るとした所で、健三には斯うより外に解釋の道はなかつた。しかも困窮といふからしてが既に怪しかつた。肝心の代表者たる吉田も強ひて其點は辯護しなかつた。「或はさうかも知れません」と云つたなり、後は笑に紛らしてしまつた。其癖月々若干か貢いで遣つて呉れる譯には行くまいかといふ相談をすぐ其後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の經濟事情を打明けて、此一面識しかない男に話さなければならなくなつた。彼は自己の手に入る百二三十圓の月收が、何う消費されつゝあるかを詳しく說明して、月々あとに殘るもの

は零だと云ふ事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の辯解を聽いた。然し彼が何處迄彼を信用して、何處から彼を疑ひ始めてゐるか、其點は健三にも分らなかつた。たゞ先方は何處迄も下手に出る手段を主眼としてゐるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請がましい樣子は噫にも出さなかつた。

十三

是で吉田の持つて來た用件の片が付いたものと解釋した健三は、心のうちで暗に彼の歸るのを豫期した。然し彼の態度は明かに此豫期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり觸れなかつたが、毒にも藥にもならない世間話を何時迄も續けて動かなかつた。さうして自然天然話頭をまた島田の身の上に戻して來た。

「何んなものでせう。老人も取る年で近頃は大變心細さうな事ばかり云つてゐますが、――元通りの御交際は願へないものでせうか」

健三は一寸返答に窮した。仕方なしに默つて二人の間に置かれた煙草盆を眺めてゐた。彼の頭のなかには、重たさうに毛繻子の洋傘をさして、異樣の瞳を彼の上に据ゑた其老人の面影があり／＼と浮かんだ。彼は其人の世話になつた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に人格の反射から來る其人に對しての嫌惡の情も禁ずる事が出來なかつた。兩方の間に板挾みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角斯うして上がつたものですから、是丈は何うぞ曲げて御承知を願ひたいもので」

吉田の樣子は愈々丁寧になつた。何う考へても交際ふのは厭でならなかつた健三は、また何うしてもそ

れを斷るのを不義理と認めなければ濟まなかつた。彼は厭でも正しい方に從はうと思ひ極めた。

「さういふ譯なら宜しう御座います。承知の旨を向うへ傳へて下さい。然し交際は致しても、昔のやうな關係ではとても出來ませんから、それも誤解のないやうに申し傳へて下さい。それから私の今の狀況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰藉を與へるなんて事は六づかしいのですが……」

「するとまあたゞ御出入りをさせて戴くといふ譯になりますな」

健三には御出入といふ言葉を聞くのが辛かつた。左右だとも左右でないとも云ひかねて、また口を閉ぢた。

「いえなに夫で結構で、――昔と今とは事情も丸で違ひますから」

吉田は自分の役目が漸く濟んだといふ顏付をして斯う云つた後、今迄持ち扱つてゐた煙草入を腰へさしたなり、さつさと歸つて行つた。

健三は彼を玄關迄送り出すと、すぐ書齋へ入つた。其日の仕事を早く片付けようといふ氣があるので、いきなり机へ向つたが、心の何處かに引懸りが出來て、中々思ふ通りに捗取らなかつた。

其處へ細君が一寸顏を出した。「あなた」と二遍ばかり聲を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君が其儘默つて引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方迄續けた。

平生よりは遲くなつて漸く夕飯の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換はした。

「先刻來た吉田つて男は一體何なんですか」と細君が訊いた。

「元高崎で陸軍の用達か何かしてゐたんださうだ」と健三が答へた。

問答は固より夫丈で盡きる筈がなかつた。彼女は吉田と柴野との關係やら、彼と島田との間柄やらに就いて、自分に納得の行く迄夫から說明を求めようとした。

「何うせ御金か何か吳れつて云ふんでせう」

「まあ左右だ」

「それで貴方何うなすつて。――どうせ御斷りになつたでせうね」

「うん、斷つた。斷るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分等の家の經濟狀態を別々に考へた。月々支出してゐる、また支出しなければならない金額は、彼に取つて隨分苦しい勞力の報酬であると同時に、それで凡てを賄つて行く細君に取つても、少しも裕なものとは云はれなかつた。

十四

健三はそれぎり座を立たうとした。然し細君にはまだ訊きたい事が殘つてゐた。

「それで素直に歸つて行つたんですか、あの男は。少し變ね」

「だつて斷られゝば仕方がないぢやないか。喧嘩をする譯にも行かないんだから」

「だけど、又來るんでせう。あゝして大人しく歸つて置いて」

「來ても構はないさ」

「でも厭ですわ、蒼蠅くつて」

健三は細君が次の間で先刻の會話を殘らず聽いてゐたものと察した。
「御前聞いてたんだらう、悉皆」
細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。
「ぢや夫で好いぢやないか」
健三は斯う云つたなり、又立つて書齋へ行かうとした。彼は獨斷家であつた。これ以上細君に說明する必要は、始めからないものと信じてゐた。細君もさうした點に於いて夫の權利を認める女であつた。けれども表向夫の權利を認める丈に、腹の中には何時も不平があつた。事々について出て來る權柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ氣が、絕えず彼女の胸の奧に働いた。其癖夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に十分具へてゐないといふ事實には全く無頓着であつた。
「あなた島田と交際つても好いと受合つて居らしつたやうですね」
「あゝ」
健三はそれが何うしたといつた風の顏付をした。細君は何時でも此處迄來て默つてしまふのを例にしてゐた。彼女の性質として、夫が斯ういふ態度に出ると、急に厭氣がさして、それから先一步も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な樣子が又夫の氣質に反射して、益彼を權柄づくにしがちであつた。
「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構はないぢやないか、己一人で極めたつて」
「そりや私に對して何も構つて頂かなくつても宜ござんす。構つて呉れつたつて、どうせ構つて下さる

方ぢやないんだから……」

學問をした健三の耳には、細君のいふ事が丸で脱線であつた。さうして其脱線は何うしても頭の惡い證據としか思はれなかつた。「又始まつた」といふ氣が腹の中でした。然し細君はすぐ當の問題に立ち戻つて、彼の注意を惹かなければならないやうな事を云ひ出した。

「然し御父さまに惡いでせう。今になつてあの人と御交際になつちやあ」

「御父さまつて己のおやぢかい」

「無論貴方の御父さまですわ」

「己のおやぢはとうに死んだぢやないか」

「然し御亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後一切付合をしちやならないつて仰しやつたさうぢやありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した當時の光景をよく覺えてゐた。然し彼は自分の父に對して左程情愛の籠つた優しい記憶を有つてゐなかつた。其上絶交云々に就いても、さう嚴重に云ひ渡された覺はなかつた。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話した積りはないがな」

「貴方ぢやありません。御兄さんに伺つたんです」

細君の返事は健三に取つて不思議でも何でもなかつた。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を與へなかつた。

「おやぢは阿爺、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶する丈の根據がないんだから」

斯う云ひ切つた健三は、腹の中で其交際が厭で／＼堪らないのだといふ事實を意識した。けれどもその腹の中は丸で細君の胸に映らなかつた。彼女はたゞ自分の夫が又例の頑固を張り通して、徒らに皆の意見に反對するのだとばかり考へた。

十五

健三は昔其人に手を引かれて歩いた。其人は健三のために小さい洋服を拵へて呉れた。大人さへあまり外國の服裝に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイル抔には丸で頓着しなかつた。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ竝んでゐて、胸は開いた儘であつた。霜降の羅紗も硬くごは／＼して、極めて手觸りが粗かつた。ことに洋袴は薄茶色に竪溝の通つた調馬師でなければ穿かないものであつた。然し當時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子も其頃の彼には珍らしかつた。淺い鍋底の樣な形をしたフエルトをすぽりと坊主頭へ頭巾のやうに被るのが、彼に大した滿足を與へた。例の如く其人に手を引かれて、寄席へ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚きながら心配さうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫でまはして見た事もあつた。

其人は又彼のために尾の長い金魚をいくつも買つて呉れた。武者繪、錦繪、二枚つゞき三枚つゞきの繪

も彼の云ふがまゝに買つて呉れた。彼は自分の身體にあふ緋縅しの鎧と龍頭の兜さへ持つてゐた。彼は日に一度位づゝ其具足を身に着けて、金紙で拵へた采配を振り舞はした。

彼はまた子供の差す位な短い脇差の所有者であつた。その脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く彫刻で出來上つてゐた。彼は銀で作つた此鼠と珊瑚で拵へた此唐辛子とを、自分の寶物のやうに大事がつた。彼は時々此脇差が拔いて見たくなつた。また何度も拔かうとした。けれども脇差は何時も拔けなかつた。――この封建時代の裝飾品も矢張其人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまた其人に連れられて、よく船に乘つた。船には屹度腰蓑を着けた船頭が居て網を打つた。いなだの鯔だのが水際迄來て跳ね躍る樣が小さな彼の眼に白金のやうな光を與へた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕いで行つて、海鯽といふもの迄捕つた。さういふ場合には高い波が來て舟を搖り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。さうして舟の中へ寢てしまふ事が多かつた。彼の最も面白がつたのは河豚の網にかゝつた時であつた。彼は杉箸で河豚の腹をかんから太鼓のやうに叩いて、その膨れたり怒つたりする樣子を見て樂しんだ。……

吉田と會見した後の健三の胸には、不圖斯うした幼時の記憶が續々湧いて來る事があつた。凡てそれらの記憶は、斷片的な割に鮮明に彼の心に映るもの許りであつた。さうして斷片的ではあるが、どれもこれも決して其人と引離す事は出來なかつた。零碎の事實を手繰り寄せれば寄せる程、種が無盡藏にあるやうに見えた時、又其無盡藏にある種の各自のうちには必ず帽子を被らない男の姿が織り込まれてゐるといふ事を發見した時、彼は苦しんだ。

「斯んな光景をよく覺えてゐる癖に何故自分の有つてゐた其頃の心が思ひ出せないのだらう」

これが健三にとつて大きな疑問になつた。實際彼は幼少の時分是程世話になつた人に對する當時のわが心持といふものを丸で忘れてしまつた。

「然しそんな事を忘れる筈がないんだから、ことによると始めから其人に對して丈は、恩義相應の情合が缺けてゐたのかも知れない」

健三は斯うも考へた。のみならず多分此方だらうと自分を解釋した。

彼は此事情に就いて思ひ出した幼少の時の記憶を細君に話さなかつた。感情に脆い女の事だから、もし左右でもしたら、或は彼女の反感を和げるに都合が好からうとさへ思はなかつた。

十六

待ち設けた日がやがて來た。吉田と島田とはある日の午後連れ立つて健三の玄關に現はれた。

健三は此昔の人に對して何んな言葉を使つて、何んな應對をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれ等を極めて呉れる自然の衝動が今の彼には丸で缺けてゐた。彼は二十年餘も會はない人と膝を突き合せながら、大した懷かしみも感じ得ずに、寧ろ冷淡に近い受答へばかりしてゐた。

島田はかねて横風だといふ評判のある男であつた。健三の兄や姉は單にそれ丈でも彼を忌み嫌つてゐる位であつた。實は健三自身も心のうちでそれを恐れてゐた。今の健三は、單に言葉遣ひの末でさへ、斯んな男から自尊心を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評價してゐた。

然し島田は思つたよりも丁寧であつた。普通初見の人が挨拶に用ひる「ですか」とか「ません」とかいふてにはで、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないやうに見えた。健三はむかし其人から健坊々々と呼ばれた幼い時分を思ひ出した。關係が絶えてからも、會ひさへすれば、矢張り同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「然しこの調子なら好いだらう」

健三はそれで、出來る丈不快の顏を二人に見せまいと力めた。向うも成るべく穩かに歸る積りと見えて、少しも健三の氣を惡くするやうな事は云はなかつた。それがために、當然雙方の間に話題となるべき懷舊談抔も殆ど出なかつた。從つて談話はや〻ともすると途切れ勝になつた。

健三はふと雨の降つた朝の出來事を考へた。

「此間二度程途中で御目にか〻りましたが、時々あの邊を御通りになるんですか」

「實はあの高橋の總領の娘が片付いてゐる所がつい此先にあるもんですから」

高橋といふのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあ」

「そら知つてるでせう。あの芝の」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其處の家は何でも神主か坊主だといふ事を健三は子供心に聞いて覺えてるやうな氣もした。然しその親類の人には、要さんといふ彼とおない年位な男に、一二遍會つたぎりで、他のものに顏を合せた記憶は丸でなかつた。

「芝といふと、たしかお藤さんの妹さんに當る方の御嫁に入らしつた所でしたね」
「いえ姉ですよ。妹ではないんです」
「はあ」
「要三丈は死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら總領のに、多分知つておいでだらう、――へ行つたんです」
――といふ名前は成程健三に耳新しいものではなかつた。然しそれはもう餘程前に死んだ人であつた。
「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん／＼て重寶がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出來たものだから、殆ど毎日のやうに此處の前を通ります」
健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。たとひ一錢でも二錢でも負けさせなければ物を買つた例のない此人は、其時も僅か五厘の釣錢を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。
「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」
健三は斯う考へながら、島田の顏を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに氣が付かないらしかつた。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺して行つて呉れたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、何うにか斯うにか遣つて行けるんです」

島田は――の作つた書物を世の中の誰でもが知つてゐなければならない筈だといつた風の口調で斯う云つた。然し健三は不幸にして其著書の名前を知らなかつた。字引か教科書だらうとは推察したが、別に訊いて見る氣にもならなかつた。

「本といふものは實に有難いもので、一つ作つて置くとそれが何時迄も賣れるんですからね」

健三は默つてゐた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るやうな事を云つた。

「御祝儀は濟んだが、――が死んだ時後が女だけだもんだから。實は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々若干と極めて、向うから收めさせるやうにしたんです」

「へえ、大したもんですな。成程何うも學問をなさる時は、それ丈資金が要るやうで、一寸損な氣もしますが、さて仕上げて見ると、つまり其方が利廻りの好い譯になるんだから、無學のものはとても敵ひませんな」

「結局得ですよ」

彼等の應對は健三に何の興味も與へなかつた。其上いくら相槌を打たうにも打たれないやうな變な見當へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、已むを得ず二人の顏を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

其庭はまた見苦しく手入の屆かないものであつた。何時綠をとつたか分らないやうな一本の松が、息苦

しさうに蒼黑い葉を垣根の傍に茂らしてゐる外に、木らしい木は殆どなかつた。箒に馴染まない地面は小石交りに凸凹してゐた。

「此方の先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない譯に行かなかつた。仕方なしに「えゝ儲けたいもので すね」と云つて跋を合せた。

「なに譯はないんです。洋行迄すりや」

是は年寄の言葉であつた。それが恰も自分で學資でも出して、健三を洋行させたやうに聞こえたので、彼は厭な顏をした。然し老人は一向そんな事に頓着する樣子も見えなかつた。迷惑さうな健三の體を見ても澄ましてゐた。仕舞に吉田が例の煙草入を腰へ差して、「では今日は是で御暇を致す事にしませうか」と催促したので、彼は漸く歸る氣になつたらしかつた。

二人を送り出して又一寸座敷へ戻つた健三は、再び座蒲團の上に坐つたまゝ、腕組をして考へた。

「一體何の爲に來たのだらう。是ぢや他を厭がらせに來るのと同じ事だ。あれで向うは面白いのだらうか」

彼の前には先刻島田の持つて來た手土産が其儘置いてあつた。彼はほんやり其粗末な菓子折を眺めた。何も云はずに茶碗だの煙草盆を片付け始めた細君は、仕舞に默つて坐つてゐる彼の前に立つた。

「あなたまだ其處に坐つて居らつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上らうとした。
「あの人達はまた來るんでせうか」
「來るかも知れない」
彼は斯う言ひ放つた儘、また書齋へ入つた。一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが濟むと、菓子折を奪り合ふ子供の聲がした。凡てがやがて靜になつたと思ふ頃、黄昏の空から又雨が落ちて來た。健三は買はう／＼と思ひながら、ついまだ買はずにゐるオヴーシューの事を思ひ出した。

十八

雨の降る日が幾日も續いた。それがからりと晴れた時、染付けられたやうな空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい思ひをして、縫針にばかり氣をとられてゐた細君は、縁鼻へ出て此蒼い空を見上げた。それから急に簞笥の抽斗を開けた。
彼女が服裝を改めて夫の顏を覗きに來た時、健三は頰杖を突いたまゝ盆槍汚ない庭を眺めてゐた。
「あなた何を考へて居らつしやるの」
健三は一寸振り返つて細君の餘所行姿を見た。其刹那に爛熟した彼の眼は不圖した新らし味を自分の妻の上に見出した。
「何處かへ行くのかい」
「えゝ」

細君の答は彼に取つて餘りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの侘びしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜しくつて御蒼蠅いでせうから」

其日曜の午後を健三は獨り靜かに暮らした。

細君の歸つて來たのは、彼が夕飯を濟まして又書齋へ引き取つた後なので、もう灯が點いてから一二時間經つてゐた。

「只今」

遲くなりましたとも何とも云はない彼女の無愛嬌が、彼には氣に入らなかつた。彼は一寸振り向いた丈で口を利かなかつた。するとそれが又細君の心に暗い影を投げる媒介となつた。細君も其儘立つて茶の間の方へ行つてしまつた。

話をする機會はそれぎり二人の間に絶えた。彼等は顏さへ見れば自然何か云ひたくなるやうな仲の好い夫婦でもなかつた。又それ丈の親しみを現すには、御互か御互に取つてあまりに陳腐過ぎた。

二三日經つてから細君は始めて其日外出した折の事を食事の時話題に上せた。

「此間宅へ行つたら、門司の叔父に會ひましてね。隨分驚いちまひました。まだ臺灣にゐるのかと思つたら、何時の間にか歸つて來てゐるんですもの」

門司の叔父といふのは油斷のならない男として彼等の間に知られてゐた。健三がまだ地方にゐる頃、彼が突然汽車で遣つて來て、急に入用が出來たから、是非共少し都合して呉れまいかと賴むので、健三は地

方の銀行に預けて置いた貯金を些少ながら用立てたら、立派に印紙を貼つた證文を後から郵便で送つて來た。其中に「但し利子の儀は」といふ文句迄書き添へてあつたので、健三は寧ろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて來なかつた。

「今何をしてるのかね」

「何をしてるんだか分りやしません。何とかの會社を起すんで、是非健三さんにも賛成して貰ひたいから、其内上る積だつて云つてました」

健三には其後を訊く必要もなかつた。彼が昔金を借りられた時分にも、此叔父は何かの會社を建てゝるとかいふので彼はそれを本當にしてゐた。細君の父もそれを疑はなかつた。叔父は其父を旨く說きつけて、門司迄引張つて行つた。さうして是が今建築中の會社だと云つて、縁もゆかりもない他人の建てゝゐる家を見せた。彼は實に此手段で細君の父から何千かの資本を捲き上げたのである。

健三は此人に就いてこれ以上何も知りたがらなかつた。細君も云ふのが厭らしかつた。然し何時もの通り會話は其處で切れてしまはなかつた。

「あの日はあまり好い御天氣だつたから、久し振りで御兄さんの所へも廻つて來ました」

「さうか」

細君の里は小石川臺町で、健三の兄の家は市ヶ谷藥王寺前だから、細君の訪問は大した迂回でもなかつた。

十九

「御兄さんに島田の來た事を話したら驚いて居らつしやいましたよ。今更來られた義理ぢやないんだつて。健三もあんなものを相手にしなければ好いのにつて」

細君の顏には多少諷諫の意が現れてゐた。

「それを聞きに、御前わざ〳〵藥王寺前へ廻つたのかい」

「またそんな皮肉を仰しやる。あなたは何うしてさう他のする事を惡くばかり御取りになるんでせう。妾あんまり御無沙汰をして濟まないと思つたから、たゞ歸りに一寸伺つた丈ですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際の義理を立てゝゐるやうなものなので、いかな健三もそれには苦情をいふ餘地がなかつた。

「御兄さんは貴夫のために心配してゐらつしやるんですよ。あゝ云ふ人と交際ひだして、また何んな面倒が起らないとも限らないからつて」

「面倒つて何んな面倒を指すのかな」

「そりや起つて見なければ、御兄さんにだつて分りつ子ないでせうけれども、何しろ碌な事はないと思つてゐらつしやるんでせう」

碌な事があらうとは健三にも思へなかつた。

「然し義理が惡いからね」

「だつて御金を遣つて緣を切つた以上、義理の惡い譯はないぢやありませんか」
手切れの金は昔養育料の名前の下に健三の父の手から島田に渡されたのである。それはたしか健三が二十二の春であつた。
「其上その御金をやる十四五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅へ引取られてゐらしつたんでせう」
いくつの年からいくつの年迄彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判然分らなかつた
「三つから七つ迄ですつて。御兄さんが左右仰有いましたよ」
「左右かしら」
健三は夢のやうに消えた自分の昔を囘顧した。彼の頭の中には眼鏡で見るやうな細かい繪が澤山出た。けれども其繪には何れを見ても日付がついてゐなかつた。
「證文にちやんと左右書いてあるさうですから大丈夫間違はないでせう」
彼は自分の離籍に關した書類といふものを見た事がなかつた。
「見ない譯はないわ。屹度忘れて居らつしやるんですよ」
「然し八つで宅へ歸つたにした所で復籍する迄は多少往來もしてゐたんだから仕方がないさ。全く緣が切れたといふ譯でもないんだからね」
細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかつた。
「己も實は面白くないんだよ」
「ぢや御止しになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になつてあんな人と交際ふのは。一體何うい

ふ氣なんでせう、先方は」

「それが己には些も解らない。向うでも噍詰らないだらうと思ふんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて來たに違ひないから、用心しなくつちや不可いつて云つて居らつしやいましたよ」

「然し金は始めから斷つちまつたんだから、構はないさ」

「だつて是から先何を云ひ出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初から斯うした豫感が働いてゐた。其處を既に防ぎ止めたとばかり信じてゐた理に強い健三の頭に、微かな不安が又新しく萌した。

二十

其不安は多少彼の仕事の上に卽いて廻つた。けれども彼の仕事はまた其不安の影を何處かへ埋めてしまふ程忙しかつた。さうして島田が再び健三の玄關へ現れる前に、月は早くも末になつた。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ會計簿を持つて彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を擧げて細君の手に委ねるのを例にしてゐた健三は、それが意外であつた。彼は未だ曾て月末に細君の手から支出の明細書を突き付けられた例がなかつた。

「まあ何うにかしてゐるんだらう」

彼は常に斯う考へた。それで自分に金の要る時は遠慮なく細君に請求した。月々買ふ書物の代價丈けで

ら隨分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましてゐた。經濟に暗い彼は時として細君の放漫を疑つた。

「月々の勘定はちやんとして己に見せなければ不可いぜ」

細君は厭な顔をした。彼女自身から云へば自分程忠實な經濟家は何處にも居ない氣なのである。

「えゝ」

彼女の返事は是限であつた。さうして月末が來ても會計簿はつひに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを默認した。けれども惡い時は意地になつてわざと見せろと逼る事があつた。其癖見せられるとごちや／＼して中々解らなかつた。たとひ帳面づらは細君の說明を聽いて解るにしても、實際月に肴をどれ丈食つたものか、又は米がどれ程要つたものか、またそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見當が付かなかつた。

此場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通した丈であつた。

「何か變つた事でもあるのかい」

「何うかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向に就いて詳しい說明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日迄遣つて來られたものだね」

「實は毎月餘らないんです」

餘らうとは健三にも思へなかつた。先月末に舊い友達が四五人で何處か遠足に行くとかいふので、彼

にも勸誘の端書をよこした時、彼は二圓の會費がない丈の理由で、同行を斷つた覺もあつた。

「然しかつかつ位には行きさうなものだがな」

「行つても行かなくつても、是丈の收入で遣つて行くより仕方がないんですけれども」

細君は云ひ惡さうに、箪笥の抽匣に仕舞つて置いた自分の着物と帶を質に入れた顚末を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼等の晴着を風呂敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たり又持つて入つたりしたのをよく目撃した。他に知れないやうに氣を配りがちな彼等の態度は、恰も罪を犯した日影者のやうに見えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。斯うした聯想が今の彼を殊更に侘びしく思はせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾を潜つた事のない彼は、自分より貧苦の經驗に乏しい彼女が、平氣でそんな所へ出入する筈がないと考へた。

「いゝえ賴んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆さんにです。あすこには通ひつけの質屋の帳面があつて便利ですから」

健三は其先を訊かなかつた。夫が碌な着物一枚さへ拵へてやらないのに、細君が自分の宅から持つてきたものを質に入れて、家計の足にしなければならないといふのは、夫の恥に相違なかつた。

二十一

健三はもう少し働かうと決心した。その決心から來る努力が、月々幾枚かの紙幣に變形して、細君の手に渡るやうになつたのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の內隱袋から出して封筒の儘疊の上へ放り出した。默つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐ其紙幣の出所を知つた。家計の不足は斯の如くにして無言のうちに補はれたのである。

其時細君は別に嬉しい顏もしなかつた。然し若し夫が優しい言葉に添へて、それを渡して呉れたなら、屹度嬉しい顏をする事が出來たらうにと思つた。健三は又若し細君が嬉しさうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたらうにと考へた。それで物質的の要求に應ずべく工面された此金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としては寧ろ失敗に歸してしまつた。

細君は其折の物足らなさを回復するために、二三日經つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵へようと思ふんですが、是は何うでせう」

細君の顏は晴々しく輝いてゐた。然し健三の眼にはそれが下手な技巧を交へてゐるやうに映つた。彼は其不純を疑つた。さうしてわざと彼女の愛嬌に誘はれまいとした。細君は寒さうに座を立つた。細君の座を立つた後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければならない心理狀態に自分が制せられたのかと考へて益不愉快になつた。

細君と口を利く次の機會が來た時、彼は斯う云つた。

「己は決して御前の考へてゐるやうな冷刻な人間ぢやない。たゞ自分の有つてゐる溫かい情愛を堰き止

ゐて、外へ出られないやうに仕向けるから、仕方なしに左右するのだ」

「誰もそんな意地の惡い事をする人は居ないぢやありませんか」

「御前は始終してゐるぢやないか」

細君は恨めしさうに健三を見た。健三の論理は丸で細君に通じなかつた。

「貴夫の神經は近頃餘つ程變ね。何うしてもつと穩當に私を觀察して下さらないのでせう」

健三の心には細君の言葉に耳を傾ける餘裕がなかつた。彼は自分に不自然な冷かさに對して腹立たしい程の苦痛を感じてゐた。

「あなたは誰も何もしないのに、自分一人で苦しんでゐらつしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底する迄話し合ふ事のつひに出來ない男女のやうな氣がした。從つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。

健三の新に求めた餘分の仕事は、彼の學問なり教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭つた。無意味に暇を潰すといふ事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きてゐるうちに、何か爲遂せる、又仕遂せなければならないと考へる男であつた。

彼が其餘分の仕事を片付けて家に歸るときは何時でも夕暮になつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄關の格子を手荒く開けた。すると奥から出て來た細君が彼の顔を見るなり、「あなた彼の人が又來ましたよ」と云つた。細君は島田の事を始終あの人あの人と呼んでゐたので、健三も彼女の樣子と言葉から、留守のうちに誰が來たのか略見當が付いた。彼は無言の儘茶の

間へ上つて、細君に扶けられながら洋服を和服に改めた。

二十二

彼が火鉢の傍に坐つて、煙草を一本吹かしてゐると、間もなく夕飯の膳が彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上つたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位此質問は突然であつた。一寸驚いて健三の顏を見た彼女は、返事を待ち受けてゐる夫の樣子から始めて其意味を悟つた。

「あの人ですか。――でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかつたのが、恰も夫の氣に障る事でもしたやうな調子で、言譯がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「えゝ。たゞ玄關で一寸」

「何とか云つてゐたかい」

「とうに伺ふ筈だつたけれども、少し旅行してゐたものだから御無沙汰をして濟みませんつて」

濟みませんといふ言葉が一種の嘲弄のやうに健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな、田舍に用のある身體とも思へないが。御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何とも云ひませんでした。たゞ娘の所で來て呉れつて頼まれたから行つて來たつて云ひました。大方あのお縫さんて人の宅なんでせう」

お縫さんの嫁いた柴野といふ男には健三も其昔會つた覺があつた。柴野の今の任地先も此間吉田から聞いて知つてゐた。それは師團か旅團のある中國邊の或都會であつた。

「軍人なんですか、其お縫さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間を置いたあとで斯んな問を掛けた。

「能く知つてるね」

「何時か御兄さんから伺ひましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野とお縫さんの姿を並べて考へた。柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眼鼻立からいふと寧ろ立派な部類に屬すべき男に違なかつた。お縫さんは又すらりとした恰好の好い女で、顔は面長の色白といふ出來であつた。ことに美しいのは睫毛の多い切長の其眼のやうに思はれた。彼等の結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜つた記憶を有つてゐた。其時柴野は隊から歸つて來た身體を大きくして、長火鉢の猫板の上にある洋盃から冷酒をぐい／＼飲んだ。お縫さんは白い肌をあらはに、鏡臺の前で髪を撫でつけてゐた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮨を頻りに皿の中から撮んで食べた。……

「お縫さんて人はよつほど容色が好いんですか」

「何故」

「だつて貴夫の御嫁にするつて話があつたんださうぢやありませんか」
成程そんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五六の時分、ある友達を往來へ待たせて置いて、自分一人一寸島田の家へ寄らうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往來を眺めてゐたお縫さんは、一寸微笑しながら出合頭の健三に會釋した。それを目撃した彼の友達は獨逸語を習ひ始めの子供であつたので、「フラウ門に倚つて待つ」と云つて彼をひやかした。然しお縫さんは年齒からいふと彼より一つ上であつた。其上その頃の健三は、女に對する美醜の鑑別もなければ好惡も有たなかつた。夫から羞恥に似たやうな一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自然の力で、護謨球のやうに、却つて女から彈き飛ばした。彼とお縫さんとの結婚は、他に面倒のあるなしを差措いて、到底物にならないものとして放棄されてしまつた。

二十三

「貴夫何うして其お縫さんて人を御貰ひにならなかつたの」
健三は膳の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕かされた人のやうに。
「丸で問題にやならない。そんな料簡は島田にあつた丈なんだから。それに己はまだ子供だつたしね」
「あの人の本當の子ぢやないんでせう」
「無論さ。お縫さんはお藤さんの連れつ子だもの」
お藤さんと云ふのは島田の後妻の名であつた。

「だけど、もしそのお縫さんて人と一所になつてゐらしつたら、何うでせう。今頃は」
「何うなつてるか判らないぢやないか、なつて見なければ」
「でも事によると、幸福かも知れませんわね。其方が」
「左右かも知れない」
健三は少し忌々しくなつた。細君はそれぎり口を噤んだ。
「何故そんな事を訊くのだい。詰らない」
細君は窘められるやうな氣がした。彼女にはそれを乘り越す丈の勇氣がなかつた。
「どうせ私は始めつから御氣に入らないんだから……」
健三は箸を放り出して、手を頭の中に突込んだ。さうして其處に溜つてゐる雲脂をごし〳〵落し始めた。
二人はそれなり別々の室で別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶に來た子供の去つた後で例の如く書物を讀んだ。細君は其子供を寢かした後で、晝の殘りの縫物を始めた。
お縫さんの話がまた二人の間の問題になつたのは、中一日置いた後の事で、それも偶然の切つ懸けからであつた。
其時細君は一枚の端書を持つて、健三の部屋へ這入つて來た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものやうに其儘立ち去らうともせずに、彼の傍に腰を卸した。健三が受取つた端書を手に持つたなり何時迄も讀みさうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はつひに夫を促した。
「あなた其端書は比田さんから來たんですよ」

健三は漸く書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出來たんですつて」

成程端書には島田の事で會ひたいから一寸來てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあつた。わざわざ彼を呼び寄せる失禮も丁寧に詫びてあつた。

「何うしたんでせう」

「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」

「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」

端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭に不圖又お縫さんの影が差した。島田が彼と此女を一所にして、後まで兩家の關係をつながうとした如く、此女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたいやうな希望を有つてゐたらしかつたのである。

「健ちやんの宅と斯んな間柄にならないとね、あたしも始終健ちやんの家へ行かれるんだけれども」

お藤さんが健三に斯んな事を云つたのも、顧れば古い昔であつた。

「だつてお縫さんが今嫁いてる先は元からの許嫁なんでせう」

「許嫁でも場合によつたら斷る氣だつたんだらうよ」

「一體お縫さんは何方へ行きたかつたんでせう」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の間に應ぜられるやうな人情がかつた材料が一つもなかつた。

「それも判明らんさ」

「ぢや御兄さんの方は何うなの」

「そんな事が判明るもんか」

二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答へた。さうして指定の日が來た時、約束通り又津の守坂へ出掛けた。

彼は時間に對して頗る正確な男であつた。一面に於いて愚直に近い彼の性格は、一面に於いて却つて彼を神經的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寢る迄、始終時間に追ひ懸けられてゐるやうなものであつた。

彼は途々自分の仕事に就いて考へた。其仕事は決して自分の思ひ通りに進行してゐなかつた。一歩目的へ近付くと、目的は又一歩彼から遠ざかつて行つた。

彼は又彼の細君の事を考へた。其當時强烈であつた彼女の歇私的里は、自然と輕くなつた今でも、彼の胸に猶暗い不安の影を投げて已まなかつた。彼はまた其細君の里の事を考へた。經濟上の壓迫が家庭を襲はうとしてゐるらしい氣配が、船に乘つた時の鈍い動搖を彼の精神に與へる種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考へなければならなかつた。凡てが頽廢の

影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならなかつた。

姉の家へ來た時、彼の心は沈んでゐた。それと反對に彼の氣は興奮してゐた。

「いや何うもわざ／＼御呼び立て申して」と比田が挨拶した。是は昔の健三に對する彼の態度ではなかつた。然し變つて行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たる此人にだけ優者になり得たといふ誇りは、健三にとつて滿足であるよりも、寧ろ苦痛であつた。

「一寸上がらうにも、何うにも斯うにも忙しくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も實は頼まれたんですけれども、貴方と御約束があるから、斷つてやつとの事で今歸つて來た所で」

比田のいふ所を默つて聽いてゐると彼が變な女を其勤先の近所に圍つてゐるといふ噂はまるで嘘のやうであつた。

古風な言葉で形容すれば、たゞ算筆に達者だといふ事の外に、大した學問も才幹もない彼が、今時の會社で、さう重寶がられる筈がないのに。――健三の心には斯んな疑問さへ湧いた。

「姉さんは」

「それにお夏が又例の喘息でね」

姉は比田のいふ通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかゝつて、ぜい／＼云つてゐた　茶の間を覗きに立つた健三の眼に、其亂れた髮の毛がむごたらしく映つた。

「何うです」
彼女は頭を眞直に上げる事さへ叶はないで、小さな顏を横にした儘健三を見た。挨拶をしようと思ふ努力が、すぐ咽喉に障つたと見えて、今迄多少落ち付いてゐた咳嗽の發作が一度に來た。其咳嗽は一つがまだ濟まないうちに、後から〳〵仕切りなしに出て來るので、傍で見てゐても氣が退けた。
「苦しさうだな」
彼は獨り言のやうに斯う呟やいて、眉を顰めた。
見馴れない四十恰好の女が、姉の後から背中を撫つてゐる傍に、一本の杉箸を添へた水飴の入物が盆の上に載せてあつた。女は健三に會釋した
「何うも一昨日からね、あなた」
姉は斯うして三日も四日も不眠絶食の姿で衰へて行つたあと、又活作用の彈力で、ぢり〳〵元へ戻るのを、年來の習慣としてゐた。それを知らない健三ではなかつたが、目前此猛烈な咳嗽と消え入るやうな呼息遣とを見てゐると、病氣に罹つた當人よりも自分の方が却つて不安で堪らなくなつた。
「口を利かうとすると咳嗽を誘ひ出すのでせう。靜かにしてゐらつしやい。私は彼方へ行くから」
發作の一仕切收まつた時、健三は斯う云つて、またもとの座敷へ歸つた。

二十五

比田は平氣な顏をして本を讀んでゐた。「いえなに又例の持病ですから」と云つて、健三の慰問には丸

で取り合はなかつた。同じ事を年に何度となく繰返して行くうちに、自然と末枯れて來る氣の毒な女房の姿は、此男にとつて毫も感傷の種にならないやうに見えた。實際彼は三十年近くも同棲して來た彼の妻に、たゞの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入つて來るのを見た彼は、すぐ讀み懸けの本を伏せて、鐵縁の眼鏡を外した。

「今一寸貴方が茶の間へ行つてゐらしつた間に、下らないものを讀み出したんです」

比田と讀書――是は又極めて似つかはしくない取合せであつた。

「何ですか、それは」

「なに健ちやんなんぞの讀むもんぢやありません、古いもんで」

比田は笑ひながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。それが意外にも常山紀談だつたので健三は少し驚いた。それにしても自分の細君が今にも絶息しさうな勢ひで咳き込んでゐるのを、丸で餘所事のやうに聽いて、こんなものを平氣で讀んでゐられる所が、如何にも能く此男の性質をあらはしてゐた。

「私や舊弊だから斯ういふ古い講談物が好きでしてね」

彼は常山紀談を普通の講談物と思つてゐるらしかつた。然しそれを書いた湯淺常山を講釋師と間違へる程でもなかつた。

「矢つ張り學者なんでせうね、其男は。曲亭馬琴と何方でせう。私や馬琴の八犬傳を持つてゐるんだが」

成程彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷つた豫約の八犬傳を綺麗に重ね込んでゐた。

「健ちやんは江戸名所圖繪を御持ちですか」

「いゝえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げませうか。なにしろ江戸と云つた昔の日本橋や櫻田がすつかり分るんだからね」

彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版の淺黄の表紙をした古い本を一二冊取り出した。さうして恰も健三を江戸名所圖繪の名さへ聞いた事のない男のやうに取扱つた。其健三には子供の時分その本を藏から引き摺り出して來て、頁から頁へと丹念に插繪を拾つて見て行くのが、何よりの樂みであつた時代の、懷かしい記憶があつた。中にも駿河町といふ所に描いてある越後屋の暖簾と富士山とが、彼の記憶を今代表する燒點となつた。

「此分では迚もその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接關係のない本などを讀んでゐる暇は、藥にしたくつても出て來まい」

健三は心のうちで斯う考へた。たゞ焦燥りに焦燥つてばかりゐる今の自分が、恨めしくもあり又氣の毒でもあつた。

兄が約束の時間迄に顔を出さないので、比田は其間を繋ぐためか、しきりに書物の話をつゞけようとした。書物の事なら何時迄話してゐても、健三にとつて迷惑にならないといふ自信でも持つてゐるやうに見えた。不幸にして彼の知識は、常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度であつた。それでも彼は昔出た風俗畫報を一冊殘らず綴ぢて持つてゐた。

本の話が盡きた時、彼は仕方なしに問題を變へた。

「もう來さうなもんですね、長さんも。あれ程云つてあるんだから忘れる筈はないんだが。それに今日は明けの日だから、遲くとも十一時頃迄には歸らなきやならないんだから。何なら一寸迎に遣りませうか」

此時又變化が來たと見えて、火の着くやうに咳き入る姉の聲が茶の間の方で聞こえた。

二十六

やがて門口の格子を開けて、沓脱へ下駄を脱ぐ音がした。

「やつと來たやうですぜ」と比田が云つた。

然し玄關を通り拔けた其足音はすぐ茶の間へ這入つた。

「また惡いの。驚いた。些も知らなかつた。何時から」

短い言葉が感投詞のやうに又質問のやうに、座敷に坐つてゐる二人の耳に響いた。その聲は比田の推察通りやつぱり健三の兄であつた。

「長さん、先刻から待つてるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から聲を掛けた。女房の喘息などは何うなつても構はないといつた風の其調子が、如何にも此男の特性をよく現はしてゐた。「本當に手前勝手な人だ」とみんなから云はれる丈あつて、彼は此場合にも、自分の都合より外に何も考へてゐないやうに見えた。

「今行きますよ」

長太郎は少し癪だと見えて、中々茶の間から出て來なかつた。

「重湯でも少し飲んだら好いでせう。厭？でもさう何も食べなくつちや身體が疲れる丈だから」
姉が息苦しくつて、受答へが出來かねるので、背中を撫つてゐた女が一口ごとに適宜な挨拶をした。平生健三よりは親しく其宅へ出入する兄は、見馴れない此女とも近付と見えた。其所爲か彼等の應對は容易に盡きなかつた。
比田はぷりつと膨れてゐた。朝起きて顏を洗ふ時のやうに、兩手で黑い顏をごし／＼擦つた。仕舞ひに健三の方を向いて、小さな聲で斯んな事を云つた。
「健ちやんあれだから困るんですよ。口ばかり多くつてね。此方も手がないから仕方なしに頼むんだが」
比田の非難は明かに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。
「何ですあの人は」
「そら梳手のお勢ですよ。昔健ちやんの遊びに來る時分、よく居たぢやありませんか、宅に」
「へえゝ」
健三には比田の家でそんな女に會つた覺えが全くなかつた。
「知りませんね」
「なに知らない事があるもんですか、お勢だもの。彼奴はね、御承知の通りまことに親切で實意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌るのが病なんだから」
よく事情を知らない健三には、比田のいふ事が、たゞ自分丈に都合のいゝ誇張のやうに聞こえるばかりで、大した感銘も與へなかつた。

姉はまた咳き出した。その發作が一段落片付く迄は、さすがの比田も默つてゐた。長太郎も茶の間を出て來なかつた。

「何だか先刻より劇しい樣ですね」

少し不安になつた健三は、さう云ひながら席を立たうとした。比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見ると一寸吃驚しますがね。私なんざあもう年來馴れつ子になつてるから平氣なもんですよ。實際又あれを一々苦にしてゐるやうぢや、とても今日迄一所に住んでる事は出來ませんからね」

健三は何とも答へる譯に行かなかつた。たゞ腹の中で、自分の細君が歇私的里の發作に冒された時の苦しい心持を、自然の對照として描き出した。

姉の咳嗽が一收まり收まつた時、長太郎は始めて座敷へ顏を出した。

「何うも濟みません。もつと早く來る筈だつたが、生憎珍らしく客があつたもんだから」

「來たか長さん待つてたほい。冗談ぢやないよ。使でも出さうかと思つてた所です」

比田は健三の兄に向つてこの位な氣安い口調で話の出來る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比田が最初に口を開いた。

彼は一寸した相談事にも仔細ぶる男であつた。さうして仔細ぶればぶる程、自分の存在が周圍から強く

認められると考へてゐるらしかつた。「比田さん比田さんつて、立てゝ置きさへすりや好いんだ」と皆が蔭で笑つてゐた。

「時に長さん何うしたもんだらう」

「さう」

「何うもこりや天から筋が違ふんだから、健ちやんに話をする迄もなからうと思ふんだがね、私や」

「左右さ。今更そんな事を持ち出して來たつて、此方で取り合ふ必要もないだらうぢやないか」

「だから私も突つ跳ねたいのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、丸で自分の殺した子供を、もう一返生かして呉れつて、御寺樣へ頼みに行くやうなものだからお止しなさいつて。だけど大將いくら何と云つても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。然しあの男があゝやつて今頃私の宅へのんこのしやあで遣つて來るのも、實はといふと、矢つ張り昔〇の關係があつたからの事さ。だつてそりや昔も昔、ずつと昔の話でさあ。其上たゞで借りやしまいしね……」

「またたゞで貸す風でもなしね」

「さうさ。口ぢや親類付合だとか何とか云つてる癖に、金にかけちやあかの他人より阿漕なんだから」

「來た時にさう云つて遣れば好いのに」

比田と兄との談話は中々元へ戻つて來なかつた。ことに比田は其處に健三のゐるのさへ忘れてしまつたやうに見えた。健三は好加減に何とか口を出さなければならなくなつた。

「一體何うしたんですか。島田が此方へでも突然伺つたんですか」

「いやわざ〱御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌つて濟みません。――ぢや長さん私から健ちやんに一應其顚末を御話する事にしようか」

「えゝ何うぞ」

話は意外にも單純であつた。――ある日島田が突然比田の所へ來た。自分も年を取つて頼りにするものがゐないので心細いといふ理由の下に、昔通り島田姓に復歸して貰ひたいから何うぞ健三にさう取次いでくれと頼んだ。比田も其要求の突飛なのに驚いて最初は拒絶した。然し何と云つても動かないので、兎も角も彼の希望丈は健三に通じようと受合つた。――たゞ是だけなのである。

「少し變ですね」

健三には何う考へても變としか思はれなかつた。

「變だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらはした。

「何うせ變にや違ない、何しろ六十以上になつて、少しやきが廻つてるからね」

「慾でやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑しさうに笑つたが、健三は獨り其仲間へ入る事が出來なかつた。彼は何時迄も變だと思ふ氣分に制せられてゐた。彼の頭から判斷すると、そんな事は到底ありよう筈がなかつた。彼は最初に吉田が來た時の談話を思ひ出した。次に吉田と島田が一所に來た時の光景を思ひ出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたと云つて、島田が一人で訊ねて來た時の言葉を思ひ出した。然し何處を何う思ひ出しても、

「然しそりや問題にやならないでせう。たゞ斷りさへすりや好いんだから」

彼は自分の爲に同じ言葉をもう一度繰返して見た。それから漸と氣を換へて斯う云つた。

「何うしても變ですね」

其處から斯んな結果が生れて來ようとは考へられなかつた。

二十八

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合はなかつた。從つてこれを片付けるのも容易であつた。たゞ簡單に斷りさへすれば濟んだ。

「然し一旦は貴方の御耳迄入れて置かないと、私の落度になりますからね」と比田は自分を辯護するやうに云つた。彼は何處迄も此會合を眞面目なものにしなければ氣が濟まないらしかつた。それで言ふ事も時によつて變化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違へば何をするか分らないんだから、用心しなくつちやいけませんよ」

「燒が廻つてるなら構はないぢやないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、比田は猶眞面目になつた。

「燒が廻つてるから怖いんです。なに先が當り前の人間なら、私だつて其場ですぐ斷つちまひまさあ」

斯んな曲折は會談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要

求を斷るといふ事になつた。それは三人が三人ながら始めから豫期してゐた結局なので、其處へ行き着く迄の筋道は、健三から見ると、寧ろ時間の空費に過ぎなかつた　然し彼はそれに對して比田に禮を述べる義理があつた。

「いえ何御禮なんぞ仰有られると恐縮します」といつた比田の方は却つて得意であつた。誰が見ても宅へも歸らずに忙しがつてゐる人の樣子とは受取れない程、調子づいて來た。

彼は其處にある鹽煎餠を取つて矢鱈にぽり〳〵嚙んだ。さうしてその相間々々には大きな湯呑へ茶を何杯も注ぎ替へて飮んだ。

「相變らず能く食べますね。今でも鰻飯を二つ位遣るんでせう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちやんの見てゐる前で天ぷら蕎麥を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたがね」

比田は其頃から食氣の強い男であつた。さうして餘計食ふのを自慢にしてゐた。それから腹の太いのを賞められたがつて、時機さへあれば始終叩いて見せた。

健三は昔此人に連れられて寄席などに行つた歸りに、能く二人して屋臺店の暖簾を潛つて、鮨や天麩羅の立食をした當時を思ひ出した。彼は健三に其寄席で聽いたしいや〳〵とかいふ三味線の手を敎へたり、又はさばを讀むといふ隱語などを習ひ覺えさせたりした。

「どうも矢つ張り立食に限るやうですね。私も此年になる迄、段々方々食つて歩いて見たが。健ちやん、一遍輕井澤で蕎麥を食つて御覽なさい、騙されたと思つて。汽車の停つてるうちに、降りて食ふんです、

プラットホームの上へ立つてね、流石本場丈あつて旨うがすぜ」
彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。
「それよか、善光寺の境内に元祖藤八拳指南所といふ看板が懸つてゐたには驚いたね、長さん」
「這入つて一つ遣つて來やしないか」
「だつて束脩が要るんだからね、君」
斯んな談話を聞いてゐると、健三も何時か昔の我に歸つたやうな心持になつた。同時に今の自分が、何んな意味で彼等から離れて何處に立つてゐるかも明かに意識しなければならなくなつた。然し比田は一向そこに氣が付かなかつた。
「健ちやんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼處に、ちんちらでんき皿持てこ汁飲ましよつて鳴く鳥がゐるのを御存じですか」などゝ訊いた。
先刻から落付いてゐた姉が、又劇しく咳き出した時、彼は漸く口を閉ぢた。さうして左もくさ／＼したと云はぬ許りに、左右の手の平を揃へて、黒い顔をごし／＼擦つた。
兄と健三は一寸茶の間の様子を覗きに立つた。二人共發作の靜まる迄姉の枕元に坐つてゐた後で、別々に比田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控へてゐる事を遂に忘れることが出來なくなつた。此世界は平生の彼

にとつて遠い過去のものであつた。然しいざといふ場合には、突然現在に變化しなければならない性質を帶びてゐた。

彼の頭には願仁坊主に似た比田の毬栗頭が浮いたり沈んだりした。猫のやうに顋の詰つた姉の息苦しく喘いでゐる姿が薄暗く見えた。血の氣の竭きかけた兄に特有なひすばつた長い顏も出たり引込んだりした。

昔この世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から獨り脱け出してしまつた。さうして脱け出したまゝ永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久し振に過去の臭を嗅いだ。それは彼に取つて、三分の一の懷かしさと、三分の二の厭らしさとを齎す混合物であつた。

彼は又其世界とは丸で關係のない方角を眺めた。すると其處には時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有つた青年がゐた。彼は其人々の笑ひに耳を傾けた。未來の希望を打ち出す鐘のやうに朗かなその響が健三の暗い心を躍らした。

或日彼は其青年の一人に誘はれて、池の端を散歩した歸りに、廣小路から切通しへ拔ける道を曲つた。彼等が新しく建てられた見番の前へ來た時、健三は不圖思ひ出したやうに青年の顏を見た。彼の頭の中には自分と丸で緣故のない或女の事が閃いた。其女は昔藝者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顏を出す事が出來るやうになつたのである。

「嘸辛いだらう」

容色を生命とする女の身になつたら、殆ど堪へられない淋しみが其處にあるに違ないと健三は考へた。然しいくらでも春が永く自分の前に續いてゐるとしか思はない伴の青年には、彼の言葉が何程の效果にも

ならなかつた。此青年はまだ二十三四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟つて驚いた。

「さう云ふ自分も矢つ張り此藝者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分に斯う云ひ渡した。若い時から白髪の生えたがる性質の彼の頭には、氣の所爲か近頃めつきり白い筋が増して來た。自分はまだ／＼と思つてゐるうちに、十年は何時の間にか過ぎた

「然し他事ぢやないね君。其實僕も青春時代を全く牢獄の裡で暮したんだから」

青年は驚いた顏をした。

「牢獄とは何です」

「學校さ、それから圖書館さ。考へると兩方ともまあ牢獄のやうなものだね」

青年は答へなかつた。

「然し僕が若し長い間の牢獄生活をつゞけなければ、今日の僕は決して世の中に存在してゐないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば辯解的であつた。半ば自嘲的であつた。過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、其現在の自分の上に是非共未來の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。さうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれども其方針によつて前へ進んで行くのが、此時の彼には徒に老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち來さないやうに見えた。

「學問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」

「そんな事はありませんよ」

彼の意味はつひに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚當時の自分と、何んなに變つて、細君の眼に映るだらうかを考へながら歩いた。其細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髮の毛なども氣の引ける程拔ける事があつた。さうして今は既に三番目の子を胎内に宿してゐた。

三十

家へ歸ると細君は奥の六疊に手枕をしたなり寐てゐた。健三は其傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、又かといふ顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遲く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少くはなかつた。斯うして能く寐眠りを貪らないと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしても判然しないといふのが、常に彼女の辯解であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を言つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐をするんだ」

彼は自分の小言が、歇私的里性の細君に對して、何う反應するかを、よく觀察してやる代りに、單なる面當のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釋して、苦々しい呟きを口の内で洩らす事がよくあつた。

「何故夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐるのだといふ答辯を屹度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて縫物の手を已めなかつた。

健三は斯うした細君の態度を惡んだ。同時に彼女の歇私的里を恐れた。それからもしや自分の解釋が間違つてゐはしまいかといふ不安にも制せられた。

彼は其處に立つた儘、しばらく細君の寐顔を見詰めてゐた。肱の上に載せられた其横顔は寧ろ蒼白かつた。彼は默つて立つてゐた。お住といふ名前さへ呼ばなかつた。

彼は不圖眼を轉じて、あらはな白い腕の傍に放り出された一束の書物に氣を付けた。それは普通の手紙の重なり合つたものでもなければ、又新らしい印刷物を一纏めに括つたものとも見えなかつた。總體が茶色がゝつて既に多少の時代を帶びてゐる上に、古風なかんじん撚で丁寧な結び目がしてあつた。其書ものの一端は、殆ど細君の頭の下に敷かれてゐると思はれる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮つてゐた。

彼はわざ／＼それを引き出して見る氣にもならずに、又眼を蒼白い細君の額の上に注いだ。彼女の頰は滑り落ちるやうにこけてゐた。

「まあ御瘦せなすつた事」

久し振に彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚いたやうに、斯んな評を加へた事があつた。其時健三は何故だか此細君を瘦せさせた凡ての原因が自分一人にあるやうな心持がした。

彼は書齋に入つた。

三十分も經つたと思ふ頃、門口を開ける音がして、二人の子供が外から歸つて來た。坐つてゐる健三の

耳には、彼等と子守との問答が手に取るやうに聞こえた。子供はやがて驅け込むやうに奥へ入つた。其處では又細君が蒼蠅いといつて、彼等を叱る聲がした。
夫からしばらくして細君は先刻自分の枕元にあつた一束の書き物を手に持つた儘、健三の前にあらはれた。
「先程御留守に御兄いさんが入らつしやいましてね」
健三は萬年筆の手を止めて、細君の顏を見た。
「もう歸つたのかい」
「えゝ。今一寸散歩に出掛けましたから、もうぢき歸りませうつて御止めしたんですけれども、時間がないからつて御上りになりませんでした」
「さうか」
「何でも谷中に御友達とかの御葬式があるんですつて。それで急いで行かないと間に合はないから、上つてゐられないんだと仰しやいました。然し歸りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、歸つたら待つてるやうに云つて呉れつて、云ひ置いて行らつしやいました」
「何の用なのかね」
「矢つ張りあの人の事なんださうです」
兄は島田の事で來たのであつた。

三十一

細君は手に持つた書付の束を健三の前に出した。
「是を貴夫に上げて呉れと仰しやいました」
健三は怪訝な顔をしてそれを受取つた。
「何だい」
「みんなあの人に關係した書類なんださうです。健三に見せたら參考になるだらうと思つて、用箪笥の抽匣の中に仕舞つて置いたのを、今日出して持つて來たつて仰しやいました」
「そんな書類があつたのかしら」
彼は細君から受取つた一括りの書付を手に載せた儘、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何の意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにして略二寸もあつたが、風の通らない濕氣た所に長い間放り込んであつた所爲か、蟲に食はれた一筋の痕が偶然健三の眼を懷古的にした。彼は其不規則な筋を指の先でざら／＼撫でゝ見た。けれども今更丁寧に絡げたかんじん撚の結び目を解いて、一々中を檢める氣も起らなかつた。
「開けて見たつて何が出て來るものか」
彼の心は此一句でよく代表されてゐた。
「御父さまが後々の爲にちやんと一纏にして取つて御置になつたんですつて」

「左右か」
健三は自分の父の分別と理解力に對して大した尊敬を拂つてゐなかつた。
「おやぢの事だから屹度何でもかんでも取つて置いたんだらう」
「然しそれも皆貴夫に對する御親切からなんでせう。あんな奴だから己のゐなくなつた後に、何んな事を云つて來ないとも限らない、其時には是が役に立つつて、わざ〳〵一纏にして、御兄さんに御渡になつたんださうですよ」
「左右かね、己は知らない」
健三の父は中氣で死んだ。その父のまだ達者でゐるずつと前から彼はもう東京にゐなかつた。彼は親の死目にさへ會はなかつた。斯んな書付が自分の眼に觸れないで、長い間兄の手元に保管されてゐたのも、別段の不思議ではなかつた。
彼は漸く書類の結目を解いて一所に重なつてゐるものを、一々ほごし始めた。手續書と書いたものや、取替せ一札の事と書いたものや、明治二十一年子一月約定金請取の證と書いた半紙二つ折の帳面やらが順順にあらはれて來た。其帳面の仕舞には、右本日受取右月賦金は皆濟相成候事と島田の手蹟で書いて黑い判がべたりと捺してあつた。
「おやぢは月々三圓か四圓づゝ取られたんだな」
「あの人にですか」
細君は其帳面を逆さまに覗き込んでゐた。

「〆て若干になるかしら。然し此外にまだ一時に遣つたものがある筈だ。おやぢの事だから、屹度その受取を取つて置いたに違ない。何處かにあるだらう」

書付は夫から夫へと續々出て來た。けれども、健三の眼には何れも是もごちや〳〵して容易に解らなかつた　彼はやがて四つ折にして一纒に重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小學校の卒業證書迄入れてある」

其小學校の名は時によつて變つてゐた。一番古いものには第一大學區第五中學區第八番小學などゝいふ朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまつた」

「よつほど古いものね」

證書のうちには賞狀も二三枚交つてゐた。昇り龍と降り龍で丸い輪廓を取つた眞中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に斷つてあつた。

「書物も貰つた事があるんだがな」

彼は勸善訓蒙だの輿地誌略だのを抱いて喜びの餘り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の晩夢に見た蒼い龍と白い虎の事も思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。

細君には此古臭い免狀が猶の事珍らしかつた。夫の一旦下へ置いたのを又取り上げて、一枚々々丁寧に剝繰つて見た。

「變ですわね。下等小學第五級だの六級だのつて。そんなものが在つたんでせうか」

「在つたんだね」

健三は其儘外の書付に手を着けた。讀みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「之を御覽、迚も讀む勇氣がないね。只でさへ判明らない所へ持つて來て、無暗に朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合に就いて必要な下書らしいものが細君の手に渡された。細君は女丈あつて、綿密にそれを讀み下した。

「貴夫の御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」

「そんな話は己も聞いてはゐるが」

「此處に書いてありますよ。――同人幼少にて勤向相成りがたく當方へ引き取り五箇年間養育致候緣合を以てと」

細君の讀み上げる文章は、丸で舊幕時代の町人が町奉行か何かへ出す訴狀のやうに聞えた。其口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴した。其父から、將軍の鷹狩に行く時の模樣などを、

それ相當の敬語で聞かされた昔も思ひ合された。然し事實の興味が主として働きかけてゐる細君の方では丸で文體などに頓着しなかつた。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣られたのね。此處にさう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐んだ。平氣な細君は其續きを讀み出した。

「右健三三歳の砌り養子に差遣はし置候處平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき當時八歳の健三を當方へ引き取り今日迄十四箇年間養育致し、——あとは眞赤でごちや〳〵して讀めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を讀まうと企てた。健三は腕組をして默つて待つてゐた。細君はやがてくす〳〵笑ひ出した。

「何が可笑しいんだ」

「だつて」

細君は何も云はずに、書付を夫の方に向け直した。さうして人さし指の頭で、細かく割註のやうに朱で書いた所を抑へた。

「一寸其處を讀んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、其一行を六づかしさうに讀み下した。

「取扱ひ所勤務中遠山藤と申す御家へ通じ合ひ候が事の起り。——何だ下らない」

「然し本當なんでせう」

「本當は本當さ」

「それぢや貴夫の八つの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御歸りになつた譯ね」
「然し籍を返さないんだ」
「あの人が？」
細君はまた其書付を取り上げた。讀めない所は其儘にして置いて、讀める所丈眼を通しても、自分の知らない事實が出て來るだらうといふ興味が、少からず彼女の好奇心を唆つた。
書付の仕舞の方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて實家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形を濫用して金を借り散らした例などが擧げてあつた。
愈手を切る時に養育料として島田に渡した金の證文も出て來た。それには、然る上は健三離縁本籍と引替に當金――圓御渡し被下、殘金――圓は毎月三十日限り月賦にて御差入の積御對談云々と長たらしく書いてあつた。
「凡て變梃な文句許りだね」
「親類取扱人比田寅八つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでせう」
健三はつい此間會つた比田の萬事に心得顏な樣子と、此證文の文句とを引き比べて見た。

三十三

葬式の歸りに寄るかも知れないと云つた兄は遂に顏を見せなかつた。
「あんまり遲くなつたから、すぐ御歸りになつたんでせう」

健三には其方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰して調べたり考へたりしなければ義務を果す事の出來ない性質のものであつた。從つて必要な時間を他に食ひ削られるのは、彼に取つて甚だしい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじん撚で括らうとした。彼が指先に力を入れた時、其のかんじん撚はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は蟲が食つてる位ですもの、貴夫」

「左右云へばさうかも知れない。何しろ抽斗に投げ込んだなり、今日迄放つて置いたんだから。然し兄貴も能くまあ斯んなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも賣る癖に」

細君は健三の顏を見て笑ひ出した。

「誰も買ひ手がないでせう。そんな蟲の食つた紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠の中へ入れてしまはなかつたと云ふ事さ」

細君は赤と白で撚つた細い糸を火鉢の抽斗から出して來て、其處に置かれた書類を新しく絡げた上、それを夫に渡した。

「己の方にや仕舞つて置く所がないよ」

彼の周圍は書物で一杯になつてゐた。手文庫には文殼とノートがぎつしり詰つてゐた。空地のあるのは

夜具蒲團の仕舞つてある一間の戸棚丈であつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄さんは二三日うち屹度また入らつしやいますよ」

「あの事でかい」

「それも左右ですけれども、今日御葬式に入らつしやる時に、袴が要るから借してくれつて、此處で穿いて入らしつたんですもの。屹度又返しに入らつしやるに極つてゐますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、一寸考へさせられた。始めて學校を卒業した時彼は其兄から貰つたべろ／＼の薄羽織を着て友達と一所に池の端で寫眞を撮つた事をまだ覺えてゐた。其友達の一人が健三に向つて、此中で一番先に馬車へ乘るものは誰だらうと云つた時に、彼は返事をしないで、たゞ自分の着てゐる羽織を淋しさうに眺めた。其羽織は古い絽の紋付に違ひなかつたが、惡く云へば申し譯の爲めに破けずにゐる位な見すぼらしい程度のものであつた。懇意な友人の新婚披露に招かれて星が岡の茶寮に行つた時も、着るものがないので、袴羽織共凡て兄のを借りて間に合せた事もあつた。

彼は細君の知らない斯んな記憶を頭の中に呼び起した。然しそれは今の彼を得意にするよりも却つて悲しくした。今昔の感――さう云ふ在來の言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧いた。

「袴位ありさうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御仕舞ひなすつたんでせう」

「困るなあ」

「どうせ宅にあるんだから、要る時に貸して上げさへすりや夫で好いでせう。毎日使ふものぢやなし」

「宅にある間はそれで好いがね」

細君は夫に内證で自分の着物を質に入れたつい此間の事件を思ひ出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陷らないものでもないといふ悲觀的な哲學があつた。

昔しの彼は貧しいながら一人で世の中に立つてゐた。今の彼は切り詰めた餘裕のない生活をしてゐる上に、周圍のものからは、活力の心棒のやうに思はれてゐた。それが彼には辛かつた。自分のやうなものが親類中で一番好くなつてゐると考へられるのは猶更情なかつた。

三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の眞中にある或大きな局へ勤めてゐた。其宏壯な建物のなかに永い間憐れな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。

「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て來るんだから」

其建物のなかには何百といふ人間が日となく夜となく烈しく働いてゐた。氣力の盡きかけた彼の存在は丸で形のない影のやうなものに違なかつた。

「あゝ厭だ」

活動を好まない彼の頭には常に斯んな觀念が潛んでゐた。彼は病身であつた。年歯より早く老けた。年歯より早く干乾びた。さうして色澤の惡い顔をしながら、死にでも行く人のやうに働いた。

「何しろ夜寢ないんだから、身體に障つてね」

彼はよく風邪を引いて咳嗽をした。ある時は熱も出た。すると其熱が必ず肺病の前兆でなければならないやうに彼を脅した。

實際彼の職業は强壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。さうして夜通し起きて働かなければならなかつた。翌日の朝彼はぼんやりして自分の宅へ歸つて來た。其日一日は何をする勇氣もなく、只ぐたりと寢て暮らす事さへあつた。

それでも彼は自分のため又家族のために働くべく餘儀なくされた。

「今度は少し危險いやうだから、誰かに賴んで吳れないか」

改革とか整理とかいふ噂のある度に、健三はよく斯んな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れてゐる時などは、わざ〳〵手紙で依賴して來た事も一遍や二遍ではなかつた。彼は其都度誰それにと云つて、わざ〳〵要路の人を指名した。然し健三にはたゞ名前が知れてゐる丈で、自分の兄の位置を保證してもらふ程の親しみのあるものは一人もなかつた。健三は頰杖を突いて考へさせられる許りであつた。

彼は斯うした不安を何度となく繰返しながら、昔から今日迄同じ職務に從事して、動きもしなければ發展もしなかつた。健三よりも七つ許り年上な彼の半生は、恰も變化を許さない器械の樣なもので、次第に消耗して行くより外には何の事實も認められなかつた。

「二十四五年もあんな事をしてゐる間には何か出來さうなものだがね」

健三は時々自分の兄を斯んな言葉で評したくなつた。其兄の派出好で勉强嫌であつた昔も眼の前に見え

ゐやうであつた。三味線を彈いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜で冷したり、凡ての時間は其頃の彼に取つて食ふ事と遊ぶ事ばかりに費されてゐた。

「みんな自業自得だと云へば、まあそんなものさね」

是が今の彼の折々他に洩す述懐になる位彼は怠け者であつた。

兄弟が死に絶えた後、自然健三の生家の跡を襲ぐやうになつた彼は、父が亡くなるのを待つて、家屋敷をすぐ賣り拂つてしまつた。それで元からある借金を濟して、自分は小さな宅へ這入つた。それから其處に納まり切らない道具類を賣拂つた。

間もなく彼は三人の子の父になつた。そのうちで彼の最も可愛がつてゐた惣領の娘が、年頃になる少し前から惡性の肺結核に罹つたので、彼は其娘を救ふために、あらゆる手段を講じた。然し彼のなし得る凡ては殘酷な運命に對して全くの徒勞に歸した。二年越煩つた後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の簞笥は丸で空になつてゐた。儀式に要る袴は無論、一寸した紋付の羽織さへなかつた。彼は健三の外國で着古した洋服を貰つて、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

三十五

二三日經つて健三の兄は果して細君の豫想通り袴を返しに來た。

「何うも遲くなつて御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に雙方の端を折返して小さく疊んだ袴を、風呂敷の中から出して細君の前に置いた。大の

見榮坊で、一寸した包物を持つのも厭がつた昔に比べると、今の兄は全く色氣が拔けてゐた。其代り膏氣もなかつた。彼はぱさ〳〵した手で、汚れた風呂敷の隅を抓んで、それを鄭寧に折つた。

「こりや好い袴だね。近頃拵へたの」

「いゝえ。中々そんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のとき此袴を着けて勿體らしく坐つた夫の姿を思ひだした。遠い所で極簡略に行はれた其結婚の式に兄は列席してゐなかつた。

「へえゝ。左右かね。成程さう云はれると何處かで見たやうな氣もするが。然し昔のものは矢つ張り丈夫なんだね。ちつとも敗んでゐないぢやないか」

「滅多に穿かないんですもの。それでも一人でゐるうちに能くそんな物を買ふ氣になれたのね、あの人が。私今でも不思議だと思ひますわ」

「或は婚禮の時に穿く積でわざ〳〵拵へたのかも知れないね」

二人は其時の異樣な結婚式に就いて笑ひながら話し合つた。

東京からわざ〳〵彼女を伴れて來た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの禮裝さへ調へてゐなかつた。セルの單衣を着流しの儘で仕舞には胡坐さへ搔いた。婆さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方では猶の事困つた。彼は結婚の儀式に就いて全くの無方針であつた。もと〳〵東京へ歸つてから貰ふといふ約束があつたので、媒妁人も其地にはゐなかつた。健三は參考のため此媒妁人が書いて送つて呉れた注意書のやうなものを讀んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた嚴しいものには違

なかつたが、中には東鑑などが例に引いてある丈で、何の實用にも立たなかつた。

「雌蝶も雄蝶もあつたもんぢやないのよ貴方。だいち御盃の縁が缺けてゐるんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「えゝ。だから夫婦中が斯んなにがたぴしするんでせう」

兄は苦笑した。

「健三も中々の氣六づかしやだから、お住さんも骨が折れるだらう」

細君はたゞ笑つてゐた。別段兄の言葉に取り合ふ氣色も見えなかつた。

「もう歸りさうなものですがね」

「今日は待つてゝ例の事件を話して行かなくつちや……」

兄はまだ其後を云はうとした。細君はふいと立つて茶の間へ時計を見に這入つた。其處から出て來た時、彼女は此間の書類を手にしてゐた。

「是が要るんでせう」

「いえ夫はたゞ參考迄に持つて來たんだから、多分要るまい。もう健三に見せて呉れたんでせう」

「えゝ見せました」

「何と云つてたかね」

細君は何とも答へやうがなかつた。

「隨分澤山色々な書付が這入つてゐますわね。此中には」

「御父さんが、今に何か事があると不可いつて、丹念に取つて置いたんだから」
細君は夫から頼まれて其中の最も大切らしい一部分を彼の爲に代讀した事は云はなかつた。兄もそれぎり書類に就いて語らなくなつた。二人は健三の歸る迄の時間をたゞの雜談に費した。其健三は約三十分程して歸つて來た。

三十六

彼が何時もの通り服裝を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚り合はせた細い絲で括られた例の書類は兄の膝の上にあつた。
「先達ては」
兄は油氣の拔けた指先で、一度解きかけた絲の結び目を元の通りに締めた。
「今一寸見たら此中には君に不必要なものが紛れ込んでゐるね」
「左右ですか」
此大事さうに仕舞込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄は又自分の弟がそれ程熱心にそれを調べてゐない事に氣が付いた。
「お由の送籍願が這入つてるんだよ」
お由といふのは兄の妻の名であつた。彼が其人と結婚する當時に必要であつた區長宛の願書が其處から出て來ようとは、二人とも思ひがけなかつた。

兄は最初の妻を離別した。次の妻に死なれた。其二度目の妻が病氣の時、彼は大して心配の樣子もなく能く出歩いた。病症が惡阻だから大丈夫といふ安心もあるらしく見えたが、容體が險惡になつて後も、彼は依然として其態度を改める樣子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻に對する仕打とも解釋した。健三も或は左右だらうと思つた。

三度目の妻を迎へる時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。然し弟には一言の相談もしなかつた。それがため我の強い健三の、兄に對する不平が、罪もない義姉の方に迄影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌けない人だらう」

陰で批評の口に上る斯うした言葉は、彼を反省させるよりも却つて頑固にした。習俗を重んずるために學問をしたやうな惡い結果に陷つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼は慚愧の眼をもつて當時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでるなら、それを御返しするから、持つて行つたら好いでせう」

「いゝえ寫だから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の絲に手も觸れなかつた。健三は不圖其日附が知りたくなつた。

「一體何時頃でしたかね。それを區役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄は是丈云つたぎりであつた。其の脣には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗つて、最後にやつと

自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れる程、彼は耄碌してゐなかつた。同時にそれを口へ出す程若くもなかつた。

「御幾年でしたかね」と細君が訊いた。

「お由ですか。お由はお住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答へずに、先刻から膝の上に置いた書類の帶を急に解き始めた。

「まだ斯んなものが這入つてゐたよ。是も君にや關係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚いたが、こら」

彼はごた〳〵した故紙の中から、何の雜作もなく一枚の書付を取出した。それは喜代子といふ彼の長女の出産屆の下書であつた。「右者本月二十二日午前十一時五十分出生致候」といふ文句の「本月二十三日」丈に棒が引懸けて消してある上に、蟲の食つた不規則な線が筋違に入つてゐた。

「是も御父さんの手蹟だ。ねえ」

彼は其一枚の反故を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覽、蟲が食つてるよ。尤も其筈だね。出産屆ばかりぢやない、もう死亡屆迄出てゐるんだから」

結核で死んだ其子の生年月を、兄は口のうちで靜かに讀んでゐた。

三十七

兄は過去の人であつた。華美な前途はもう彼の前に横たはつてゐなかつた。何かに付けて後を振り返り勝な彼と對坐してゐる健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるやうな氣がした。

「淋しいな」

健三は兄の道伴になるには餘りに未來の希望を多く持ち過ぎた。其癖現在の彼も可なりに淋しいものに違なかつた。其現在から順に推した未來の、當然淋しかるべき事も彼にはよく解つてゐた。

兄は此間の相談通り島田の要求を斷つた旨を健三に話した。然し何んな手續きでそれを斷つたのか、又先方がそれに對して何んな挨拶をしたのか、さういふ細かい點になると、全く要領を得た返事をしなかつた。

「何しろ比田から左う云つて來たんだから慥だらう」

其比田が島田に會ひに行つて話を付けたとも、又は手紙で會見の始末を知らせて遣つたとも、健三には判明らなかつた。

「多分行つたんだらうと思ふがね。それとも彼の人の事だから、手紙丈で濟まして仕舞つたのか。其處はつい聽いて來るのを忘れたよ。尤もあの後一遍姉さんの見舞かた〳〵行つた時にや、比田が相變らず留守だつたので、つい會ふ事が出來なかつたのさ。然し其時姉さんの話ぢや、何でも忙しいんで、まだ其儘にしてあるやうだつて云つてたがね。あの男も隨分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知つてゐる比田も無責任の男に相違なかつた。其代り賴むと何でも引き受ける性質であつた。た

だ他から頭を下げて賴まれるのが嬉しくつて物を受合ひたがる彼は、賴み方が氣に入らないと容易に動かなかつた。

「然しこんだの事なんざあ、島田がぢかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」

兄は暗に比田自身が先方へ出向いて話合を付けなければ義理の惡いやうな事を云つた。其癖彼はこんな場合に決して自分が懸合事抔に出掛ける人ではなかつた。少し氣を遣はなければならない面倒が起ると必ず顏を背けた。さうして事情の許す限り凝と辛抱して獨り苦しんだ。健三には此矛盾が腹立たしくも可笑しくもない代りに何となく氣の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他から見たら何處か似てゐるのかも知れない」

斯う思ふと、兄を氣の毒がるのは、つまり自分を氣の毒がるのと同じ事にもなつた。

「姉さんはもう好いんですか」

問題を變へた彼は、姉の病氣に就いて經過を訊ねた。

「あゝ、どうも喘息つてものは不思議だねえ。あんなに苦しんでゐても直癒るんだから」

「もう話が出來ますか」

「出來るどころか、中々好く饒舌つてね。例の調子で。――姉さんの考へぢや、島田はお縫さんの所へ行つて、智慧を付けられて來たんだらうつて云ふんだがね」

「まさか。それよりあの男だから彼んな非常識な事を云つて來るのだと解釋する方が適當でせう」

「さう」

兄は考へてゐた。健三は馬鹿らしいといふ顔付をした。

「でなければね。屹度年を取つて皆から邪魔にされるんだらうつて」

健三はまだ默つてゐた。

「何しろ淋しいには違ないんだね。それも彼奴の事だから、人情で淋しいんぢやない、慾で淋しいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手當が屆く事を何うしてか知つてゐた

「何でも金鵄勳章の年金か何かをお藤さんが貰つてゐるんだとさ。だから島田も何處からか貰はなくつちや淋しくつて堪らなくなつたんだらうよ。何しろあの位慾張つてるんだから」

健三は慾で淋しがつてる人に對して大した同情も起し得なかつた。

三十八

事件のない日が又少し續いた。事件のない日は、彼に取つて沈默の日に過ぎなかつた。

彼は其間に時々己の追憶を辿るべく餘儀なくされた。自分の兄を氣の毒がりつゝも、彼は何時の間にか、其兄と同じく過去の人となつた。

彼は自分の生命を兩斷しようと試みた。するとに綺麗に切り棄てられしべき筈の過去が、却つて自分を追掛けて來た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。

さうして其行き詰まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の廣い階子段のついた二階があつた。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で圍まれた中庭もまた眞四角であつた。

不思議な事に、其廣い宅には人が誰も住んでゐなかつた。それを淋しいとも思はずにゐられる程の幼い彼には、まだ家といふものゝ經驗と理解が缺けてゐた。

彼は幾つとなく續いてゐる部屋だの、遠く迄眞直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のやうに考へた。さうして人の通らない往來を一人で歩く氣でそこいら中驅け廻つた。

彼は時々表二階へ上つて、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたりした馬が何匹も續いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた眞ん向うには大きな唐金の佛樣があつた。其佛樣は胡坐をかいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を擔いでゐた。それから頭に笠を被つてゐた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其處からすぐ向側の石段を下りるために馬の通る往來を横切つた。彼は斯うしてよく佛樣へ攀ぢ上つた。着物の襞へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まつたりして、後から肩に手が屆くか、又は笠に自分の頭が觸れると、其先はもう何うする事も出來ずにまた下りて來た。

彼はまた此四角な家と唐金の佛樣の近所にある赤い門の家を覺えてゐた。赤い門の家は狹い往來から細い小路を二十間も折れ曲つて這入つた突き當りにあつた。其奧は一面の高藪で蔽はれてゐた。

此狹い往來を突き當つて左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくる其坂は、不規則な石段で下から上迄疊み上げられてゐた。古くなつて石の位置が動いた爲か、段の方々には凸凹があつた。石と石の罅隙からは青草が風に靡いた。それでも其處は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿の儘で、何度か其高い石段を上つたり下つたりした。

坂を下り盡すと又坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黑く見えた。丁度其坂と坂の間の、谷になつ

た窪地の左側に、又一軒の茅葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つてゐたが、往來に面した一部分には掛茶屋の樣な雜な構が拵へられて、常には二三脚の床几さへ體よく据ゑてあつた。葭簀の隙から覗くと、奧には石で圍んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上に差し出された兩端を支へる二本の棚柱は池の中に埋まつてゐた。周圍には躑躅が多かつた。中には緋鯉の影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影の樣に赤くする其魚を健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にゐない時を見計らつて、不細工な布袋竹の先へ一枚絲を着けて、餌と共に池の中に投げ込んだら、すぐ絲を引く氣味の惡いものに脅された。彼を水の底に引つ張り込まなければ已まない其強い力が二の腕迄傳はつた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿を放り出した。さうして翌日靜かに水面に浮いてゐた一尺餘りの緋鯉を見出した。彼は獨り怖がつた。……

「自分は其時分誰と共に住んでゐたのだらう」

彼には何等の記憶もなかつた。彼の頭は丸で白紙のやうなものであつた。けれども理解力の索引に訴へて考へれば、何うしても島田夫婦と共に暮したと云はなければならなかつた。

三十九

それから舞臺が急に變つた。淋しい田舍が突然彼の記憶から消えた。

すると表に櫺子窓の付いた小さな宅が朧氣に彼の前にあらはれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。さうして右にも左にも折れ曲つてゐた。

彼の記憶がほんやりしてゐるやうに、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出來なかつた。

彼は其處で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘ひ出したのだとかいふ話であつた。彼は暗い櫺子のうちで轉げ廻つた。總身の肉を所嫌はず搔き挘つて泣き叫んだ。

彼はまた偶然廣い建物の中に幼い自分を見出した。區切られてゐる樣で續いてゐる仕切のうちには人がちらほら居た。空いた場所の疊だか薄緣だかゞ、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く淋しく見せた。彼は高い所にゐた。其處で辨當を食つた。さうして油揚の胴を干瓢で結へた稻荷鮨の恰好に似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄につらまつて何度も下を覗いて見た。然し誰もそれを取つて呉れるものはなかつた。伴の大人はみんな正面に氣を取られてゐた。正面ではぐら／＼と柱が搖れて大きな宅が潰れた。すると其の潰れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張つて出て來た。――其頃の健三はまだ芝居といふもの〻觀念を有つてゐなかつたのである。

彼の頭には此芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられてゐた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋違に飛んで行つた時、誰だか彼の傍に居るものが、「外れた／＼」と叫んだ。すると誰だかまた手を叩いて其鷹を呼び返さうとした。――健三の記憶は此處でぷつりと切れてゐた。芝居と鷹と何方を先に見たのか、夫さへ彼には不分明であつた。從つて彼が田圃や藪ばかり見える田舍に住んでゐたのと、狹苦しい町内の往來に向いた薄暗い宅に住んでゐたのと、何方が先になるのか、それも彼にはよく判明らなかつた。さうして其時代の彼の記憶には、殆ど人といふもの〻影が働いてゐなかつた。

然し島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。

其時夫婦は變な宅にゐた。門口から右へ折れると、他の塀際傳ひに石段を三つ程上らなければならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの路地で、拔けると廣くて賑かな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反對に二三段下りる順になつてゐた。すると其處に長方形の廣間があつた。廣間に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり來たりした。河岸には柵を結つた中へ薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だら〳〵下りに水際迄續いた。石垣の隙間からは辨慶蟹がよく鋏を出した。

島田の家は此細長い屋敷を三つに區切つたものゝ眞中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の廣間が其店になつてゐたらしく思はれるけれども、その持主の何者であつたか、又何うして彼が其處を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横はる祕密であつた。

一頃その廣い部屋をある西洋人が借りて英語を敎へた事があつた。まだ西洋人を異人といふ昔の時代だつたので、島田の妻のお常は、化物と同居でもしてゐるやうに氣味を惡がつた。尤も此西洋人は上靴を穿いて、島田の借りてゐる部屋の椽側迄のそ〳〵歩いてくる癖を有つてゐた。お常が癪の氣味だとか云つて蒼い顏をして寢てゐると、其處の椽側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、又はたゞ手眞似だけか、健三には丸で解つてゐなかつた。

四十

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三が不圖心付いて見ると、其廣い室は既に扱所といふものに變つてゐた。

扱所といふのは今の區役所の樣なものらしかつた。みんなが低い机を一列に竝べて事務を執つてゐた。テーブルや椅子が今日のやうに廣く用ひられない時分の事だつたので、疊の上に長く坐るのが、夫程の不便でもなかつたのだらう。呼び出されるものも、また自分から遣つて來るものも、悉く自分の下駄を土間へ脱ぎ捨てゝ掛り／＼の机の前へ畏まつた。

島田は此扱所の頭であつた。從つて彼の席は入口からずつと遠い一番奥の突當りに設けられた。其處から直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓の際迄に、人の數が何人ゐたか、机の數が幾脚あつたか、健三の記憶は慥にそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居と扱所とは、もとより細長い一つ家を仕切つた迄の事なので、彼は出勤と云はず退出と云はず、少からぬ便宜を有つてゐた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す億劫を省く事が出來た。彼は自宅から緣側傳ひで勤めに出た。さうして同じ緣側を歩いて宅へ歸つた。

斯ういふ關係が、小さい健三を少からず大膽にした。彼は時々公の場所へ顏を出して、みんなから相手にされた。彼は好い氣になつて、書記の硯箱の中にある朱墨を弄つたり、小刀の鞘を拂つて見たり、他に蒼蠅がられるやうな惡戲を續けざまにした。島田はまた出來る限りの專横をもつて、此小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇な男であつた。妻のお常は島田よりも猶吝嗇であつた。

「爪に火を點すつてえのは、あの事だね」

彼が實家に歸つてから後、斯んな評が時々彼の耳に入つた。然し當時の彼は、お常が長火鉢の傍へ坐つて、下女に味噌汁をよそつて遣るのを何の氣もなく眺めてゐた。

「それぢや何ぼ何でも下女が可哀さうだ」

彼の實家のものは苦笑した。

お常はまた飯櫃や御菜の這入つてゐる戸棚に、いつでも錠を卸した。たまに實家の父が訪ねて來ると、屹度蕎麥を取寄せて食はせた。其時は彼女も健三も同じものを食つた。その代り飯時が來ても決して何時ものやうに膳を出さなかつた。それを當然のやうに思つてゐた健三は、實家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

然し健三に對する夫婦は金の點に掛けて寧ろ不思議な位寛大であつた。外へ出る時は黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買ふために、わざ〳〵越後屋迄引つ張つて行つたりした。其越後屋の店へ腰を掛けて、柄を擇り分けてゐる間に、夕暮の時間が逼つたので、大勢の小僧が廣い間口の雨戸を、兩側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな聲を揚げて泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具は無論彼の自由になつた。其中には寫し繪の道具も交つてゐた。彼はよく紙を繼ぎ合はせた幕の上に、三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい獨樂を買つて貰つて、時代を着けるために、それを河岸際の泥溝の中に浸けた。所が其泥溝は薪積場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は獨樂の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の

土間を拔けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹の穴を棒で突つついた。それから逃げ損つたものゝ甲を抑へて、いくつも生捕りにして袂へ入れた。……

要するに彼は此吝嗇な島田夫婦に、餘所から貰ひ受けた一人つ子として、異數の取扱ひを受けてゐたのである。

四十一

然し夫婦の心の奧には健三に對する一種の不安が常に潛んでゐた。

彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。

「御前の御父さんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指した。

「ぢや御前の御母さんは」

健三はまたお常の顏を見て彼女を指した。是で自分達の要求を一應滿足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ぢや御前の本當の御父さんと御母さんは」

健三は厭々ながら同じ答を繰返すより外に仕方がなかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顏を見合せて笑つた。

或時はこんな光景が殆ど毎日のやうに三人の間に起つた。或時は單に是丈の問答では濟まなかつた。こ

に赤い門の家を擧げて答へなければならなかつた。お常は何時此質問を掛けても、健三が差支なく同じ返事の出來るやうに、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかつた。

「健坊、御前本當は誰の子なの。隱さずにさう御云ひ」

彼は苦められるやうな心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を與へずに、わざと默つてゐたくなつた。

「御前誰が一番好きだい。御父さん？御母さん？」

健三は彼女の意を迎へるために、向うの望むやうな返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまゝ棒のやうに立つてゐた。それを只年歯の行かないためとのみ解釋したお常の觀察は、寧ろ簡單に過ぎた。彼は心のうちで彼女の斯うした態度を忌み惡んだのである。

夫婦は全力を盡して健三を彼等の專有物にしようと力めた。また事實上健三は彼等の專有物に相違なかつた。從つて彼等から大事にされるのは、つまり彼等のために彼の自由を奪はれるのと同じ結果に陷つた。彼には既に身體の束縛があつた。然しそれよりも猶恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不滿足の影を投げた。

夫婦は何かに付けて彼等の恩惠を健三に意識させようとした。それで或時は「御父さんが」といふ聲を大きくした。或時はまた「御母さんが」といふ言葉に力を入れた。御父さんと御母さんを離れたたゞの菓子を食つたり、たゞの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられてゐた。

自分達の親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込まうとする彼等の努力は、却つて反對の結果を其子供の上に引き起した。健三は蒼蠅がつた。

「なんでそんなに世話を燒くのだらう」

「御父さんが」とか「御母さんが」とかゞ出るたびに、健三は已獨りの自由を欲しがつた。自分の買つて貰ふ玩具を喜んだり、錦繪を飽かず眺めたりする彼は、却つてそれ等を買つてくれる人を嬉しがらなくなつた。少くとも兩つのものを綺麗に切り離して、純粹な樂みに耽りたかつた。

夫婦は健三を可愛がつてゐた。けれども其愛情のうちには變な報酬が豫期されてゐた。金の力で美しい女を圍つてゐる人が、其女の好きなものを、云ふが儘に買つて呉れるのと同じ樣に、彼等は自分達の愛情そのものゝ發現を目的として行動する事が出來ずに、たゞ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつた。さうして彼等は自然のために彼等の不純を罰せられた。しかも自ら知らなかつた。

四十二

同時に健三の氣質も損はれた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。さうして其陥缺を補ふものは强情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘は日増に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往來でも道端でも構はずに、すぐ其處へ坐り込んで動かなかつた。ある時は小僧の背中から彼の髪の毛を力に任せて捩り取つた。ある時は神社に放し飼の鳩を何うしても宅へ持つて歸るのだと主張して已まなかつた。養父母の寵を欲しいまゝに專有し得る狹い世界の中に起きたり寢たりする事より外に何も知らない彼には、凡ての他人が、たゞ自分の命令を聞くために生きてゐるやうに見えた。彼はいへば通るとばかり考へるやうになつた。

やがて彼の横着はもう一歩深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寢起きに其處から小便をする癖を有つてゐた。所が其日は何時もより眠かつたので、彼は用を足しながらつい途中で寢てしまつた。さうして其後を知らなかつた。

眼が覺めて見ると、彼は小便の上に轉げ落ちてゐた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かつた。大通りから河岸の方へ滑り込んでゐる地面の中途に當るので、普通の倍程あつた。彼はその出來事のためにとうとう腰を拔かした。

驚いた養父母はすぐ彼を千住の名倉へ伴れて行つて出來る丈の治療を加へた。然し強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は醋の臭のする黄色いどろ〳〵したものを毎日局部に塗つて座敷に寢てゐた。それが幾日續いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覽」

お常は毎日のやうに催促した。然し健三は動けなかつた。動けるやうになつてもわざと動かなかつた。

彼は寢ながらお常のやきもきする顏を見てひそかに喜んだ。

彼は仕舞に立つた。さうして平生と何の異なる所なく其處いら中歩き廻つた。するとお常の驚いて嬉しがりやうが、如何にも芝居じみた表情に充ちてゐたので、彼はいつそ立たずにもう少し寢てゐればよかつたといふ氣になつた。

彼の弱點がお常の弱點とまともに相搏つ事も少くはなかつた。

お常は非常に嘘を吐く事の巧い女であつた。それから何んな場合でも、自分に利益があるとさへ見れば、すぐ涙を流す事の出來る重寶な女であつた。健三をほんの子供だと思つて氣を許してゐた彼女は、其裏面をすつかり彼に曝露して自ら知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つてゐたお常は、其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聽いてゐても聽きづらい程罵つた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて來た。するとお常は甲に向つて、そらぞらしい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘迄吐いた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な子供の正直を其儘甲の前に披瀝した。甲の歸つたあとでお常は大變に怒つた。

「御前と一所にゐると顏から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」

健三はお常の顏から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌ふ心が我知らず常に何處かに働いてゐた。いくらお常から可愛がられても、

それに酬いる丈の情合が此方に出て來得ないやうな醜いものを、彼女は彼女の人格の中に藏してゐたのである。さうして其醜いものを一番能く知つてゐたのは、彼女の懐に温められて育つた駄々つ子に外ならなかつたのである。

四十三

其中變な現象が島田とお常との間に起つた。

ある晩健三が不圖眼を覺まして見ると、夫婦は彼の傍ではげしく罵り合つてゐた。出來事は彼に取つて突然であつた。彼は泣き出した。

其翌晩も彼は同じ爭ひの聲で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。

斯うした騷がしい夜が幾つとなく重なつて行くに連れて、二人の罵る聲は次第に高まつて來た。仕舞には雙方共手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すと已んだ二人の喧嘩が、今では寢ようが覺めようが、彼に用捨なく進行するやうになつた。

幼稚な健三の頭では何の爲めに、ついぞ見馴れない此光景が毎夜深更に起るのか、丸で解釋出來なかつた。彼はたゞそれを嫌つた。道徳も理非も持たない彼に、自然はたゞそれを嫌ふやうに教へたのである。

やがてお常は健三に事實を話して聞かせた。其話によると、彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大變な惡ものであつた。然し最も惡いのはお藤さんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいふ言葉を使ふとき、お常は口惜しくつて堪まらないといふ顔付をした。眼から涙を流した。然

しさうした劇烈な表情は却つて健三の心持を悪くする丈で、外に何の效果もなかつた。
「彼奴は讎だよ。御母さんにもお前にも讎だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちや」
お常は齒をぎり〳〵噛んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。
彼は始終自分の傍にゐて、朝から晩迄彼を味方にしたがるお常よりも、寧ろ島田の方を好いた。其島田は以前と違つて、大抵は宅にゐない事が多かつた。彼の歸る時刻は何時も夜更らしかつた。從つて日中は滅多に顔を合せる機會がなかつた。
然し健三は毎晩暗い灯火の影で彼を見た。其險悪な眼と怒りに顫へる脣とを見た。咽喉から渦捲く煙のやうに洩れて出る其憤りの聲を聞いた。
それでも彼は時々健三を伴れて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大變甘いものを嗜んだ。ある晩彼は健三とお藤さんの娘のお縫さんとを伴れて、賑やかな通りを散歩した歸りに汁粉屋へ寄つた。健三のお縫さんに會つたのは此時が始めてゞあつた。それで彼等は碌に顔さへ見合せなかつた。口は丸で利かなかつた。
宅へ歸つた時、健三はお常から、まづ島田に何處へ伴れて行かれたかを訊かれた。それからお藤さんの宅へ寄りはしないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたといふ詰問を受けた。健三は島田の注意に拘らず、事實を有の儘に告げた。然しお常の疑ひはそれでも中々解けなかつた。彼女はいろいろな鎌を掛けて、それ以上の事實を釣り出さうとした。
「彼奴も一所なんだらう。本當を御云ひ。云へば御母さんが好いものを上げるから御云ひ。あの女も行

つたんだらう。さうだらう」

彼女は何うしても行つたと云はせようとした。同時に健三は何うしても云ふまいと決心した。彼女は健三を疑つた。健三は彼女を卑しんだ。

「ぢや彼の子に御父さんが何と云つたい。彼の子の方に餘計口を利くかい、御前の方にかい」

何の答もしなかつた健三の心には、たゞ不愉快の念のみ募つた。然しお常は其處で留まる女ではなかつた。

「汁粉屋で御前を何方へ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」

嫉妬から出る質問は何時迄經つても盡きなかつた。その質問のうちに自分の人格を會釋なく露して顧ない彼女は、十にも足りないわが養ひ子から、愛想を盡かされて毫も氣が付かずにゐた。

四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなつた。河岸を向いた裏通りと賑やかな表通りとの間に挾まつてゐた今迄の住居も急に何處へか行つてしまつた。お常とたつた二人ぎりになつた健三は、見馴れない變な宅の中に自分を見出だした。

其家の表には門口に繩暖簾を下げた米屋だか味噌屋だかゞあつた。彼の記憶は此大きな店と、茹でた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食つた事をいまだに忘れずにゐた。然し自分の新しく移つた住居については何の影像も浮かべ得なかつた。「時」は綺麗に此佗しい記念を彼のために拂ひ去つてくれた。

お常は會ふ人毎に島田の話をした。口惜しい〳〵と云つて泣いた。
「死んで祟つてやる」
彼女の權幕は健三の心をます〳〵彼女から遠ざける媒介となるに過ぎなかつた。
夫と離れた彼女は健三を自分一人の專有物にしようとした。また專有物だと信じてゐた。
「是からは御前一人が依估だよ。好いかい。確かりして呉れなくつちや不可いよ」
斯う頼まれるたびに健三は云ひ澁つた。彼はどうしても素直な子供のやうに心持の好い返事を彼女に與へる事が出來なかつた。
健三を物にしようといふお常の腹の中には愛に驅られる衝動よりも、寧ろ慾に押し出される邪氣が常に働いてゐた。それが頑是ない健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投げた。然し其他の點について彼は全くの無我無中であつた。
二人の生活は僅の間しか續かなかつた。物質的の缺乏が原因になつたのか、又はお常の再縁が現狀の變化を餘儀なくしたのか、年歯の行かない彼には丸で解らなかつた。何しろ彼女は又突然健三の眼から消えて失くなつた。さうして彼は何時の間にか彼の實家へ引き取られてゐた。
「考へると丸で他の身の上のやうだ。自分の事とは思へない」
健三の記憶に上せた事相は餘りに今の彼と懸隔してゐた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思ひ浮べなければならなかつた。しかも或る不快な意味に於いて思ひ浮べなければならなかつた。
「お常さんて人は其時にあの波多野とか云ふ宅へ又御嫁に行つたんでせうか」

細君は何年前か夫の所へお常から來た長い手紙の上書をまだ覺えてゐた。

「左右だらうよ。己も能く知らないが」

「其波多野といふ人は大方まだ生きてるんでせうね」

健三は波多野の顏さへ見た事がなかつた。生死抔は無論考への中になかつた。

「警部だつて云ふぢやありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫が自分でさう仰しやつた癖に」

「何時」

「あの手紙を私に御見せになつた時よ」

「左右かしら」

健三は長い手紙の内容を少し思ひ出した。其中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立てゝあつた。乳がないので最初からおぢや丈で育てた事だの、下性が惡くつて寢小便の始末に困つた事だの、凡てさうした顚末を、飽きる程委しく述べた中に、甲府とかにゐる親類の裁判官が、月々彼女に金を送つてくれるので、今では大變仕合せだと書いてあつた。然し肝腎の彼女の夫が警部であつたか何うか、其處になると健三には全く覺えがなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きてるかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、又お常の事ともつかず、斯んな問答が取り換はされた。
「あの人が不意に遣つて來たやうに、其女の人も、何時突然訪ねて來ないとも限らないわね」
細君は健三の顏を見た。健三は腕組をしたなり默つてゐた。

四十五

健三も細君もお常の書いた手紙の傾向をよく覺えてゐた。彼女とはさして緣故のない人ですら、親切に毎月若干かづゝの送金をして呉れるのに、小さい時分あれ程世話になつて置きながら、今更知らん顏をしてゐられた義理でもあるまいと云つた風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

其時彼は此手紙を東京にゐる兄の許に送つた。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し氣を付けるやうに先方へ注意してくれと賴んだ。兄からはすぐ返事が來た。もと〳〵養家先を離緣になつて、他家へ嫁に行つた以上は他人である、其上健三はその養家さへ旣に出て仕舞つた後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るといふ理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、其返事には書いてあつた。

お常の手紙は其後ふつつり來なくなつた。健三は安心した。然し何處かに心持の惡い所があつた。彼はお常の世話を受けた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌ふ念は昔の通り變らなかつた。要するに彼のお常に對する態度は、彼の島田に對する態度と同じ事であつた。さうして島田に對するよりも一層嫌惡の念が劇しかつた。

細君の腹の中は猶の事であつた。細君の同情は今其生家の方にばかり注がれてゐた。もと可なりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を續けた結果、漸々經濟上の苦境に陷つて來たのである。

健三は時々宅へ話しに來る青年と對坐して、晴々しい彼等の樣子と自分の内面生活とを對照し始めるやうになつた。すると彼の眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ／＼と歩いて行くやうに見えた。

或日彼は其青年の一人に向つて斯う云つた。

「君等は幸福だ。卒業したら何にならうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考へてゐるんだから」

青年は苦笑した。さうして答へた。

「それは貴方方時代の事でせう。今の青年はそれ程呑氣でもありません。何にならうとか、何をしようとか思はない事は無論ないでせうけれども、世の中が、さう自分の思ひ通りにならない事も亦能く承知してゐますから」

成程彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛くなつてゐた。然しそれは衣食住に關する物質的の問題に過ぎなかつた。從つて青年の答には彼の思はくと多少喰ひ違つた點があつた。

「いや君等は僕のやうに過去に煩はされないから仕合せだと云ふのさ」

青年は解しがたいといふ顏をした。

「あなただつて些も過去に煩はされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだといふ所があるやうですね」
今度は健三の方が苦笑する番になつた。彼は其青年に佛蘭西のある學者が唱へ出した記憶に關する新說を話した。
人が溺れかゝつたり、又は絶壁から落ちようとする間際に、よく自分の過去全體を一瞬間の記憶として、其頭に描き出す事があるといふ事實に、此哲學者は一種の解釋を下したのである。
「人間は平生彼等の未來ばかり望んで生きてゐるのに、其未來が咄嗟に起つたある危險のために塞がれて、もう己は駄目だと事が極ると、急に眼を轉じて過去を振り向くから、そこで凡ての過去の經驗が一度に意識に上るのだといふんだね。その說によると」
青年は健三の紹介を面白さうに聽いた。けれども事狀を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引直して見る事が出來なかつた。健三も一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危險な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた。

四十六

健三の心を不愉快な過去に捲き込む端緒になつた島田は、それから五六日程して、つひに又彼の座敷にあらはれた。
其時健三の眼に映じた此老人は正しく過去の幽靈であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗

い未來の影にも相違なかつた。

「何處迄此影が己の身體に付いて回るだらう」

健三の胸は好奇心の刺戟に促されるよりも寧ろ不安の漣漪に搖れた。

「此間比田の所を一寸訪ねて見ました」

島田の言葉遣ひは此前と同じやうに鄭重であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顏をして澄ましてゐた。彼の口振は丸で無沙汰見舞かた〴〵其方へ用のあつた序に立ち寄つた人の如くであつた。

「あの邊も昔と違つて大分變りましたね」

健三は自分の前に坐つてゐる人の眞面目さの程度を疑つた。果して此男が彼の復籍を比田迄賴み込んだのだらうか、又比田が自分達と相談の結果通り、斷然それを拒絕したのだらうか。健三は其明白な事實さへ疑はずには居られなかつた。

「舊はそら彼處に瀑があつて、みんな夏になると能く出掛けたものですがね」

島田は相手に頓着なくたゞ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に觸れる必要を認めないので、たゞ老人の迹に跟いて引つ張られて行く丈であつた。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて來た。仕舞に彼は健三の姉を呼び捨てにし始めた。

「お夏も年を取つたね。尤ももう大分久しく會はないには違ないが。昔はあれで中々勝氣な女で、能く私に喰つて掛つたり何かしたものさ。其代り元々兄弟同樣の間柄だから、いくら喧嘩をしたつて、仲の直

るのも亦早いには早いが。何しろ困ると助けて呉れつて能く泣き付いて來るんで、私や可哀想だからその度に若干かづゝ都合して遣つたよ」

島田の云ふ事は、姉が蔭で聽いてゐたら嘸怒るだらうと思ふやうに横柄であつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事實を他に押し付けようとする邪氣に充ちてゐた。

健三は次第に言葉少なになつた。仕舞には默つたなり凝と島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。其上往來などで物を見るときは必ず口を開けてゐた。だから一寸馬鹿のやうであつた。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映する男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼は其底で常に反對の何物かを語つてゐた。眉は寧ろ險しかつた。狹くて高い彼の額の上にある髮は、若い時分から左右に分けられた例がなかつた。法印か何ぞのやうに常に後へ撫で付けられて居た。

彼は不圖健三の眼を見た。さうして相手の腹を讀んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣ひが又何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて來た。健三に對して過去の己に返らう／＼とする試みを遂に斷念してしまつた。

彼は室の内をきよろ／＼見廻し始めた。殺風景を極めた其室の中には生憎額も掛物も掛つてゐなかつた。

「李鴻章の書は好きですか」

彼は突然斯んな問を發した。健三は好きとも嫌ひとも云ひ兼ねた。

「好きなら上げても好ござんす。あれでも價値にしたら今ぢや餘つ程するでせう」

昔島田は藤田東湖の僞筆に時代を着けるのだと云つて、白髮蒼顔萬死餘云々と書いた半切の唐紙を、臺

所の竈の上に釣るしてゐた事があつた。彼の健三に呉れるといふ李鴻章も、何處の誰が書いたものか頗る怪しかつた。島田から物を貰ふ氣の絶對になかつた健三は取り合はずにゐた。島田は漸く歸つた。

四十七

「何しに來たんでせう、あの人は」

目的なしに只來る筈がないといふ感じが細君には強くあつた。健三も丁度同じ感じに多少支配されてゐた。

「解らないね、何うも。一體魚と獸程違ふんだから」

「何が」

「あゝ云ふ人と己などゝはさ」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思ひ出した。兩者の間には自然の作つた溝があつて、御互を離隔してゐた。片意地な夫は決してそれを飛び超えて呉れなかつた。溝を拵へたものの方で、それを埋めるのが當然ぢやないかと云つた風の氣分で何時迄も押し通してゐた。里ではまた反對に、夫が自分の勝手で此溝を掘り始めたのだから、彼の方で其處を平にしたら好からうと云ふ考へを有つてゐた。細君の同情は無論自分の家族の方に在つた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出來ない偏窟な學者だと解釋してゐた。同時に夫が里と調和しなくなつた原因の中に、自分が主な要素として這入つてゐる事も認めてゐた。

細君は默つて話を切上げようとした。然し島田の方にばかり氣を取られてゐた健三には其意味が通じな

かつた。
「お前はさう思はないかね」
「そりや彼の人と貴夫となら魚と獸位違ふでせう」
「無論外の人と己と比較してゐやしない」
話はまた島田の方へ戻つて來た。細君は笑ひながら訊いた。
「李鴻章の掛物を何うとか云つてたのね」
「己に遣らうかつて云ふんだ」
「御止しなさいよ。そんな物を貰つてまた後から何んな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣るつて云ふのは、大方口の先丈なんでせう。本當は買つて呉れつていふ氣なんですよ、屹度」
夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買ひたいものが澤山あつた。段々大きくなつて來る女の子に、相當の着物を着せて表へ出す事の出來ないのも、細君から云へば、夫の氣の付かない心配に違ひなかつた。二圓五十錢の月賦で、此間拵へた雨合羽の代を、月々洋服屋に拂つてゐる夫も、あまり長閑な心持になれよう筈がなかつた。
「復籍の事は何も云ひ出さなかつた樣ですね」
「うん何も云はない。丸で狐に抓まれたやうなものだ」
始めから此方の氣を引く爲にわざとそんな突飛な要求を持ち出したものか、又は眞面目な懸合として、それを比田へ持ち込んだ後、比田からきつぱり斷られたので、始めて駄目だと覺つたものか、健三には丸

で見當が付かなかつた。

「何方でせう」

「到底解らないよ、あゝいふ人の考へは」

島田は實際何方でも遣りかねない男であつた。

彼は二日程して又健三の玄關を開けた。其時健三は書齋に灯火を點けて机の前に坐つてゐた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒を見せかけた所であつた。彼は一圖にそれを手近迄手繰り寄せようとして骨を折つた。彼の思索は突然截ち切られた。彼は苦い顏をして室の入口に手を突いた下女の方を顧た。

「何もさう度々來て、他の邪魔をしなくつても好ささうなものだ」

彼は腹の中で斯う呟いた。斷然面會を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時默つてゐた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答へた。それから「奥さんは」と訊ねた。

「少し御氣分が惡いと仰しやつて先刻から伏せつてるらつしやいます」

細君の寢るときは歇私的里の起つた時に限るやうに健三には思へてならなかつた。彼は漸く立ち上つた。

四十八

電氣燈のまだ戸毎に點されない頃だつたので、客間には例の通り暗い洋燈が點いてゐた。其洋燈は細長い竹の臺の上に油壺を嵌め込むやうに拵へたもので、鼓の胴の恰好に似た平たい底が疊へ据わるやうに出來てゐた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心を出したり引つ込ましたりしながら灯火の具合を眺めてゐた。彼は改まつた挨拶もせずに、「少し油煙がたまる樣ですね」と云つた。

成程火屋が薄黑く燻つてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな變調を來すのが此洋燈の特徵であつた。

「換へさせませう」

家には同じ型のものが三つばかりあつた。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換へさせようとした。然し島田は生返事をする限で、容易に煤で曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「何ういふ加減だらう」

彼は獨り言を云つて、草花の模樣丈を不透明に擦つた丸い蓋の隙間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く氣にするといふ點に於いて、頗る几帳面な男に相違なかつた。彼は寧ろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金錢上の不潔癖の償ひにでもなるやうに、座敷や緣側の塵を氣にした。彼は尻をからげて、箒掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所迄掃いたり水を打つたりした。

物が壞れると彼は屹度自分で修復した。或は修復さうとした。それがために何の位な時間が要つても、

又何んな勞力が必要になつて來ても、彼は決して厭はなかつた。さういふ事が彼の性にある許りでなく、彼には手に握つた一錢銅貨の方が、時間や勞力よりも遙に大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅で出來る。金を出して賴むがものはない。損だ」

損をするといふ事が彼には何よりも恐ろしかつた。さうして目に見えない損は幾何しても解らなかつた。

「宅の人はあんまり正直過ぎるんで」

お藤さんは昔健三に向つて、自分の夫を評するときに、斯んな言葉を使つた。世の中をまだ知らない健三にも其眞實でない事はよく解つてゐた。たゞ自分の手前、噓と承知しながら、夫の品性を取り繕ふのだらうと善意に解釋した彼は、其時お藤さんに向つて何も云はなかつた。併し今考へて見ると、彼女の批評にはもう少し慥な根柢があるらしく思へた。

「必竟大きな損に氣のつかない所が正直なんだらう」

健三はたゞ金錢上の慾を滿たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭腦を精一杯に働かせてゐる老人を寧ろ憐れに思つた。さうして凹んだ眼を今擦り硝子の蓋の傍へ寄せて、硏究でもする時のやうに、暗い灯を見詰めてゐる彼を氣の毒な人として眺めた。

「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味つた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば此强慾な老人の一生と大した變りはないかも知れ

ないといふ氣が強くした。

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚いた彼は、又螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火を猶の事暗くした。

「何うも何處か調子が狂つてますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持つて來さした。

四十九

其晩の島田は此前來た時と態度の上に於いて何の異る所もなかつた。應對には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた。

然し彼はもう先達の掛物に就いては丸で忘れてゐるかの如くに見えた。李鴻章の李の字も口にしなかつた。復籍の事は猶更であつた。噯にさへ出す樣子を見せなかつた。

彼は成るべく唯の話をしようとした。然し二人に共通した興味のある問題は、何處を何う探しても落ちてゐる筈がなかつた。彼のいふ事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から餘り遠く隔たつてゐるとも思へなかつた。

健三は退屈した。然し其退屈のうちには一種の注意が徹つてゐた。彼は此老人が或日或物を持つて、今より判明した姿で、屹度自分の前に現れてくるに違ないといふ豫覺に支配された。其或物がまた必ず自分に不愉快な若くは不利益な形を具へてゐるに違ないといふ推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭い緊張を感じた。その所爲か、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燻つた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く變つてゐた。

「隙があつたら飛び込まう」

落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明かに此意味を物語つてゐた。自然健三はそれに抵抗して身構へなければならなくなつた。然し時によると、其身構へをさらりと投げ出して、飢ゑたやうな相手の眼に、落付を與へて遣りたくなるやうな場合もあつた。

其時突然奥の間で細君の唸るやうな聲がした。健三の神經は此聲に對して普通の人以上の敏感さを有つてゐた。彼はすぐ耳を峙てた。

「誰か病氣ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それはいけませんね。何處が惡いんです」

島田はまだ細君の顏を見た事がなかつた。何時何處から嫁に來た女かさへ知らないらしかつた。從つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に對する同情を求めようとは思つてゐなかつた。

「近頃は時候が惡いから、能く氣を付けないといけませんね」

子供は疾うに寢付いた後なので奥は寂としてゐた。下女は一番懸け離れた臺所の傍の三疊にゐるらしかつた。斯んな時に細君をたつた一人で置くのが健三には何より苦しかつた。彼は手を叩いて下女を呼んだ。

「一寸奧へ行つて奧さんの傍に坐つてて呉れ」
「へえゝ」
下女は何の爲だか解らないと云つた樣子をして間の襖を締めた。健三は又島田の方へ向き直つた。けれども彼の注意は寧ろ老人を離れてゐた。腹の中で早く歸つて呉れゝば好いと思ふので、其腹が言葉にも態度にもあり〳〵と現れた。
夫でも島田は容易に立たなかつた。話の接穗がなくなつて、手持無沙汰で仕方なくなつた時、始めて座蒲團から滑り落ちた。
「何うも御邪魔をしました。御忙しい所を。何れまた其内」
細君の病氣に就いては何事も云はなかつた彼は、沓脱へ下りてから又健三の方を振り向いた。
「夜分なら大抵御暇ですか」
健三は生返事をしたなり立つてゐた。
「實は少し御話したい事があるんですが」
健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持つた暗い灯影から、鈍い眼を光らして又彼を見上げた。其眼には矢つ張り何處かに隙があつたら彼の懷に潛り込まうといふ人の悪い厭な色が動いてゐた。
「ぢや御免」
最後に格子を開けて外へ出た島田は斯う云つてとう〳〵暗がりに消えた。健三の門には軒燈さへ點いて

ゐなかつた。

五十

健三はすぐ奥へ來て細君の枕元に立つた。

「何うかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲團の横からまた其眼を見下した。

襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のより暗かつた。細君の眸が何處に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。

「何うかしたのか」

健三は同じ問をまた繰返さなければならなかつた。それでも細君は答へなかつた。

彼は結婚以來斯ういふ現象に何度となく遭遇した。然し彼の神經はそれに慣らされるには餘りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感ずるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸した。

「もう彼方へ行つても好い。此處には己が居るから」

ぼんやり蒲團の裾に坐つて、退屈さうに健三の樣子を眺めてゐた下女は無言の儘立ち上つた。さうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御辭儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤い筋を引いた光るものが疊の上に殘つた。彼は眉を顰めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は默つて手に持つたまゝ、しばらく考へてゐた。彼は仕舞に其針

をぶつりと襖に立てた。さうして又細君の方へ向き直つた。

細君の眼はもう天井を離れてゐた。然し判然何處を見てゐるとも思へなかつた。黑い大きな瞳子には生きた光があつた。けれども生きた働が缺けてゐた。彼女は魂と直接に繫がつてゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見當を眺めてゐた。

「おい」

健三は細君の肩を搖つた。細君は返事をせずに只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顏を向けた。けれども其處に夫の存在を認める何等の輝もなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪いて天に禱る時の誠と願もあつた。

「何うぞ口を利いて吳れ。後生だから己の顏を見て吳れ」

彼は心のうちで斯う云つて細君に賴むのである。然し其痛切な賴を決して口へ出して云はうとはしなかつた。感傷的な氣分に支配され易い癖に、彼は決して外表的になれない男であつた。

細君の眼は突然平生の我に歸つた。さうして夢から覺めた人のやうに健三を見た。

「貴夫?」

彼女の聲は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。然しまだ緊張してゐる健三の顏を認めた時、彼女は其笑ひを止めた。

「あの人はもう歸つたの」
「うん」
二人はしばらく默つてゐた。細君は又頭を曲げて、傍に寢てゐる子供の方を見た。
「能く寢てゐるのね」
子供は一つ床の中に小さな枕を竝べてすや／＼寢てゐた。
健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。
「水で頭でも冷して遣らうか」
「いゝえ、もう好ござんす」
「大丈夫かい」
「えゝ」
「本當に大丈夫かい」
「えゝ。貴夫ももう御休みなさい」
「己はまだ寢る譯に行かないよ」
健三はもう一遍書齋へ入つて靜な夜を一人更かさなければならなかつた。

五十一

彼の眼が冴えてゐる割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中斷された人のやうに、考察の進

路を遮る霧の中で苦しんだ。

彼は明日の朝多くの人より一段高い所に立たなければならない憐れな自分の姿を思ひ見た。其憐れな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分の云ふ事を眞面目に筆記したりする青年に對して濟まない氣がした。自分の虚榮心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出來ない彼には、大きな苦痛であつた。

「明日の講義もまた纏まらないのかしら」

斯う思ふと彼は自分の努力が急に厭になつた。愉快に考への筋道が運んだ時、折々何者にか煽動されて起る、「己の頭は惡くない」といふ自信も己惚も忽ち消えてしまつた。同時に此頭の働きを攪き亂す自分の周圍に就いての不平も常時よりは高まつて來た。

彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。

「もう已めた。何うでも構はない」

時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側傳ひに廊下へ出ると、突當りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。

子供は犬ころのやうに塊つて寐てゐた。細君も靜かに眼を閉ぢて仰向に眠つてゐた。

音のしないやうに氣を付けて其傍に坐つた彼は、心持頸を延ばして、細君の顔を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔の上に翳した。彼女は口を閉ぢてゐた。彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息が微かに感ぜられた。其呼息は規則正しかつた。また穩かだつた。

彼は漸く出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出來ないといふ氣が彼の胸を衝いて起つた。けれども彼は直に其衝動に打勝つた。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を搖り起さうとしたが、それも已めた。

「大丈夫だらう」

彼は漸く普通の人の斷案に歸着する事が出來た。然し細君の病氣に對して神經の鋭敏になつて居る彼には、それが何人も斯ういふ場合に取らなければならない尋常の手續きのやうに思はれたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の藥であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顏を見詰めて居る健三に、何よりも有難い其眠りが、靜かに彼女の瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな氣が常にした。然し其眠りがまた餘り長く續き過ぎると、今度は自分の視線から隱された彼女の眼が却つて不安の種になつた。つひに睫毛の鎖してゐる奧を見るために、彼は正體なく寢入つた細君を、態態搖り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寐かして置いて呉れゝば好いのにといふ訴へを疲れた顏色に現はして重い瞼を開くと、彼は其時始めて後悔した。然し彼の神經は斯んな氣の毒な眞似をして迄も彼女の實在を確めなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、靜かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには餘りに暗過ぎた。然し騷がしい其動きを止めるには十分靜かであつた。

翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の聲で眼を覺ました。

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取つた袂時計を眺めてゐた。下女が俎板の上で何か刻む音が臺所の方で聞こえた。

「婢はもう起きてるのか」

「えゝ。先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いて又床の中に這入つたのである。健三はすぐ起き上つた。細君も同時に立つた。

昨夜の事は二人共丸で忘れたやうに何とも云はなかつた。

五十二

二人は自分達の此態度に對して何の注意も省察も拂はなかつた。二人は二人に特有な因果關係を有つてゐる事を冥々の裡に自覺してゐた。さうして其因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふ事も能く呑み込んでゐた。だから事狀を知らない第三者の眼に、自分達が或は變に映りはしまいかといふ疑念さへ起さなかつた。

健三は默つて外へ出て、例の通り仕事をした。然し其仕事の眞際中に彼は突然細君の病氣を想像する事があつた。彼の眼の前に、夢を見てゐるやうな細君の黑い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ歸らなければならないやうな氣がした。或は今にも宅から迎が來るやうな心持になつた。彼は廣い室の片隅に居て眞ん向うの突當りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鉢金

を伏せたやうな高い丸天井を眺めた。假漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるやうに工夫した其天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼の云ふ事を聴いてゐる多くの青年の上に落ちた。さうして復卒然として現實に歸るべく彼等から餘儀なくされた。

是程細君の病氣に惱まされてゐた健三は、比較的島田のために祟られる恐れを抱かなかつた。彼は此老人を因業で強慾な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性癖を十分發揮する能力が無いものとして寧ろ見縊つてもゐた。たゞ要らぬ會談に惜しい時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩ひになつた。

「何を云つて來る氣かしら、此次は」

襲はれる事を豫期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を氣になさるより早く絶交した方が餘つ程得ですわ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がつた。然し口では却つて反對な返事をした。

「それ程氣にしちや居ないさ、あんな者。もと〳〵恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいつて誰も云やしませんわ。けれども面倒臭いにや違ひないでせう、いくら貴夫だつて」

「世の中にはたゞ面倒臭い位な單純な理由で已める事の出來ないものが幾何でもあるさ」

多少片意地の分子を含んでゐる斯んな會話を細君と取り換はせた健三は、その次島田の來た時、例よりは忙しい頭を抱へてゐるにも拘らず、つひに面會を拒絶する譯に行かなかつた。

島田のちと話したい事があると云つたのは、細君の推察通り矢つ張り金の問題であつた。隙があつたら飛び込まうとして、此間から覘ひを付けてゐた彼は、何時迄待つても際限がないとでも思つたものか、機會のあるなしに頓着なく、つひに健三に肉薄し始めた。

「何うも少し困るので。外に何處と云つて賴みに行く所もない私なんだから、是非一つ」

老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潛んでゐた。然しそれは健三の神經を自尊心の一角に於いて傷め付ける程強くも現れてゐなかつた。

健三は立つて書齋の机の上から自分の紙入を持つて來た。一家の會計を司どつてゐない彼の財嚢は無論輕かつた。空の儘硯箱の傍に幾日も横たはつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。彼は其中から手に觸れる丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は變な顏をした。

「何うせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも有る丈悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。さうして彼の歸つたあとで、空の財布を客間へ放り出した儘た書齋へ入つた。細君には金を遣つた事を一口も云はなかつた。

五十三

翌日例刻に歸つた健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵へた大型の此二つ折は彼の持物として寧ろ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買つたのである。

外國から持つて歸つた記念が、何の興味も惹かなくなりつゝある今の彼には、此紙入も無用の長物と見える外はなかつた。細君が何故丁寧にそれを元の場所へ置いて呉れたのだらうかとさへ疑つた彼は、皮肉な一瞥を空つぽうの入物に與へたぎり、手も觸れずに幾日かを過ごした。

其内何かで金の要る日が來た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れて呉れ」

細君は右の手で物指を持つた儘夫の顏を下から見上げた。

「這入つてる筈ですよ」

彼女は此間島田の歸つたあとで何事も夫から聽かうとしなかつた。それで老人に金を奪られたことも全く夫婦間の話題に上つてゐなかつた。健三は細君が事狀を知らないで斯ういふのかと思つた。

「あれはもう遣つちやつたんだ。紙入は疾うから空つぽうになつてゐるんだよ」

細君は依然として自分の誤解に氣が付かないらしかつた。物指を疊の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「一寸拜見」

健三は馬鹿々々しいと云ふ風をして、それを細君に渡した。細君は中を檢めた。中からは四五枚の紙幣が出た。

「そら矢つ張り入つてるぢやありませんか」

彼女は手垢の付いた皺だらけの紙幣を、指の間に挾んで、一寸胸のあたり迄上げて見せた。彼女の擧動

は自分の勝利に誇るものゝ如く微な笑に伴つた。

「何時入れたのか」

「あの人の歸つた後でです」

健三は細君の心遣を嬉しく思ふよりも寧ろ珍らしく眺めた。彼の理解してゐる細君は斯んな氣の利いた事を滅多にする女ではなかつたのである。

「己が内證で島田に金を奪られたのを氣の毒とでも思つたものかしら」

彼は斯う考へた。然し口へ出して其理由を彼女に訊き糺して見る事はしなかつた。夫と同じ態度を[illegible]に失はずにゐた彼女も、自ら進んで己を説明する面倒を敢てしなかつた。彼女の塡補した金は斯くして默つて受取られ、又默つて消費されてしまつた。

其内細君の御腹が段々大きくなつて來た。起居に重苦しさうな氣息をし始めた。氣分も能く變化した。

「妾今度はことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてか斯う云つて涙を流した。大抵は取り合はずにゐる健三も、時として相手にさせられなければ濟まなかつた。

「何故だい」

「何故だかさう思はれて仕方がないんですもの」

質問も説明も是以上には上る事の出來なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潛んでゐた。

其或ものは單純な言葉を傳はつて、言葉の屆かない遠い所へ消えて行つた。鈴の音が鼓膜の及ばない幽かな

な世界に潛り込むやうに。

彼女は惡阻で死んだ健三の兄の細君の事を思ひ出した。さうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二三日食物が通らなければ滋養灌腸をする筈だつた際どい所を、よく通り拔けたものだなどと考へると、生きてゐる方が却つて偶然の樣な氣がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。

五十四

健三の氣分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事ばかりは云つてはゐなかつた。時によると、不快さうに寢てゐる彼女の體たらくが癪に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと慳貪に要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かなかつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益沈默を守つて、それが夫の氣を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。

「詰りしぶといのだ」

健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色ででもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。しぶといといふ觀念丈があらゆる注意の焦點になつて來た。彼は餘所を眞闇にして置いて、出來る丈强烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに餘つて其憎惡を受取つた。從つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫に何うしても氣違染みた癇癪持として評價されなければならなかつた。

「貴夫がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」

細君の眼からは時々斯んな光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では强ひて勝手にしろといふ風を裝つた。其强硬な態度の何處かに何時でも假裝に近い弱點があるのを細君は能く承知してゐた。

「どうせ御產で死んでしまふんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んぢまへと云ひたくなつた。

或晚彼は不圖眼を覺まして、大きな眼を開いて天井を見詰めてゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髮剃があつた。彼女が黑檀の鞘に折り込まれた其刃を眞直に立てずに、たゞ黑い柄丈を握つてゐたので、寒い光は彼の視覺を襲はずに濟んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髮剃を捥ぎ取つた。

「馬鹿な眞似をするな」

斯ういふと同時に、彼は髮剃を投げた。髮剃は障子に嵌め込んだ硝子に中つて其一部分を摧いて向う側

の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。

彼女は本當に情に逼つて刃物三昧をやる氣なのだらうか、又は病氣の發作に自己の意志を捧げべく餘儀なくされた結果、無我無中で切れ物を弄ぶのだらうか、或は單に夫に打ち勝たうとする女の策略から斯うして人を驚かすのだらうか、驚かすにしても其眞意は果して何處にあるのだらうか。自分に對する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだらうか、又はたゞ淺墓な征服慾に驅られてゐるのだらうか、――健三は床の中で一つの出來事を五條にも六條にも解釋した。さうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けて其動靜をうかゞつた。寢てゐるとも起きてゐるとも付かない細君は、丸で動かなかつた。恰も死を衒ふ人のやうであつた。健三は又枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。

其解決は彼の實生活を支配する上に於いて、學校の講義よりも遙に大切であつた。彼の細君に對する基調は、全く其解決一つでちやんと定められなければならなかつた。今よりずつと單純であつた昔、彼は一圖に細君の不可思議な擧動を、病の爲とのみ信じ切つてゐた。其時代には發作の起るたびに、神の前に己れを懺悔する人の誠を以つて、彼は細君の膝下に跪いた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な處置と信じてゐた。

「今だつて其原因が判然分りさへすれば」

彼には斯ういふ慈愛の心が充ち滿ちてゐた。けれども不幸にして其原因は昔のやうに單純には見えなかつた。彼はいくらでも考へなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、とろ／＼と眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事に就いて、つひに一言も細君に口を

利く機會を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。

五十五

斯ういふ不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入つて來た。二人は何時となく普通夫婦の利くやうな口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍觀者に過ぎなかつた。夫婦は何處迄行つても背中合せの儘で暮した。二人の關係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ歸れと云つた。細君の方ではまた歸らうが歸るまいが此方の勝手だといふ顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰返して憚らなかつた。

「ぢや當分子供を伴れて宅へ行つてゐませう」

細君は斯う云つて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼等の食料を毎月送つて遣るといふ條件の下に、また昔のやうな書生生活に立ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的廣い屋敷に下女とたつた二人ぎりになつた此突然の變化を見て、少しも淋しいとは思はなかつた。

「あゝ晴々して好い心持だ」

彼は八疊の座敷の眞中に小さな餉臺を据ゑて其上で朝から夕方迄ノートを書いた。丁度極暑の頃だつたので、身體の強くない彼は、よく仰向になつてばたりと疊の上に倒れた。何時替へたとも知れない時代の着いた其疊には、彼の背中を蒸すやうな黄色い古びが心迄透つてゐた。

彼のノートもまた暑苦しい程細かな字で書き下された。蠅の頭といふより外に形容のしやうのない其原稿を、成る可くだけ餘計拵へるのが、其時の彼に取つては何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。又義務であつた。

巣鴨の植木屋の娘とかいふ下女は、彼のために二三の盆栽を宅から持つて來て呉れた。それを茶の間の縁に置いて、彼が飯を食ふ時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜んだ。けれども彼女の盆栽を輕蔑した。それは何處の縁日へ行つても、二三十錢出せば、鉢ごと買へる安價な代物だつたのである。

彼は細君の事をかつて考へずにノートばかり作つてゐた。彼女の里へ顏を出さうなどゝいふ氣は丸で起らなかつた。彼女の病氣に對する懸念も悉く消えてしまつた。

「病氣になつても父母が付いてゐるぢやないか。もし惡ければ何とか云つて來るだらう」

彼の心は二人一所にゐる時よりも遙に平靜であつた。

細君の關係者に會はないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも會ひに行かなかつた。其代り向うでも來なかつた。彼はたつた一人で、日中の勉強につゞく涼しい夜を散歩に費やした。さうして繼布のあたつた青い蚊帳の中に入つて寢た。

一箇月あまりすると細君が突然遣つて來た。其時健三は日のかぎつた夕暮の空の下に、廣くもない庭先を逍遙してゐた。彼の歩みが書齋の縁側の前へ來た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸の影から急に姿を現はした。

「貴夫故のやうになつて下さらなくつて」
健三は細君の穿いてる下駄の表が變にさゝくれて、其後の方が如何にも見苦しく擦り減らされてゐるのに氣が付いた。彼は憐れになつた。紙入の中から三枚の一圓紙幣を出して細君の手に握らせた。
「見つともないから是で下駄でも買つたら好いだらう」
細君が歸つてから幾日目か經つた後彼女の母は始めて健三を訪れた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼等を引取つて呉れといふ主意を疊の上で布衍したに過ぎなかつた。既に本人に歸りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な擧動であつた。彼は一も二もなく承知した。細君は又子供を連れて駒込へ歸つて來た。然し彼女の態度は里へ行く前と毫も違つてゐなかつた。健三は心のうちで彼女の母に騙されたやうな氣がした。
斯うした夏中の出來事を自分丈で繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。是が何時迄續くのだらうかと考へたりした。

五十六

同時に島田はちよい〳〵健三の所へ顏を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつ切だといふ懸念が猶更彼を蒼蠅くした。健三は時々書齋に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた。
「好い紙入ですね。へえゝ。外國のものは矢つ張り何處か違ひますね」

島田は大きな二つ折を手に取つて、左も感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失禮ながら是で何の位します。彼方では」

「たしか十志だつたと思ひます。日本の金にすると、まあ五圓位なものでせう」

「五圓？――五圓は隨分好い値ですね。淺草の黑船町に古くから私の知つてる袋物屋があるが、彼處ならもつとずつと安く拵へて吳れますよ。こんだ要る時にや、私が賴んで上げませう」

健三の紙入は何時も充實してゐなかつた。全く空虛の時もあつた。左ういふ場合には、仕方がないので何時迄經つても、立ち上がらなかつた。島田も何かに事寄せて尻を長くした。

「小遣を遣らないうちは歸らない。厭な奴だ」

健三は腹の內で憤つた。然しいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取つて老人に渡す事はしなかつた。細君も其位な事ならと云つた風をして別に苦情を鳴らさなかつた。

左う斷つてゐるうちに、島田の態度が段々積極的になつて來た。二十三十と纏まつた金を、平氣に向うから請求し始めた。

「何うか一つ。私も此年になつて倚る子はなし、依怙にするのは貴方一人なんだから」

彼は自分の言葉遣ひの橫着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた。それでも健三がむつとして默つてゐると、凹んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろ／＼彼の樣子を眺める事を忘れなかつた。

「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金の出來ない筈はない」

彼は斯んな事迄口へ出して云つた。彼が歸ると、健三は厭な顏をして細君に向つた。

「ありや成し崩しに己を侵蝕する氣なんだね。始め一度に攻め落さうとして斷られたもんだから、今度は遠卷にしてじり／＼寄つて來ようつてんだ。實に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさへすれば、よく實にとか一番とか大とかいふ最大級を使つて鬱憤の一端を漏らしたがる男であつた。斯んな點になると細君の方は、ぶとい代りに大分落付いてゐた。

「貴夫が引つ掛かるから惡いのよ。だから初めから用心して寄せ付けないやうにすれば好いのに」

健三は其位の事なら最初から心得てゐると云はぬばかりの樣子を、むつとした顏に見せた。

「絶交しようと思へば何時だつて出來るさ」

「然し今迄付合つた丈が損になるぢやありませんか」

「そりや何の關係もない御前から見れば左うさ。然し己は御前とは違ふんだ」

細君には健三の意味が能く通じなかつた。

「何うせ貴夫の眼から見たら、私なんぞは馬鹿でせうよ」

健三は彼女の誤解を正してやるのさへ面倒になつた。

二人の間に感情の行違ひでもある時は、是丈の會話すら交換されなかつた。彼は島田の後影を見送つたまゝ默つてすぐ書齋へ入つた。そこで書物も讀まず筆も執らずたゞ凝と坐つてゐた。細君の方でも、家庭と切り離されたやうな此孤獨な人に何時迄も構ふ氣色を見せなかつた。夫が自分の勝手で座敷牢へ入つてゐるのだから仕方がない位に考へて、丸で取り合はずにゐた。

五十七

健三の心は紙屑を丸めた樣にくしや〱した。時によると癇癪の電流を何かの機會に應じて外へ洩らさなければ苦しくつて居堪れなくなつた。彼は子供が母に強請つて買つて貰つた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛ばして見たりした。赤ちやけた素燒の鉢が彼の思ひ通りにがら〱と破れるのさへ彼には多少の滿足になつた。けれども殘酷たらしく摧かれた其花と莖の、憐れな姿を見るや否や、彼はすぐ又一種の果敢ない氣分に打ち勝たれた。何も知らない我子の、嬉しがつてゐる美しい慰みを、無慈悲に破壞したのは、彼等の父であるといふ自覺が、猶更彼を悲しくした。彼は半自分の行爲を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。

「己の責任ぢやない。畢竟こんな氣違じみた眞似を己にさせるものは誰だ。其奴が惡いんだ」

彼の腹の底には何時でも斯ういふ辯解が潛んでゐた。

平靜な會話は波だつた彼の氣分を沈めるに必要であつた。然し人を避ける彼に、その會話の屆きよう筈がなかつた。彼は一人居て一人自分の熱で燻るやうな心持がした。常でさへ有難くない保險會社の勸誘員などの名刺を見ると、大きな聲をして罪もない取次の下女を叱つた。其の聲は玄關に立つてゐる勸誘員の耳に迄明かに響いた。彼はあとで自分の態度を恥ぢた。少くとも好意を以て一般の人類に接する事の出來ない己を怒つた。同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じやうな言譯を、堂々と心の裡で讀み上げた。

「己が惡いのぢやない。己の惡くない事は、假令彼の男に解つてゐなくつても、己には能く解つてゐる」

無信心な彼は何うしても「神には能く解つてゐる」と云ふ事が出來なかつた。もし左右いひ得たならばどんなに仕合せだらうといふ氣さへ起らなかつた。彼の道德は何時でも自己に始つた。さうして自己に終るぎりであつた。

彼は時々金の事を考へた。何故物質的の富を目標として今日迄働いて來なかつたのだらうと疑ふ日もあつた。

「己だつて、專門に其方ばかり遣りや」

彼の心には斯んな己惚もあつた。

彼はけち臭い自分の生活狀態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に惱んでゐるのを氣の毒に思つた。極めて低級な慾望で、朝から晩迄齷齪してゐるやうな島田をさへ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何も欲しくないのだ」

斯う考へて見ると、自分が今迄何をして來たのか解らなくなつた。

彼は元來儲ける事の下手な男であつた。儲けられても其方に使ふ時間を惜しがる男であつた。卒業したてに、悉く他の口を斷つて、たゞ一つの學校から四十圓貰つて、それで滿足してゐた。彼はその四十圓の半分を阿爺に取られた。殘る二十圓で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚ばかり食つてゐた。然し彼は其間に遂に何事も仕出かさなかつた。

其時分の彼と今の彼とは色々な點に於いて大分變つてゐた。けれども經濟に餘裕のないのと、遂に何事

も仕出かさないのとは、何處迄行つても變りがないやうに見えた。
彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた。然し今から金持になるのは迂闊な彼に取つてもう遲かつた。偉くならうとすれば又色々な塵勞が邪魔をした。其塵勞の種をよく〳〵調べて見ると、矢つ張り金のないのが大原因になつてゐた。何うして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出來ない眞に偉大なものが彼の眼に這入つて來るにはまだ大分間があつた。

五十八

健三は外國から歸つて來た時、既に金の必要を感じた。久し振にわが生れ故鄕の東京に新しい世帶を持つ事になつた彼の懷中には一片の銀貨さへなかつた。
彼は日本を立つ時、其妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小さな家を空けて彼等の住居に充てた。細君の祖父母が亡くなる迄居た其家は狹いながら左程見苦しくもなかつた。張交の襖には南湖の畫だの鵬齋の書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲ばせる記念と見るべきものさへ故の通り貼り付けてあつた。
父は官吏であつた。大して派手な暮しの出來る身分ではなかつたけれども、留守中手元に預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思ひをさせる程窮してもゐなかつた。其上健三の細君へは月々若干かの手當が公から下りた。健三は安心してわが家族を後に遺した。
彼が外國にゐるうち、内閣が變つた。其時細君の父は比較的安全な閑職からまた引張出されて劇しく活

動しなければならない或位地に就いた。不幸にして其新しい内閣はすぐ倒れた。父は崩壊の渦の中に捲き込まれなければならなかつた。

遠い所で此變化を聽いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父の經濟狀態に關しては別に顧慮する必要のないものとして、殆ど心を悩ませなかつた。

迂濶な彼は歸つてからも其處に注意を拂はなかつた。また氣も付かなかつた。彼は細君が月々貰ふ二十圓丈でも子供二人に下女を使つて十分遣つて行ける位に考へてゐた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

斯んな呑氣な想像が、實際を見た彼の眼を驚愕で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の不斷着をことごとく着切つてしまつた。仕方がないので、仕舞には健三の置いて行つた地味な男物を縫ひ直して身に纏つた。同時に蒲團からは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍に見てゐる父は何うして遣る譯にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後、相場に手を出して、多くもない貯蓄を悉く亡くして仕舞つたのであつた。

首の廻らない程高い襟を掛けて外國から歸つて來た健三は、此慘澹な境遇に置かれたわが妻子を默つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーの爲めに手非道く打ち据ゑられた。彼の脣は苦笑する勇氣さへ有たなかつた。

其内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買つて來なかつた彼の荷物は、書籍丈であつた。狹苦しい隱居所のなかで、彼は其箱の蓋さへ開ける事の出來ないのを馬鹿らしく思つた。彼は新しい家を搜し始めた。

同時に金の工面もしなければならなかつた。

彼は唯一の手段として、今迄繼續して來た自分の職を辭した。彼は其行爲に伴つて起る必然な結果として、一時賜金を受け取る事が出來た。一年勤めれば役を已めた時に月給の半額を呉れるといふ規定に從つて彼の手に入つた其金額は、無論大したものではなかつた。けれども彼はそれで漸と日常生活に必要な家具家財を調へた。

彼は僅ばかりの金を懷にして、或る舊い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。其の友達がまた品物の如何に拘らず無暗に價切り倒す癖を有つてゐるので、彼はたゞ歩くために少からぬ時間を費やさゝれた。茶盆、煙草盆、火鉢、丼鉢、眼に入るものは幾何でもあつたが、買へるのは滅多に出て來なかつた。是丈に負けて置けと命令するやうに云つて、もし主人が其通りにしないと、友達は健三を店先に殘したま〻、さつさと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追驅けなければならなかつた。たまに愚圖々々してゐると、彼は大きな聲を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買ふのか他の物を買ふのか、其區別を辨へてゐないやうに猛烈な男であつた。

五十九

健三は又日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物を渡世にする男の店先に立つて、しきりに算盤を彈く主人と談判をした。

彼の誂へた本棚には硝子戸も後部も着いてゐなかつた。塵埃の積る位は懷中に餘裕のない彼の意とする

所ではなかつた。木がよく枯れてゐないので、重い洋書を載せると、棚板が氣の引ける程撓つた。

斯んな粗末な道具ばかりを揃へるのにさへ彼は少からぬ時間を費やした。わざ〳〵辭職して貰つた金は何時の間にかもう無くなつてゐた。迂濶な彼は不思議さうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。さうして外國にゐる時、衣服を作る必要に逼られて、同宿の男から借りた金は何うして返して好いか分らなくなつて仕舞つた樣に思ひ出した。

そこへ其男から若し都合が付くなら算段して貰ひたいといふ催促狀が屆いた。健三は新しく拵へた高い机の前に坐つて、少時彼の手紙を眺めてゐた。

僅の間とは云ひながら、遠い國で一所に暮らした其人の記憶は、健三に取つて淡い新しさを帶びてゐた。其人は彼と同じ學校の出身であつた。卒業の年もさう違はなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調の爲といふ名義の下に、官命で遣つて來た其人の財力と健三の給費との間には、殆ど比較にならない程の懸隔があつた。

彼は寢室の外に應接間も借りてゐた。夜になると繻子で作つた刺繡のある綺麗な寢衣を着て、暖かさうに暖爐の前で書物などを讀んでゐた。北向の狹苦しい部屋で押込められたやうに凝と竦んでゐる健三は、ひそかに彼の境遇を羨んだ。

其健三には晝食を節約した憐れな經驗さへあつた。ある時の彼は表へ出た歸り掛に途中で買つたサンドヰッチを食ひながら、廣い公園の中を目的もなく歩いた。斜に吹きかける雨を片々の手に持つた傘で防けつゝ、片々の手で薄く切つた肉と麵麭を何度にも頰張るのが非常に苦しかつた。彼はいくたびか其處にあ

るベンチへ腰を卸さうとしては躊躇した。ベンチは雨の爲に悉く濡れてゐたのである。

ある時の彼は町で買つて來たビスケットの罐を午になると開いた。さうして湯も水も呑まずに、硬くて脆いものをぼり／＼嚙み摧いては、生唾の力で無理に嚥み下した。

ある時の彼はまた馭者や勞働者と一所に如何はしい一膳飯屋で形ばかりの食事を濟ました。其處の腰掛の後部は高い屛風のやうに切立つてゐるので、普通の食堂の如く、廣い室を一目に見渡す事は出來なかつたが、自分と一列に竝んでゐるものの顏丈は自由に眺められた。それは皆何時湯に入つたか分らない顏であつた。

斯んな生活をしてゐる健三が、此同宿の男の眼には左も氣の毒に映つたと見えて、彼は能く健三を午餐に誘ひ出した。錢湯へも案內した。茶の時刻には向うから呼びに來た。健三が彼から金を借りたのは斯うして彼と大分懇意になつた時の事であつた。

其時彼は反故でも棄てるやうに無雜作な態度を見せて、五磅のバンクノートを二枚健三の手に渡した。何時返して吳れとは無論云はなかつた。健三の方でも日本へ歸つたら何うにかなるだらう位に考へた。

日本へ歸つた健三は能く此バンクノートの事を覺えてゐた。けれども催促狀を受取る迄は、それ程急に返す必要が出て來ようとは思はなかつた。行き詰つた彼は仕方なしに、一人の舊い友達の所へ出掛けて行つた。彼は其友達の大した金持でない事を承知してゐた。然し自分よりも少しは融通の利く地位にある事も呑み込んでゐた。友達は果して彼の請求を容れて、要る丈の金を彼の前に揃へて吳れた。彼は早速それを外國で恩を受けた人の許へ返しに行つた。新しく借りた友達へは月に十圓宛の割で成し崩しに取つて貰

ふ事に極めた。

六十

斯んな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに氣が付いた。それでも、金力を離れた他の方面に於いて自分が優者であるといふ自覺が絶えず彼の心に往來する間は幸福であつた。其自覺が遂に金の問題で色々に攪き亂されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黑木綿の紋付さへ、無能力の證據のやうに思はれ出した。

「此己をまた强請りに來る奴がゐるんだから非道い」

彼は最も質の惡い其種の代表者として島田の事を考へた。

今の自分が何の方角から眺めても島田より好い社會的地位を占めてゐるのは明白な事實であつた。それが彼の虛榮心に少しの反響も與へないのも亦明白な事實であつた。昔し自分を呼び捨てにした人から今となつて鄭寧な挨拶を受けるのは、彼に取つて何の滿足にもならなかつた。小遣の財源のやうに見込まれるのは、自分を貧乏人と見做してゐる彼の立場から見て、腹が立つ丈であつた。

彼は念のために姉の意見を訊ねて見た。

「一體何の位困つてるんでせうね、あの男は」

「左右さね。さう度々無心を云つて來るやうぢや、隨分苦しいのかも知れないね。だけど健ちやんだつてさう〳〵他にばかり貢いでゐた日にや際限がないからね。いくら御金が取れたつて」

「御金がそんなに取れるやうに見えますか」

「だつて宅なんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方ぢやないか」

姉は自分の宅の活計を標準にしてゐた。相變らず口數の多い彼女は、比田が月々貰ふものを滿足に持つて歸つた例のない事や、俸給の少い割に交際費の要る事や、宿直が多いので辨當代だけでも隨分の額に上る事や、毎月の不足はやつと盆暮の賞與で間に合はせてゐる事などを詳しく健三に話して聞かせた。

「その賞與だつて、そつくり私の手に渡して呉れるんぢやないんだからね。だけど近頃ぢや私達二人はまあ隱居見たやうなもので、月々食料を彦さんの方へ遣つて賄つて貰つてるんだから、少しは樂にならなけりやならない譯さ」

養子と經濟を別々にしながら一所の家に住んでゐた姉夫婦は、自分達の搗いた餅だの、自分達の買つた砂糖だのといふ特別な食物を有つてゐた。自分達の所へ來た客に出す御馳走なども屹度自分達の懷中から拂ふ事にしてゐるらしかつた。健三は殆ど考への及ばないやうな眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に存在してゐる此一家の經濟狀態を眺めた。然し主義も理窟も有たない姉にはまた是程自然な現象はなかつたのである。

「健ちやんなんざ、斯んな眞似をしなくつても濟むんだから好いやあね。それに腕があるんだから、稼ぎさへすりや幾何でも欲しい丈の御金は取れるしさ」

彼女のいふ事を默つて聞いてゐると、島田などは何處へ行つたか分らなくなつてしまひ勝であつた。それでも彼女は最後に付け加へた。

「まあ好いやね。面倒臭くなつたら、其内都合の好い時に上げませうとか何とか云つて歸して仕舞へば。それでも蒼蠅いなら留守をお遣ひよ。構ふ事はないから」

此注意は如何にも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかつた彼はまた比田を捉まへて同じ質問を掛けて見た。比田はたゞ、大丈夫といふ丈であつた。

「何しろ故の通りあの地面と家作を有つてるんだから、さう困つてゐない事は慥ですあ。それにお藤さんの方へはお縫さんの方からちやん〳〵と送金はあるしさ。何でも好い加減な事を云つて來るに違ないから放つて御置きなさい」

比田の云ふ事も矢つ張り好い加減の範圍を脱し得ない上つ調子のものには相違なかつた。

六十一

仕舞には健三は細君に向つた。

「一體何ういふんだらう、今の島田の實際の境遇つて云ふのは。姉に訊いても比田に訊いても、本當の所が能く分らないが」

細君は氣のなささうに夫の顏を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しさうに抱へて、朱塗の船底枕の上に亂れた頭を載せてゐた。

「そんなに氣になさるなら、御自分で直に調べて御覧になるが好いぢやありませんか。左右すれば、すぐ

分るでせう。御姉さんだつて、今あの人と交際つて居らつしやらないんだから、そんな確な事の知れてる
る筈がないと思ひますわ」
「己にはそんな暇なんかないよ」
「それぢや放つて御置きになれば夫迄でせう」
細君の返事には、男らしくもないといふ意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思つてゐる事もさう無暗に口へ出して云はない性質に出來上つた彼女は、自分の生家と夫との面白くない間柄に就いてさへ、餘り言葉に現してつべこべ辯じ立てなかつた。自分と關係のない島田の事などは丸で知らない振をして澄ましてゐる日も少くなかつた。彼女の持つた心の鏡に映る神經質な夫の影は、いつも度胸のない偏窟な男であつた。
「放つて置け？」
健三は反問した。細君は答へなかつた。
「今迄だつて放つて置いてるぢやないか」
細君は猶答へなかつた。健三はぷいと立つて書齋へ入つた。
島田の事に限らず二人の間には斯ういふ光景が能く繰返された。其代り前後の關係で反對の場合も時には起つた。——
「お縫さんが脊髓病なんださうだ」
「脊髓病ぢや六づかしいでせう」

「到底助かる見込はないんだとさ。それで島田が心配してゐるんだ。あの人が死ぬと柴野とお藤さんとの緣が切れてしまふから、今迄每月送つてくれた例の金が來なくなるかも知れないつてね」
「可哀想ね今から脊髓病なんぞに罹つちや。まだ若いんでせう」
「己より一つ上だつて話したぢやないか」
「子供はあるの」
「何でも澤山あるやうな樣子だ。幾人だか能く訊いて見ないが」
細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死にゝ行く、まだ四十に充たない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼つたわが產の結果も新に氣遣はれ始めた。重さうな腹を眼の前に見ながら、それ程心配もして吳れない男の氣分が、情なくもあり又羨ましくもあつた。夫は丸で氣が付かなかつた。
「島田がそんな心配をするのも必竟は平生が惡いからなんだらうよ。何でも嫌はれてゐるらしいんだ。島田に云はせると、其柴野といふ男が酒食ひで喧嘩早くつて、それで何時迄經つても出世が出來なくつて、仕方がないんださうだけれども、何うも夫許ぢやないらしい。矢つ張島田の方が愛想を盡かされてゐるに違ないんだ」
「愛想を盡かされなくつたつて、そんなに子供が澤山あつちや何うする事も出來ないでせう」
「さうさ。軍人だから大方己と同じやうに貧乏してゐるんだらうよ」
「一體あの人は何うして其お藤さんて人と――」
細君は少し躊躇した。健三には意味が解らなかつた。細君は云ひ直した。

「何うして其お藤さんて人と懇意になつたんでせう」

お藤さんがまだ若い未亡人であつた頃、何かの用で扱所へ出なければならない事の起つた時、島田はさういふ場所へ出つけない女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に關係の付く始りだと、健三は小さい時分に誰かから聽いて知つてゐた。然し戀愛といふ意味を何うして島田に應用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾も手傳つたに違ないね」

細君は何とも云はなかつた。

六十二

不治の病氣に惱まされてゐるといふお縫さんに就いての報知が健三の心を和げた。何年振にも顏を合せた事のない彼と其人とは、度々會はなければならなかつた昔でさへ、殆ど親しく口を利いた例がなかつた。席に着くときも座を立つときも、大抵は默禮を取り換はせる丈で濟ましてゐた。もし交際といふ文字を斯んな間柄にも使ひ得るならば、二人の交際は極めて淡くさうして輕いものであつた。強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されてゐない其人の面影は、島田やお常のそれよりも、今の彼に取つて遙に尊かつた。人類に對する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から喚り得る點に於いて、また漠然として散漫な人類を、比較的判明した一人の代表者に縮めて呉れる點に於いて。――彼は死なうとしてゐる其人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れないお縫さんの死は、狡猾な島田にまた彼を強請る口實を與へるに違なかつた。明かにそれを豫想した彼は、出來る限りそれを避けたいと思つた。然し彼は此場合何うして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂する迄行くより外に仕方がない」

彼は斯う觀念した。彼は手を拱いて島田の來るのを待ち受けた。其島田の來る前に突然彼の姉のお常が訪ねて來ようとは、彼も思ひ掛けなかつた。

細君は何時もの通り書齋に坐つてゐる彼の前に出て、「あの波多野つて御婆さんがとう〱遣つて來ましたよ」と云つた。彼は驚くよりも寧ろ迷惑さうな顏をした。細君には其態度が愚圖々々してゐる臆病ものの樣に見えた。

「御會ひになりますか」

それは、會ふなら會ふ、斷るなら斷る、早く何方かに極めたら好からうといふ言葉の遣ひ方であつた。

「會ふから上げろ」

彼は島田の來た時と同じ挨拶をした。細君は重苦しさうに身を起して奥へ立つた。

座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏つて、丸まつちく坐つてゐる一人の婆さんを見た。彼の心で想像してゐたお常とは全く變つてゐる其質朴な風采が、島田よりも遙に強く彼を驚かした。

彼女の態度も島田に比べると寧ろ反對であつた。彼女は丸で身分の懸隔でもある人の前へ出たやうな樣子で、鄭寧に頭を下げた。言葉遣も慇懃を極めたものであつた。

健三は子供の時分能く聞かされた彼女の生家の話を思ひ出した。田舍にあつたその住居も庭園も、彼女の叙述によると、善を盡し美を盡した立派なものであつた。床の下を水が縦横に流れてゐるといふ特色が、彼女の何時でも繰返す重要な點であつた。南天の柱――さういふ言葉もまだ健三の耳に殘つてゐた。然し小さい健三は其の宏大な屋敷が何處の田舍にあるのか丸で知らなかつた。それから一度も其處へ連れて行かれた覺がなかつた。彼女自身も、健三の知つてゐる限り、一度も自分の生れた其の大きな家へ歸つたことがなかつた。彼女の性格を朧氣ながら見拔くやうに、彼の批評眼がだん／＼肥えて來た時、彼はそれも亦彼女の空想から出る例の法螺ではないかと考へ出した。

健三は自分を出來る丈富有に、上品に、そして善良に、見せたがつた其女と、今彼の前に畏まつて坐つてゐる白髪頭の御婆さんとを比較して、時間の齎した對照に不思議さうな眼を注いだ。

お常は昔から肥り肉の女であつた。今見るお常も依然として肥つてゐた。何方かといふと、昔よりも今の方が却つて肥つてゐはしまいかと疑はれる位であつた。それにも拘らず、彼女は全く變化してゐた。何處から見ても田舍育ちの御婆さんであつた。多少誇張して云へば、籠に入れた麥焦しを背中へ背負つて近在から出て來る御婆さんであつた。

六十三

「あゝ變つた」

顏を見合せた刹那に双方は同じ事を一度に感じ合つた。けれどもわざ／＼訪ねて來たお常の方には、此

變化に對する豫期と準備が十分にあつた。所が健三にはそれが殆ど缺けてゐた。從つて不意に打たれたものは客よりも寧ろ主人であつた。それでも健三は大して驚いた樣子を見せなかつた。彼の性質が彼にさうしろと命令する外に、彼はお常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更此女の遣る芝居を事新しく觀せられるのは、彼に取つて堪へがたい苦痛であつた。成るべくなら彼は先方の弱點を未然に防ぎたかつた。それは彼女の爲めでもあり、又自分の爲めでもあつた。

　彼は彼女から今迄の經歷をあらまし聞き取つた。其間には人世と切り離す事の出來ない多少の不幸が相應に纏綿してゐるらしく見えた。

　島田と別れてから二度目に嫁いた波多野と彼女との間にも子が生れなかつたので、二人は或所から養女を貰つて、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、或はまだ生きてゐる時分にか、それはお常も云はなかつたが、其貰ひ娘に養子が來たのである。

　養子の商賣は酒屋であつた。店は東京のうちでも隨分繁華な所にあつた。何の位な程度の活計をしてゐたものか能く分らないが、困つたとか、窮したとかいふ弱い言葉はお常の口を洩れなかつた。

　其内養子が戰爭に出て死んだので、女丈では店が持ち切れなくなつた。親子は已むを得ずそれを疊んで、郊外近くに住んでゐる或身緣を頼りに、ずつと邊鄙な所へ引越した。其處で娘に二度目の夫が出來る迄は、死んだ養子の遺族へ每年下がる扶助料丈で活計を立てゝ行つた。……

　お常の物語は健三の豫期に反して寧ろ平靜であつた。誇張した身振だの、仰山な言葉遣だの、當込の臺詞だのは、それ程多く出て來なかつた。それにも拘らず彼は自分と此御婆さんの間に、少しの氣脈も通じ

てゐない事に氣が付いた。
「あゝ左右ですか、それは何うも」
健三の挨拶は簡單であつた。普通の受答へとしても短過ぎる此一句を彼女に與へたぎりで、彼に別段物足りなさを感じ得なかつた。
「昔の因果が今でも矢つ張り祟つてゐるんだ」
斯う思つた彼は流石に好い心持がしなかつた。何方かといふと泣きたがらない質に生れながら、時々は何故本當に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て來て呉れないのかと考へるのが彼の持前であつた。
「己の眼は何時でも涙が湧いて出るやうに出來てゐるのに」
彼は丸まつちくなつて座蒲團の上に坐つてゐる御婆さんの姿を熟視した。さうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく觀じた。
彼は紙入の中にあつた五圓紙幣を出して彼女の前に置いた。
「失禮ですが、車へでも乘つて御歸り下さい」
彼女はさういふ意味で訪問したのではないと云つて一應辭退した上、健三からの贈りものを受け納めた。彼女は氣の毒な事に、其贈り物の中には、疎い同情が入つてゐる丈で、露はな眞心は籠つてゐなかつた。彼女はそれを能く承知してゐるやうに見えた。さうして何時の間にか離れ〳〵になつた人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦めるより外に仕方がないといふ風に振舞つた。彼は玄關に立つて、お常の歸つて行く後姿を見送つた。

「もしあの憐れな御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出來たらう。泣けない迄も、相手の心をもつと滿足させる事が出來たらう。零落した昔の養ひ親を引き取つて死水を取つて遣る事も出來たらう」
默つて斯う考へた健三の腹の中は誰も知る者がなかつた。

六十四

「とう〳〵遣つて來たのね、御婆さんも。今迄は御爺さん丈だつたのが、御爺さんと御婆さんと二人になつたのね。是からは二人に祟られるんですよ、貴夫は」
細君の言葉は珍らしく乾燥いでゐた。笑談とも付かず、冷評とも付かない其態度が、感想に沈んだ健三の氣分を不快に刺戟した。彼は何とも答へなかつた。
「又あの事を云つたでせう」
細君は同じ調子で健三に聞いた。
「あの事た何だい」
「貴夫が小さいうち寢小便をして、あの御婆さんを困らしたつて事よ」
健三は苦笑さへしなかつた。
けれども彼の腹の中には、お常が何故それを云はなかつたかの疑問が既に横はつてゐた。彼女の名前を聞いた刹那の健三は、すぐその辯口に思ひ到つた位、お常は能く喋舌る女であつた。ことに自分を護る事に巧な技倆を有つてゐた。他の口車に乘せられ易い、又見え透いた御世辭を嬉しがり勝な健三の實父は、

何時でも彼女を賞める事を忘れなかつた。

「感心な女だよ。だいち身上持が好いからな」

島田の家庭に風波の起つた時、彼女は有るだけの言葉を父の前に並べ立てた。さうして其言葉の上にまた悲しい涙と口惜しい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつて仕舞つた。

御世辭が上手だといふ點に於いて健三の父は彼の姉を大變可愛がつてゐた。無心に來られるたんびに、「さう／＼は己だつて困るよ」とか何とか云ひながら、いつか入用丈の金子は手文庫から取出されてゐた。

「比田はあんな奴だが、お夏が可哀想だから」

姉の歸つた後で、父は何時でも辯解らしい言葉を傍のものに聞えるやうに云つた。

然し是程父を自由にした姉の口先は、お常に比べると遙に下手であつた。眞しやかといふ點に於いて遠く及ばなかつた。實際十六七になつた時の健三は彼女と接觸した自分以外のもので、果してその性格を見拔いたものが何人あるだらうかと、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。

彼女に會ふときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分此口にあつた。

「御前を育てたものは此私だよ」

この一句を二時間でも三時間でも敷衍して、幼少の時分恩になつた記憶を又新しく復習させられるのかと思ふと、彼は辟易した。

「島田は御前の敵だよ」

彼女は自分の頭の中に殘つてゐる此古い主觀を、活動寫眞のやうに誇張して、又彼の前に露け出すに極

つてゐた。彼はそれにも辟易しない譯に行かなかつた。
何方を聽くにしても涙が交るに違ひなかつた。彼は裝飾的に使用される其涙を見るに堪へないやうな心持がした。彼女は話す時に姉のやうな大きな聲を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思ふ場合には、其言葉に厭らしい強い力を入れた。圓朝の人情噺に出て來る女が、長い火箸を灰の中に突き刺し突き刺し、人に騙された恨みを述べて、相手を困らせるのと略同じ態度で又同じ口調であつた。
彼の豫期が外れた時、彼はそれを仕合せと考へるよりも寧ろ不思議に思ふ位、お常の性格が牢として崩すべからざる判明した一種の型になつて、彼の頭の何處かに入つてゐたのである。
細君は彼の爲に說明した。
「二十年近くにもなる古い事ぢやありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでせう。それに大抵の人はもう忘れてしまひまさあね。それから人間の性質だつて長い間には少しづゝ變つて行きますからね」
遠慮、忘却、性質の變化、それ等のものを前に並べて考へて見ても、健三には少しも合點が行かなかつた。
「そんな淡泊した女ぢやない」
彼は腹の中で斯う云はなければ何うしても承知が出來なかつた。

六十五

お常を知らない細君は却つて夫の執拗を笑つた。

「それが貴夫の癖だから仕方がない」

平生彼女の眼に映る健三の一部分はたしかに斯うなのであつた。ことに彼と自分の生家との關係に就いて、夫の此惡い癖が著しく出てゐるやうに彼女は思つてゐた。

「己が執拗なのぢやない、あの女が執拗なのだ。あの女と交際つた事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべを云ふのだ」

「だつて現に貴夫の考へてゐた女とは丸で違つた人になつて貴夫の前へ出て來た以上は、貴夫の方で昔の考へを取り消すのが當然ぢやありませんか」

「本當に違つた人になつたのなら何時でも取消すが、左右ぢやないんだ。違つたのは上部丈で腹の中は故の通りなんだ」

「それが何うして分るの。新しい材料も何もないのに」

「御前に分らないでも己にはちやんと分つてるよ」

「隨分獨斷的ね、貴夫も」

「批評が中つてさへゐれば獨斷的で一向差支ないものだ」

「然しもし中つてゐなければ迷惑する人が大分出て來るでせう。あの御婆さんは私と關係のない人だから、何うでも構ひませんけれども」

健三には細君の言葉が何を意味してゐるのか能く解つた。然し細君はそれ以上何も云はなかつた。腹の

中で自分の父母兄弟を辯護してゐる彼女は、表面夫と遣り合つて、行ける所迄行く氣はなかつた。彼女は理智に富んだ性質ではなかつた。

「面倒臭い」

少し込み入つた議論の筋道を辿らなければならなくなると、彼女は屹度斯う云つて當面の問題を投げた。さうして解決を付ける迄進まないために起る面倒臭さは何時迄も辛抱した。然し其辛抱は自分自身に取つて決して快いものではなかつた。健三から見ると猶更心持が惡かつた。

「執拗だ」

「執拗だ」

二人は兩方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合つた。さうして御互の腹の中にある蟠りを御互の素振から能く讀んだ。しかも其非難に理由のある事も亦御互に認め合はなければならなかつた。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなつた。何故行かないとも訊かず、又時々行つて呉れとも賴まずにたゞ默つてゐた細君は、依然として「面倒臭い」を心の中に繰り返すぎりで、少しも其態度を改めようとしなかつた。

「是で澤山だ」

「己も是で澤山だ」

また同じ言葉が雙方の胸のうちで屢繰り返された。

それでも護謨紐のやうに彈力性のある二人の間柄には、時により日によつて多少の伸縮があつた。非常

に緊張して何時切れるか分らない程に行き詰つたかと思ふと、それがまた自然の勢ひで徐々元へ戻つて來た。さうした日和の好い精神狀態が少し繼續すると、細君の脣から暖かい言葉が洩れた。

「是は誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼に斯んな問を掛けたりした。其頃細君の腹はまだ今のやうに大きくはなかつた。然し彼女は此時既に自分の胎内に蠢き掛けてゐた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に傳へようとしたのである。

「喧嘩をするのは詰り兩方が惡いからですね」

彼女は斯んな事も云つた。夫程自分が惡いと思つてゐない頑固な健三も、微笑するより外に仕方がなかつた。

「離れゝばいくら親しくつても夫切になる代りに、一所にゐさへすれば、たとひ敵同志でも何うにか斯うにかなるものだ。つまりそれが人間なんだらう」

健三は立派な哲理でも考へ出したやうに首を捻つた。

六十六

お常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入つた。

毎年時候が寒くなると屹度身體に故障の起る兄は、秋口から又風邪を引いて一週間ほど局を休んだ揚句、氣分の惡いのを押して出勤した結果、幾日經つても熱が除れないで苦しんでゐた。

「つい無理をするもんだから」

無理をして、月給の壽命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内何方かを擇ぶより外に仕方がない樣に見えたのである。

「何うも肋膜らしいつていふんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人よりも強い畏怖の念を抱いてゐた。さうして何人よりも強い速度で、其肉塊を減らして行かなければならなかつた。

健三は細君に向つて云つた。――

「もう少し平氣で休んでゐられないものかな。責めて熱の失くなる迄でも好いから」

「左右したいのは山々なんでせうけれども、矢つ張さうは出來ないんでせう」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、たゞ活計の方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを殘酷ながら自然の眺め方として許してゐた。同時にさういふ觀察から逃れる事の出來ない自分に對して一種の不快を感じた。彼は苦い鹽を嘗めた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合はなかつた。彼は女たゞ自分の大きな腹を持て餘してばかりゐた。生家と緣故のある產婆が、遠い所から俥に乘つて時々遣つて來た。彼は其產婆が何をしに來て、又何をして歸つて行くのか全く知らなかつた。

「腹でも揉むのかい」
「まあ左右です」
細君ははか〴〵しい返事さへしなかつた。
其内兄の熱がころりと除れた。
「御祈禱をなすつたんですつて」
迷信家の細君は加持、祈禱、占ひ、神信心、大抵の事を好いてゐた。
「御前が勸めたんだらう」
「いゝえそれが私なんぞの知らない妙な御祈禱なのよ。何でも髪剃を頭の上へ載せて遣るんですつて」
健三には髪剃の御蔭で、いゝ、しこじらした體熱が除れようとも思へなかつた。
「氣の所爲で熱が出るんだから、氣の所爲でそれが又直ぐ除れるんだらうよ。髪剃でなくつたつて、杓子でも鍋蓋でも同じ事さ」
「然しいくら御醫者の藥を飮んでも癒らないもんだから、試しに遣つて見たら何うだらうつて勸められて、とう〳〵遣る氣になつたんですつて。何うせ高い御祈禱代を拂つたんぢやないんでせう」
健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れる迄藥を飮む事の出來ない彼の內狀を氣の毒に思つた。髪剃の御蔭でも何でも熱が除れさへすればまづ仕合せだとも思つた。
兄が癒ると共に姉がまた喘息で惱み出した。
「又かい」

健三は我知らず斯う云つて、不圖女房の持病を苦にしない比田の樣子を想ひ浮べた。
「しかし今度は何時もより重いんですつて。ことによると六づかしいかも知れないから、健三に見舞に行くやうに左右云つて吳れつて御しやいました」
兄の注意を健三に傳へた細君は、重苦しさうに自分の尻を疊の上に着けた。
「少し立つてゐると御腹の具合が變になつて來て仕方がないんです。手なんぞ延ばして棚に載つてゐるものなんか到底取れやしません」
產が逼る程姙婦は運動すべきものだ位に考へてゐた健三は意外な顏をした。下腹部だの腰の周圍の感じが何んなに退儀であるかは全く彼の想像の外にあつた。彼は活動を強ひる勇氣も自信も失つた。
「私迚も御見舞には參れませんよ」
「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

六十七

其頃の健三は宅へ歸ると甚しい倦怠を感じた。たゞ仕事をした結果とばかりは考へられない此疲勞が、一層彼を出不精にした。彼はよく晝寢をした。机に倚つて書物を眼の前に開けてゐる時ですら、睡魔に襲はれる事が屢あつた。愕然として假寢の夢から覺めた時、失はれた時間を取り返さなければならないといふ感じが一層強く彼を刺戟した。彼は遂に机の前を離れる事が出來なくなつた。括り付けられた人のやうに書齋に凝としてゐた。彼の良心はいくら勉强が出來なくつても、いくら愚圖々々してゐても、左右いふ

風に凝と坐つてゐろと彼に命令するのである。

斯くして四五日は徒に過ぎた。健三が漸く津の守坂へ出掛けた時は六づかしいかも知れないと云つた姉が、もう回復期に向つてゐた。

「まあ結構です」

彼は尋常の挨拶をした。けれども腹の中では狐にでも抓まれたやうな氣がした。

「あゝ、でも御蔭さまでね。――姉さんなんざあ、生きてゐたつて何うせ他の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、矢つ張持つて生れた壽命だと見えて是許りは仕方がない」

姉は自分の云ふ裏を健三から聽きたい樣子であつた。然し彼は默つて煙草を吹かしてゐた。斯んな些細の點にも姉弟の氣風の相違は現れた。

「でも比田のゐるうちは、いくら病身でも無能でも私が生きてゐて遣らないと困るからね」

親類は亭主孝行といふ名で姉を評し合つてゐた。それは女房の心盡しなどに對して餘りに無頓着過ぎる比田を一方に置いて此姉の態度を見ると、寧ろ氣の毒な位親切だつたからである。

「私や本當に損な生れ付でね。良人とは丸であべこべなんだから」

姉の夫思ひは全く天性に違なかつた。けれども比田が時として理の徹らない我儘を云ひ募るやうに、彼女は譯の解らない實意立をして却つて夫を厭がらせる事があつた。それに彼女は縫針の道を心得てゐなかつた。手習をさせても遊藝を仕込んでも何一つ覺える事の出來なかつた彼女は、嫁に來てから今日迄、つ

ひぞ夫の着物一枚縫つた例がなかつた。それでゐて彼女は人一倍勝氣な女であつた。子供の時分強情を張つた罰として土藏の中に押し込められた時、小用に行きたいから是非出して呉れ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかと云つて、網戸の内外で母と論判をした話はいまだに健三の耳に殘つてゐた。

さう思ふと自分とは大變懸け隔たつたやうでゐて、其實何處か似通つた所のある此腹違の姉の前に、彼は反省を強ひられた。

「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剝けば己だつて大した變りはないんだ」

平生の彼は教育の力を信じ過ぎてゐた。今の彼は其教育の力で何うする事も出來ない野生的な自分の存在を明かに認めた。斯く事實の上に於いて突然人間を平等に視た彼は、不斷から輕蔑してゐた姉に對して多少極りの惡い思ひをしなければならなかつた。然し姉は何にも氣が付かなかつた。

「お住さんは何うです。もう直生れるんだらう」

「えゝ落つこちさうな腹をして苦しがつてゐます」

「御産は苦しいもんだからね。私も覺があるが」

久しく不姙性と思はれてゐた姉は、片付いて、何年目かになつて始めて一人の男の子を生んだ。年齒を取つてからの初産だつたので、當人も傍のものも大分心配した割に、それ程の危險もなく胎兒を分娩したが、其子はすぐ死んで仕舞つた。

「輕はずみをしないやうに用心おしよ。――宅でも彼子がゐると少しは依怙になるんだがね」

六十八

姉の言葉には昔亡くしたわが子に對する思ひ出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれてゐた。

「彦ちやんがもう少し確乎してゐて呉れると好いんだけれども」

彼女は時々傍のものに斯んな述懐を洩らした。彦ちやんは彼女の豫期するやうな大した働き手でないにせよ、至極穏かな好人物であつた。朝つぱらから酒を飲まなくつちやゐられない人だといふ噂を耳にした事はあるが、其他の點に就いて深い交渉を有たない健三には、何處が不足なのか能く解らなかつた。

「もう少し御金を取つて呉れると好いんだけどもね」

無論彦ちやんは養父母を樂に養へる丈の收入を得てゐなかつた。然し比田も姉も彼を育てた時の事を思へば、今更そんな贅澤の云へた義理でもなかつた。彼等は彦ちやんを何處の學校へも入れて遣らなかつた。僅ばかりでも彼が月給を取るやうになつたのは、養父母に取つて寧ろ僥倖と云はなければならなかつた。

健三は姉の不平に對して眼に見えるほどの注意を拂ひかねた。昔死んだ赤ん坊については、猶の事同情が起らなかつた。彼は其生顔を見た事がなかつた。其死顔も知らなかつた。名前さへ忘れてしまつた。

「何とか云ひましたね、あの子は」

「作太郎さ。あすこに位牌があるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り拔いて拵へた小さい佛壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚い其中には先祖からの位牌が五つ六つ竝んでゐた。

「あの小さい奴がさうですか」
「あゝ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵へたんだよ」
立つて行つて戒名を讀む氣にもならなかつた健三は、矢張故の所に坐つた儘、黑塗の上に金字で書いた小形の札のやうなものを遠くから眺めてゐた。
彼の顏には何の表情もなかつた。自分の二番目の娘が赤痢に罹つて、もう少しで命を奪られる所だつた時の心配と苦痛さへ聯想し得なかつた。
「姉さんも斯んなぢや何時あゝなるか分らないよ、健ちやん」
彼女は佛壇から眼を放して健三を見た。健三はわざと其視線を避けた。
心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思つてゐない彼女の云ひ草には、世間並の年寄と少し趣を異にしてゐる所があつた。慢性の病氣が何時迄も繼續するやうに、慢性の壽命が又何時迄も繼續するだらうと彼女には見えたのである。
其處へ彼女の癇性が手傳つた。彼女は何んなに氣息苦しくつても、いくら他から忠告されても、何うしても居ながら用を足さうと云はなかつた。這ふやうにしてゞも厠迄行つた。それから子供の時からの習慣で、朝は屹度肌拔になつて手水を遣つた。寒い風が吹かうが冷たい雨が降らうが決して已めなかつた。
「そんな心細い事を云はずに、出來る丈養生をしたら好いでせう」
「養生はしてゐるよ。健ちやんから貰ふ御小遣ひの中で牛乳丈は屹度飲む事に極めてゐるんだから」
田舍ものが米の飯を食ふやうに、彼女は牛乳を飲むのが凡ての養生でゝもあるかのやうな事を云つた。

日に／＼損はれて行く吾健康を意識しつゝ、此姉に養生を勸める健三の心の中にも、「他事ぢやない」といふ馬鹿らしさが遠くに働いてゐた。

「私しや近頃は具合が惡くつてね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れませんよ」

彼の言葉は無論根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑つた。然し自ら健康を損ひつゝあると確に心得ながら、それを何うする事も出來ない境遇に置かれた彼は、姉よりも却つて自分の方を憐んだ。

「己のは默つて成し崩しに自殺するのだ。氣の毒だと云つて吳れるものは一人もありやしない」

彼はさう思つて姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頰と、肉のない細い手とを、微笑しながら見てゐた。

六十九

姉は細かい所に氣の付く女であつた。從つて細かい事に迄よく好奇心を働かせたがつた。一面に於いて馬鹿正直な彼女は、一面に於いてまた變な廻り氣を出す癖を有つてゐた。

健三が外國から歸つて來た時、彼女は自家の生計に就いて、他の同情に訴へ得るやうな憐れつぽい事實を彼の前に並べた。仕舞に兄の口を借りて、若干でも好いから月々自分の小遣として送つて吳れまいかといふ依賴を持ち出した。健三は身分相應な額を定めた上、また兄の手を經て先方へ其旨を通知して貰ふ事にした。すると姉から手紙が來た。長さんの話では御前さんが月々若干若干私に遣るといふ事だが、實際御前さんの、吳れると云つた金高は何の位なのか、長さんに內證で一寸知らせて吳れないかと書いてあつ

た。姉はこれから毎月中取次をする役に當るかも知れない兄の心事を疑つたのである。

健三は馬鹿々々しく思つた。腹立たしくも感じた。然し何より先に淺間しかつた。「默つてゐろ」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛てた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、斯うした彼の氣分を能く現はしてゐた。姉はそれぎり何とも云つて來なかつた。無筆な彼女は最初の手紙さへ他に賴んで書いて貰つたのである。

此出來事が健三に對する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも彼でも訊きたがる彼女も、健三の家庭に就いては、當り障りのない事の外、多く口を開かなかつた。健三も自分等夫婦の關係を彼女の前で問題にしようなどゝは會て想ひ到らなかつた。

「近頃お住さんは何うだい」

「まあ相變らずです」

會話は此位で切り上げられる場合が多かつた。

間接に細君の病氣を知つてゐる姉の質問には、好奇心以外に、親切から來る懸念も大分交つてゐた。然し其懸念は健三に取つて何の役にも立たなかつた。從つて彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無愛想な變人に過ぎなかつた。

淋しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へ〳〵と歩いて行つた。さうしてついぞ見た事もない、新開地のやうな汚い町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上に於いて、自分の今踏んでゐる場所を能く辨へてゐた。けれども其處には彼の追憶を誘ふ何物も殘つてゐなかつた。過去の記念が悉く彼の眼

から奪はれてしまつた大地の上を、彼は不思議さうに歩いた。
彼は昔あつた青田と、其青田の間を走る眞直な徑とを思ひ出した。田の盡きる所には三四軒の藁葺屋根が見えた。菅笠を脱いで床几に腰を掛けながら、心太を食つてゐる男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のやうに廣い紙漉場があつた。其處を折れ曲つて町つゞきへ出ると、狹い川に橋が懸つてゐた。川の左右は高い石垣で積み上げられてゐるので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂にある古風な錢湯の暖簾や、其隣の八百屋の店先に竝んでゐる唐茄子などが、若い時の健三によく廣重の風景畫を聯想させた。
然し今では凡てのものが夢のやうに悉く消え失せてゐた。殘つてゐるのはたゞ大地ばかりであつた。
「何時斯んなに變つたんだらう」
人間の變つて行く事にのみ氣を取られてゐた健三は、それよりも一層劇しい自然の變りかたに驚かされた。
彼は子供の時分比田と將棋を差した事を偶然思ひだした。比田は盤に向ふと、是でも所澤の藤吉さんの御弟子だからなと云ふのが癖であつた。今の比田も將棋盤を前に置けば、屹度同じ事を云ひさうな男であつた。
「己自身は畢竟何うなるのだらう」
衰へる丈で案外變らない人間のさまと、變るけれども日に榮えて行く郊外の樣子とが、健三に思ひがけない對照の材料を與へた時、彼は考へない譯に行かなかつた。

七十

元氣のない顔をして宅へ歸つて來た彼の樣子がすぐ細君の注意を惹いた。

「御病人は何うなの」

あらゆる人間が何時か一度は到着しなければならない最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞かうとするやうに見えた。健三は答を與へる先に、まづ一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寢てはゐるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたやうなものだね」

馬鹿らしいといふ氣が幾分か彼の口振に出た。

「騙されても其方がいくら好いか知れやしませんわ、貴夫。若しもの事でもあつて御覽なさい、それこそ……」

「兄貴が惡いんぢやない。兄貴は姉に騙されたんだから。其姉は又病氣に騙されたんだ。つまり皆騙されてゐるやうなものさ。世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩つたつて、決して騙されないんだからね」

「矢つ張宅にゐないの」

「居るもんか。尤も非道く惡かつた時は何うだか知らないが」

健三は比田の振ら下げてゐる金時計と金鎖の事を思ひ出した。兄はそれを天麩羅だらうと云つて陰で評してゐたが、當人は何處迄も本物らしく見せびらかしたがつた。金着せにせよ、本物にせよ、彼が何處で

幾何で買つたのか知るものは誰もなかつた。斯ういふ點に掛けては無頓着でゐられない性分の姉も、たゞ好い加減に其出處を推察するに過ぎなかつた。

「月賦で買つたに違ないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聽かれもしないのに、兄に向つて色々な說明をした。健三には殆ど問題にならない事が、彼等の間に想像の種を幾個でも卸した。左右されゝばされる程又比田は得意らしく見えた。健三が每月送る小遣さへ時々借りられてしまふ癖に、姉はつひに夫の手元に入る、又は現在手元にある、金高は決して知る事が出來なかつた。

「近頃は何でも債券を二三枚持つてゐるやうだよ」

姉の言葉は丸で隣の宅の財産でも云ひ中てるやうに夫から遠ざかつてゐた。

姉を斯ういふ地位に立たせて平氣でゐる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかつた。それが已むを得ない夫婦關係のやうに心得て辛抱してゐる姉自身も健三には分らなかつた。然し金銭上飽く迄祕密主義を守りながら、時々姉の豫期に釣り合はないやうなものを買ひ込んだり着込んだりして、妄りに彼女を驚かせたがる料簡に至つては想像さへ及ばなかつた。妻に對する虛榮心の發現、焦らされながらも夫を勝利と思ふ妻の滿足。――此二つのもの丈では到底十分な說明にならなかつた。

「金の要る時も他人、病氣の時も他人、それぢやたゞ一所にゐる丈ぢやないか」

健三の謎は容易に解けなかつた。考へる事の嫌ひな細君はまた何といふ評も加へなかつた。

「然し己達夫婦も世間から見れば隨分變つてるんだから、さう他の事ばかり兎や角云つちやゐられないかも知れない」

「矢つ張り同じ事ですわ。みんな自分丈は好いと思つてるんだから」

健三はすぐ癪に障つた。

「御前でも自分ぢや好い積でゐるのかい」

「ゐますとも。貴夫が好いと思つてゐらつしやる通りに」

彼等の爭ひは能く斯ういふ所から起つた。さうして折角穩かに靜まつてゐる雙方の心を攪き亂した。健三はそれを愼みの足りない細君の責に歸した。細君はまた偏窟で強情な夫の所爲だとばかり解釋した。

「字が書けなくつても、裁縫が出來なくつても、矢つ張姉のやうな亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女が何處の國にゐるもんですか」

細君の言葉の奧には、男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感が横はつてゐた。

七十一

筋道の通つた頭を有つてゐない彼女には存外新しい點があつた。彼女は形式的な昔風の倫理觀に囚はれる程嚴重な家庭に人とならなかつた。政治家を以て任じてゐた彼女の父は、教育に關しては殆ど無定見であつた。母は又普通の女の樣に八釜しく子供を育て上げる性質ではなかつた。彼女は宅にゐて比較的自由な空氣を呼吸した。さうして學校は小學校を卒業した丈であつた。彼女は考へなかつた。けれども考へた

て自分には出來ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の實質を有つた人間になつて自分の前に出て來るが好い。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも學問をした健三の方は此點に於いて却つて舊式であつた。自分は自分の爲に生きて行かなければならないといふ主義を實現したがりながら、夫の爲にのみ存在する妻を最初から假定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に從屬すべきものだ」

二人が衝突する大根は此處にあつた。

夫と獨立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。動ともすると、「女の癖に」といふ氣になつた。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意氣な」といふ言葉に變化した。細君の腹には「いくら女だつて」といふ挨拶が何時でも貯へてあつた。

「いくら女だつて、さう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顏に出る是丈の表情を明かに讀んだ。

「女だから馬鹿にするのではない、馬鹿だから馬鹿にするのだ。尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるがいゝ」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理と同じものになつてしまつた。

彼等は斯くして圓い輪の上をぐる〳〵廻つて歩いた。さうしていくら疲れても氣が付かなかつた。健三は其輪の上にはたりと立ち留る事があつた。彼の留る時は彼の激昂が靜まる時に外ならなかつた。細君も其輪の上で不圖動かなくなる事があつた。然し細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融け出す時に限つてゐた。其時健三は漸く怒號を已めた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携へて談笑しながら、矢張り圓い輪の上を離れる譯に行かなかつた。

細君が產をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎留守だつた彼は、夕暮に歸つてから細君に其話を聞いて首を傾けた。

「何か用でもあつたのかい」

「えゝ少し御話したい事があるんですつて」

「何だい」

細君は答へなかつた。

「知らないのかい」

「えゝ。また二三日うちに上つて能く御話をするからつて歸りましたから、今度參つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何も云ふ事が出來なかつた。

久しく細君の父を訪ねないでゐた彼は、用事のあるなしに拘はらず、向うがわざ〳〵此方へ出掛けて來ようなどゝは夢にも豫期しなかつた。その不審が例より彼の口數を多くする原因になつた。それとは反對

に細君の言葉は却つて常よりも少かつた。然しそれは彼がよく彼女に於いて發見する不平や無愛嬌から來る寡言とも違つてゐた。

　夜は何時の間にやら全くの冬に變化してゐた。細い燈火の影を凝と見詰めてゐると、灯は動かないで風の音丈が烈しく雨戸に當つた。ひゆう／＼と樹木の鳴るなかに、夫婦は靜かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた。

七十二

「今日父が來ました時、外套がなくつて寒さうでしたから、貴方の古いのを出して遣りました」

田舍の洋服屋で拵へた其二重廻しは、殆ど健三の記憶から消えかゝつてゐる位古かつた。細君が何うしてまたそれを彼女の父に與へたものか、健三には理解出來なかつた。

「あんな汚ならしいもの」

彼は不思議といふよりも寧ろ恥かしい氣がした。

「いゝえ。喜んで着て行きました」

「御父さんは外套を有つてゐないのかい」

「外套どころぢやない、もう何も有つちやゐないんです」

健三は驚いた。細い灯に照された細君の顏が急に憐れに見えた。

「そんなに窮つてゐるのかなあ」

「えゝもう何うする事も出來ないんですつて」

口數の寡い細君は、自分の生家に關する詳しい話を今迄夫の耳に入れずに通して來たのである。職に離れて以來の不如意を薄々知つてゐながら、まさか是程とも思はずにゐた健三は、急に眼を轉じて其人の昔を見なければならなかつた。

彼は絹帽にフロツクコートで勇ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿を鮮かに思ひ浮べた。堅木を久の字形に切り組んで作つた其玄關の床は、つる／＼光つて、時によると馴れない健三の足を滑らせた。前に廣い芝生を控へた應接間を左へ折れ曲ると、それと接續いて長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其處で細君の家族のものと一所に晩餐の卓に着いた事を未だに覺えてゐた。二階には疊が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多に招かれた彼は、そのうちの一間で暖い宵を笑ひ聲の裡に更かした記憶もあつた。

西洋館に續いて日本建も一棟付いてゐた此屋敷には、家族の外に五人の下女と二人の書生が住んでゐた。職務柄客の出入の多い此家の用事には、それ丈の召仕が必要かも知れなかつたが、もし經濟が許さないとすれば、其必要も充たされる筈はなかつた。

健三が外國から歸つて來た時ですら、細君の父は左程困つてゐるやうには見えなかつた。彼が駒込の奧に住居を構へた當座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つて斯う云つた。——

「まあ自分の宅を有つといふ事が人間には何うしても必要ですね。然しさう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄を心掛けたら好いでせう。二三千圓の金を有つてゐないと、いざといふ場合に、大變困るもんだから。なに千圓位出來ればそれで結構です。それを私に預けて御置きなさると、一年位經

細君の父にのみあつて、自分には全く缺乏してゐる、一種の怪力を眺めた。しかし千圓拵へて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つて其方法を訊く氣にもならずについ今日迄過ぎたのである。

「そんなに貧乏する筈がないだらうぢやないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻り合せだから」

産といふ肉體の苦痛を眼前に控へてゐる細君の氣息遣はたゞでさへ重々しかつた。健三は默つて氣の毒さうな其腹と、光澤の惡い其頰とを眺めた。

昔田舍で結婚した時、彼女の父が何處からか浮世繪風の美人を描いた下等な團扇を四五本買つて持つて來たので、健三は其一本をぐる〳〵廻しながら、隨分俗なものだと評したら、父はすぐ「所相應だらう」と答へた事があつたが、健三は今自分が其地方で作つた外套を細君の父に遣つて、「阿爺相應だらう」といふ氣には迚もなれなかつた。いくら困つたつて彼んなものをと思ふと寧ろ情なくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでせう」

細君は淋しさうに笑つた。

七十三

中一日置いて彼が來た時、健三は久し振で細君の父に會つた。

年輩から云つても、經歴から見ても、健三より遙に世間馴れた父は、何時も自分の娘婿に對して鄭寧であつた。或時は不自然に陷る位鄭寧過ぎた。然しそれが彼を現はす凡てゞはなかつた。裏側には反對のものが所々に起伏してゐた。

官僚式に出來上つた彼の眼には、健三の態度が最初から頗る横着に見えた。超えてはならない階段を無躾に飛び越すやうにも思はれた。其上彼は無暗に自ら任じてゐるらしい健三の高慢ちきな所を喜ばなかつた。頭にある事を何でも口外して憚らない健三の無作法も氣に入らなかつた。亂暴とより外に取りやうのない一徹一圖な點も非難の標的になつた。

健三の稚氣を輕蔑した彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて來ようとする健三を表面上鄭寧な態度で遮つた。すると二人は其處で留まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所も判明と理解する事が出來惡くなつた。さうして二人共自分の有つてゐる缺點の大部分には決して氣が付かなかつた。

然し今の彼は健三に對して疑ひもなく一時的の弱者であつた。他に頭を下げる事の嫌ひな健三は窮迫の結果、餘儀なく自分の前に出て來た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない譯に行かなかつた。

「如何にも苦しいだらう」

健三は此一念に制せられた。さうして彼の持ち來した金策談に耳を傾けた。けれども好い顏はし得なかつた。心のうちでは好い顏をし得ない其自分を呪つてゐた。

「金の話だから好い顏が出來ないんぢやない。金とは獨立した不愉快の爲に好い顏が出來ないのです。誤解してはいけません。私は斯んな場合に敵討をするやうな卑怯な人間とは違ひます」

細君の父の前に是丈の辯解がしたくつて堪らなかつた健三は、默つて誤解の危險を冒すより外に仕方がなかつた。

此ぶつきら棒な健三に比べると、細君の父は餘程鄭寧であつた。又落付いてゐた。傍から見れば遙に紳士らしかつた。

彼は或人の名を擧げた。

「向うでは貴方を知つてるといひますが、貴方も知つてるんでせうね」

「知つてゐます」

健三は昔學校にゐた時分に其男を知つてゐた。けれども深い交際はなかつた。卒業して獨逸へ行つて歸つて來たら、急に職業がへをして或大きな銀行へ入つたとか人の噂に聞いた位より外に、彼の消息は健三に傳はつてゐなかつた。

「まだ銀行にゐるんですか」

細君の父は點頭いた。然し二人が何處で何う知合になつたのか、健三には想像さへ付かなかつた。又そ

れを詳しく訊いて見た所で仕方がなかつた。要點はたゞ其人が金を貸してくれるか、呉れないかの問題にあつた。

「で當人の云ふには、貸しても好い、好いが慥な人を證人に立てゝ貰ひたいと斯ういふんです」

「成程」

「ぢや誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざ〳〵指名した譯なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇しなかつた。然し自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他に知れてゐなければならない筈だと考へた。其上細君の父は交際範圍の極めて廣い人であつた。平生彼の口にする知合のうちには、健三より何の位世間から信用されて好いか分らない程有名な人がいくらでもゐた。

「何故私の判が必要なんでせう」

「貴方なら貸さうと云ふのです」

健三は考へた。

七十四

彼は今日迄證書を入れて他から金を借りた經驗のない男であつた。つい義理で判を捺いて遣つたのが本で、立派な腕を有ちながら、生涯社會の底に沈んだ儘、藻掻き通しに藻掻いてゐる人の話は、いくら迂闊

な彼の耳にも屢傳へられてゐた。彼は出來るなら自分の未來に關るやうな所作を避けたいと思つた。然し頑固な彼の半面には至つて氣の弱い煮え切らない或物が能く働きたがつた。此場合斷然連印を拒絶するのは、彼に取つて如何にも無情で、冷刻で、心苦しかつた。

「私でなくつちや不可いのでせうか」

「貴方なら好いといふんです」

彼は同じ事を二度訊いて同じ答へを二度受けた。

「何うも變ですね」

世事に疎い彼は、細君の父が何處へ頼んでも、もう判を押して呉れるものがないので、しまひに仕方なしに彼の所へ持つて來たのだといふ明白な事情さへ推察し得なかつた。彼は親しく交際つた事もない其銀行家から夫程信用されるのが却つて怖くなつた。

「何んな目に逢はされるか分りやしない」

彼の心には未來に於ける自己の安全といふ懸念が十分に働いた。同時にたゞ夫丈の利害心で此問題を片付けてしまふ程彼の性格は單純に出來て居なかつた。彼の頭が彼に適當な解決を與へる迄彼は逡巡しなければならなかつた。其解決が最後に來た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を拂つた。

「印を捺す事は何うも危險ですから已めたいと思ひます。然し其代り私の手で出來る丈の金を調へて上げませう。無論貯蓄のない私の事だから、調へるにした所で、どうせ何處からか借りるより外に仕方がな

いのですが、出來るなら證文を書いたり判を捺したりするやうな形式上の手續を踏む金は借りたくないのです。私の有つてゐる狹い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、まづ其方の方を一つ中つて見ませう。無論御入用丈の額は駄目です。私の手で調へる以上、私の手で返さなければならないのは無論の事ですから、身分不相當の借金は出來ません」

幾何でも融通が付けば付いた丈助かるといつた風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強ひなかつた。

「何うぞ夫ぢや何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて歸つて行つた。書齋で話を濟ませた健三は、玄關から又同じ書齋に戻つたなり細君の顏を見なかつた。細君も父を玄關に送り出した時、夫と竝んで沓脱の上に立つた丈で、遂に書齋へは入つて來なかつた。金策の事は默々のうちに二人に了解されてゐながら、遂に二人の間の話題に上らずにしまつた。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果すために動かなければならなかつた。彼は世帶を持つときに、火鉢や煙草盆を一所に買つて歩いて貰つた友達の宅へ又出掛けた。

「金を貸して呉れないかね」

彼は藪から棒に質問を掛けた。金などを有つてゐない友達は驚いた顏をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳しながら友達の前に逐一事情を話した。

「何うだらう」

三年間支那のある學堂で教鞭を取つてゐた頃に蓄へた友達の金は、みんな電鐵か何かの株に變形してゐた。

「おや清水に頼んで見て呉れないか」

友達の妹婿に當る清水は、下町の可なり繁華な場所で、病院を開いてゐた。

「さあ何うかなあ。彼奴ら其位な金はあるだらうが、動かせるやうになつてゐるかしら。まあ訊いて見てやらう」

友達の好意は幸ひ徒勞にならずに濟んだ。健三の借り受けた四百圓の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四五日經つて後の事であつた。

七十五

「己は精一杯の事をしたのだ」

健三の腹には斯ういふ安心があつた。從つて彼は自分の調達した金の價値に就いて餘り考へなかつた。嘸嬉しがるだらうとも思はない代りに、是位の補助が何の役に立つものかといふ氣も起さなかつた。それが何の方面に何う消費されたかの問題になると、全くの無智識で澄ましてゐた。細君の父も其處迄内情を打ち明ける程彼に接近して來なかつた。

從來の牆壁を取り拂ふには此機會があまりに脆弱過ぎた。若しくは二人の性格があまりに固着し過ぎてゐた。

父は健三よりも世間的に虚榮心の強い男であつた。成るべく自分を他に能く了解させようと力めるよりも、出來るだけ自分の價値を明るい光線に觸てさせたがる性質であつた。從つて彼を圍繞する妻子近親に對する彼の樣子は幾分か誇大に傾きがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一轉した時、彼は自分の平生を顧みない譯に行かなかつた。彼はそれを糊塗するため、健三に向つて能ふ限り左あらぬ態度を裝つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとうとう健三に連印を求めたのである。けれども彼が何の位の負債に何う苦しめられてゐるかといふ巨細の事實は、遂に健三の耳に入らなかつた。健三も訊かなかつた。

二人は今迄の距離を保つた儘で互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手を又引き込めた。傍でそれを見てゐた細君は默つて何とも云はなかつた。

健三が外國から歸つた當座の二人は、まだ是程に離れてゐなかつた。彼が新宅を構へて間もない頃、彼は細君の父がある鑛山事業に手を出したといふ話を聞いて驚いた事があつた。

「山を掘るんだつて？」

「えゝ、何でも新しく會社を拵へるんださうです」

彼は眉を顰めた。同時に彼は父の怪力に幾分かの信用を置いてゐた。

「旨く行くのかね」

「何うですか」

健三と細君との間に斯んな簡單な會話が取り換はされた後、彼はその用事を帯びて北國のある都會へ向

けて出發したといふ父の報知を細君から受け取つた。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣つて來た。父が旅先で急に病氣に罹つたので、是から自分も行かなければならないと思ふが、それに就いて旅費の都合は出來まいかといふのが母の用向であつた。

「えゝ／＼旅費位何うでもして上げますから、すぐ行つて御上げなさい」

宿屋に寢てゐる苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心から氣の毒に思つた健三は、自分の見た事もない遠くの空の佗しさ迄想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が來た丈で、詳しい事は丸で分りませんのですから」

「おや猶御心配でせう。成るべく早く御立ちになる方が好いでせう」

幸ひにして父の病氣は輕かつた。然し彼の手を着けかけたといふ鑛山事業はそれぎり立消になつてしまつた。

「まだ何も見付からないのかね、口は」

「有るにはあるやうですけれども旨く纏まらないんですつて」

細君は父がある大きな都會の市長の候補者になつた話をして聞かせた。其運動費は財力のある彼の舊友の一人が負擔して呉れてゐるやうであつた。然し市の有志家が何名か打ち揃つて上京した時に、有名な政治家のある伯爵に會つて、父の適不適を問ひ訊したら、其伯爵が何うも不向だらうと答へたので、話はそれぎりで已めになつたのださうである。

「何うも困るね」

「今に何とかなるでせう」
細君は健三よりも自分の父の方を遙に餘計信用してゐた。健三も例の怪力を知らないではなかつた。
「たゞ氣の毒だからさう云ふ丈さ」
彼の言葉に嘘はなかつた。

七十六

けれども其次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つてゐた。自ら進んで母に旅費を用立つた女婿は、一歩退かなければならなかつた。彼は比較的遠い距離に立つて細君の父を眺めた。然し彼の眼に漂ふ色は冷淡でも無頓着でもなかつた。寧ろ黒い瞳から閃かうとする反感の稲妻であつた。力めて其稲妻を隱さうとした彼は、已むを得ず此鋭く光るものに冷淡と無頓着の假裝を着せた。

父は悲境にゐた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。此二つのものが健三の自然に壓迫を加へた。積極的に突つ掛る事の出來ない彼は控へなければならなかつた。單なる無愛想の程度で我慢すべく餘儀なくされた彼には、相手の苦しい現狀と慇懃な態度とが、却つてわが天眞の流露を妨げる邪魔物となつた。彼から云へば、父は斯ういふ意味に於いて彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父から云へば、普通の人としてさへ不都合に近い愚劣な應對振を、自分の女婿に見出すのは、堪へがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と關係のない此場丈の光景を眺める傍觀者の眼にも健三は矢張馬鹿であつた。それを承知してゐる細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「私も今度といふ今度は困りました」

最初に斯う云つた父は健三からはか〲しい返事すら得なかつた。

父はやがて財界で有名な或人の名を擧げた。其人は銀行家でもあり、又實業家でもあつた。

「實は此間ある人の周旋で會つて見ましたが、何うか旨く出來さうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼處位なもんですから、使用人になつたからと云つて、別に私の體面に關る事もありませんし、それに仕事をする區域も廣い樣ですから、面白く働けるだらうと思ふんです」

此財力家によつて細君の父に豫約された地位といふのは、關西にある或私立の鐵道會社の社長であつた。會社の株の大部分を一人で所有してゐる其人は、自分の意志の儘に、其處の社長を選ぶ特權を有してゐたのである。然し何十株か何百株かの持主として、豫め資格を作つて置かなければならない父は、何うして金の工面をするだらう。事情に通じない健三には此疑問さへ解けなかつた。

「一時必要な株數丈を私の名儀に書換へて貰ふんです」

健三は父の言葉に疑ひを挾む程、彼の才能を見縊つてゐなかつた。彼と彼の家族とを目下の苦境から解脫させるといふ意味に於いても、其成功を希望しない譯に行かなかつた。然し依然として元の立場に立つてゐる事も改める譯に行かなかつた。彼の挨拶は形式的であつた。さうして幾分か彼の心の柔かい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父は丸で其處に注意を拂はないやうに見えた。

「然し困る事に、是は今が今といふ譯に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懷から又一枚の辭令見たやうなものを出して健三に見せた。それには或保險會社が彼に顧問を囑託

するといふ文句と、其報酬として月々彼に百圓を贈與するといふ條件が書いてあつた。
「今御話した一方の方が出來たら之は已めるか、又は出來ても續けてやるか、其邊は未だ分らないんですが、兎に角百圓でも當座の凌ぎにはなりますから」
昔彼が政府の内意で或官職を抛つた時、當路の人は山陰道筋のある地方の知事なら轉任させても好いといふ條件を付けた事があつた。然し彼は斷然それを斥けた。彼が今大して隆盛でもない保險會社から百圓の金を貰つて、別に厭な顏をしないのも、矢張境遇の變化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。
斯うした懸け隔てのない父の態度は、動ともすると健三を自分の立場から前へ押し出さうとした。其傾向を意識するや否や彼は又後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然らしく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

七十七

細君の父は事務家であつた。動ともすると仕事本位の立場からばかり人を評價したがつた。乃木將軍が一時臺灣總督になつて間もなくそれを已めた時、彼は健三に向つて斯んな事を云つた。
「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤く實に立派なものです。然し總督としての乃木さんが果して適任であるか何うかといふ問題になると、議論の餘地がまだ大分あるやうに思ひます。個人の德は自分に親しく接觸する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を與へようとするには不十分です。其處へ行くと矢つ張手腕ですね。手腕がなくつちや、何んな善人でもたゞ坐つてゐるより

外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の關係から或會の事務一切を管理してゐた。侯爵を會頭に頂く其會は、彼の力で設立の主意を綺麗に事業の上で完成した後、彼の手元に二萬圓程の剩餘金を委ねた。官途に縁がなくなつてから、不如意に不如意の續いた彼は、つい其委託金に手をつけた。さうして何時の間にか全部を消費してしまつた。然し彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けなかつた。從つて彼は此預金から當然生まれて來る百圓近くの利子を每月調達して、體面を繕はなければならなかつた。自家の經濟よりも却つて此方を苦に病んでゐた彼が、公生涯の持續に絕對に必要な其百圓を、月々保險會社から貰ふやうになつたのは、當時の彼の心中に立入つて考へて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

餘程後になつて始めて此話を細君から聽いた健三は、彼女の父に對して新たな同情を感じた丈で、不德義漢として彼を惡む氣は更に起らなかつた。さういふ男の娘と夫婦になつてゐるのが恥づかしいなどゝは更に思はなかつた。然し細君に對しての健三は、此點に關して殆ど無言であつた。細君は時々彼に向つて云つた。――

「私、どんな夫でも構ひませんわ、たゞ自分に好くして呉れさへすれば」

「泥棒でも構はないのかい」

「えゝえゝ、泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れゝば、それで澤山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅で不親切ぢや私にや何にもならないんですもの」

實際細君は此の言葉通りの女であつた。健三も其意見には贊成であつた。けれども彼の推察は月の暈の

樣に細君の言外迄滲み出した。學問許りに屈託してゐる自分を、彼女が斯ういふ言葉で餘所ながら非難するのだと云ふ臭が何處やらでした。然しそれよりも遙に強く、夫の心を知らない彼女が斯んな態度で暗に自分の父を辯護するのではないかといふ感じが健三の胸を打つた。

「己はそんな事で人と離れる人間ぢやない」

自分を細君に説明しようと力めなかつた彼も、獨り辯解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた。

然し細君の父と彼との交情に、自然の溝渠が出來たのは、やはり父の重きを置き過ぎてゐる手腕の結果としか彼には思へなかつた。

健三は正月に父の所へ禮に行かなかつた。恭賀新年といふ端書丈を出した。父はそれを寛假さなかつた。表向それを咎める事もしなかつた。彼は十二三になる末の子に、同じく恭賀新年といふ曲りくねつた字を書かして、其子の名前で健三に賀狀の返しをした。斯ういふ手腕で彼に返報する事を巨細に心得てゐた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口づから述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であつた。

一事は萬事に通じた。利が利を生み、子に子が出來た。二人は次第に遠ざかつた。已むを得ないで犯す罪と、遣らんでも濟むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てゝゐる健三は、性質の宜しくない此餘裕を非常に惡み出した。

七十八

「與し易い男だ」

實際に於いて與し易い或物を多量に有つてゐると自覺しながらも、健三は他から斯う思はれるのが癪に障つた。

彼の神經は此肝癪を乘り超えた人に向つて鋭い懷しみを感じた。彼は群衆のうちにあつて直ぐさういふ人を物色する事の出來る眼を有つてゐた。けれども彼自身は何うしても其域に達せられなかつた。だから猶さういふ人が眼に着いた。又さういふ人を餘計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵つた。然し自分を罵らせるやうにする相手をば更に烈しく罵つた。

斯くして細君の父と彼との間には自然の造つた溝渠が次第に出來上つた。彼に對する細君の態度も暗にそれを手傳つたには相違なかつた。

二人の間柄が擦れ〳〵になると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持たなければならなくなつた。然し細君の肩を持つといふ事は、或場合に於いて、健三を敵とするといふ意味に外ならなかつた。二人は益離れる丈であつた。

幸ひにして自然は緩和劑としての歇斯的里を細君に與へた。發作は都合好く二人の關係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通ふ廊下に俯伏になつて倒れてゐる細君を抱き起して床の上迄連れて來た。眞夜中に雨戶を一枚明けた縁側の端に蹲踞つてゐる彼女を、後から兩手で支へて、寢室へ戾つて來た經驗もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧として夢よりも分別がなかつた。瞳孔が大きく開いてゐた。外界はたゞ幻影のやうに映るらしかつた。

枕邊に坐つて彼女の顏を見詰めてゐる健三の眼には何時でも不安が閃いた。時としては不便の念が凡てに打ち勝つた。彼は能く氣の毒な細君の亂れかゝつた髮に櫛を入れて遣つた。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣つた。たまには氣を確にするために、顏へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

發作の今よりも劇しかつた昔の樣も健三の記憶を刺戟した。

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帶と細君の帶とを繋いで寢た。紐の長さを四尺程にして、寢返りが充分出來るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。

或時の彼は細君の鳩尾へ茶碗の絲底を宛がつて、力任せに押し付けた。それでも踏ん反り返らうとする彼女の魔力を此一點で喰留めなければならない彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道さまが來ました。五色の雲へ乘つて來ました。大變よ、貴夫」

「私の赤ん坊は死んぢまつた。私の死んだ赤ん坊が來たから行かなくつちやならない。そら其處にゐるぢやありませんか。桔槹の中に。私一寸行つて見て來るから放して下さい」

流產してから間もない彼女は、抱き竦めにかゝる健三の手を振り拂つて、斯う云ひながら起き上らうとしたのである。……

細君の發作は健三に取つての大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉靆いてゐた。彼は心配よりも可哀想になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出來得る限り機嫌を取つた。細君も嬉しさうな顏をした。

だから發作に故意だらうといふ疑ひの掛からない以上、また餘りに癇癪が強過ぎて、何うでも勝手にしろといふ氣にならない以上、最後に其度數が自然の同情を妨げて、何でさう己を苦しめるのかといふ不平が高まらない以上、細君の病氣は二人の仲を和げる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間には斯ういふ重寶な緩和劑が存在してゐなかつた。從つて細君が本で出來た兩者の疎隔は、たとひ夫婦の關係が常に復した後でも、一寸埋める譯に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事實に相違なかつた。

七十九

不合理な事の嫌ひな健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別に何うする料簡も出さなかつた。彼の性質はむきでもあり一圖でもあつたと共に頗る消極的な傾向を帶びてゐた。

「己にそんな義務はない」

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、其答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を付けて呉れるだらうとさへ豫期しなかつた。

不幸にして細君も亦此點に於いて何處迄も消極的な態度を離れなかつた。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他から賴まれて男より邁進する場合もあつた。然しそれは眼前に手で觸れられる丈の明瞭な或物を捉まへた時に限つてゐた。所が彼女の見た夫婦關係には、そんな物が何處にも存在してゐなかつた。自分の父と健三の間にも是といふ程の破綻は認められなかつた。大きな具象的な變化でなければ事件と認

めたい彼女は其他を閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態の動揺に手の着けやうのないものだと觀じてゐた。

「だつて何もないぢやありませんか」

裏面に其動揺を意識しつゝ彼女は斯う答へなければならなかつた。彼女に最も正當と思はれた此答が、時として虚偽の響を持つて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。仕舞に何うなつても構はないといふ投げ遣りの氣分が、單に消極的な彼女を猶の事消極的に練り堅めて行つた。

斯うして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永續するためにと評されても仕方のない此一致は、根強い彼等の性格から割り出されてゐた。偶然といふよりも寧ろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼等は、相手の人相で自分の運命を判斷した。

細君の父が健三の手で調達された金を受取つて歸つてから、それを特別の問題ともしなかつた夫婦は、却つて餘事を話し合つた。

「産婆は何時頃生れると云ふのかい」

「何時つて判然云ひもしませんか、もう直ですわ」

「用意は出來てるのかい」

「えゝ奥の戸棚の中に入つてゐます」

健三には何が這入つてゐるのか分らなかつた。細君は苦しさうに大きな溜息を吐いた。

「何しろ斯う重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないつて云つてたぢやないか」
「えゝ、死んでも何でも構はないから、早く生んぢまひたいわ」
「どうも御氣の毒さまだな」
「好いわ、死ねば貴夫の所爲だから」
健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の光景を憶ひ出した。不安さうに苦い顏をしてゐた彼が、産婆から少し手を貸して呉れと云はれて産室へ入つた時、彼女は骨に應へるやうな恐ろしい力でいきなり健三の腕に獅嚙み付いた。さうして拷問でもされる人のやうに唸つた。彼は自分の細君が身體の上に受けつゝある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかといふ氣さへした。
「産をするのも苦しいだらうが、それを見てるのも辛いものだぜ」
「ぢや何處かへ遊びにでも入らつしやいな」
「一人で生めるかい」
細君は何とも答へなかつた。夫が外國へ行つてゐる留守に、次の娘を生んだ時の事などは丸で口にしなかつた。健三も訊いて見ようとは思はなかつた。生れ付き心配性な彼は、細君の唸聲を餘所にして、ぶら〳〵外を歩いてゐられるやうな男ではなかつた。
産婆が次に顏を出した時、彼は念を押した。
「一週間以内かね」
「いえもう少し後でせう」

健三も細君も其氣でゐた。

八十

日取が狂つて豫期より早く産氣づいた細君は、苦しさうな聲を出して、側に寢てゐる夫の夢を驚かした。

「先刻から急に御腹が痛み出して……」

「もう出さうなのかい」

健三には何の位の程度で細君の腹が痛んでゐるのか分らなかつた。彼は寒い夜の中に夜具から顏丈出して、細君の樣子をそつと眺めた。

「少し撫つて遣らうか」

起き上る事の臆劫な彼は出來る丈口先で間に合せようとした。彼は産に就いての經驗をたつた一度しか有つてゐなかつた。其經驗も大方は忘れてゐた。けれども長女の生れる時には、斯ういふ痛みが、潮の滿干のやうに、何度も來たり去つたりしたやうに思へた。

「さう急に生れるんぢやないんだらうな、子供つてものは。一仕切痛んではまた一仕切治まるんだらう」

「何だか知らないけれども段々痛くなる丈ですわ」

細君の態度は明かに彼女の言葉を證據立てた。凝と蒲團の上に落付いてゐられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けやうがなかつた。

「産婆を呼ばうか」

「え、、早く」
職業柄産婆の宅には電話が掛つてゐたけれども、彼の家にそんな氣の利いた設備のあらう筈はなかつた。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の醫者の所へ驅けつけるのを例にしてゐた。
初冬の暗い夜はまだ明け離れるのに大分間があつた。彼は其人と其人の門を敲く下女の迷惑を察した。然し夜明迄安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室の襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口迄來た彼は、すぐ召使の一人を急き立てゝ暗い夜の中へ追ひ遣つた。
彼が細君の枕元へ歸つて來た時、彼女の痛みは益劇しくなつた。彼の神經は一分毎に門前で停る車の響を待受けなければならない程に緊張して來た。
産婆は容易に來なかつた。細君の唸る聲が絶間なく靜かな夜の室を不安に攪き亂した。五分經つか經たないうちに、彼女は「もう生れます」と夫に宣告した。さうして今迄我慢に我慢を重ねて怺へて來たやうな叫び聲を一度に揚げると共に胎兒を分娩した。
「確りしろ」
すぐ立つて蒲團の裾の方に廻つた健三は、何うして好いか分らなかつた。其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに靜かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落してゐる邊は、夜具の縞柄さへ判明しないほんやりした陰で一面に裹まれてゐた。
彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其處を照すのは、男子の見るべからざるものを強ひて見るやうな心持がして氣が引けた。彼は已むを得ず暗中に摸索した。彼の右手は忽ち一種異樣の觸覺をもつて、今迄

經驗した事のない或物に觸れた。其或物は寒天のやうにぷり〳〵してゐた。さうして輪廓からいつても恰好の判然しない何かの塊に過ぎなかつた。彼は氣味の惡い感じを彼の全身に傳へる此塊を輕く指頭で撫でゝ見た。塊は動きもしなければ泣きもしなかつた。たゞ撫でるたんびにぷり〳〵した寒天のやうなものが剝げ落ちるやうに思へた。若し強く抑へたり持つたりすれば、全體が屹度崩れて仕舞ふに違ないと彼は考へた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込めた。

「然し此儘にして放つて置いたら、風邪を引くだらう、寒さで凍えてしまふだらう」

死んでゐるか生きてゐるかさへ辨別のつかない彼にも斯ういふ懸念が湧いた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中に入れてあるといつた細君の言葉を思ひ出した。さうしてすぐ自分の後部にある唐紙を開けた。彼は其處から多量の綿を引き摺り出した。脫脂綿といふ名さへ知らなかつた彼は、それを無暗に千切つて柔かい塊の上に載せた。

八十一

其内待ちに待つた產婆が來たので、健三は漸く安心して自分の室へ引取つた。

夜は間もなく明けた。赤子の泣く聲が家の中の寒い空氣を顫はせた。

「御安產で御目出たう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し氣の毒さうに中途で句を切つた。

「又女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのも亦女、都合三人の娘の父になつた彼は、さう同じものばかり生んで何うする氣だらうと、心の中で暗に細君を非難した。然しそれを生ませた自分の責任には思ひ到らなかつた。

田舍で生れた長女は肌理の濃やかな美しい子であつた。健三はよく其子を乳母車に乘せて町の中を後から押して歩いた。時によると、天使のやうに安らかな眠りに落ちた顏を眺めながら宅へ歸つて來た。然し當にならないのは想像の未來であつた。健三が外國から歸つた時、人に伴れられて彼を新橋に迎へた此娘は、久し振りに父の顏を見て、もつと好い御父さまかと思つたと傍のものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに惡い方に變化してゐた。彼女の顏は段々丈が詰つて來た。輪廓に角が立つた。健三は此娘の容貌の中にいつか成長しつゝある自分の相好の惡い所を明かに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物だらけの頭をしてゐた。風通しが惡いからだらうといふのが本で、とう／＼髮の毛をぢよぎ／＼に剪つてしまつた。顋の短い眼の大きな其子は、海坊主の化物のやうな風をして、其處いらをうろ／＼してゐた。

三番目の子丈が器量好く育たうとは親の慾目にも思へなかつた。

「あゝ云ふものが續々生れて來て、必竟何うするんだらう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、斯ういふ自分や自分の細君など

も、必竟何うするんだらうといふ意味も朧氣に交つてゐた。
彼は外へ出る前に一寸寢室へ顔を出した。細君は洗ひ立てのシーツの上に穩かに寢てゐた。子供は小さな附屬物のやうに、厚い綿の入つた新調の夜具蒲團に包まれたまゝ、傍に置いてあつた。其子供は赤い顔をしてゐた。昨夜暗闇で彼の手に觸れた寒天のやうな肉塊とは全く感じの違ふものであつた。
一切も綺麗に始末されてゐた。其處いらには汚れ物の影さへ見えなかつた。夜來の記憶は跡形もなく夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。
「蒲團は換へて遣つたのかい」
「えゝ、蒲團も敷布も換へて上げました」
「よく斯う早く片付けられるもんだね」
産婆は笑ふ丈であつた。若い時から獨身で通して來た此女の聲や態度は何處となく男らしかつた。
「貴夫が無暗に脱脂綿を使つて御仕舞になつたものだから、足りなくつて大變困りましたよ」
「左右だらう、隨分驚いたからね」
斯う答へながら健三は大して氣の毒な思ひもしなかつた。それよりも多量に血を失つて蒼い顔をしてゐる細君の方が懸念の種になつた。
「何うだ」
細君は微に眼を開けて、枕の上で輕く肯いた。健三は其儘外へ出た。
例刻に歸つた時、彼は洋服のまゝで又細君の枕元に坐つた。

「何うだ」
然し細君はもう背かなかつた。
「何だか變な樣です」
彼女の顏は今朝見た折と違つて熱で火熱つてゐた。
「心持が惡いのかい」
「えゝ」
「產婆を呼びに遣らうか」
「もう來るでせう」
產婆は來る筈になつてゐた。

八十二

やがて細君の腋の下に檢溫器が宛がはれた。
「熱が少し出ましたね」
產婆は斯う云つて度盛の柱の中に上つた水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡であつた。用心のため產科の醫者を呼んで診て貰つたら何うだといふ相談さへせずに歸つてしまつた。
「大丈夫なのかな」
「何うですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さへ出ればすぐ産褥熱ぢやなからうかといふ危惧の念を起した。母から掛り付けて來た産婆に信頼してゐる細君の方が却つて平氣であつた。

「何うですかつて、御前の身體ぢやないか」

細君は何とも答へなかつた。健三から見ると、死んだつて構はないといふ表情が其顏に出てゐるやうに思へた。

「人が斯んなに心配して遣るのに」

此感じを翌る日迄持ち續けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。さうして午後に歸つて來て、細君の熱がもう退めてゐる事に氣が付いた。

「矢つ張何でもなかつたのかな」

「えゝ。だけど何時又出て來るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は眞面目であつた。細君は淋しい頰に微笑を洩らした。

熱は幸ひにしてそれぎり出なかつた。産後の經過は先づ順當に行つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元へ來て、時々話をしながら坐つた。

「今度は死ぬ〳〵つて云ひながら、平氣で生きてゐるぢやないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御隨意だ」

夫の言葉を戲談半分に聽いてゐられるやうになつた細君は、自分の生命に對して鈍いながらも一種の危險を感じた其當時を顧みなければならなかつた。

「實際今度は死ぬと思つたんですもの」

「何ういふ譯で」

「譯はないわ、たゞ思ふのに」

死ぬと思つたのに却つて普通の人より輕い産をして、豫想と事實が丁度裏表になつた事さへ、細君は氣に留めてゐなかつた。

「御前は暢氣だね」

「貴夫こそ暢氣よ」

細君は嬉しさうに自分の傍に寢てゐる赤ん坊の顏を見た。さうして指の先で小さい頰片を突ついて、あやし始めた。其赤ん坊はまだ人間の體裁を具へた眼鼻を有つてゐるとは云へない程變な顏をしてゐた。

「産が輕い丈あつて、少し小さ過ぎる樣だね」

「今に大きくなりますよ」

健三は此小さい肉の塊が今の細君のやうに大きくなる未來を想像した。それは遠い先にあつた。けれども中途で命の綱が切れない限り何時か來るに相違なかつた。

「人間の運命は中々片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。さうして其意味が解らなかつた。

「何ですつて」
健三は彼女の前に同じ文句を繰返すべく餘儀なくされた。
「それが何うしたの」
「何うしもしないけれども、左右だから左右だといふのさ」
「詰らないわ。他に解らない事さへ云ひや、好いかと思つて」
細君は夫を捨てゝ又自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭な顔もせずに書齋へ入つた。
彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならずにゐる兄の事があつた。喘息で斃れようとして未だ斃れずにゐる姉の事があつた。新しい位地が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。其他島田の事もお常の事もあつた。さうして自分と是等の人々との關係が皆まだ片付かずにゐるといふ事もあつた。

八十三

子供は一番氣樂であつた。生きた人形でも買つて貰つたやうに喜んで、閑さへあると、新しい妹の傍に寄りたがつた。其妹の瞬き一つさへ驚嘆の種になる彼等には、嚔でも欠でも何でも彼でも不可思議な現象と見えた。
「今に何んなになるだらう」
當面に忙殺される彼等の胸には曾て斯うした問題が浮かばなかつた。自分達自身の今に何んなになるか

をすら了解し得ない子供等は無論今に何うするだらう抔と考へる筈がなかつた。

此意味で見た彼等は細君よりも尚遠く健三を離れてゐた。外から歸つた彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやり是等の一團を眺めた。

「又塊つてるな」

彼はすぐ踵を回らして部屋の外へ出る事があつた。

時によると彼は服も改めずにすぐ其處へ胡坐をかいた。

「斯う始終湯婆ばかり入れてるちや子供の健康に惡い。出してしまへ。第一幾何入れるんだ」

彼は何も解らない癖に好い加減な小言を云つて却つて細君から笑はれたりした。

日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る氣にならなかつた。それでゐて一つ室に塊つてゐる子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を專領してしまふものだね」

細君は驚いた顏をして夫を見返した。其處には自分が今迄無自覺で實行して來た事を、夫の言葉で突然悟らされたやうな趣もあつた。

「何で藪から棒にそんな事を仰しやるの」

「だつて左右ぢやないか。女はそれで氣に入らない亭主に敵討をする積なんだらう」

「馬鹿を仰しやい。子供が私の傍へばかり寄り付くのは、貴夫が構ひ付けないからです」

「己を構ひ付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう」

「何うでも勝手になさい。何ぞといふと僻みばかり云つて。どうせ口の達者な貴夫には敵ひませんから」
健三は寧ろ眞面目であつた。僻みとも口巧者とも思はなかつた。
「女は策略が好きだから不可い」
細君は床の上で寢返りをして彼方を向いた。さうして涙をぽた〱と枕の上に落した。
「そんなに何も私を虐めなくつても……」
細君の樣子を見てゐた子供はすぐ泣き出しさうにした。健三の胸は重苦しくなつた。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を並べなければならなかつた。然し彼の理解力は依然として此同情とは別物であつた。細君の涙を拭いてやつた彼は、其涙で自分の考へを訂正する事が出來なかつた。
次に顏を合せた時、細君は突然夫の弱點を刺した。
「貴夫何故其子を抱いて御遣りにならないの」
「何だか抱くと劍呑だからさ。頸でも折ると大變だからね」
「噓を仰しやい。貴夫には女房や子供に對する情合が缺けてゐるんですよ」
「だつて御覽な、ぐた〱して抱き慣けない男に手なんか出せやしないぢやないか」
實際赤ん坊はぐた〱してゐた。骨などは何處にあるか丸で分らなかつた。それでも細君は承知しなかつた。彼女は昔一番目の娘に水疱瘡の出來た時、健三の態度が俄に一變した實例を證據に擧げた。
「それ迄毎日抱いて遣つて居たのに、それから急に抱かなくなつたぢやありませんか」

健三は事實を打消す氣もなかつた。同時に自分の考を改めようともしなかつた。

「何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深く斯う信じてゐた。恰も自分自身は凡ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。

八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で讀んだ。時々枕元に置いてある厚紙の汚らしい其表紙が健三の注意を惹く時、彼は妻君に向つて訊いた。

「斯んなものが面白いのかい」

細君は自分の文學趣味の低い事を嘲られるやうな氣がした。

「可いぢやありませんか、貴夫に面白くなくつたつて、私にさへ面白けりや」

色々な方面に於いて自分と夫の隔離を意識してゐた彼女は、すぐ斯んな口が利きたくなつた。

健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二三の男を知つてゐるぎりであつた。さうして其人々はみんな健三とは異つた意味で生きて行くものばかりであつた。男性に對する觀念をその數人から抽象して健三の所へ持つて來た彼女は、全く豫期と反對した一個の男を、彼女の夫に於いて見出した。彼女は其何方かゞ正しくなければならないと思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考は單純であつた。今に此夫が世間から教育されて、自分の父のやうに、型が變つて行くに違ひないといふ確信を有つてゐた。

分に相應して健三は頑强であつた。同時に細君の膠着力も固かつた。二人は二人同士で輕蔑し合つた。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、動ともすると心の中で夫に反抗した。健三は又自分を認めない細君を忌々しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下す態度を公にして憚らなかつた。

「おや貴夫が教へて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教へて貰はうといふ氣がないからさ。自分はもう是で一人前だといふ腹があつちや、己にや何うする事も出來ないよ」

誰が盲從するものかといふ氣が細君の胸にあると同時に、到底啓發しやうがないではないかといふ辯解が夫の心に潜んでゐた。二人の間に繰返される斯うした言葉爭ひは古いものであつた。然し古い丈で埒は一向開かなかつた。

健三はもう飽きたといふ風をして、手摺れのした貸本を投げ出した。

「讀むなと云ふんぢやない。それは御前の隨意だ。然し餘り眼を使はないやうにしたら好いだらう」

細君は裁縫が一番好きであつた。夜眼が冴えて寢られない時などは、一時でも二時でも構はずに、細い針の目を洋燈の下に運ばせてゐた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相當の時期が經過しないうちに、縫物を取上げたのが本で、大變視力を惡くした經驗もあつた。

「えゝ、針を持つのは毒ですけれども、本位構はないでせう。それも始終讀んでゐるんぢやありませんから」

「然し疲れる迄讀み續けない方が好からう。でないと後で困る」

「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過勞の意味が能く解らなかつた。彼女は笑つて取り合はなかつた。

「お前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事を云つた。自分の注意を無にする妻君を見ると、健三はよく斯んな言葉遣ひをしたがつた。それが又夫の惡い癖の一つとして細君には數へられてゐた。

同時に彼のノートは益細かくなつて行つた。最初蠅の頭位であつた字が次第に蟻の頭程に縮まつて來た。何故そんな小さな文字を書かなければならないのかとさへ考へて見なかつた彼は、殆ど無意味に洋筆を走らせて已まなかつた。日の光の弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈から出る薄い灯火の影、彼は暇さへあれば彼の視力を濫費して顧なかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に拂はなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思はなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼等の庭に霜柱の錐を立てようとしてゐた。

「大變荒れた事、今年は例より寒いやうね」

「血が少くなつた所爲で、さう思ふんだらう」

「左右でせうかしら」

細君は始めて氣が付いたやうに、兩手を火鉢の上に翳して、自分の爪の色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りさうなものだのにね」
「えゝ、そりや分つてますわ」
彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頬を二三度撫でた。
「然し寒い事も寒いんでせう、今年は」
健三には自分の説明を聽かない細君が可笑しく見えた。
「そりや冬だから寒いに極つてゐるさ」
細君を笑ふ健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身體に嚴しく中つた。彼は已むを得ず書齋に炬燵を入れて、兩膝から腰のあたりに浸み込む冷を防いだ。神經衰弱の結果斯う感ずるのかも知れないとさへ思はなかつた彼は、自分に對する注意の足りない點に於いて、細君と異る所がなかつた。
每朝夫を送り出してから髮に櫛を入れる細君の手には、長い髮の毛が何本となく殘つた。彼女は梳くたびに櫛の齒に絡まる其拔毛を殘り惜氣に眺めた。それが彼女には失はれた血潮よりも却つて大切らしく見えた。
「新しく生きたものを拵へ上げた自分は、其償ひとして衰へて行かなければならない」
彼女の胸には微かに斯ういふ感じが湧いた。然し彼女は其微かな感じを言葉に纏める程の頭を有つてゐなかつた。同時に其感じには手柄をしたといふ誇りと、罰を受けたといふ恨みと、が交つてゐた。いづれにしても、新しく生れた子が可愛くなるばかりであつた。

彼女はぐたくして手應へのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、其丸い頰へ自分の脣を持つて行つた。すると自分から出たものは何うしても自分の物だといふ氣が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍に其子を置いて、また裁ものゝ板の前に坐つた。さうして時々針の手を已めては、暖かさうに寢てゐるその顏を、心配さうに上から覗き込んだ。

「そりや誰の着物だい」

「矢つ張此子のです」

「そんなに幾何も要るのかい」

「えゝ」

細君は默つて手を運ばしてゐた。

健三は漸と氣が付いた樣に、細君の膝の上に置かれた大きな模樣のある切地を眺めた。

「それは姉から祝つて呉れたんだらう」

「左右です」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰つた小遣の中を割いて、斯ういふ贈り物をしなければ氣の濟まない姉の心持が、彼には理解出來なかつた。

「つまり己の金で己が買つたと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫に對する義理だと思つてゐらつしやるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいふ義理を克明に守り過ぎる女であつた。他から物を貰へば屹度それ以上のものを贈り返さうとして苦しがつた。

「何うも困るね、さう義理々々つて。何が義理だか薩張り解りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣を比田に借りられないやうな用心でもする方が余つ程増しだ」

斯んな事に掛けると存外無神経な細君は、強ひて姉を弁護しようともしなかつた。

「今に又何か御礼をしますから、夫で好いでせう」

他を訪問する時に殆ど土産ものを持参した例のない健三は、それでもまだ不審さうに細君の顔の上にあるメリンスを見詰めてゐた。

八十六

「だから元は御姉さんの所へ皆が色んな物を持つて来たんですつて」

細君は健三の顔を見て突然斯んな事を云ひ出した。

「十のものには十五の返しをなさる御姉さんの気性を知つてるもんだから、皆な其御礼を目的に何か呉れるんださうですよ」

「十のものに十五の返しをするつたつて、高が五十銭が七十五銭になる丈ぢやないか」

「夫で沢山なんでせう。さういふ人達は」

他から見ると酔興としか思はれない程細かなノートばかり拵へてゐる健三には、世の中にそんな人間が

生きてゐるとさへ思へなかつた。

「隨分厄介な交際だね。だいち馬鹿々々しいぢやないか」

「傍から見れば馬鹿々々しいやうですけれども、其中に入ると、矢つ張仕方がないんでせう」

健三は此間餘所から臨時に受取つた三十圓を、自分が何う消費してしまつたかの問題に就いて考へさせられた。

今から一箇月餘り前、彼は或る知人に頼まれて其男の經營する雜誌に長い原稿を書いた。それ迄細かいノートより外に何も作る必要のなかつた彼に取つての此文章は、違つた方面に働いた彼の頭腦の最初の試みに過ぎなかつた。彼はたゞ筆の先に滴る面白い氣分に驅られた。彼の心は全く報酬を豫期してゐなかつた。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾つた樣に喜んだ。

兼てからわが座敷の如何にも殺風景なのを苦に病んでゐた彼は、すぐ團子坂にある唐木の指物師の所へ行つて、紫檀の懸額を一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸つた友達に貰つた北魏の二十品といふ石摺のうちにある一つを擇り出して入れた。それから其額を環の着いた細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かないせゐか、額は靜かな時でも斜に傾いた。

彼は又團子坂を下りて谷中の方へ上つて行つた。さうして其處にある陶器店から一個の花瓶を買つて來た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黄で大きな草花が描かれてゐた。高さは一尺餘りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふら〳〵する比較的小さい懸額とは何うしても釣合が取れなかつた。彼は少し失望したやうな眼をして此不調和な配合を眺めた。けれども丸で何も無いよりは増しだと

考へた。趣味に贅澤をいふ餘裕のない彼は、不滿足のうちに滿足しなければならなかつた。

彼は又本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反物を買つた。織物に就いて何の知識もない彼はたゞ番頭が見せて呉れるもののうちから好い加減な選擇をした。それは無暗に光る絣であつた。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭に揃ひの羽織と着物を拵へるべく勸められた彼は、遂に一疋の伊勢崎銘仙を抱へて店を出た。其伊勢崎銘仙といふ名前さへ彼はそれ迄つひぞ聞いた事がなかつた。

是等の物を買ひ調へた彼は毫も他人に就いて考へなかつた。新しく生れる子供さへ眼中になかつた。自分より困つてゐる人の生活などはてんから忘れてゐた。俗社會の義理を過重する姉に比べて見ると、彼は憐なものに對する好意すら失つてゐた。

「さう損をして迄も義理が盡されるのは偉いね。然し姉は生れ付いての見榮坊なんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増しだらう」

「親切氣は丸でないんでせうか」

「左右さな」

健三は一寸考へなければならなかつた。姉は親切氣のある女に違ひなかつた。

「ことによると己の方が不人情に出來てゐるのかも知れない」

八十七

此會話がまだ健三の記憶を新しく彩つてゐた頃、彼はお常から第二回の訪問を受けた。先達て見た時と略同じやうに粗末な服裝をしてゐる彼女の恰好は、寒さと共に襦袢胴着の一類でも重ねたのだらう、前よりは益丸まつちくなつてゐた。健三は客のために出した火鉢をすぐ其人の方へ押し遣つた。

「いえもう御構ひ下さいますな。今日は大分御暖かで御座いますから」

外部には穩かな日が、障子に嵌めた硝子越に薄く光つてゐた。

「あなたは年を取つて段々御肥りになるやうですね」

「えゝ御蔭さまで身體の方はまことに丈夫で御座います」

「そりや結構です」

「其代り身上の方はたゞ瘦せる一方で」

健三には老後になつてから斯うむく／＼肥る人の健康が疑はれた。少なくとも不自然に思はれた。何處か不氣味に見える處もあつた。

「酒でも飮むんぢやなからうか」

斯んな推察さへ彼の胸を橫切つた。

お常の肌身に着けてゐるものは悉く古びてゐた。幾度水を潛つたか分らない其着物なり羽織なりは、何處かに絹の光が殘つてゐるやうで、又變にごつ／＼してゐた。たゞ何んなに時代を食つても、綺麗に洗張が出來てゐる所に彼女の氣性が見える丈であつた。健三は丸いながら如何にも窮屈さうな其人の姿を眺め

て、彼女の生活狀態と彼女の口に距離のない事を知つた。
「何處を見ても困る人だらけで弱りますね」
「此方などが困つてるらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」
健三は辯解する氣にさへならなかつた。彼はすぐ考へた。
「此人は己を自分より金持と思つてゐるやうに、己を自分より丈夫だとも思つてゐるのだらう」
近頃の健三は實際健康を損つてゐた。それを自覺しつゝ彼は醫者にも診て貰はなかつた。友達にも話さなかつた。たゞ一人で不愉快を忍んでゐた。然し身體の未來を想像するたんびに彼はむしや／＼した。或時は他が自分を斯んなに弱くしてしまつたのだといふ樣な氣を起して、相手のないのに腹を立てた。
「年が若くつて起居に不自由さへなければ丈夫だと思ふんだらう。門構の宅に住んで下女さへ使つてゐれば金でもあると考へるやうに」
健三は默つてお常の顏を眺めてゐた。同時に彼は新しく床の間に飾られた花瓶と其後に懸つてゐる懸額とを眺めた。近いうちに絲を通すべきぴか／＼する反物も彼の心の中にあつた。彼は何故此年寄に對して同情を起し得ないのだらうかと怪しんだ。
「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」
彼は姉の上に加へた評をもう一遍腹の中で繰返した。さうして「何不人情でも構ふものか」といふ答を得た。
お常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事に就いて色々な話をし始めた。世間一般によく見る通り、其人

の手腕がすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕といふのは、つまり月々入る金の意味で、其金より外に人間の價値を定めるものは、彼女に取つて、廣い世界に一つも見當らないらしかつた。

「何しろ取高が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼いで呉れると好いのですけれども」

彼女は自分の娘婿を捉まへて愚圖だとも無能だとも云はない代りに、毎月彼の勞力が産み出す、收入の高を健三の前に並べて見せた。恰も物指で反物の寸法さへ計れば、縞柄だの地質だのは、丸で問題にならないと云つた風に。

生憎健三はさうした尺度で自分を計つて貰ひたくない商賣をしてゐる男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

八十八

好い加減な時分に彼は立つて書齋に入つた。机の上に載せてある紙入を取つて、そつと中を改めると、一枚の五圓札があつた。彼はそれを手に握つた儘元の座敷へ歸つて、お常の前へ置いた。

「失禮ですがこれで俥へでも乘つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては濟みません。さういふ積で上つたのでは御座いませんから」

彼女は辭退の言葉と共に紙幣を受け納めて懷へ入れた。

小遣を遣る時の健三が此前と同じ挨拶を用ひたやうに、それを貰ふお常の辭令も最初と全く違はなかつ

たゞ其上偶然にも五圓といふ金高さへ一致してゐた。

「此次來た時に、もし五圓札が無かつたら何うしよう」

健三の紙入がそれ丈の實質で始終充たされてゐない事は其所有主の彼に知れてゐるばかりで、お常に分る筈がなかつた。三度目に來るお常を豫想した彼が、三度目に遣る五圓を豫想する譯に行かなかつた時、彼は不圖馬鹿々々しくなつた。

「是からあの人が來ると、何時でも五圓遣らなければならないやうな氣がする。つまり姉が要らざる義理立をするのと同じ事なのかしら」

自分の關係した事ぢやないと云つた風に熨斗を動かして居た細君は、手を休めずに斯ういつた。

「無いときは遣らないでも好いぢやありませんか。何もさう見榮を張る必要はないんだから」

「無い時に遣らうつたつて、遣れないのは分つてるさ」

二人の問答はすぐ途切れてしまつた。消えかゝつた炭を熨斗から火鉢へ移す音が其間に聞えた。

「何うして又今日は五圓入つてゐたんです。貴夫の紙入に」

健三は床の間に釣り合はない大きな朱色の花瓶を買ふのに四圓いくらか拂つた。懸額を誂へるとき五圓なにがしか取られた。指物師が百圓に負けて置くから買はないかと云つた立派な紫檀の書棚をじろ〳〵見ながら、彼は其廿分の一にも足らない代價を大事さうに懷中から出して匠人の手に渡した。彼はまたぴかぴかする一匹の伊勢崎銘仙を買ふのに十圓餘りを費やした。友達から受取つた原稿料が斯う形を變へたあとに、手垢の付いた五圓札がたつた一枚殘つたのである。

「實はまだ買ひたいものがあるんだがな」
「何を御買ひになる積だつたの」
健三は細君の前に特別な品物の名前を擧げる事が出來なかつた。
「澤山あるんだ」
慾に際限のない彼の言葉は簡單であつた。夫と懸け離れた好尚を有つてゐる細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を夫に掛けた。
「あの御婆さんは御姉さんなんぞより餘程落ち付いてゐるのね。あれぢや島田つて人と宅で落ち合つても、さう喧嘩もしないでせう」
「落ち合はないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顏を見合せでもして見るがいゝ、それこそ堪らないや。一人づゝ相手にしてゐるんでさへ澤山な所へ持つて來て」
「今でも矢つ張り喧嘩が始まるでせうか」
「喧嘩は兎に角、己の方が厭ぢやないか」
「二人ともまだ知らないやうね。片つ方が宅へ來る事を」
「何うだか」
島田はかつてお常の事を口にしなかつた。お常も健三の豫期に反して、島田に就いては何も語らなかつた。
「あの御婆さんの方がまだ彼の人より好いでせう」

島田の請求慾の訪問毎に増長するのに比べると、お常の態度は尋常に違なかつた。
「五圓貰ふと默つて歸つて行くから」
「何うして」

八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顏が又健三の座敷に現はれた時、彼はすぐお常の事を聯想した。
彼等だつて生れ付いての敵同士でない以上、仲の好い昔もあつたに違ひない。他から爪に灯を點すやうだと云はれるのも構はずに、金ばかり溜めた當時は、何んなに樂しかつたらう。何んな未來の希望に支配されてゐただらう。彼等に取つて睦ましさの唯一の記念とも見るべき其金が何處かへ飛んで行つてしまつた後、彼等は夢のやうな自分達の過去を、果して何う眺めてゐるだらう。
健三はもう少しでお常の話を島田にする所であつた。然し過去に無感覺な表情しか有たない島田の顏は、何事も覺えてゐないやうに鈍かつた。昔の憎惡、古い愛執、そんなものは當時の金と共に彼の心から消え失せて仕舞つたとしか思はれなかつた。
彼は腰から煙草入を出して、刻煙草を雁首へ詰めた。吸殼を落すときには、左の掌で煙管を受けて、火鉢の縁を敲かなかつた。脂が溜つてゐると見えて、吸ふときにじゆう／＼音がした。彼は無言で懷中を探つた。それから健三の方を向いた。
「少し紙はありませんか、生憎煙管が詰つて」

彼は健三から受取つた半紙を割いて小撚を拵へた。それで二遍も三遍も羅宇の中を掃除した。彼は斯ういふ事をするのに最も馴れた人であつた。健三は默つて其手際を見てゐた。

「段々暮になるんで嘸御忙しいでせう」

彼は疏通の好くなつた煙管をぷつ〳〵と心持好ささうに吹きながら斯う云つた。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はさうは行きませんよ」

島田がまだ何か云はうとしてゐるうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のやうですね」

「えゝ、つい此間生れたばかりです」

「そりや何うも。些も知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へえゝ、失禮だが是で幾人目ですか」

島田は色々な事を訊いた。それに相當な受應をしてゐる健三の胸に何んな考へが浮かんでゐるか丸で氣が付かなかつた。

出產率が殖えると死亡率も增すといふ統計上の議論を、つい四五日前ある外國の雜誌で讀んだ健三は、其時赤ん坊が何處かで一人生れゝば、年寄が一人何處かで死ぬものだといふやうな理窟とも空想とも付かない變な事を考へてゐた。

「つまり身代りに誰かゞ死ななければならないのだ」
彼の觀念は夢のやうにぼんやりしてゐた。詩として彼の頭をぼうつと侵す丈であつた。それをもつと明暸になる迄理解の力で押し詰めて行けば、其身代りは取りも直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其處迄行く氣はなかつた。たゞ自分の前にゐる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何の爲に生きてゐるか殆ど意義の認めやうのない此年寄は、身代りとして最も適當な人間に違なかつた。

「何ういふ譯で斯う丈夫なのだらう」

健三は殆ど自分の想像の殘酷さ加減さへ忘れてしまつた。さうして人並でないわが健康狀態に就いてほゞ毫も責任がないもの丶如き忌々しさを感じた。其時島田は彼に向つて突然斯う云つた。——

「お縫もとう〱亡くなつてね。御祝儀は濟んだが」

迚も助からないといふ事丈は、脊髓病といふ名前から推して、とうに承知してゐたやうなものの、改まつてさう云はれて見ると、健三も急に氣の毒になつた。

「さうですか。可哀想に」

「なに病氣が病氣だから迚も癒りつこないんです」

島田は平然としてゐた。死ぬのが當り前だといつたやうに煙草の輪を吹いた。

九十

然し此不幸な女の死に伴つて起る經濟上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙に重大であつた。健三の豫想はすぐ事實となつて彼の前に現はれなければならなかつた。

「それに就いて是非一つ聞いて貰はないと困る事があるんですが」

此處迄來て健三の顏を見た島田の樣子は緊張してゐた。健三は聽かない先から其後を推察する事が出來た。

「又金でせう」

「まあ左右です。お縫が死んだんで、柴野とお藤との緣が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月月送らせる譯に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭寧になつたりした。

「今迄は金鵄勳章の年金だけはちやん〳〵と此方へ來たんですがね。それが急に無くなると、丸で當前が外れる樣な始末で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「兎に角斯うなつちや、御前を措いてもう外に世話をして貰ふ人は誰もありやしない。だから何うかして呉れなくつちや困る」

「さう他にのし懸つて來たつて仕方がありません。今の私にはそれ丈の事をしなければならない因緣も何もないんだから」

島田は凝と健三の顏を見た。半ば探りを入れるやうな、半ば弱いものを脅かすやうな其眼付は、單に相

手の心を激昂させる丈であつた。健三の態度から深入の危險を知つた島田は、すぐ問題を區切つて小さくした。

「永い間の事は又緩々御話をするとして、ぢや此急場丈でも一つ」

健三には何ういふ急場が彼等の間に持ち上つてゐるのか解らなかつた

「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏まつた金の要るのは當り前だらう」

健三は勝手にしろといふ氣に成つた。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談云つちや不可い。是丈の構をしてゐて、其位の融通が利かないなんて、そんな筈があるもんか」

「有つても無くつても、無いから無いといふ丈の話です」

「ぢや云ふが、御前の收入は月に八百圓あるさうぢやないか」

健三は此無茶苦茶な言掛りに怒らされるよりは寧ろ驚かされた。

「八百圓だらうが千圓だらうが、私の收入は私の收入です。貴方の關係した事ぢやありません」

島田は其處迄來て默つた。健三の答が自分の豫期に外れたといふやうな風も見えた。づう／＼しい割に頭の發達してゐない彼は、それ以上相手を何うする事も出來なかつた。

「ぢやいくら困つても助けて呉れないと云ふんですね」

「えゝ、もう一文も上げません」

島田は立ち上つた。沓脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼は又振り返つた。

「もう參上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝いた。健三は敷居の上に立つて明らかに其眼を見下した。然し彼はその輝きのうちに何等の凄さも怖ろしさも又不氣味さも認めなかつた。彼自身の胸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに十分であつた。

細君は遠くから暗に健三の氣色を窺つた。

「一體何うしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろつて來たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるやうな態度を見せた。

「あの御婆さんの方が細く長く續くからまだ安全ね」

「島田の方だつて、是で片付くもんかね」

健三は吐出すやうに斯う云つて、來るべき次の幕さへ頭の中に豫想した。

九十一

同時に今迄眠つてゐた記憶も呼び覺まされずには濟まなかつた。彼は始めて新しい世界に臨む人の鋭い

眼をもつて、實家へ引き取られた遠い昔を鮮明かに眺めた。

實家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに斯んな出來損ひが舞ひ込んで來たかといふ顔付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に與へなかつた。今迄と打つて變つた父の此態度が、生の父に對する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に對してにこ〳〵してゐた父と、厄介物を背負ひ込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚いた。次には愛想をつかした。然し彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。發育に伴ふ彼の生氣は、いくら抑へ付けられても、下からむく〳〵と頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに濟んだ。

子供を澤山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙る氣がなかつた。今に世話にならうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかつた。繫がる親子の緣で仕方なしに引き取つたやうなもの丶、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、たゞ損になる丈であつた。

其上肝心の本人は歸つて來ても籍は復らなかつた。いくら實家で丹精して育て上げたにした所で、いざといふ時に、又伴れて行かれゝば夫迄であつた。

「食はす丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方でするのが當然だ」

父の理窟は斯うであつた。

島田は又島田で自分に都合の宜い方からばかり事狀の成行を觀望してゐた。

「なに實家へ預けて置きさへすれば何うにかするだらう。其内健三が一人前になつて少しでも働けるやうになつたら、其時表沙汰にしてゞも此方へ奪還つてしまへば夫迄だ」

健三は海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。兩方から突き返されて、兩方の間をまご〳〵してゐた。同時に海のものを食ひ、時には山のものにも手を出した。

實父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。たゞ實父が我樂多として彼を取り扱つたのに對して、養父には今に何かの役に立てゝ遣らうといふ目算がある丈であつた。

「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かの序に斯んな事を云つた。健三は驚いて逃げ歸つた。酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを與へた。其時の彼は幾歳だつたか能く覺えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ慾が、もう十分萌してゐる頃であつた。

「給仕になんぞされては大變だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸にして其言葉は徒勞に繰り返されなかつた。彼は何うか斯うか給仕にならずに濟んだ。

「然し今の自分は何うして出來上つたのだらう」

彼は斯う考へると不思議でならなかつた。其不思議のうちには、自分の周圍と能く鬪ひ終せたものだといふ誇りも大分交つてゐた。さうしてまだ出來上らないものを、既に出來上つたやうに見る得意も無論含まれてゐた。

彼は過去と現在との對照を見た。過去が何うして此現在に發展して來たかを疑つた。しかも其現在の爲

に苦しんでゐる自分には丸で氣が付かなかつた。
彼と島田との關係が破裂したのは、此現在の御蔭であつた。彼がお常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないのも此現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのも亦此現在の御蔭に違なかつた。一方から見ると、他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は氣の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つて云つた。――
「貴夫に氣に入る人は何うせ何處にもゐないでせうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」
健三の心は斯うした諷刺を笑つて受ける程落付いてゐなかつた。周圍の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈にした。
「御前は役に立ちさへすれば、人間はそれで好いと思つてゐるんだらう」
「だつて役に立たなくつちや何にもならないぢやありませんか」
生憎細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もさういふ方面にだけ發達する性質であつた。これに反して健三は甚だ實用に遠い生れ付であつた。
彼には轉宅の手傳ひすら出來なかつた。大掃除の時にも彼は懷手をしたなり澄ましてゐた。行李一つ絡げるにさへ、彼は細紐を何う渡すべきものやら分らなかつた。
「男の癖に」

動かない彼は、傍のものゝ眼に、如何にも氣の利かない鈍物のやうに映つた。彼は猶更動かなかつた。
さうして自分の本領を益反對の方面に移して行つた。

彼は此見地から、昔細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舍へ伴れて行つて教育しようとした。其弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮會釋がなかつた。ある理學士に每日自宅で課業の復習をして貰ふ時、彼は其人の前で構はず胡坐をかいた。又其人の名を何君々々と君づけに呼んだ。

「あれぢや仕方がない、私に御預けなさい。私が田舍へ連れて行つて育てるから」

健三の申出は細君の父によつて默つて受け取られた。さうして默つて捨てられた。彼は眼前に横暴を恣にする我子を見て、何といふ未來の心配も抱いてゐないやうに見えた。彼ばかりか、細君の母も平氣であつた。細君も一向氣に掛ける樣子がなかつた。

「若し田舍へ遣つて貴夫と衝突したり何かすると、折合が惡くなつて、後が困るから、それで已めたんださうです」

細君の辯解を聞いた時、健三は滿更の嘘とも思はなかつた。けれども其他にまだ意味が殘つてゐるやうにも考へた。

「馬鹿ぢやありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周圍の樣子から健三は謝絶の本意が却つて此處にあるのではなからうかと推察した。

成程細君の弟は馬鹿ではなかつた。寧ろ怜悧過ぎた。健三にも其點はよく解つてゐた。彼が自分と細君

の未來の爲に、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見當の違つた方面にあつた。さうして遺憾ながら其方面は、今日に至る迄いまだに細君の父母にも細君にも了解されてゐなかつた。

「役に立つばかりが能ぢやない。其位の事が解らなくつて何うするんだ」

健三の言葉は勢ひ權柄づくであつた。傷けられた細君の顏には不滿の色がありありと見えた。

機嫌の直つた時細君は又健三に向つた。——

「さう頭からがみがみ云はないで、もつと解るやうに云つて聞かして下すつたら好いでせう」

「解るやうに云はうとすれば、理窟ばかり捏ね返すつていふぢやないか」

「だからもつと解り易い樣に。私に解らないやうな小六づかしい理窟は已めにして」

「それぢや何うしたつて說明しやうがない。數字を使はずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だつて貴夫の理窟は、他を捻ぢ伏せるために用ひられるより外に考へやうのない事があるんですもの」

「御前の頭が惡いから左右思ふんだ」

「私の頭も惡いかも知れませんけれども、中味のない空つぽの理窟で捻ぢ伏せられるのは嫌ひですよ」

二人は又同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた。

九十三

面と向つて夫としつくり融け合ふ事の出來ない時、細君は已むを得ず彼に背中を向けた。さうして其處

に寢てゐる子供を見た。彼女は思ひ出したやうに、すぐ其子供を抱き上げた。

章魚のやうにぐにや〳〵してゐる肉の塊と彼女との間には、理窟の壁も分別の牆もなかつた。自分の觸れるものが取りも直さず自分のやうな氣がした。彼女は溫い心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、脣を着けて所嫌はず接吻した。

「貴夫が私のものでなくつても、此子は私の物よ」

彼女の態度から斯うした精神が明かに讀まれた。

其赤ん坊はまだ眼鼻立さへ判明してゐなかつた。頭には何時迄待つても殆ど毛らしい毛が生えて來なかつた。公平な眼から見ると、何うしても一個の怪物であつた。

「變な子が出來たものだなあ」

健三は正直な所を云つた。

「何處の子だつて生れたては皆此通りです」

「眞逆左右でも無からう。もう少しは整つたのも生れる筈だ」

「今に御覽なさい」

細君に左も自信のあるやうな事を云つた。健三には何といふ見當も付かなかつた。けれども彼は細君が此赤ん坊のために夜中何度となく眼を覺ますのを知つてゐた。大事な睡眠を犧牲にして、少しも不愉快な顏を見せないのも承知してゐた。彼は子供に對する母親の愛情が父親のそれに比べて何の位强いかの疑問にさへ逢着した。

四五日前少し強い地震のあつた時、臆病な彼はすぐ縁から庭へ飛下りた。彼が再び座敷へ上つて來た時、細君は思ひも掛けない非難を彼の顏に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構はない氣なんだから」

何故子供の安危を自分より先に考へなかつたかといふのが細君の不平であつた。咄嗟の衝動から起つた自分の行爲に對して、斯んな批評を加へられようとは夢にも思つてゐなかつた健三は驚いた。

「女にはあゝいふ時でも子供の事が考へられるものかね」

「當り前ですわ」

健三は自分が如何にも不人情のやうな氣がした。

然し今の彼は我物顏に子供を抱いてゐる細君を、却つて冷やかに眺めた。

「譯の分らないものが、いくら束になつたつて仕樣がない」

しばらくすると彼の思索がもつと廣い區域に亙つて、現在から遠い未來に延びた。

「今に其子供が大きくなつて、御前から離れて行く時期が來るに極つてゐる。御前と己と離れても、子供とさへ融け合つて一つになつてゐれば、それで澤山だといふ氣でゐるらしいが、それは間違ひだ。今に見ろ」

書齋に落付いた時、彼の感想が又急に科學的色彩を帶び出した。

「芭蕉に實が結ると翌年から其幹は枯れて仕舞ふ。竹も同じ事である。動物のうちには子を生む爲に生きてゐるのか、死ぬ爲めに子を生むのか解らないものが幾何でもある。人間も緩漫ながらそれに準じた法

則に矢つ張支配されてゐる。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犧牲にして子供に生を與へた以上、また餘りのあらゆるものを犧牲にして、其生を守護しなければなるまい。彼女が天からさういふ命令を受けて此世に出たとするならば、其報酬として子供を獨占するのは當り前だ。故意といふよりも自然の現象だ」

彼は母の立場を斯う考へ盡した後、父としての自分の立場をも考へた。さうしてそれが母の場合と何う違つてゐるかに思ひ到つた時、彼は心のうちで又細君に向つて云つた。

「子供を有つた御前は仕合せである。然し其仕合を享ける前に御前は既に多大な犧牲を拂つてゐる。是から先も御前の氣の付かない犧牲を何の位拂ふか分らない。御前は仕合せかも知れないが、實は氣の毒なものだ」

九十四

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちら／＼と見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寢ると御正月」といふ唄をうたつた。彼等の心は彼等の口にする唱歌の通りであつた。來るべき新年の希望に充ちてゐた。

書齋にゐる健三は時々手に洋筆を持つた儘、彼等の聲に耳を傾けた。自分にもあゝ云ふ時代があつたのかしらと考へた。

子供は又「旦那の嫌ひな大晦日」といふ毬歌をうたつた。健三は苦笑した。然しそれも今の自分の身の

上には痛切に的中らなかつた。彼はたゞ厚い四つ折の半紙の束を、十も二十も机の上に重ねて、それを一枚毎に讀んで行く努力に惱まされてゐた。彼は讀みながら其紙へ赤い印氣で棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい數字を竝べて面倒な勘定もした。

半紙に認められたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字劃さへ判然しないのが多かつた。亂暴で讀めないのも時々出て來た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落膽した。「ペネロピーの仕事」といふ英語の俚諺が何遍となく彼の口に上つた。

「何時まで經つたつて片付きやしない」

彼は折々筆を擱いて溜息を吐いた。

然し片付かないものは、彼の周圍前後にまだ幾何でもあつた。彼は不審な顏をして又細君の持つて來た一枚の名刺に眼を注がなければならなかつた。

「何だい」

「島田の事に就いて一寸御目に掛りたいつていふんです」

「今差支へるからつて返して呉れ」

一度立つた細君はすぐ又戻つて來た。

「何時伺つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれ所ぢやないといふ顏をしながら、自分の傍に高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「歸つたかい」

仕事を中絶された彼はぼんやり煙草を吹かし始めた。所へ細君が又入つて來た。

健三も仕方なしに時日を指定した。

「明後日の午後に來て下さいと云つて呉れ」

「何と云ひませう」

「えゝ」

細君は夫の前に廣げてある赤い印の付いた汚ならしい書きものを眺めた。夜半に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないやうに、此半紙の山を綿密に讀み通す夫の困難も細君には想像出來なかつた。――

調べ物を度外に置いた彼女は、坐るとすぐ夫に訊ねた。――

「また何か左右云つて來る氣でせうね。執つ濃い」

「暮のうちに何うかしようと云ふんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心は却つて昔の關係上多少の金を彼に遣る方に傾いてゐた。然し話は其處迄發展する機會を得ずに餘所へ外れてしまつた。

「御前の宅の方は何うだい」

「相變らず困るんでせう」

「あの鐵道會社の社長の口はまだ出來ないのかい」

「あれは出來るんですつて。けれども左右此方の都合の好いやうに、ちよつくら一寸といふ譯には行かないんでせう」
「此暮のうちには六づかしいかね」
「迚も」
「困るだらうね」
「困つても仕方がありませんわ。何も彼もみんな運命なんだから」
細君は割合に落付いてゐた。何事も諦めてゐるらしく見えた。

九十五

見知らない名刺の持參者が、健三の指定した通り、中一日置いて再び彼の玄關に現れた時、彼はまださくれた洋筆先で、粗末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な符徴を附けるのに忙がしかつた。彼の指頭は赤い印氣で所々汚れてゐた。彼は手も洗はずに其儘座敷へ出た。
島田のために來た其男は、前の吉田に比べると少し型を異にしてゐたが、健三から云へば、雙方共殆ど差別のない位懸け離れた人間であつた。
彼は縞の羽織に角帶を締めて白足袋を穿いてゐた。商人とも紳士とも片の付かない彼の樣子なり言葉遣ひなりは、健三に差配といふ一種の人柄を思ひ起させた。彼は自分の身分や職業を打明ける前に、卒然として健三に訊いた。

「貴方は私の顏を覺えて御出でですか」

健三は驚いて其人を見た。彼の顏には何等の特徴もなかつた。强ひて云へば、今日迄たゞ世帶染みて生きて來たといふ位のものであつた。

「何うも分りませんね」

彼は勝ち誇つた人のやうに笑つた。

「さうでせう。もう忘れても好い時分ですから」

彼は區切を置いて又附け加へた。

「然し私や是でも貴方の坊ちやん坊ちやんて云はれた昔をまだ覺えてゐますよ」

「左右ですか」

健三は素つ氣ない挨拶をしたなり、其人の顏を凝と見守つた。

「何うしても思ひ出せませんかね。ぢや御話しませう。私や昔島田さんが扱所を遣つてゐなすつた頃あすこに勤めてたものです。ほら貴方が惡戯をして、小刀で指を切つて、大騷ぎをしたことがあるでせう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんでさあ。その時金盥に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭には左右した事實が明らかにまだ保存されてゐた。然し今自分の前に坐つてゐる人の其時の姿などは夢にも憶ひ出せなかつた。

「その緣故で今度又私が賴まれて、島田さんの爲に上つたやうな譯合なんです」

彼は直ぐ本題に入つた。さうして健三の豫期してゐた通り金の請求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺はないと云つてますから」

「此間歸る時既に左右云つて行つたんです」

「で、何うでせう、此處いらで綺麗に片を付ける事にしたら。それでないと何時迄經つても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せと云つた風な相手の口氣を快く思はなかつた。

「いくら引つ懸つてゐたつて、迷惑ぢやありません。何うせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢してゐた方が、私には餘程心持が好いんです」

其人はしばらく考へてゐた。少し困つたといふ樣子も見えた。然しやがて口を開いた時は思ひも寄らない事を云ひ出した。

「それに貴方も御承知でせうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、此際若干でも纏めたものを渡して、あの書付と引き替へになすつた方が好くはありませんか」

健三は其書付を慥に覺えてゐた。彼が實家へ復籍する事になつた時、島田は當人の彼から一札入れて貰ひたいと主張したので、健三の父も已むを得ず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執つた。さうして今度離縁になつたに就いては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだといふ意味を僅二行餘に綴つて先方へ渡した。

「あんなものは反故同然ですよ。向で持つてゐても役に立たず、私が貰つても仕方がないんだ。もし利用出來る氣ならいくらでも利用したら好いでせう」
健三にはそんな書付を賣り付けに掛る其人の態度が猶氣に入らなかつた。

九十六

話が行き詰ると其人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。云ふ事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴へるといふ風でもなかつた。たゞ物にさへすれば好いといふ料簡が露骨に見透かされた。收束する所なく共に動いてゐた健三は仕舞に飽きた。
「書付を買への、今に迷惑するのが厭なら金を出せのと云はれると此方でも斷るより外に仕方がありませんが、困るから何うかして貰ひたい、其代り向後一切無心がましい事は云つて來ないと保證するなら、昔の情義上少しの工面はして上げても構ひません」
「えゝそれが詰り私の來た主意なんですから、出來るなら何うかさう願ひたいもので」
健三はそんなら何故早くさう云はないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くさう云つて呉れないのかといふ顔付をした。
「ぢや何の位出して下さいます」
健三は默つて考へた。然し何の位が相當の處だか判明した目安の出て來よう筈はなかつた。其上成るべく少い方が彼の便宜であつた。

「まあ百圓位なものですね」
「百圓」
其人は斯う繰り返した。
「何うでせう、責めて三百圓位にして遣る譯には行きますまいか」
「出すべき理由さへあれば何百圓でも出します」
「御尤もだが。島田さんもあゝして困つてるもんだから」
「そんな事をいやあ、私だつて困つてゐます」
「さうですか」
彼の語氣は寧ろ皮肉であつた。
「元來一文も出さないと云つたつて、貴方の方ぢや何うする事も出來ないんでせう。百圓で惡けりや御止しなさい」
相手は漸く懸引を已めた。
「ぢや兎も角も本人によくさう話して見ます。其上で又上る事にしますから、どうぞ何分」
其人が歸つた後で健三は細君に向つた。
「とう／＼來た」
「何うしたつて云ふんです」
「又金を取られるんだ。人さへ來れば金を取られるに極つてるから厭だ」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

「馬鹿らしい」

「だつて仕方がないよ」

健三の返事も簡單であつた。彼は其處へ落付く迄の筋道を委しく細君に話してやるのさへ面倒だつた。

「そりや貴方の御金を貴方が御遣りになるんだから、私何も云ふ譯はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲き付ける樣に斯う云つて、又書齋へ入つた、其處には鉛筆で一面に汚された紙が所々赤く染つた儘机の上で彼を待つてゐた。彼はすぐ洋筆を取り上げた。さうして既に汚れたものを猶更赤く汚さなければならなかつた。

客に會ふ前と會つた後との氣分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つた時、彼は一旦讀み了つたものを念のため又讀んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるか何うか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を辯護しながら、ずん〳〵眼を通し始めた。然し積重ねた半紙の束は、いくら速力を增しても盡きる期がなかつた。漸く一組を元の樣に折ると又新しく一組を開かなければならなかつた。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼は又洋筆を放り出した。赤い印氣が血のやうに半紙の上に滲んだ。彼は帽子を被つて寒い往來へ飛び

出した。

九十七

人通りの少い町を歩いてゐる間、彼は自分の事ばかり考へた。

「御前は必竟何をしに世の中に生れて來たのだ」

彼の頭の何處かで斯ういふ質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答へたくなかつた。成るべく返事を避けようとした。すると其聲が猶彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰返して已めなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

其聲は忽ちせゝら笑つた。

「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其處へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」

「己の所爲ぢやない。己の所爲ぢやない」

健三は逃げるやうにずん／＼歩いた。

賑やかな通りへ來た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新しさを以て急に彼の眼を刺戟した。彼の氣分に漸く變つた。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を盡して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蒔繪の櫛笄だのを、硝子越に何の意味もな

く長い間讀めてゐた。

「暮になると世の中の人は屹度何か買ふものかしら」

少くとも彼自身は何も買はなかつた。細君も殆ど何も買はないと云つて可かつた。彼の兄、彼の姉、細君の父、何れを見ても、買へるやうな餘裕のあるものは一人もなかつた。みんな年を越すのに苦しんでゐる連中ばかりであつた。中にも細君の父は一番非道さうに思はれた。

「貴族院議員になつてさへゐれば、何處でも待つて呉れるんださうですけれども」

借金取に責められてゐる父の事情を夫に打ち明けた序に、細君はかつて斯んな事を云つた。

それは内閣の瓦解した當時であつた。細君の父を閑職から引張り出して、彼の辭職を餘儀なくさせた人は、自分達の退く間際に、彼を貴族院議員に推擧して、幾分か彼に對する義理を立てようとした。然し多數の候補者の中から、限られた人員を選ばなければならなかつた總理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまつた。彼はつひに選に洩れた。何かの意味で保險の付いてゐない人にのみ酷薄であつた債權者は直に彼の門に逼つた。官邸を引き拂つた時に召使の數を減らした彼は、少時して自用俥を廢した。仕舞にわが住宅を擧げて人手に渡した頃は、もう何うする事も出來なかつた。日を重ね月を追つて益悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが惡いんですよ」

細君は斯んな事も云つた。

「御役人をしてゐる間は相場師の方で儲けさせて呉れるんですつて。だから好いけれども、一旦役を退

くと、もう相場師が構つて呉れないから、みんな駄目になるんださうです」
「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さへ解らない」
「貴方に解らなくつたつて、左右なら仕方がないぢやありませんか」
「何を云つてるんだ。それぢや相場師は決して損をしつこないものに極つちまふぢやないか。馬鹿な女だな」
健三は其時細君と取り換はせた談話迄憶ひ出した。
彼は不圖氣が付いた。彼と擦れ違ふ人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙しさうであつた。みんな一定の目的を有つてゐるらしかつた。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動するとしか思はれなかつた。
或者は丸るで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥を與へた。
「御前は馬鹿だよ」
稀には斯んな顔付をするものさへあつた。
彼は又宅へ歸つて赤い印氣を汚い半紙へなすくり始めた。

九十八

二三日すると島田に頼まれた男が又刺を通じて面會を求めに來た。行掛り上斷る譯に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみた其人の前に再び坐るべく餘儀なくされた。

「何うも御忙しい所を度々出まして」
彼は世事慣れた男であつた。口で氣の毒さうな事をいふ割に、それ程殊勝な様子も彼の態度の何處にも現はさなかつた。
「實は此間の事を島田によく話しました所、さういふ譯なら致し方がないから、金額はそれで宜しい、其代り何うか年内に頂戴致したい、と斯ういふんですがね」
健三にはそんな見込がなかつた。
「年内たつてもう僅かの日數しかないぢやありませんか」
「だから向うでも急ぐ樣な譯でしてね」
「あれば今すぐ上げても好いんです。然し無いんだから仕方がないぢやありませんか」
「さうですか」
二人は少時無言の儘でゐた。
「何うでせう、其處のところを一つ御奮發は願はれますまいか。私も折角斯うして忙しい中を、島田さんのために、わざ〳〵遣つて來たもんですから」
それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足る程の手數でも面倒でもなかつた。
「御氣の毒ですが出來ませんね」
二人は又沈默を間に置いて相對した。
「ぢや何時頃頂けるんでせう」

健三には何時といふ目的もなかつた。
「いづれ來年にでもなつたら何うにかしませう」
「私も斯うして頼まれて上つた以上、何とか向へ返事をしなくつちやなりませんから、せめて日限でも一つ御取極めを願ひたいと思ひますが」
「御尤もです。ぢや正月一杯とでもして置きませう」
健三はそれより外に云ひやうがなかつた。相手は仕方なしに歸つて行つた。
其晩寒さと倦怠を凌ぐために蕎麥湯を拵へて貰つた健三は、どろ／＼した鼠色のものを啜りながら、盆を膝の上に置いて傍に坐つてゐる細君と話し合つた。
「又百圓何うかしなくつちやならない」
「貴夫が遣らないでも好いものを遣るつて約束なんぞなさるから後で困るんですよ」
「遣らないでも可いのだけれども、己は遣るんだ」
言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。
「さう依怙地を御仰しやれば夫迄です」
「御前は人を理窟ぽいとか何とか云つて攻撃する癖に、自分にや大變形式ばつた所のある女だね」
「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」
「理窟と形式とは違ふさ」
「貴夫のは同じですよ」

「ぢや云つて聞かせるがね、己は口に丈論理を有つてる男ぢやない。口にある論理は己の手にも足にも、身體全體にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がさう空つぽうに見える筈がないぢやありませんか」

「空つぽうぢやないんだもの。丁度この柿の粉のやうなもので、理窟が中から白く吹き出す丈なんだ。外部からくつ付けた砂糖とは違ふさ」

斯んな說明が既に細君には空つぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に摑まなくつては承知出來ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しようと思つても出來なかつた。

「御前が形式張るといふのはね。人間の內側は何うでも、外部へ出た所丈を捉まへさへすれば、それで其人間が、すぐ片付けられるものと思つてるからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、證據さへなければ文句を付けられる因緣がないと考へてるやうなもので……」

「父はそんな事を云つた事なんぞありやしません。私だつてさう外部ばかり飾つて生きてる人間ぢやありません。貴夫が不斷からそんな僻んだ眼で他を見てゐらつしやるから……」

細君の瞼から淚がぼた〳〵落ちた。云ふ事が其間に斷絕した。島田に遣る百圓の話が、飛んだ方角へ外れた。さうして段々こんがらかつて來た。

九十九

又二三日して細君は久し振に外出した。

「無沙汰見舞旁少し歳暮に廻つて來ました」
乳呑兒を抱いた儘健三の前へ出た彼女は、寒い頰を赤くして、暖い空氣の裡に尻を落付けた。
「御前の宅は何うだい」
「別に變つた事もありません。あゝなると心配を通り越して、却つて平氣になるのかも知れませんね」
健三は挨拶の仕樣もなかつた。
「あの紫檀の机を買はないかつて云ふんですけれども、緣起が惡いから止しました」
舞葡萄とかいふ木の一枚板で中を張り詰めた其大きな唐机は、百圓以上もする見事なものであつた。かつて親類の破產者からそれを借金の抵當に取つた細君の父は、同じ運命の下に、早晚それをまた誰かに持つて行かれなければならなかつたのである。
「緣起はどうでも好いが、そんな高價いものを買ふ勇氣は當分此方にもなささうだ」
健三は苦笑し乍ら煙草を吹かした。
「さう云へば貴夫、あの人に遣る御金を比田さんから借りなくつて」
細君は藪から棒に斯んな事を云つた。
「比田にそれ丈の餘裕があるのかい」
「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方を已められたんですつて」
健三は此新しい報知を當然とも思つた。又異樣にも感じた。
「もう老朽だらうからね。然し已められゝば、猶困るだらうぢやないか」

「追つては何うなるか知れないでせうけれども、差當り困るやうな事はないんですつて」

彼の辭職は自分を引き立てゝ呉れた重役の一人が、社と關係を絶つた事に起因してゐるらしかつた。けれども永年勤續して來た結果、權利として彼の手に入るべき金は、一時彼の經濟狀態を潤ほすには十分であつた。

「居食をしてゐても詰らないから、確な人があつたら貸したいから何うか世話をして呉れつて、今日頼まれて來たんです」

「へえ、とう〱金貸を遣るやうになつたのかい」

健三は平生から島田の因業を嗤つてゐた比田だの姉だのを憶ひ浮べた。自分達の境遇が變ると、昨日迄輕蔑してゐた人の眞似をして恬として氣の付かない姉夫婦は、反省の足りない點に於いて寧ろ子供染みてゐた。

「何うせ高利なんだらう」

細君は高利だか低利だか丸で知らなかつた。

「何でも旨く運轉すると月に三四十圓の利子になるから、それを二人の小遣にして、是から先細く長く遣つて行く積だつて、御姉えさんがさう仰しやいましたよ」

健三は姉のいふ利子の高から胸算用で元金を勘定して見た。

「恐くすると、又みんな損つちまふ丈だ。それより左右慾張らないで、銀行へでも預けて置いて相當の利子を取る方が安全だがな」

「だから確な人に貸したいつて云ふんでせう―
「確な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」
「だけど普通の利子ぢや遣つて行けないんでせう」
「それぢや己だつて借りるのは厭ださ」
「御兄いさんも困つてるらしつてよ」
比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先づ其手始として、兄に金を借りて呉れと頼んだのださうである。
「馬鹿だな。金を借りて呉れ、借りて呉れつて、此方から頼む奴もないぢやないか。兄貴だつて金は欲しいだらうが、そんな劍呑な思ひ迄して借りる必要もあるまいからね」
健三は苦々しいうちにも滑稽を感じた。比田の手前勝手な氣性が此一事でも能く窺はれた。それを傍で見て澄ましてゐる姉の料簡も彼には不可思議であつた。血が續いてゐても姉弟といふ心持は全くしなかつた。
「御前己が借りるとでも云つたのかい」
「そんな餘計な事云やしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通して貰ふといふ事が、健三には迚も眞面目に考へられな

かつた。彼は毎月若干か宛の小遣ひを姉に送る身分であつた。其姉の亭主から今度は此方で金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄の合はない事は世の中に幾何でもあるにはあるが」

斯う云ひ掛けた彼は突然笑ひたくなつた。

「何だか變だな。考へると可笑しくなる丈だ。まあ好いや己が借りて遣らなくつても何うにかなるんだらうから」

「えゝ、そりや借手にいくらでもあるんでせう。現にもう一口ばかり貸したんですつて。彼處いらの待合か何かへ」

待合といふ言葉が健三の耳に猶更滑稽に響いた。彼は我を忘れたやうに笑つた。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したといふ事實が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に關ると思ふやうな性質ではなかつた。たゞ夫と一所になつて面白さうに笑つてゐた。

滑稽の感じが去つた後で反動が來た。健三は比田に就いて不愉快な昔迄思ひ出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「是を今に御前に遣らう」と殆ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した經驗のない若い健三は、欲しくて堪らない其裝飾品が、何時になつたら自分の帶に巻き付けられるのだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一

つは亡くなつた人の記念とも見るべき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉から所有權丈を讓り渡されたと同樣で、肝心の時計には手も觸れる事が出來ずに幾日かを過ごした。

或日皆が一つ所に落合つた。すると其席上で比田が問題の時計を懷中から出した。時計は見違へる樣に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚樹の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。

「それでは是は貴方に上げる事にしますから」

傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。

「どうも色々御手數を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」

兄は禮を云つてそれを受取つた。

健三は默つて三人の樣子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の如く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面中てがましい事をしたのか、何うしても考へ出さなかつた。

彼は自分の權利も主張しなかつた。又說明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判斷した。

「そんな事をまだ覺えてゐらつしやるんですか。貴方も隨分執念深いわね。御兄いさんが御聞きになつ

たら嘸御驚きなさるでせう」

細君は健三の顔を見て暗に其氣色を伺つた。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深からうが、男らしくなからうが、事實は事實だよ。よし事實に棒を引いたつて、感情を打ち殺す譯には行かないからね。其時の感情はまだ生きてゐるんだ。生きて今でも何處かで働いてゐるんだ。已が殺しても天が復活させるから何にもならない」

「御金なんか借りさへしなきあ、それで好いぢやありませんか」

斯う云つた細君の胸には、比田達ばかりでなく、自分の事も、自分の生家の事も勘定に入れてあつた。

百一

歳が改まつた時、健三は一夜のうちに變つた世間の外觀を、氣のなささうな顔をして眺めた。

「すべて餘計な事だ。人間の小刀細工だ」

實際彼の周圍には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引續きばかりであつた。彼は人の顔を見て御目出たうといふのさへ厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも會はずに默つてゐる方がまだ心持が好かつた。

彼は普通の服裝をしてぶらりと表へ出た。成るべく新年の空氣の通はない方へ足を向けた。冬木立と荒れた畠、藁葺屋根と細い流、そんなものが盆槍した彼の眼に入つた。然し彼は此可憐な自然に對しても最う感興を失つてゐた。

幸ひ天氣は穩かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に似た靄が遠く懸つてゐた。其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身體を包んだ。彼は人もなく路もない所へわざ〳〵迷ひ込んだ。さうして融けかゝつた霜で泥だらけになつた靴の重いのに氣が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。彼は一つ所に佇立んでゐる間に、氣分を紛らさうとして繪を描いた。然し其繪があまり不味いので、寫生は却つて彼を自棄にする丈であつた。彼は重たい足を引摺つて又宅へ歸つて來た。途中で島田に遣るべき金の事を考へて、不圖何か書いて見ようといふ氣を起した。

赤い印氣で汚い半紙をなすくる業は漸く濟んだ。新しい仕事の始まる迄にはまだ十日の間があつた。彼は其十日を利用しようとした。彼は又洋筆を執つて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰へつゝある不快な事實を認めながら、それに注意を拂はなかつた彼は、猛烈に働いた。恰も自分で自分の身體に反抗でもするやうに、恰もわが衞生を虐待するやうに、又己の病氣に敵討でもしたいやうに。彼は血に饑ゑた。しかも他を屠る事が出來ないので已むを得ず自分の血を啜つて滿足した。

豫定の枚數を書き了へた時、彼は筆を投げて疊の上に倒れた。

「あゝ、あゝ」

彼は獸と同じやうな聲を揚げた。

書いたものを金に換へる段になつて、彼は大した困難にも遭遇せずに濟んだ。たゞ何んな手續きでそれを島田に渡して好いか一寸迷つた。直接の會見は彼も好まなかつた。向うでももう參上りませんと云ひ放つた最後の言葉に對して、彼の前へ出て來る氣のない事は知れてゐた。何うしても中へ入つて取り次ぐ人の

必要があつた。
「矢つ張御兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでせう。今迄の行掛りもあるんだから」
「まあ左右でもするのが、一番適當な所だらう。あんまり有難くはないが。公な他人を頼む程の事でもないから」
健三は津守坂へ出掛けて行つた。
「百圓遣るの」
驚いた姉は勿體なささうな眼を丸くして健三を見た。
「でも健ちやんなんぞは顏が顏だからね。さうしみつたれた眞似も出來まいし、それにあの島田つて爺さんが、たゞの爺さんと違つて、あの通りの惡黨だから、百圓位仕方がないだらうよ」
姉は健三の腹にない事迄一人合點でべら〳〵喋舌つた。
「だけど御正月早々御前さんも隨分好い面の皮さね」
「好い面の皮鯉の瀧登りか」
先刻から傍に胡坐をかいて新聞を見てゐた比田は、此時始めて口を利いた。然し其言葉は姉に通じなかつた。健三にも解らなかつた。それを左も心得顏にあはゝと笑ふ姉の方が、健三には却つて可笑しかつた。
「でも健ちやんは好いね。御金を取らうとすれば幾何でも取れるんだから」
「此方とらとは少し頭の寸法が違ふんだ、右大將頼朝公の髑髏と來てゐるんだから」

比田は變挺な事ばかり云つた。然し頼んだ事は一も二もなく引き受けて呉れた。

百二

比田と兄が揃つて健三の宅を訪問れたのは月の半ば頃であつた。松飾の取り拂はれた往來にはまだ何處となく新年の香がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐つた二人は、落付かないやうに其處いらを見廻した。

比田は懷から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあ是で漸く片が付きました」

其一枚には百圓受取つた事と、向後一切の關係を斷つといふ事が古風な文句で書いてあつた。手蹟は誰のとも判斷が付かなかつたが、島田の印は確に捺してあつた。

健三は「然る上は後日に至り」とか、「後日のため誓約件の如し」とかいふ言葉を馬鹿にしながら默讀した。

「何うも御手數でした、ありがたう」

「斯ういふ證文さへ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時迄蒼蠅く付け纏はられるか分つたもんぢやないよ。ねえ長さん」

「さうさ。是で漸く一安心出來たやうなものだ」

比田と兄の會話は少しの感銘も健三に與へなかつた。彼には遣らないでもいゝ百圓を好意的に遣つたの

だといふ氣ばかり強く起つた。面倒を避けるために金の力を藉りたとは何うしても思へなかつた。

彼は無言の儘もう一枚の書付を開いて、其處に自分が復籍する時島田に送つた文言を見出した。

「私儀今般貴家御離緣に相成、實父より養育料差出候に就ては、今後とも互に不實不人情に相成らざる樣心掛度と存候」

健三には意味も論理も能く解らなかつた。

「それを賣り付けようといふのが向うの腹さね」

「つまり百圓で買つて遣つたやうなものだね」

比田と兄は又話し合つた。健三は其間に言葉を挾むのさへ厭だつた。

二人が歸つたあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「此方の方は蟲が食つてますね」

「反故だよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠へ入れてしまへ」

「わざ〳〵破かなくつても好いでせう」

健三はそのまゝ席を立つた。再び顏を合はせた時、彼は細君に向つて訊いた。――

「先刻の書付は何うしたい」

「簞笥の抽斗に仕舞つて置きました」

彼女は大事なものでも保存するやうな口振で斯う答へた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める氣にもならなかつた。

「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」
細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。
「何が片付いたつて」
「でも、あゝして證文を取つて置けば、それで大丈夫でせう。もう來る事も出來ないし、來たつて構ひ付けなければ夫迄ぢやありませんか」
「そりや今迄だつて同じ事だよ。左右しようと思へば何時でも出來たんだから」
「だけど、あゝして書いたものを此方の手に入れて置くと大變違ひますわ」
「安心するかね」
「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」
「まだ中々片付きやしないよ」
「何うして」
「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」
細君の顏には不審と反抗の色が見えた。
「ぢや何うすれば本當に片付くんです」
「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も續くのさ。たゞ色々な形に變るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」
健三の口調は吐き出す樣に苦々しかつた。細君は默つて赤ん坊を抱上げた。

「おゝ好い子だ〳〵。御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」
細君に斯う云ひ〳〵、幾度か赤い頰に接吻した。

昭和三年十二月一日印刷
昭和三年十二月五日發行

漱石全集第九卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　東京市神田區南神保町十六番地　漱石全集刊行會

右代表者　岩波茂雄

印刷者　東京市本所區小梅町一番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町二番地　凸版印刷株式會社分工場